新潟県埋蔵文化財調査報告書　第182集

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅵ

岩 ノ 原 遺 跡

２００８

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅵ

岩ノ原遺跡（いわのはら）

２００８

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を基点に上越新幹線高崎駅から分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪市に至る工事延長700kmの新幹線鉄道です。全面開通により、北陸地方と関東圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に伴って実施された上越市大字向橋に所在する岩ノ原遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査により、平安時代の建物群や土坑、井戸などが検出され、土師器・須恵器を主とする遺物が出土しました。中でも土師器・須恵器に「石庄」「石井庄」と墨書きされた土器から、この遺跡が奈良時代に上越地方で成立した「東大寺領石井庄」の荘園遺跡であることが明らかとなりました。建物群は荘園を構成する荘所の一部と推定され、また、儀明川近くでは物資の搬出入に関すると見られる建物群も認められました。荘所は9世紀前葉から中葉に存続したと推定され、時期の限定された初期荘園の一例として重要な発見となりました。これらの調査成果は、今後、上越地方の古代史の解明に大きく寄与するものと確信しています。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解を賜りました上越市教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をくださいました独立行政法人鉄道建設・運輸施設支援機構鉄道建設本部　北陸新幹線建設局、同上越鉄道建設所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成20年3月

新潟県教育委員会

教　育　長　武藤　克己

例　　言

1　本書は、新潟県上越市大字向橋（むかばし）字内沖（うちおき）303番地１ほかに所在する岩ノ原遺跡の発掘調査記録である。

2　この調査は北陸新幹線の建設に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。

3　埋文事業団は掘削作業等を株式会社ノガミに委託し、平成18年度に発掘調査を実施した。

4　整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成18年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。

5　出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。

6　遺物の注記は、岩ノ原遺跡の略記号「06イワノハ」、に出土地点、遺構名、層位等を併記した。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　掲載遺物の番号は、種別に関わらず、すべて通し番号を付した。本文及び観察表、図面図版、写真図版の遺物番号は一致している。

9　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10　自然科学分野にかかる分析は、以下の機関に委託して行い、了解を得て再編集した。

樹種同定 ……パリノ・サーヴェイ株式会社

植物珪酸体分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社

花粉分析 ……パリノ・サーヴェイ株式会社

テフラ分析 ……早津賢二（妙高火山研究所）

11　本書の作成・編集作業の一部は株式会社セビアスに委託した。詳細は第Ⅰ章３に記述した。

12　本書の執筆は、寺崎裕助（埋文事業団　本発掘調査担当課長代理）の指導のもと、髙橋保雄（同　専門調査員）、高橋知之（同　主任調査員）、田中一穂（同　嘱託員）、小村正之（株式会社ノガミ　埋文調査部調査員）、金内元（同　埋文調査部調査員）があたり、編集は髙橋保雄が担当した。執筆分担は第Ⅵ章　自然科学の分析を除き、以下のとおりである。

第Ⅱ章：高橋知之

第Ⅳ章１・２：小村正之、髙橋保雄

第Ⅳ章３：小村正之、金内　元、高橋知之、髙橋保雄、

第Ⅴ章１・２：金内　元

第Ⅶ章１：田中一穂

第Ⅶ章２：金内　元

これ以外は髙橋保雄である。

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜わりました。ここに記して厚くお礼申し上げます。（敬称略　五十音順）

相沢　央　　浅野啓介　　安藤正美　　市　大樹　　卜部厚志　　岡村道雄　　金子拓男　　川村　尚

小池義人　　小島幸雄　　小林昌二　　酒井和男　　笹澤正史　　清水みき　　鈴木景二　　高島英之

高野武男　　中西　聡　　中村直人　　秦　繁治　　馬場　基　　宮本長二郎　　山本　崇　　山本幸俊

吉岡康暢　　渡辺晃宏　　渡邊ますみ　　尼崎市立地域研究史料館　　上越市大字向橋町内会

上越市教育委員会　　上越市土地開発公社　　上越市都市整備部新幹線建設対策課　　奈良文化財研究所

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 1

A　試掘確認調査 …… 1

B　本発掘調査 …… 3

3　整理の経過 …… 5

4　調査・整理体制 …… 6

A　試掘確認調査 …… 6

B　本発掘調査・整理作業 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7

1　地理的環境 …… 7

2　歴史的環境 …… 9

3　石井荘の小史 …… 12

第Ⅲ章　調査の概要 …… 14

1　遺跡の現況と微地形 …… 14

2　グリッドの設定 …… 14

3　基 本 層 序 …… 17

第Ⅳ章　遺　　構 …… 19

1　概　　要 …… 19

2　記 述 方 法 …… 19

3　遺 構 各 説 …… 20

A　掘立柱建物 …… 20

B　杭　　列 …… 27

C　井　　戸 …… 28

D　土　　坑 …… 28

E　性格不明遺構 …… 30

F　溝 …… 31

G　河　川　跡 …… 33

H　沢山川用水 …… 33

第Ⅴ章　遺　　物 …… 34

1　概　　要 …… 34

2　古代の土器 …… 34
A　器種分類 …… 34
B　遺構内出土 …… 37
C　遺構外出土 …… 41
3　中近世の土器 …… 45
A　中世の土器 …… 45
B　近世陶磁器 …… 45
4　木　製　品 …… 46
5　鉄　製　品 …… 48
6　鉄　　滓 …… 48
7　銭　　貨 …… 48
8　土　製　品 …… 49
9　石　製　品 …… 49

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 50
1　古植生と木材利用 …… 50
A　はじめに …… 50
B　試　　料 …… 50
C　分析方法 …… 51
D　結　　果 …… 52
E　考　　察 …… 57
2　上越市岩ノ原遺跡のテフラ分析 …… 60
A　はじめに …… 60
B　地質断面に見られる地層の概要 …… 60
C　Ⅶ層中に認められる灰白色斑紋 …… 60
D　Ⅵ層の火山灰分析 …… 62
E　まとめ …… 62

第Ⅶ章　まとめ …… 63
1　岩ノ原遺跡出土の文字資料について …… 63
A　木　　簡 …… 63
B　墨書土器 …… 66
C　刻書・ヘラ書 …… 71
2　出土土器の編年的位置 …… 71
3　遺構について …… 74
A　掘立柱建物の分類と諸特徴 …… 74
4　石井荘と岩ノ原遺跡 …… 77
≪要　　約≫ …… 79
≪引用・参考文献≫ …… 80
≪遺構観察表・遺物観察表≫ …… 82

挿図目次

第１図　北陸新幹線の路線と遺跡の位置 ……2
第２図　試掘確認調査のトレンチ位置図 ……3
第３図　周辺の地形 ……8
第４図　高田平野における遺跡分布 ……10
第５図　遺跡の位置と周辺の微地形 ……15
第６図　グリッド設定図及び調査区分割図 ……16
第７図　小グリッド模式図 ……16
第８図　基本層序 ……17
第９図　遺構の平面形態と断面形態の分類 ……20
第10図　須恵器の出土分布図 ……35
第11図　土師器の出土分布図 ……35
第12図　器種分類図 ……38
第13図　主要花粉群集の層位分布図 ……52
第14図　花粉化石顕微鏡写真 ……52
第15図　植物珪酸体含量の層位的変化 ……53
第16図　植物珪酸体顕微鏡写真 ……53
第17図　木材顕微鏡写真（1）……55
第18図　木材顕微鏡写真（2）……56
第19図　木材顕微鏡写真（3）……57
第20図　5A22グリッドにおける地層断面 ……60
第21図　Ⅶ層中の白色斑紋 ……61
第22図「黒（米）」木簡の字体例 ……63
第23図　春米付札木簡の法量グラフ ……65
第24図　器種別変遷図 ……73
第25図　南東部の掘立柱建物の分類図 ……75
第26図　南東部の掘立柱建物の方位 ……76

表　目　次

第１表　高田平野における奈良・平安時代の主な遺跡 ……11
第２表　出土土器種類別一覧表 ……34
第３表　花粉分析結果 ……52
第４表　植物珪酸体含量 ……53
第５表　樹種同定結果 ……54
第６表　器種別種類構成 ……59
第７表　掘立柱建物属性表 ……75
別表１　掘立柱建物（SB）柱穴観察表 ……82
別表２　杭列（SA）観察表 ……85
別表３　溝（SD）観察表 ……85
別表４　土器観察表 ……88
別表５　墨書土器一覧表 ……94
別表６　木製品観察表 ……96
別表７　鉄製品観察表 ……97
別表８　鉄滓観察表 ……97
別表９　銭貨観察表 ……97
別表10　土製品観察表 ……97
別表11　石製品観察表 ……97

図版目次

［図面図版］
図版１　調査範囲と周辺の地形
図版２　遺構全体図１　全遺構　　遺構全体図２　掘立柱建物・土坑・井戸ほか（S＝1/800）
図版３　遺構全体図３　調査区南東部の遺構　掘立柱建物・土坑・井戸ほか（S=1/300）
図版４　遺構全体図４　畑作溝群（Ⅰ期）　遺構全体図５　畑作溝群（Ⅱ期）ほか（S=1/400）
図版５　遺構分割図１（S＝1/200）
図版６　遺構個別図１　SB002・003・006
図版７　遺構個別図２　SA009・010、SK001・007・008、SX004
図版８　遺構分割図２
図版９　遺構個別図３　SB048
図版10　遺構個別図４　SB049・050
図版11　遺構個別図５　SB058
図版12　遺構個別図６　SB059
図版13　遺構個別図７　SB102・143
図版14　遺構個別図８　SB144、SE014、SX027
図版15　遺構個別図９　SK017・101、SX018・019・021・025・052
図版16　遺構分割図３
図版17　遺構個別図10　SB055
図版18　遺構個別図11　SB056・138
図版19　遺構個別図12　SB137
図版20　遺構個別図13　SB146、SK039～041
図版21　遺構個別図14　SK044・045・106、

SX142、河川跡、沢山川用水
図版22 遺構分割図４　遺構個別図15　SD011～013・024・062～064・067・070・091・120・122・124・125
図版23 遺構分割図５　遺構個別図16　SD031～037・072・075・077・082・083・088～090・112
図版24 遺物実測図１　遺構出土土器１
図版25 遺物実測図２　遺構出土土器２
図版26 遺物実測図３　遺構出土土器３
図版27 遺物実測図４　遺構出土土器４、遺構外出土土器１
図版28 遺物実測図５　遺構外出土土器２
図版29 遺物実測図６　遺構外出土土器３
図版30 遺物実測図７　遺構外出土土器４
図版31 遺物実測図８　遺構外出土土器５
図版32 遺物実測図９　遺構外出土土器６
図版33 遺物実測図10　遺構外出土土器７
図版34 遺物実測図11　遺構外出土土器８
図版35 遺物実測図12　遺構外出土土器９
図版36 遺物実測図13　遺構外出土土器10
図版37 墨書・線刻土器出土分布図
図版38 遺物実測図14　墨書土器１
図版39 遺物実測図15　墨書土器２
図版40 遺物実測図16　墨書土器３
図版41 遺物実測図17　木製品１
図版42 遺物実測図18　木製品２
図版43 遺物実測図19　木製品３
図版44 遺物実測図20　木製品４
図版45 遺物実測図21　木製品５
図版46 遺物実測図22　木製品６
図版47 遺物実測図23　その他の遺物

［写真図版］

図版48 遺跡の位置と周辺の景観、遺跡遠景
図版49 遺跡遠景、完掘全景
図版50 北西部の遺構群　完掘全景、南東部の遺構群　完掘全景
図版51 SB048・049・050・058・059・102・143・144ほか完掘状況、SB055・056・137・138・146ほか完掘状況
図版52 出土土器（土師器・須恵器）、墨書土器「石庄」、墨書土器「石井庄」、銭貨「萬年通寶」、3B15基本層序
図版53 12A23　基本層序、16C17　基本層序、SB002-P02　土層断面、SB002-P03　土層断面、SB002　完掘
図版54 SB003　完掘、SB003-P03　土層断面、SB003-P08　土層断面、SB006　完掘、SB006-P01土層断面
図版55 SB048・SK106　完掘、SB048-P02　土層断面、SB048-P03　土層断面、SB048-P04　土層断面、SB048-P08　土層断面
図版56 SB049　完掘、SB049-P01　土層断面、SB049-P05　土層断面、SB049-P07　土層断面、SB049-P17　土層断面
図版57 SB050　完掘、SB050-P02　植物質敷設物検出状況、SB050-P04　礎盤（板）検出状況、SB050-P05　土層断面、SB050-P08　土層断面
図面58 SB055・056　完掘、SB055-P07　土層断面、SB055-P11　土層断面、SB056-P01　土層断面、SB056-P02　土層断面
図版59 SB058・144　完掘、SB058-P03　土層断面、SB058-P08　土層断面、SB144-P01　土層断面、SB144-P02　土層断面
図版60 SB059・143　完掘、SB059-P02　土層断面、SB059-P03　土層断面、SB143-P01　土層断面、SB143-P02　完掘
図版61 SB102　完掘、SB102-P03　土層断面、SB102-P05　土層断面、SB102-P06　土層断面、SB102-P07　土層断面
図版62 SB137・138・SD136　完掘、SB137-P03　土層断面、SB137-P11　礎盤（板）検出状況、SB138-P01　土層断面、SB138-P06　土層断面
図版63 SB146　完掘、SB146-P01　土層断面、SA009　完掘、SA009-P05～09　検出状況、SB009-P14　土層断面、SA010　完掘、SE014　遺物検出状況、SE014　完掘
図版64 14B～C・15B～Cグリッド　畑作溝群（Ⅰ期）　完掘、SD062　土層断面、SD064・024土層断面、SD067　土層断面、SD070・091　土層断面

図版65　17Cグリッド　畑作溝群（Ⅰ期）　完掘、SD120　土層断面、SD122　土層断面、SD124　土層断面、SD125　土層断面
図版66　14B～C・15B～Cグリッド　畑作溝群（Ⅱ期）　完掘、SD031　土層断面、SD032　土層断面、SD036　土層断面、SD037　土層断面
図版67　16C・17B～Cグリッド　畑作溝群（Ⅱ期）　完掘、SD075　土層断面、SD077　土層断面、SD082・083　土層断面、SD112土層断面
図版68　SK001　土層断面、SK001　完掘、SK007　土層断面、SK007　完掘、SK008　土層断面、SK008　完掘、SK017　土層断面、SK017　完掘
図版69　SK039　土層断面、SK039　完掘、SK040　土層断面、SK040　完掘、SK041　土層断面、SK041　完掘、SK044　土層断面、SK044　完掘
図版70　SK045　土層断面、SK045　完掘、SK101　土層断面、SK101　完掘、SK106　土層断面、SD136　土層断面、SX004　検出状況、SX004　土層断面
図版71　SX019　完掘、SX021　土層断面、SX021　遺物出土状況、SX025　遺物出土状況、SX142　土層断面、13C15　墨書土器出土状況、15C1　「萬年通寶」出土状況、15C17　鉄斧出土状況
図版72　遺構出土土器1
図版73　遺構出土土器2
図版74　遺構出土土器3・遺構外出土土器1
図版75　遺構外出土土器2
図版76　遺構外出土土器3
図版77　遺構外出土土器4
図版78　遺構外出土土器5
図版79　遺構外出土土器6
図版80　遺構外出土土器7
図版81　遺構外出土土器8
図版82　遺構外出土土器9・木製品1
図版83　木製品2
図版84　木製品3
図版85　木製品4
図版86　木製品5
図版87　木製品6
図版88　墨書土器1
図版89　墨書土器2
図版90　墨書土器3
図版91　墨書土器4
図版92　墨書土器5

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

北陸新幹線は、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道である。上越新幹線高崎駅から分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経由し、東京都と大阪市を結ぶ路線である。工事延長600kmのうち、高崎・長野間は既に平成９（1997）年10月に開業している。その後、長野市を基点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長60kmは、昭和47（1972）年に基本計画が、翌年に整備計画が決定され、平成10年３月に長野・上越間の工事実施計画が認可された。これを受けて、日本鉄道建設公団（以下「鉄建公団」という）北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成10年９月、鉄建公団から分布調査の依頼を受けた県教委は、平成10年11月に調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であるものの、今後、試掘確認調査を実施して取り扱いを判断する必要があると回答した。平成16年３月、鉄道運輸機構から上越市内の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成16年11月に上越市向橋地区を調査した結果、上下の２枚の層から遺構・遺物が認められ、新遺跡として「岩ノ原遺跡」を周知した。したがって、上層は調査トレンチが少ないことから一部を再度試掘確認調査としたものの、下層は4,956m^{2}の本発掘調査が必要であると回答した。

試掘確認調査の結果を受けて、鉄道運輸機構は県教委に対して早期に発掘調査の実施を要望した。その結果、平成18年３月、鉄道運輸機構から県教委が受託し、同年５月１日から埋文事業団が本発掘調査に着手した。

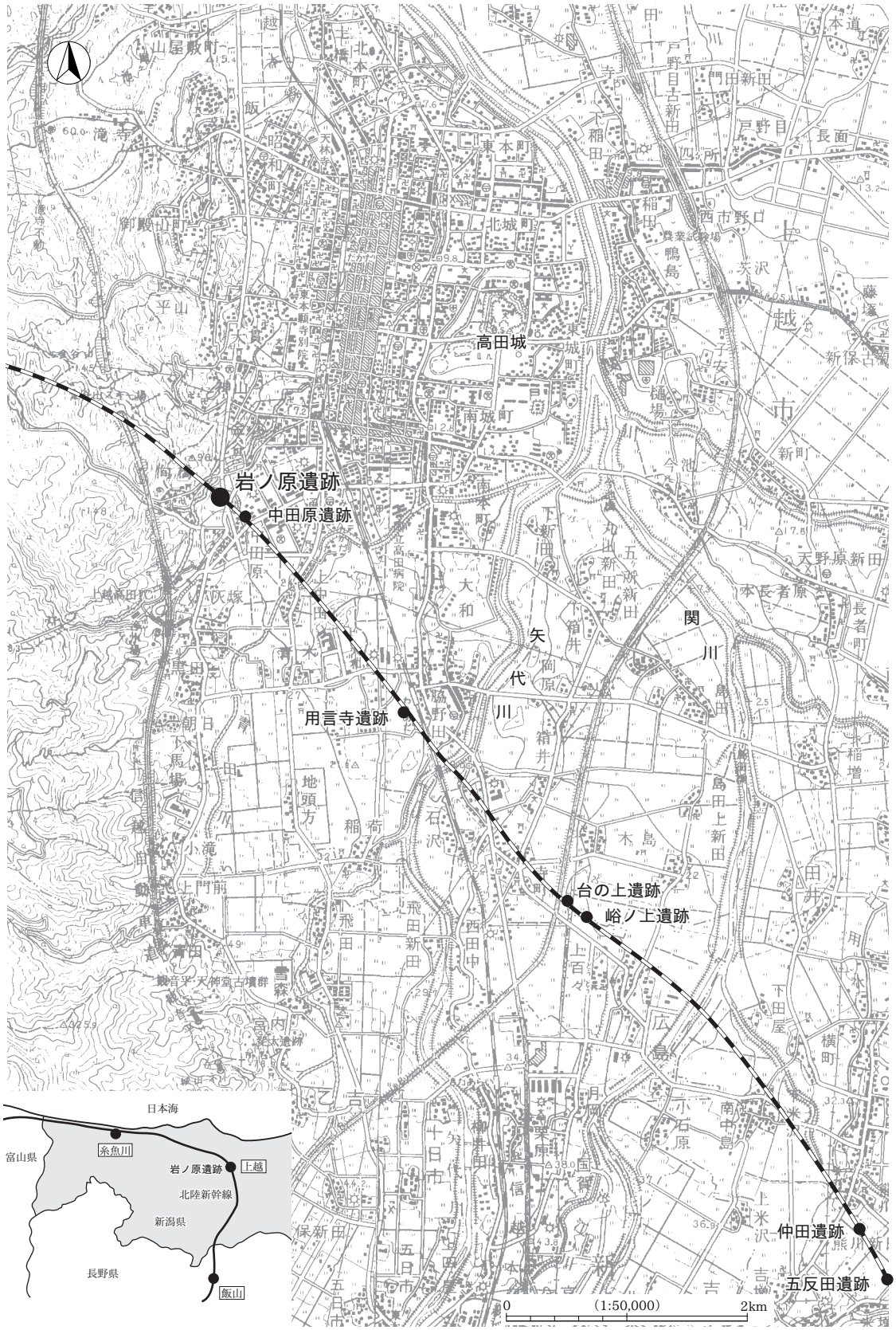
2　調査の経過

A　試掘確認調査

試掘確認調査は面積4,956m^{2}を対象に、平成16年11月８～10日までの３日間行った。現況は水田であることから、バックフォーと人力による調査となった。しかし、調査対象地は未買収地であり、次年度も耕作が行われるため、掘削深度は1m程度、バックフォーも0.2m^{3}級の軽量なもので行った。第２図のように対象地に７か所のトレンチ（調査坑）を設定し、掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

調査の結果、上下２枚の層から遺物包含層が確認され、いずれの層からも古代の遺物（土師器・須恵器）が出土した。上層ではトレンチ１～４で遺物が出土し、トレンチ１・２・４で溝・土坑・ピットなどの遺構が検出した。また、下層では１・４～６トレンチで遺物が出土し、６トレンチで土坑やピットが検出した。

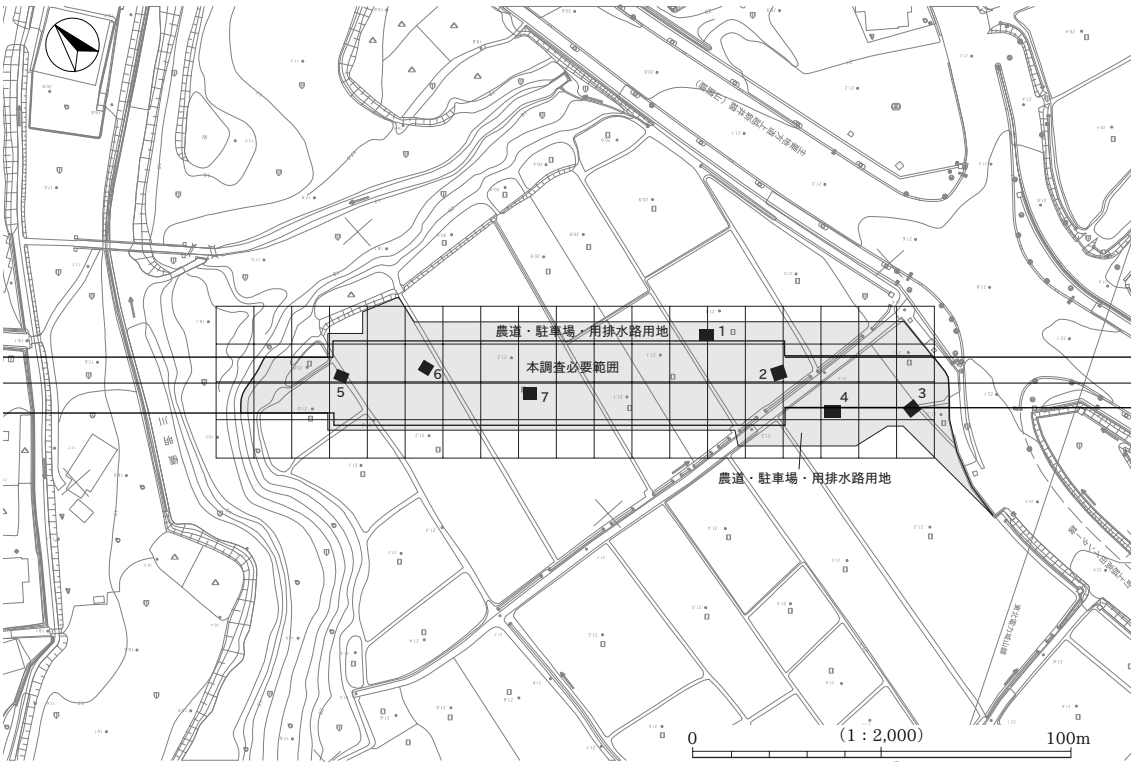
これらの結果を踏まえ、上層では１トレンチから東南側は本調査必要範囲とし、北西側は遺物が出土していないものの遺物包含層が残存していることから、再度試掘確認調査を実施することとした。また下層についてはほぼ全面にわたり遺物・遺構が認められることから、対象範囲全域の4,956m^{2}を本発掘調査必要範囲とした。



［加藤ほか2006］に加筆改変

第１図　北陸新幹線の路線と遺跡の位置

［国土地理院発行「高田東部」「高田西部」１：50,000原図］



第２図　試掘確認調査のトレンチ位置図（数字はトレンチ番号、アミは本発掘調査必要範囲）

B　本発掘調査

発掘調査対象地は、既存の水田や農道、用排水路が斜めに横断するように存在していた。したがって、水田耕作の支障が出ないように仮農道や仮用排水路の設置工事から始めた。また、調査順序も周囲の水田耕作に合わせＡ～Ｄ地区の４分割し、Ａ地区から行うことになった（第５図参照）。さらに発掘調査掘削土の搬出場所の確保なども支障となっていた。

以下、調査日誌から経過を抄録する。

４月６日　現地下見・打ち合わせ。鉄道運輸機構から工事概要の説明を受ける。調査対象地内に新幹線路線部分と用排水路・農道・駐車場部分があることが判明する。したがって、遺跡に影響のない用排水路・農道・駐車場部分を除外した3,750m^{2}が調査対象地となる。また、既存の水田や農道、用排水路が斜めに横断することから、耕作に支障が出ないように仮用排水路・仮農道の設置が必要となる。現地事務所・作業員休憩所・駐車場用地の借地の契約をする。

４月18日　水田耕作者に調査計画書、仮用排水路・仮農道の設置について説明する。

４月24日　仮用排水路・仮農道の工事に着手する。

４月30日　仮用水路・仮農道の工事が終了する。

５月１日　上越市教育委員会、同埋蔵文化財センター、鉄道運輸機構上越鉄道建設所等に挨拶し、午後から調査に入る。

５月８日　調査対象地の暗渠工事に着手する。

５月22日　暗渠工事が終了する。暗渠掘削面の精査・土層観察により、Ａ地区南東側（13列グリッド）の上層と北西側（１～３列グリッド）の下層が同一面と推定される。Ａ地区の上層の掘削をバ

ックフォーで行う。遺構・遺物が認められないことから遺構確認面と推定される層まで掘削する。

5月23日　掘削土の仮置き場所が決まる。

5月25日　作業員を入れての本格的な調査を開始する。A地区の北東側（1列グリッド）から遺構確認をする。あわせて新幹線センター杭に沿ってトレンチを設定し、下層の状況を把握する。

6月2日　上層の掘削を終了する。引き続き作業員による遺構確認を行う。

6月7日　センター杭に沿って設定したトレンチの掘削面の精査・観察の結果、A地区南東側（13列グリッド）の上層と北西側（1～3列グリッド）の下層が同一面と判明する。したがって、試掘確認調査で古代の文化層が2面とされていたが、1面と判断する。

6月12日　上層の遺構確認が終わり、全景写真を撮影する。遺構は皆無であり、遺物は下層からの混入と推定される須恵器、土師器のほか、中近世の陶磁器類が少量出土したのみである。これをもって上層の調査を終了する。

6月13日　A地区の下層とされる調査に入る（遺跡が1面と判断されたため、これ以降、上層、下層の呼称を使用しない）。洪水堆積層である間層をバックフォーで掘削し、遺物包含層の上面で止める。引き続き、1列グリッドから人力で遺物包含層の掘削に入る。

6月22日　包含層掘削の終了したA地区1列グリッドから遺構確認に入る。以後、2列グリッド以降に調査を移す。

7月1日　2・3列グリッドの西側の水田部分が大雨により、亀裂が入る。

7月4日　2・3列グリッドの地形測量、全景を撮影し、調査を終了する。引き続き、2・3列グリッドの埋め戻し作業に入る。

7月5日　4・5列グリッドを人力による包含層掘削を行うが、遺物が予想に反し少ない。6～12列区まではさらに少ないものと予想されることから、バックフォーによる包含層掘削に切り替える。

7月14日　6～12列グリッドまでバックフォーによる包含層掘削が終了する。

7月31日　人力による遺物包含層の掘削を終えた4～6・13・14列グリッドの遺構確認。SK001、SB002・006、SD011、SE014などの遺構調査に入る。

8月21日　4～6・13・14列グリッドの遺構をほぼ掘り終える。

8月24日　高所作業車を用い、A地区の全景を撮影する。

8月25日　B地区の表土層をバックフォーで掘削し、終了した部分から人力による包含層の掘削に入る。A地区の13・14Cグリッドで出土した墨書土器が「石庄」と解読され、荘園遺跡の可能性を推定する。

8月29日　水洗・乾燥中の土器の中から「石井庄」の墨書が確認され、8世紀中頃に上越地方で成立した「東大寺領石井庄」の関連遺跡とほぼ確定する。

8月30日　C地区の表土層をバックフォーで掘削し、終了した部分から人力による包含層掘削に入る。

9月4日　B地区15B・15Cグリッドから遺構確認を開始する。SD032・033をはじめとする畑作溝群、SK039・040などの遺構の調査に入る。

9月7日～9月26日　岩ノ原遺跡の調査と並行し、南東約220m地点にある「中田原遺跡」を調査する（平成18年度年報参照）。

９月20日　Ｃ地区の遺構確認をし、SB055・056などの遺構調査に入る。

９月21日　稲刈りの終了を待って、既存の農道・用排水路、仮用排水路を撤去し、Ｄ地区の掘削に入る。引き続き遺構確認、遺構掘りに入る。

10月４日　Ｂ地区14Cグリッドの建物群を除き、ほぼ遺構の配置が明らかとなり、報道関係に公開する。

10月７日　現地説明会を開き、一般に公開する（参加者：210人）。

10月10日　引き続き、畑作溝群、建物群の調査を続行する。

11月14日　建物の柱根を除き、ほぼ遺構を掘り終える。ラジコンヘリコプターで空中写真撮影を行なう。

11月15日　遺跡が石井庄の荘所の一部と確定し、報道関係に公開する。

11月18日　２回目の現地説明会を開き、一般に公開する（参加者：140人）。

11月20日　SB048をはじめとする建物群の柱根、礎板等の掘り上げを行う。

11月21日　遺構の平面測量が終了する。

11月22日　器材・諸記録類を整理し、現地から引き上げる。

なお、調査対象地の埋め戻し、農道・用排水路復旧は12月25日に終了し、鉄道運輸機構に引き渡す。

３　整理の経過

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。また、遺物の接合・復元・実測は、７月から支援業者の整理室にて先行して行った。本格的な整理は発掘調査の終了した12月から実施した。

なお、遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、民間業者に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。また、遺物写真撮影は、デジタルカメラ（ニコンD70S）で撮影し、遺構写真とともに、CD化して編集した。図版作成・編集作業にあたり、委託業者に提出した資料は、以下のとおりである。

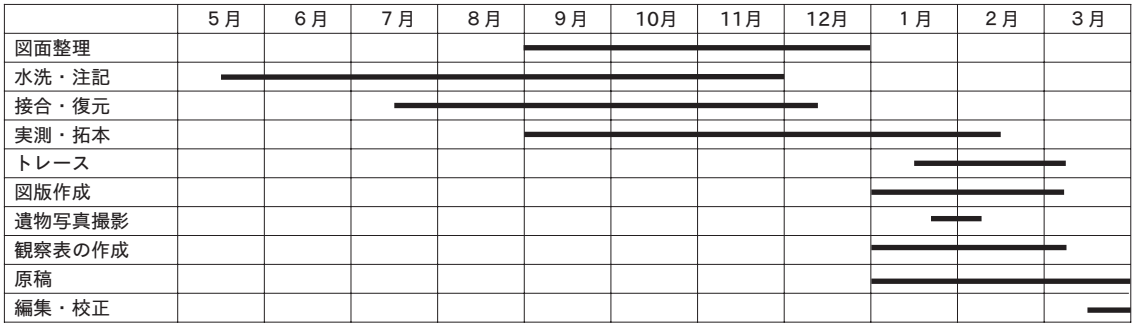
本文・挿図・観察表：Word形式、Excel形式のデータ、トレース原図、貼り込み版下。

遺構図面図版：DXF形式の測量データ、手取り原図、レイアウト図、文字データ。

遺物図面図版：個別トレース図、拓影、レイアウト図。

写真図版：デジタルデータ、レイアウト図。

整理作業の主な流れは下記のようになる。



4　調査・整理体制

A　試掘確認調査

調査期間　平成16年11月8日～11月10日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越麟一）

管　　理　総　　括　黒井　幸一（事務局長）

　　管　　理　長谷川二三夫（総務課長）

　　庶　　務　高野　正司（総務課　主任）

調　　査　調査総括　藤巻　正信（調査課長）

　　調査担当　山本　　肇（調査課　課長代理）

　　調査職員　田中　一穂（調査課　嘱託員）

B　本発掘調査・整理作業

調査・整理期間　平成18年5月1日～平成19年3月31日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤克己）

総　　括　　波多　俊二（事務局長）

管　　理　　斎藤　　栄（総務課長）

庶　　務　　長谷川　靖（総務課　班長）

調査総括　　藤巻　正信（調査課長）

指　　導　　寺﨑　裕助（調査課　課長代理）

調査担当　　髙橋　保雄（調査課　専門調査員）

職　　員　　高橋　知之（調査課　主任調査員）

支援組織　株式会社ノガミ

現場代理人　伊藤　正紀（埋文調査部）

調　査　員　小村　正之（埋文調査部）

　　金内　　元（埋文調査部）

補　助　員　石塚　桃子　　威本　早苗　　田中　暁穂（以上、埋文調査部）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1　地理的環境

岩ノ原遺跡は上越市大字向橋字内沖303番地１ほかに所在し、西頸城丘陵から流れる儀明川右岸の沖積地、高田面上に立地する。標高は21mを測り、約0.7km西には、西頸城丘陵が広がる。

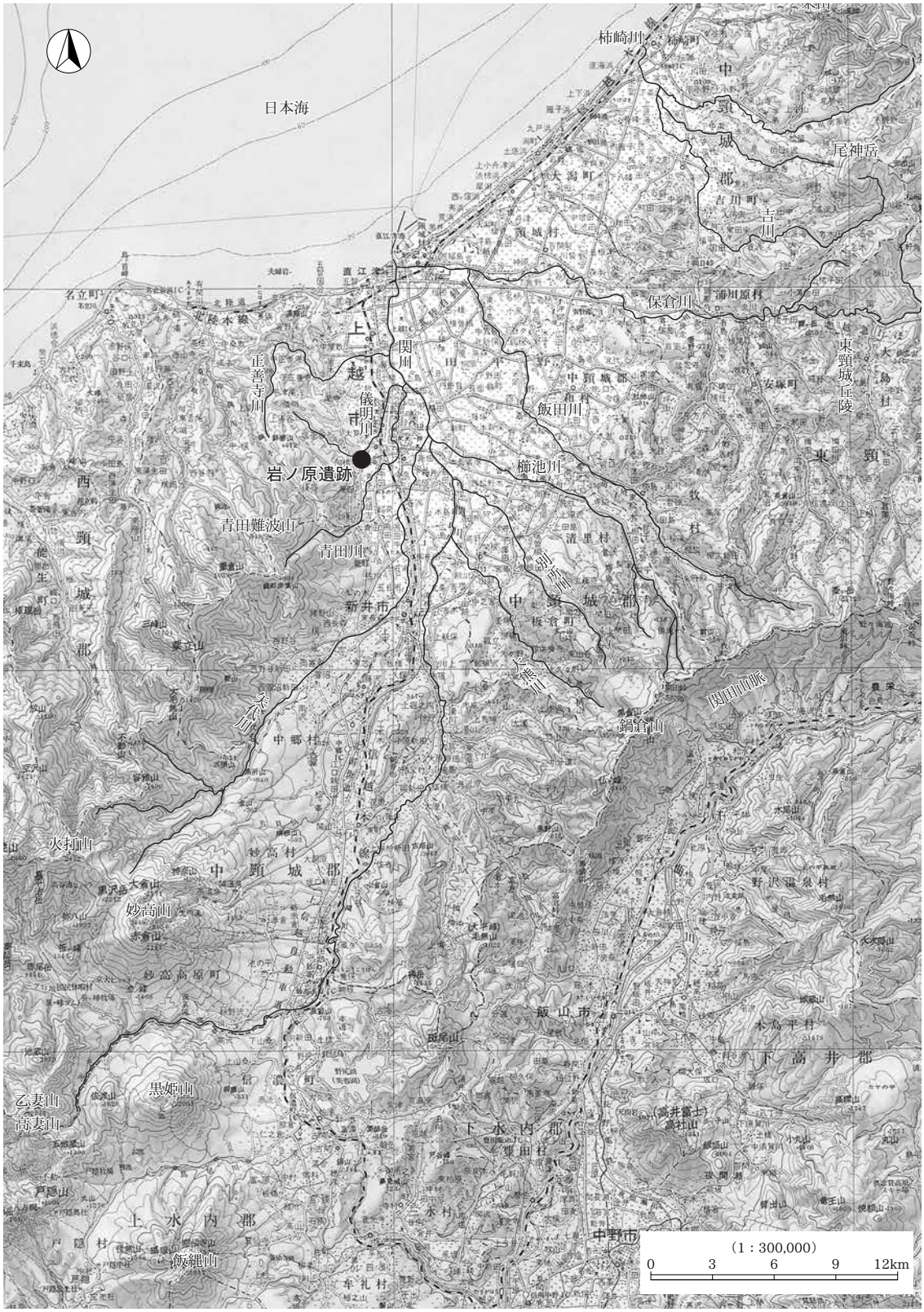
本遺跡の所在する高田平野は、新潟県の南西部に位置する不等辺三角形の平野である。平野の周辺には、北方に米山（993m）や尾神岳（757m）をはじめとする米山山地がそびえている。この米山の山麓から北東の地域には東頸城丘陵が分布する。平野の南東方には関田山脈がそびえ、新潟県と長野県の県境をなしている。関田山脈の最高点はほぼ中央部に位置する鍋倉山（1,289m）である。平野の西方には西頸城丘陵が広がっており、同丘陵の南には西頸城山地が連なっている。西頸城山地の北端は難波山（949m）、南端は火打山（2,462m）となる。平野の南には妙高山（2,454m）によって代表される妙高火山群が位置する。その南方には黒姫山（2,053m）と飯縄山（1,917m）が連なって見える。妙高山の裾野は南方から東方、東北方に広がっており、旧新井市の南で高田平野と接している。

これらの山々や丘陵からは多くの河川が流れ出し、高田平野をうるおしている。平野最大の河川は関川である。その源流部は、西頸城山地の南端の火打山や長野県との境をなす高妻山（2,353m）、乙妻山（2,318m）の地域である。また、関川は、山地や丘陵から流れ出た多くの河川を合流しながら日本海へと注いでいる。西頸城山地からは矢代川が、妙高火山からは白田切川や大田切川などが、西頸城丘陵からは青田川、儀明川、正善寺川などが流れ出し、それぞれ関川に合流する。東頸城丘陵や関田山脈からは、大熊川、別所川、櫛池川、飯田川、保倉川などの中小河川が高田平野に流れ出し、それぞれ関川に合流する。さらに北方の米山山地やその周辺の丘陵地からは、吉川や柿崎川が高田平野に流れ出し日本海に注ぐ［高野2002］。

高田平野の主要部分は、前述の諸河川によって形成された沖積平野で、山地から海岸に向けて、扇状地、氾濫原性低地、海岸砂丘が形成されている。これらの沖積面は、現河床面からの比高によってさらに２つの地形面に区分される。上位の面は高田面とよばれ、扇状地も含めて平野の大部分を占める地形面であり、下位の面は関川面とよばれ、高田面を浸食した地形面で、現河川沿いに細長く分布する。扇状地は、平野の南部および南東部にみられ、青田川から矢代川、関川、大熊川、別所川、櫛池川をへて飯田川に至る河川の高田平野への出口に発達している。氾濫原性低地は、扇状地の末端から海岸にかけて平野の大部分を占めている。この地域では関川、その支流の保倉川・飯田川などの河川の蛇行が著しく、これらの河川によってつくられた数多くの自然堤防や旧河道がみられる。

また、平野の北東部の砂丘と丘陵に囲まれた地域は低湿地帯となっており、この地域には、かつて「大潟」などの潟湖が存在した。これらの潟湖は、江戸時代後期の新堀川の掘削や保倉川の改修などにより干拓されたが、現在でも多くの潟湖が砂丘の背後地にある。砂丘は、幅0.5～2.5km、高さ10～40mの規模で、海岸線に沿って直線的に発達している。高田平野の北方に発達したこの砂丘は潟町砂丘と呼ばれている。潟町砂丘は、沖積世に形成された新期砂丘と洪積世末期に形成された古砂丘から構成され、古砂丘が伏在する砂丘の規模は大きく、新期砂丘のみからなる砂丘の規模は小さい［北陸建設弘済会1981］。

本遺跡に近接する中田原の集落には、洪積台地の一つである灰塚面が分布する。洪積台地は、山地や丘陵の山麓部に形成されている。その地形面は、新しいものから古いものへの順に、低位段丘群、灰塚面、平山面、愛の風面、裏山面に区分されている。灰塚面は、高田平野の西部で、上越市の灰塚から中田原の集



第３図　周辺の地形（国土地理院平成10年２月発行「高田」１：20万地勢図を改変）

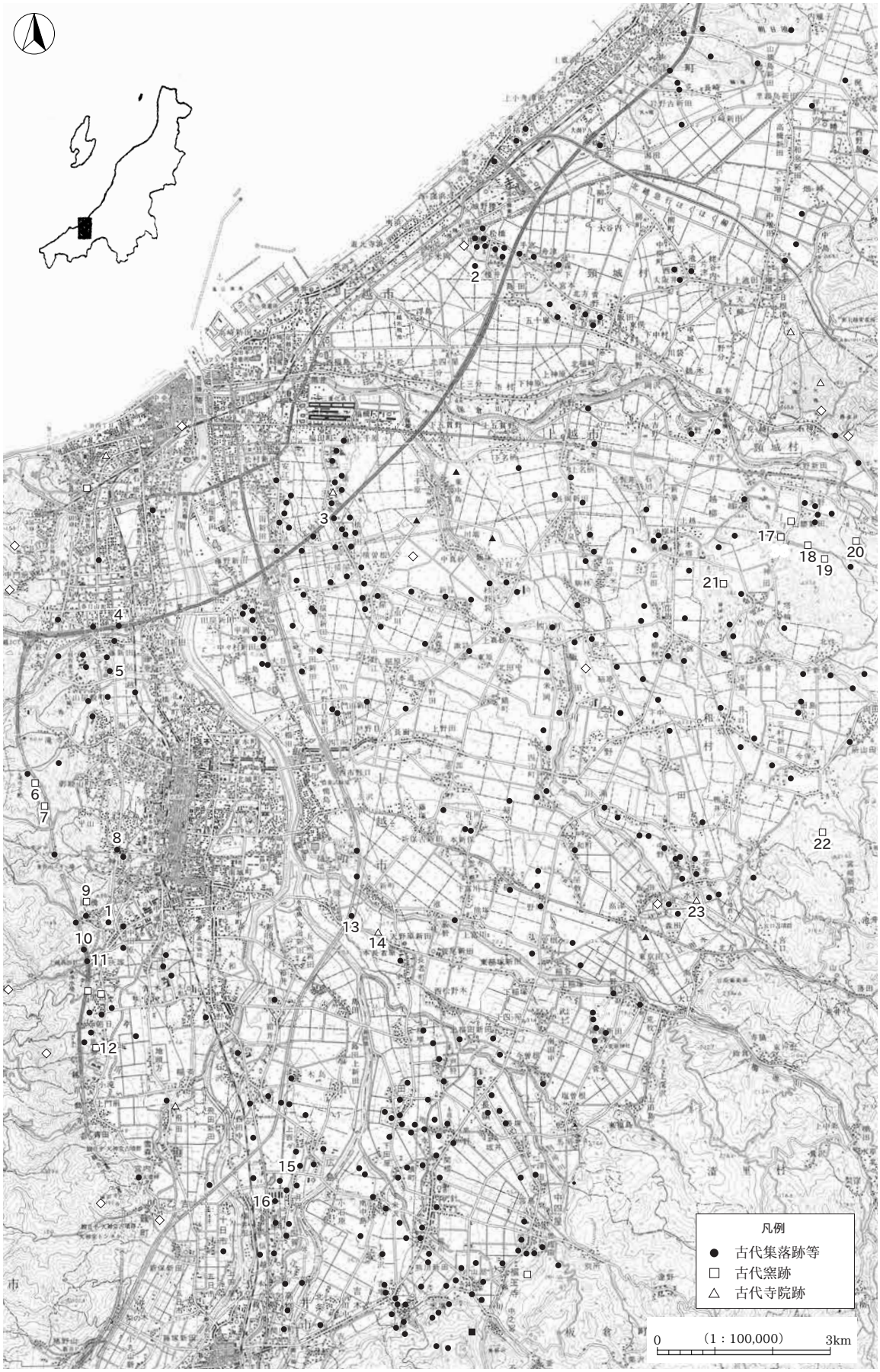
落にかけてのごく限られたところにだけ分布する。標高は25～30mで東に向かって傾き、先端部は沖積面に移化している［高野前掲］。灰塚の集落は、本遺跡の南約0.7kmにあり、本遺跡の現水田面との比高差約9mの上位に位置している。中田原の集落は、本遺跡の南東約0.2kmにあり、本遺跡の現水田面との比高差約3mの上位に位置している。

2　歴史的環境

今回の発掘調査で岩ノ原遺跡からは、8世紀末葉から9世紀第3四半期の遺構・遺物が多く検出された。このことから、ここでは、上越地方の古代に関する略史と、周辺の遺跡について記述していくことにする。律令体制確立以前、現在の福井、石川、富山、新潟および以北を含む地域は、越国と呼ばれていた。『日本書紀』天武十二（683）年より翌十三年にかけて、諸国の境界を定める作業が行われた。越の分割の時期は不明であるが、『日本書紀』持統六（692）年九月の越前国の記事が初見で、これより以前は越国が三分されたことになる。この段階での越後国の領域は、阿賀野川以北の渟足・磐舟郡の二郡のみで構成され、頸城郡は越中国に属していた［山田1986］。『続日本紀』大宝二（702）年三月十七日、越中国四郡を分割し、越後国に編入した。四郡とは頸城・古志・魚沼・蒲原である［中林2004］。上越地域も、この時点で、越後国に組み込まれた。『続日本紀』和銅元（708）年九月二十八日新たに出羽郡を建てることになった。これは、開拓民の他に夷狄視している蝦夷を律令行政区内に取り込み、種々の負担を課し、蝦夷政策を前進させる根拠地とするためであった［山田1986］。『続日本紀』和銅五（712）年九月二十三日、太政官議奏により、出羽国が創立された。ここに、磐舟郡を北限とし、頸城郡を南限とする越後国の領域が確定した［中林2004］。

10世紀前半に成立した『和名類聚抄』によると、頸城郡内に「沼川・都宇・栗原・荒木・板倉・高津・物部・五十公・夷守・佐味」の10郷が存在していたことがわかっている。現在、その10郷は以下のように比定されている。沼川郷は糸魚川市・西頸城地域の広い範囲。都宇郷は、津のある地域と解釈されて、現在の直江津付近。栗原郷は、矢代川流域と関川中流域の左岸の地域で新井市栗原を含む地域。荒木郷は、大熊川流域。板倉郷は、現在の板倉区付近。高津郷は、飯田川の中流域で、上越市高津を含む地域。物部郷は、櫛池川の中流域。五十公郷は、現在の上越市三和区から安塚区を包含する地域。夷守郷は、旧保倉川の自然堤防上の遺跡集中域、上越市頸城区・大潟区を含む地域。佐味郷は、上越市柿崎区を中心とする地域。これによると、岩ノ原遺跡は、栗原郷に含まれる。

また、『和名類聚抄』には頸城郡内に越後国府が設置されていたことも記載されている。これに伴って国分寺・国分尼寺・頸城郡衙の存在も推定されているが、所在地については諸説があり確定していない。現在、それぞれの最有力地と目されている遺跡の多くは、関川沿岸に立地している。国府・国分寺関連遺跡には上越市今池遺跡群とそれに近接する本長者原廃寺がある。今池遺跡（13）の奈良・平安時代は8世紀前半から10世紀の間の遺跡となる。掘立柱建物で構成された建物群は大半が東西棟であり、一定の計画性がうかがわれる。出土遺物の中では、墨書土器・円面硯・瓦塔・畿内からの搬入土器などが注目される。政庁に相当する建物跡は未確認であるが、官衙的な性格をもつ遺跡と考えられる［坂井ほか1984］。本長者原廃寺（14）は、上越市教育委員会の確認調査により14m四方の建物基壇跡が検出され、国分寺である可能性が高まった［小島ほか1984］。三和区法花寺廃寺遺跡（23）からは、礎石や石敷遺構の他に、基壇上に桁行6間、梁間3間の建物が検出された。この建物は、瓦葺でなく板葺の建物と思われ、平安末



［加藤ほか2006］原図を改変

第４図　高田平野における遺跡分布

（国土地理院発行 平成11年「高田東部」平成13年「高田西部」平成10年「柿崎」1:50,000原図）

期のものと推定されている。法花寺廃寺遺跡は、国分尼寺候補地の一つとされている［秦・坂井1990］。一方、頸城郡衙関連遺跡として妙高市（旧新井市）栗原遺跡（16）が有力視されている。13次にわたる発掘調査が行われた結果、瓦葺建物の建つ基壇跡や掘立柱建物群、「郡」「柴原偕伎日」と書かれた墨書土器、円面硯・銅製帯金具などが検出された［坂井1983］。また、同時期の倉田遺跡（15）では、3棟の倉庫跡を含む掘立柱建物群が検出されたほか、円面硯や栗原遺跡と同じ瓦の出土がみられ、栗原遺跡に深く関係する遺跡と考えられている［高橋1996］。

ところで、今回の発掘調査の結果、岩ノ原遺跡からは、「石井庄」「石庄」などと書かれた墨書土器が出土し、本遺跡が「東大寺領石井荘」に関連する遺跡であることが判明した。また、文献資料では、「康治元年三月二十五日越後国留守所牒」において、石井荘が「府辺之要地」とされていたことから、同荘が高田平野内の国府に近接する地にあったことが確かであるとされている［荻野1986］。現段階で、国府関連施設跡である可能性が最も高いとされる今池遺跡から、岩ノ原遺跡は直線距離にして約4kmのほぼ真西に位置している。

岩ノ原遺跡の周辺では、一之口遺跡（4）・新田畑遺跡（8）・蛇谷遺跡（10）・大塚遺跡（11）などが確認されている。一之口遺跡（4）は春日山山麓の沖積地に存在し、西地区と東地区がある。西地区は9世紀後半から10世紀前半の遺跡で、掘立柱建物、井戸、畠などが検出された。建物のなかには一辺1m以上もある巨大な柱掘形をもつ大規模なものがあり、この周辺から搬入品である灰釉陶器が集中して出土し、一般農民層ではない有力者層の居宅が想定された。また、居住区に接して畠が付随する「園宅地」と考えられる遺構も検出された［坂井ほか1986］。東地区では、掘立柱建物数棟に井戸10基以上、水田、畝状遺構、溝等が検出された。祭祀行為の行われた木器や土師器が、まとまって出土した溝や井戸も検出された［鈴木・春日ほか1994］ 。新田畑遺跡（8）は岩ノ原遺跡の北約1.3kmに位置する。9世紀前半を主体とする遺跡で、1辺約38mと推定される方形居館の検出や、石銙巡方の出土から、権力者の居館と推測されている［小島ほか2002］。蛇谷遺跡（10）は岩ノ原遺跡の南西約0.8kmに位置する。9世紀前葉から10世紀初頭までと10世紀前葉から11世紀前葉までの2時期に分けられる遺跡で、調査の結果、出入り口を持つ区画溝で囲まれた中に、掘立柱建物・竪穴住居などが配された古代の集落跡であることが判明した［土橋2005］。大塚遺跡（11）は岩ノ原遺跡の南西約0.9kmに位置する。大塚遺跡からは竪穴住居1棟・須恵器窯1基が検出され、須恵器窯跡からは焼台として使用された甕破片が出土した［高橋2005］。

荘園関連遺跡には、宮野遺跡（3）・榎井A遺跡（2）・江向遺跡（5）などがある。宮野遺跡（3）では掘立柱建物3棟、布掘りの建物などが検出され、転用硯・腰帯石銙・灰釉陶器が出土した。出土遺物から一般庶民の集落跡ではなく、在地有力支配層に関係した集落と考えられ、荘園に関係する遺跡の一つとして把握された［戸根ほか1985］。榎井A遺跡（2）では、「北館」「北」「庄」等の墨書土器、転用硯、農事における大規模な労働力の編成の一端を示すと考えられる「以四月五日御田阿□（櫻カ）夫事」と書かれた木簡が出土し、古代荘園の可能性が高いと見られている［秦・小林ほか1998］。江向遺跡（5）は10世紀

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	岩ノ原	7	大貫古窯跡群	13	今池	19	神田長峰1号古窯跡
2	榎井A	8	新田畑	14	本長者原廃寺	20	今熊古窯跡
3	宮野	9	向橋古窯跡群	15	倉田	21	本郷新溜池古窯跡
4	一之口	10	蛇谷	16	栗原	22	日向古窯跡群
5	江向	11	大塚	17	末野古窯跡	23	法花寺廃寺
6	滝寺古窯跡群	12	下馬場古窯跡群	18	神田長峰2号古窯跡		

第1表　高田平野における奈良・平安時代の主な遺跡

代を中心とする遺跡で、大型掘立柱建物とともに、「高有私印」と刻まれた青銅印が出土した。これは、西大寺領荘園（津村荘）と都宇郷との関連を示唆する新たな資料として、注目されるものである［北野2003・中林2004］。

生産遺跡として、古代の窯跡群が、高田平野を取り囲む東西の丘陵上にいくつか存在する。東側丘陵には、上越市三和区から浦川原区にかけて分布する末野・日向などの各窯跡群（17・18・19・20・21・22）（頸城平野東部丘陵窯跡群と総称）があり、西側丘陵には、下馬場（12）・向橋（9）・滝寺（6）・大貫（7）などの窯跡群がある（頸城平野西部丘陵窯跡群と総称）。操業の開始は、下馬場古窯跡が頸城平野の最古で、7世紀末葉から8世紀初頭と考えられている［小島1989・笹澤2002］。岩ノ原遺跡出土の須恵器は、多くが西部丘陵窯跡群の滝寺・大貫産で、他に、末野などの東部丘陵窯跡群、佐渡小泊窯産などが含まれる。

3　石井荘の小史

石井荘の小史と比定地の問題について、主に新潟県史［新潟県1986］・上越市史［上越市2004］・国史大辞典［亀田1998］などを基に見ていきたい。まず、石井荘の小史について時代を追って見ていく。『続日本紀』天平勝宝元（749）年七月に、寺院の墾田地所有を許可する詔が出されたのを契機に、東大寺は全国に広大な寺領を設定していく。この動きの中で、東大寺が越後国に設定したのは四荘であった。四荘とは、頸城郡石井荘・吉田荘・真沼荘・古志郡土井荘である。東大寺荘園目録にみえる石井荘に関する最古の文書名は天平勝宝五（753）年の条里坪付等四枚（大治五年東大寺諸荘文書并絵図目録）・同年国郡解（仁平三年東大寺諸荘園文書目録）であり、同八年の国郡田図がこれに次ぐ。このことから石井荘は天平勝宝五年頃に成立したと考えられる。

石井荘の規模は、同荘成立からほぼ二世紀後の天暦四（950）年に作成された「東大寺封戸荘園並寺用雑物目録」から窺うことができる。それによると、越後国の東大寺領荘園の総田数約一一三町二八九歩のうち、同荘の田地は約六五町で、越後国東大寺領の六割近くを占めていたことがわかる。この段階で石井荘は、越後国東大寺領の主柱であったということができる。

長徳四（998）年の「東大寺領目録」によれば、頸城郡の石井、吉田、真沼の三荘園はすべて、「荒廃」していたことが記されている[1)]。ただし、東大寺は頸城の荘園を「荒廃」するにまかせていたわけではなかった。東大寺の文書目録に、長徳四年以後も石井荘に関する文書が現れることは、そのことを物語っている。たとえば、元永元（1118）年の「越後国石井荘文書取出注文」によれば、寛弘五（1008）年、長和三（1014）年に石井荘より提出された解状などが残されていたことから、そのことが知られる。

永承七（1052）年に石井荘の荘司として赴任した僧兼算は、隣国から浪人を呼び集めて荒田の開発に努力し、その結果、天喜五（1057）年頃には耕作開田二十余町を数えるようになった。またこのころ石井荘では管理のため荘預と荘司が置かれていたことが知られる。なお兼算は天喜五年二月および十二月に解文を本家である東大寺に提出しているが、その中で、国から荘民に課せられる国役が繁多過重のため浪人が荘内に居住しようとしないこと、また国司の目代の非法により荘民が逃亡することを訴え、国役の免除などを願っているが、その結果については知ることができない。その後、天承～長承年間（1131～35）

1）一方、伊藤正義氏は長徳四年の「同目録」には「石井荘…荒損得」「真沼荘…吉田荘…已上、並荒廃」と荒廃状況に差があることから、石井荘は曲がりなりにも耕作経営が行われていたとしている［伊藤1986］。

に東大寺と国司との間にこの荘をめぐって紛争が生じたようで、その解決策として、この荘は同じ越後国古志郡にあった東大寺領土井荘とともに、同国沼垂郡にあった豊田荘（加地荘ともいう）と交換されることになった。ここに、石井荘の歴史は幕を閉じた。

次に、石井荘の比定地について考えてみたい。東大寺が北陸道諸国に荘園を設定するに際し、特徴的なことが二点指摘される。第一は、運送の問題を重視したこと。米などの重量物を京に送る際に利用した海運の便、河川を利用して河口の津に至る水運の便を重要な立地条件とした。第二は、北陸道諸国における東大寺領荘園が、各国の南西部の平野に集中している点である。北陸道諸国の南西部平野とは、それぞれの国の国府所在平野で、当時最も先進的と目された地域であった。北陸道諸国にあっては、都に近い南西部平野で水運の便のよいところ、そのような条件の地域に国府が設置され、東大寺領荘園が設定された。

では、石井荘はこれまで、どこに比定されてきたのであろうか。まず吉田東伍氏は『大日本地名辞書』で、「石井は古訓岩井に同じ」として西頸城郡旧名立町の岩井観音堂をこれにあて、名立谷一帯の地を石井荘に比定した。以来、これが通説化していたが、井上慶隆氏は、「石井庄字吉田一巻 条里坪付等四枚」（大治五年東大寺諸荘文書并絵図目録）なる記事から、石井荘は沖積平野の条里上に坪付されていたとし、六五町の石井荘を狭隘な名立谷に比定することは不可能と通説を否定した。そして同記事から、石井荘は長徳四年以降、史料上から姿を消す吉田荘に近接していたとし、旧中頸城郡三和村神田（旧吉田村）に隣接する地域、旧三和村付近に比定した［井上 1973］。石井荘が「府辺之要地」（永治元年三月二十五日越後国留守所牒）とされていたことから、同荘が高田平野内の国府に近接する地にあったことは確かであり、さらに、この地域が条里遺構の顕著な関川右岸の沖積平野であること、東大寺封戸五十公郷が存在した地域であったこと、この地に国衙領は認められるものの、東大寺領以外の荘園の存在が確認されないことなどは、石井荘旧三和村説を補強するものであった［市澤 2004］。さらに伊藤正義氏は、国府と頸城郡内の東大寺領荘園の位置を「国府→石井荘→吉田荘→真沼荘」という地理的遠近関係で明らかにした［伊藤 1986］。また石井荘が12世紀前半、沼垂郡加地郷の地と交換され、豊田荘が成立したことから、石井荘の故地は国衙領に編入されたとみなされる。この地域に国衙領である保が多く認められることは、この地に存在していた東大寺領荘園が12世紀前半、国衙領に編入されたことを物語るものであろう［荻野 1986a］。

このように、石井荘の比定地としては、これまで関川右岸の旧三和村説が有力視されていた。しかし、今回の発掘調査で、岩ノ原遺跡が、東大寺領石井荘に関連する荘園遺跡であることが判明し、石井荘が関川左岸地域に存在したことが確認された。ただし、「越後国留守所牒」によると、石井荘は「府辺之要地」にあったこと、当時の石井荘の田地は一五町を数え、それらは「高田保」内に散在していたことが記されている。このことから、石井荘ははっきりとした輪郭を持った荘園ではなく、上越地域の国府付近にあった高田保と呼ばれる所領単位のなかに散らばる、田地の集合体であったことがわかる［市澤 2004］。このことからも、今回の調査区以外の地に、同荘に関連する遺跡が存在することは十分に考えられる。

第Ⅲ章　調査の概要

1　遺跡の現況と微地形（第５図参照）

岩ノ原遺跡は北西約4.5kmの儀明集落付近に源を発する儀明川右岸の沖積地（高田面）に立地する。この儀明川は遺跡の南西約200m地点で北流する支流沢山川と合流し、遺跡の北西端を通過する。また、遺跡の西約400mで西頸城丘陵の東裾に達し、遺跡の南東から南約200mには洪積台地（灰塚面）が延び、遺跡のある沖積面に接する。したがって、遺跡の周囲は北から東に沖積面が、南東から南に灰塚面の微高地広がり、西は丘陵が連なる。このような周辺地形から遺跡は南から北に極めて緩く傾斜する。遺跡のある現地表面の標高は約21mで、標高の高い19Cグリッドが21.4m、標高の低い3Bグリッドで20.8mを測る。また遺跡の北側、儀明川の川岸から東側にかけては小谷状に低地が見られる。現在、江戸時代に開削された稲荷西中江用水が流れているものの、発掘調査で旧河川跡とした小河川の痕跡が認められたように、かつてこの付近には小河川が流れていたものと推測される。

遺跡の現況は水田である。眼前には北から東に主要地方道上越－新井線（通称：山麓線）が通っているが、過去の更正図や平成10年以前の空中写真を見る限り、遺跡周辺には水田が広がっていた。現水田や用水・農道の位置は主要地方道上越－新井線部分を除き、大きく改変されていない。地元民の聞き取り調査のとおり、戦後の耕地整理が大規模に行なわれていないことを示している。また、昭和の初めに埋め戻されたといわれる沢山川用水も発掘調査の結果、現農道や用水の直下に認められた。このことから水田区画や用水・農道の原形は少なくとも近世まで遡るものと推定できる。

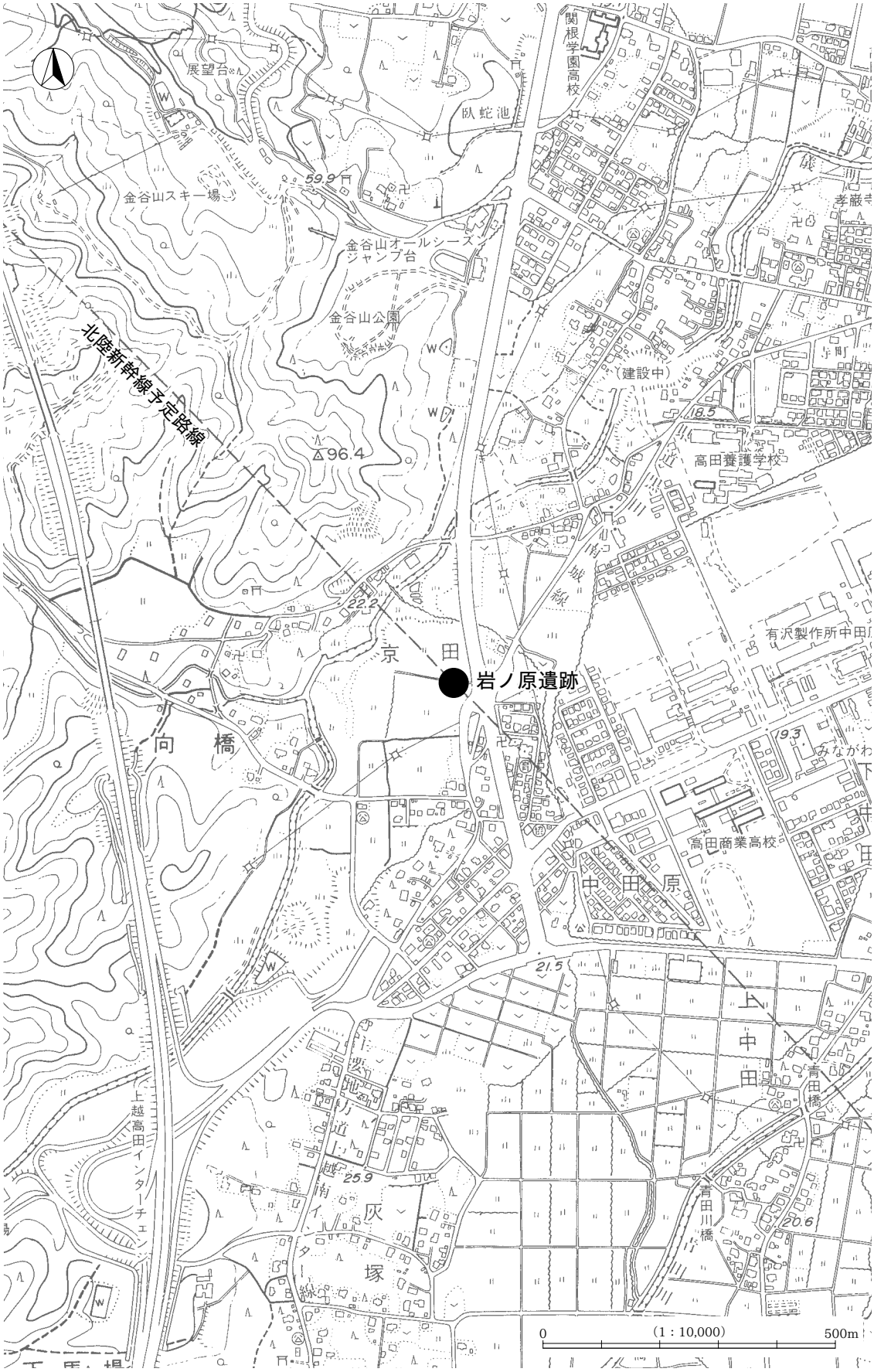
前述のとおり南から北に向って傾斜する地形は、水田の長軸方向を南北（地形に平行）とし、用水路は地形に直行させるように導かれている。地形と水田の水周りを考えた配置となっている。なお発掘調査で検出された畑作溝の方向、掘立柱建物の長軸方向のほとんどが地形に直行する東西方向を示す。これらの遺構も地形を意識して構築されたものである。

遺構の遺存状況は、当初２枚と思われた古代の文化層が下層の１枚であったため、沢山川用水で一部破壊された部分を除き、遺物包含層も含めて良好に遺存していた。加えて水田下の湿地のため木製品をはじめとする有機質遺物も良好に遺存していた。

2　グリッドの設定

調査地はほぼ南から北に向かって緩く傾斜する地形である。しかし、新幹線の路線方向と真北方向は大きくずれている。したがって、新幹線路線方向を優先しグリッドを設定した。グリッドは新幹線路線のセンター杭179k300m（世界測地系のＸ座標＝121745.8335:北緯37度５分48.894182秒、Ｙ座標＝-24035.7343:東経138度13分46.562452秒）を基点（1C杭）とし、同じくセンター杭179k200m（世界測地系のＸ座標＝121679.3848:北緯37度５分46.745386秒、Ｙ座標＝-23961.0044:東経138度13分49.596589秒）を結んだ線を横軸とした。これを基線に調査範囲を覆う形で、縦横10m方眼を組み大グリッドとした（第６図参照）。

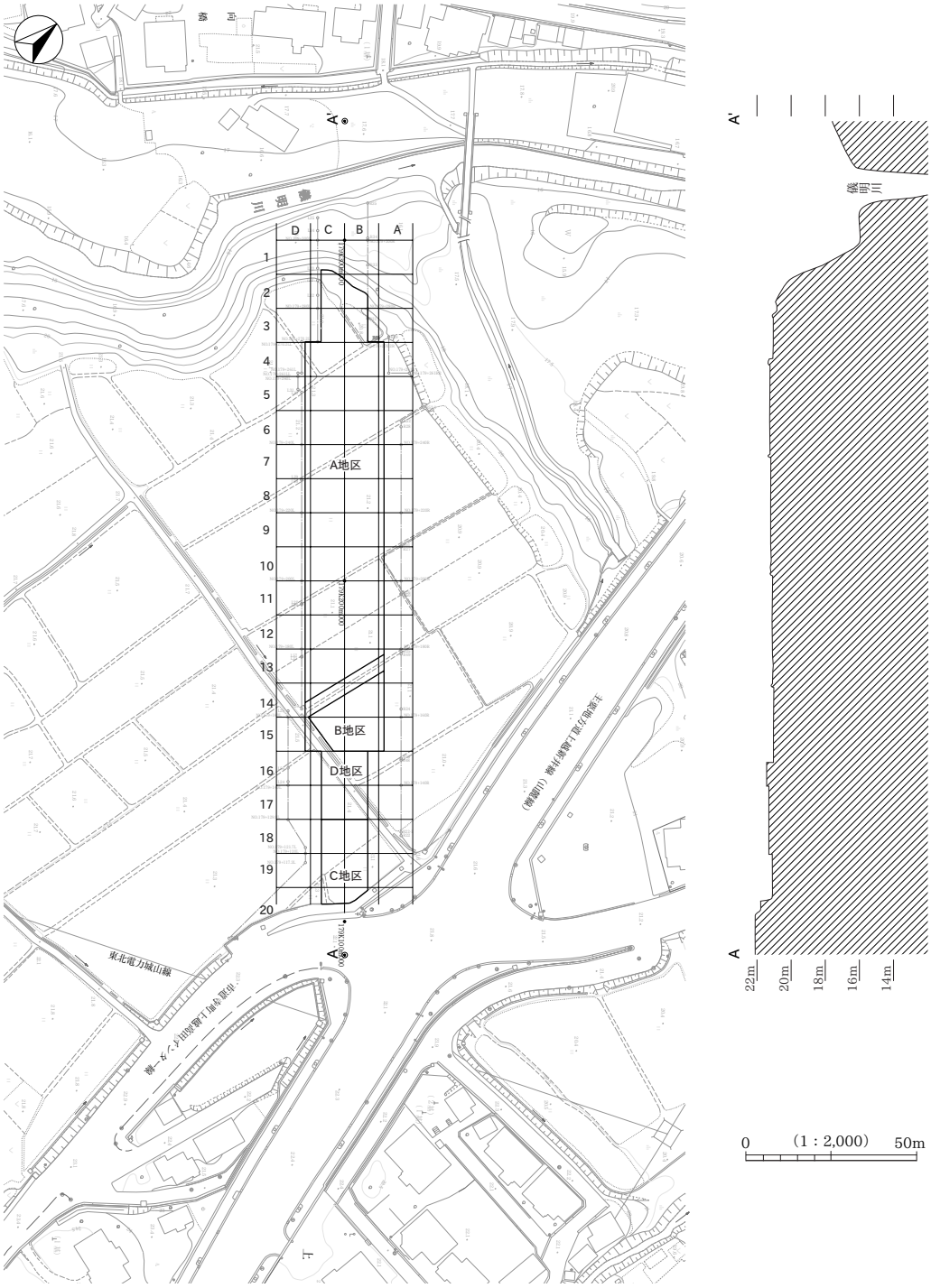
グリッド表示は北西側から縦軸に算用数字（1～20）、北東側から横軸にアルファベット（A～D）を付



第５図　遺跡の位置と周辺の微地形

〔上越市役所発行　「上越市街図」1：10,000原図〕

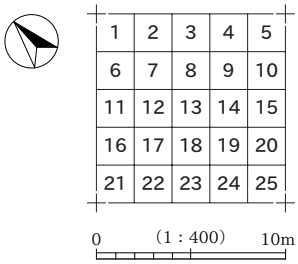
2　グリッドの設定



第６図　グリッド設定図及び調査区分割図

し、これを組み合わせた。なお、グリッドの横軸は真北から48度21分25秒西偏する。

小グリッドは大グリッドをさらに2m方眼に分割し、25区分した。小グリッドの表示は、第７図のように北隅を１（基点）に算用数字順とした。包含層出土遺物は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせ取り上げた。



第７図　小グリッド模式図

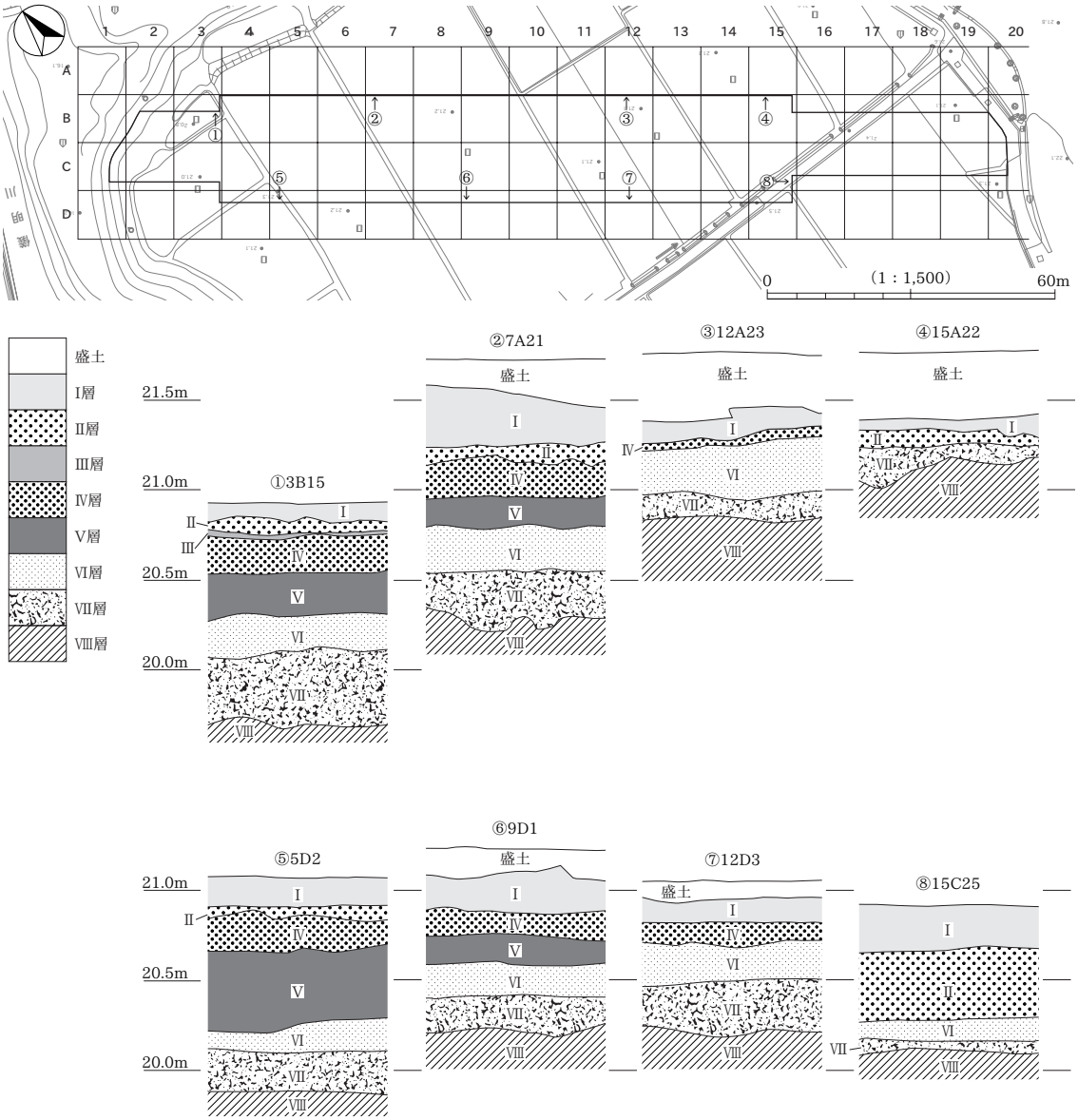
3　基本層序

本遺跡は南から北に向い緩く傾斜する地形で、儀明川右岸の段丘に立地する。したがって、いずれの地点も基本層序は近似する。しかし、儀明川に近づくにつれ標高がやや低くなるせいか古代以降の洪水堆積層が堆積する。この洪水堆積層は、遺跡の南東部では堆積せず、北西部の儀明川近くで厚くなる。なお、洪水堆積層は、シルト～砂が層状に堆積するものであり、緩やかな洪水（冠水）によるものと推定される。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅷ層まで説明する。詳述しないが、盛土は仮農道設置に伴う砂である。

Ⅰ層：10～25cm　灰褐色シルト（7.5YR4/2）　現水田耕作土、下層に鉄分の沈着多い。

Ⅱ層：5～40cm　褐灰色シルト（7.5YR4/1）　鉄分の沈着が見られ、北西部では厚く堆積する。中世～近世の遺物が少量見られた。



第８図　基本層序

Ⅲ層：０～10cm　暗青灰色シルト（5B4/1）　北西部の3B・4A・4Bグリッドの一部に見られるだけである。

Ⅳ層：０～25cm　灰白色砂（10Y7/1）～青灰色砂（10BG5/1）　洪水堆積層。13列グリッドから南東部には認められない。北西部の儀明川に近づくにつれ厚く堆積する。

Ⅴ層：０～45cm　灰色砂・灰色シルト（10Y5/1）の互層　洪水堆積層。11A－10Dグリッドから南東部では認められない。北西部の儀明川に近づくにつれ厚く堆積する。

Ⅵ層：10～40cm　灰色粘土（N5/）　炭化物粒をごく少量含む。Ⅶ層に見られる菱鉄鉱は、一部を除き含まれない。北東部では上位に鉄分の沈着が著しい。

Ⅶ層：10～45cm　灰色粘土（N6/）～灰色粘土（7.5Y6/1）　古代の遺物包含層。炭化物粒、菱鉄鉱を多く含む。

Ⅷ層：27～55cm　青灰色粘土（5BG6/1）　地山。古代の遺構確認面。

なお、A地区の調査終了後、11C・9C・7Cグリッドの３か所を深掘りし、下層の堆積状況を確認した。Ⅷ層の層厚は上記のとおりである。Ⅷ層以下は、Ⅸ層：青灰色シルト（平均37cm）、Ⅹ層：青灰色砂質土（平均35cm）、XI 層：青灰色シルト（平均60cm～）である。遺構・遺物は確認できなかった。

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

本遺跡では基本層序Ⅷ層（地山）上面を遺構確認面として、掘立柱建物16棟、杭列２列、溝81条、井戸１基、土坑11基、性格不明遺構９基、その他ピット・杭を検出した。

これらの遺構はいずれもほぼ同一面で確認され、その新旧関係によって掘り分けた。最も古い遺構群は掘立柱建物16棟、杭列２列、溝１条、井戸１基、土坑11基、性格不明遺構６基である。次いでⅠ期畑作溝群35条、最も新しい遺構群はⅡ期畑作溝群45条と性格不明遺構３基である。遺構確認面がほぼ同一面であることから、掘立柱建物等の最も古い遺構群が廃絶された後、あまり時を経ずⅠ期畑作溝群・Ⅱ期畑作溝群ほかが構築されたものと考えられる。

遺構の分布状況は、大きく調査区北西部の４～６グリッドと南東部の12～20グリッドに分かれる。前者を北西部の遺構群（北西部遺構集中区）、後者を南東部の遺構群（南東部遺構集中区）とした。北西部の遺構群は南東側を杭列によって区切られ、掘立柱建物３棟、土坑３基、性格不明遺構１基を検出した。南東部の遺構群は掘立柱建物13棟、井戸１基、土坑８基、性格不明遺構７基、溝81条を検出した。北西部と南東部の遺構群の中間区域では、ほとんど遺構が認められず、杭列１列、性格不明遺構１基を検出したのみである。

遺構の構築時期は、中間区域に所在するSX021がその出土遺物から古墳時代中期（5世紀中葉）に比定される。これ以外は遺構に伴う遺物が少ないことから、多くは詳細な時期決定に検討を要するものの、遺物包含層から出土した遺物から古代（8世紀末葉～9世紀中葉）の範囲に収まるものと推定される。

このほかに古代以降の所産と考えられる河川跡と沢山川用水を検出した。河川跡はその出土遺物から17世紀代には埋没しているものと考えられ、沢山川用水は調査時の聞き取り調査で、江戸時代には開削され、昭和初期にその役割を終え埋められたという。

2　記 述 方 法

遺構の説明は、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いた。

遺構名　遺構の種別ごとに略号を用い、番号は遺構精査の段階で確認順に通し番号を付けた。遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物、SA：杭列、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、SX：性格不明遺構

柱穴・ピット・杭は掘立柱建物や杭列のような遺構を構成する場合、遺構名の後に柱穴・ピット・杭の通し番号を付し、「SB001 - P01・02・03…」、「SA002 - P01・02・03…」のように呼称した。他の遺構との関連が認められない単独のピット・杭は、大グリッドごとの通し番号とし、「1A - P01・02・03…」「1B - 杭１・杭２・杭３…」のように呼称した。

本　文　遺構の説明は他の遺構との関連が認められない単独のピット・杭を除き、原則として個別に記述した。ただし、溝についてはSD136を除き、Ⅰ期畑作溝群、Ⅱ期畑作溝群にまとめて記述した。また

古代の遺構ではないが、河川跡と沢山川用水についても記述した。

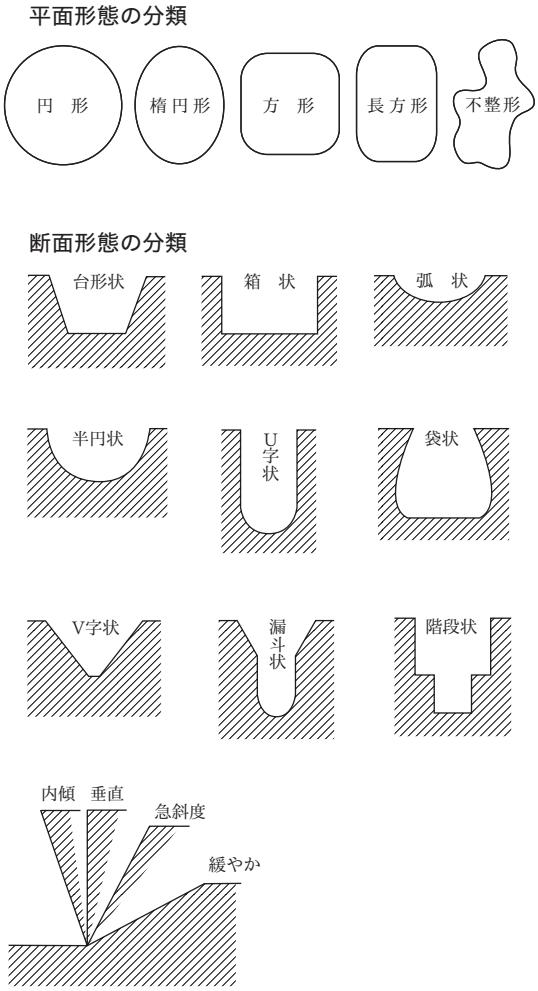
掘立柱建物の軸方向は、棟持柱等から桁方向がわかるものはこれを主軸方向とした。桁方向が明らかでない場合は、長軸方向を求めた。平面が方形で長軸・短軸が判断できない場合は、周辺の遺構に合わせ軸方向を求めた。

遺構観察表　遺構の種別ごとに観察項目を設け、掘立柱建物の柱穴、杭列、溝について掲載した。なお、遺構の新旧関係は、「ＢよりＡが古い」「ＡはＢに切られている」を「Ａ＜Ｂ」、「ＡとＢは同時期である」を「Ａ＝Ｂ」、「ＢよりＡが新しい」「ＡはＢを切っている」を「Ａ＞Ｂ」で表した。また遺構の平面および断面の形状は和泉Ａ遺跡［荒川・加藤1999］に準拠した。

図面図版　遺構分割図ごとに掘立柱建物、杭列、井戸、土坑、性格不明遺構、溝の順で掲載した。ただし、Ⅱ期畑作溝群に伴って確認された性格不明遺構（SX025・027・052）は紙面の都合上、他の土坑や性格不明遺構の個別図と一緒の図版に掲載した。

図面の縮尺は、遺構全体図：1/800、溝などの全体図：1/400、掘立柱建物などの全体図：1/300、遺構分割図：1/200で掲載した。また遺構の個別図は、掘立柱建物の平面図・エレベーション図：1/80、SX020の個別図：1/80、掘立柱建物の柱穴・井戸・土坑・性格不明遺構の個別図：1/40、畑作溝の断面図：1/40で掲載した。また河川跡と沢山川用水の断面図も1/40で掲載した。

写真図版　実測図を掲載した遺構については極力掲載するように努めた。掘立柱建物は、完掘全景と柱穴の土層断面もしくは礎盤（板）の出土状況を中心に掲載した。



第９図　遺構の平面形態と断面形態の分類

3　遺構各説

A　掘立柱建物

前述のとおり計16棟の掘立柱建物を検出した。分布状況は、北西部の４～６グリッドに３棟（SB002・003・006）、南東部の13～19グリッドに13棟（SB048～050・055・056・058・059・102・137・138・143・144・146）である。南東部では14Cグリッド付近に集中し、SB058・059・143・144の４棟が重複する。また調査区外に掘立柱建物が広がる可能性がある。建物の構造は、北西部では棟持柱を持つ平面亀甲形の側柱建物２棟と総柱建物１棟、南東部では側柱建物12棟と総柱建物１棟である。柱の立て方は、北西部のSB002・006と南東部のSB048が柱穴に掘形を持たない打込み柱

式、同じく南東部のSB049が浅くて小さい掘形を持つものの、打込み柱式と考えられる。また北西部のSB003は掘形を持つものと打込み柱式の両者の併用である。これ以外は柱穴に掘形を持つ建物である。建物規模は、北西部では総柱建物のSB003を除くと、南東部の掘立柱建物と比べて小さく、柱根も貧弱である。このことは北西部の建物群と南東部の建物群のそれぞれの性格を反映しているように思われる。建物の方向から主軸方向、長軸方向、軸方向を見ると東西を向くもの12棟、南北を向くもの4棟となる。また柱間寸法や柱穴の規模・構造などは、建物ごとに比較的規則性が認められるものと、同一の建物内においてもばらつきが認められるものなど多様な状況を示す。なお、建物に伴う雨落ち溝や庇付きの建物は検出されなかった。

SB002（図版5・6・50・53）

北西部の4～5Cグリッドに位置する側柱建物である。北西方向約50mの所に儀明川が流れ、SB006とともに川に最も近い遺構の一つである。桁行の一部に柱根は認められないものの桁行2間（2.77～2.94m）、梁行2間（2.93～3.14m）、面積は8.69m^{2}を測る。梁行は中間の柱がやや外側に張り出す棟持柱（P02・05）を持ち、平面形は亀甲形を呈する。したがって、主軸方向はN-80°-Wを示し、東西棟となる。柱間寸法は桁行北側で1.44～1.50m、梁行1.41～1.65mでほぼ等間隔となる。柱穴はP02を除いて、掘形が見られない。P02は深さ14cmと浅く、覆土は菱鉄鉱と炭化物粒を少量含む灰色粘土である。柱根はすべての柱穴に認められ、樹種はクリ、モクレン、ヌルデ、フジキ属、コナラ属コナラ亜属コナラ節の多種からなる。SB006と同様に樹種選択が認められない。棟持柱と推定されるP02・05はこれ以外の柱に比べ太く、特にP05は2倍ほどの太さとなる。またすべての柱根先端部は、片面または両面から削られ尖る。このように柱根先端部が尖ること、P02を除き掘形が認められないことから打込み柱式建物と推定できる。また、規模が小さいことから居住のための建物でなく、SB006と同様に小屋風の倉庫を想定している。遺物は柱根（343～348）以外出土していない。

SB003（図版5・6・50・54）

北西部の5～6Cグリッドに位置する総柱建物である。北西側約3mにSB002、北側約9mにSB006が存在する。また本遺構の南側はSX004と重複する。遺構同士の切合い関係は認められないものの、SX004が良好に遺存することから、SX004が新しいものと推定できる。規模は北東角の柱穴は木根による攪乱のため検出されていないが、東西2間（5.40～5.64m）、南北2間（5.40～5.67m）の方形を呈する。面積は30.25m^{2}を測る。方形のため主軸方向・長軸方向を決めかねるが、SB002・006に合わせるならばN-83°-Eの軸方向となる。柱間寸法は東西方向の西から1間目2.28～2.73m、2間目3.14～3.27mで大きく異なる。南北方向は北から1間目2.69～2.80m、2間目2.51～2.98mでやや不揃いとなる。柱穴は掘形を持つもの（P01・03・05・07・08）と持たないもの（P02・04・06）がある。掘形を持つ柱穴の覆土は、炭化物粒を含む灰色粘土である。掘形を持たない柱穴は打込み柱と推定される。また掘形を持つP07・08の柱根は掘形の底面下まで穿たれ、しかもP07は柱根先端部がやや尖るように加工されている。したがって、P07・08も打込み柱の可能性が高い。柱根は6基の柱穴（P02～04・06～08）で認められた。太さはP05を除き、15～21cmほどのしっかりとしたものを用いている。P05は太さ3.0×6.9cmの角材であり、木製品の部材の転用である。樹種は分析した5点のすべてがクリ材で、樹種選択が認められる。このように総柱建物であること、遺存する柱根が太く、丈夫で耐久性のあるクリ材を用いていることから倉庫として利用したものと考えられる。遺物はP01・02・05・07から土師器片が少量出土している。

SB006（図版5・6・50・54）

北西部の4Bグリッドに位置する側柱建物である。北西方向約50mには儀明川が流れ、川に最も近い遺構の一つである。桁行1間（3.00～3.02m）、梁行2間（2.26～2.50m）、面積は7.23m^{2}を測る。主軸方向はN-66°-Wを示し、東西棟となる。梁行の中間にはやや外側に張り出す柱穴P02・05があり、棟持柱となる。したがって、平面形は亀甲形を呈する。梁行の柱間寸法は北側（P02－03間・P05－06間）が1.01～1.05m、南側（P01－02・P04－05間）が1.27～1.41mとなる。北側が短く、南側が長くなる。柱掘形はP01・02に認められ、深さはP01が29cm、P02が9cmと浅い。覆土は炭化物粒を少量含んだ灰色粘土で、基本層序Ⅷ層（地山）に炭化物粒が混入したような土である。柱根はすべての柱穴に認められ、樹種はモクレン属、カエデ属、キハダ、アカメガシワの多種からなる。SB002と同様に樹種選択に傾向が認められない。棟持柱と推定されるP02・05の柱根が、これら以外の柱根に比べやや太くなる。またすべての柱根先端部は、片面または両面から削られ尖る。このように柱根先端部が尖ること、多くの柱穴に掘形が認められないこと、掘形の認められるP01の柱根も底面以下まで穿たれていることなどから打込み柱式建物と推定できる。また、規模が小さいことから居住のための建物でなく、小屋風の倉庫を想定している。遺物は柱根（355～360）以外出土していない。

SB048（図版8・9・51・55）

南東部の15B～C・16Cグリッドに位置する側柱建物である。西側約1～4mにSB058・059・143・144が存在する。東側をSB137-P07、西側のP06がSK106と重複し、これらの遺構に切られている。また遺構のほぼ中央は沢山川用水で破壊されている。南側は調査区外のため、梁行の柱穴が一部確認されず、P09も柱穴規模から主柱穴ではない。したがって、全容は明らかでないものの、桁行5間（11.50m）、梁行3間（6.56m）、面積75.44m^{2}と推定される。主軸方向はN-8°-Eを示し、南北棟となる。柱間寸法は確認できる範囲で桁行西側の北から2.08・1.86・1.74・3.38・2.53mと一定でないものの、梁行北側は西から2.03・2.24・2.24mでほぼ一定となる。柱穴は掘形が無く、柱根または柱痕が認められた。したがって、打込み柱式建物となる。柱根はP01・02・03・04・05・10・14の7基に認められ、太さ12.0～21.5cmを測る。このうちP04・08を除き、先端部が尖るよう加工されている。樹種も未分析のP10・14を除きすべてクリ材を用いている。なお、P11～13は規模が小さく浅いことから、当初、間仕切り柱または束柱を想定したが、本遺構との関係は不明である。遺物は柱根（361～367）、P09から木片1点が出土している。

SB049（図版8・10・51・56）

13A～Bグリッドに位置する総柱建物で、中心に心柱を持つ。南東部の遺構群のうち最も北に位置する建物で、南側はSB050と接する。南北3間（4.20～4.47m）、東西3間（3.60～3.73m）のほぼ方形で、面積は15.90m^{2}を測る。長軸方向はN-17°-Eで、南側が接するSB50とはほぼ90°のズレとなる。柱並びは、北側柱穴列のP02・03が10～20cmほどやや外側に張り出し、P02がP03に片寄る以外、ほぼます目状に並んでいる。柱間寸法は東西方向で北側1間目（P01‐02間）1.5m、2間目（P02‐03間）0.95mを除き、1.16～1.29mとほぼ均等となる。南北方向は北から1間目（P01‐05、02‐06、03‐07、04‐08間）1.32～1.68m、2間目（P05‐09、06‐10、07‐11、08‐12間）1.22～1.44m、3間目（P09‐13、10‐14、11‐SB050-P02、12‐16間）1.44～1.71mとなり、2間目がやや狭く、1・3間目がやや広くなる。柱穴の掘形はいずれも認められるが、P02・13・14・16以外は規模が小さく、柱穴底面は柱根や柱痕に比べ浅い。出土した柱根のうちP03・04・08・11の柱根底部が尖るように加

工されている。このようなことから柱穴は小さな掘形を持つものの、打込み柱式と考えられる。P02はやや大きな掘形を持ち、底面に木片・木皮の植物質敷設物が敷かれていた。P14はほかの柱穴に比べ、極めて浅く、唯一礎盤（板）の認められた柱穴である。柱の長さを調整するために礎盤（板）が用いられたと推定される。SB50と重複するP13～15（SB50-P02）・16は柱根が一本も認められなかった。SB050の構築に際し、抜き取られたと考えられる。このことからSB050と重複するが、これより古くなるものと推定される。遺物は柱根11点（368～377）、礎盤（板）1点（378）が出土している。樹種分析した礎盤（板）1点はクリ、柱根10点はスギ3点、クリ7点である。このほかP02・04・05・10・13・16から土師器片が少量出土している。なお、本建物は、総柱構造、柱根の太さから倉庫と推定され、中心の心柱は寄棟造りの屋根の中心部を支える柱[1]と考えられる。

SB050（図版8・10・51・57）

南東部の13～14Bグリッドに位置する側柱建物である。北側はSB049と重複するがこれより新しい。また、東側の一部は調査時の暗渠設置で破壊されている。東西2間（5.17～5.25m）、南北2間（4.50～4.60m）で、東西方向がわずかに長くなる。面積は23.71m^{2}を測る。長軸方向はN-78°-Wを示し、北側を接するSB49とはほぼ90度のズレとなる。柱間寸法は南北方向が2.17～2.36mとほぼ等間隔であるのに対し、東西方向は北側の東から3.43・1.82m、南側の東から2.87・2.30mと大きく異なる。柱穴はいずれも大形の掘形を持ち、径50～86cm、深さ31～78cmを測る。柱穴構造は、底面及び底面近くに礎盤（板）と植物質の敷設物が敷かれるもの（P03）、植物質の敷設物が敷かれるもの（P01・08）、礎盤（板）が敷かれるもの（P04・05・06）、何も敷設されないもの（P02・07）があり、多様な形態を示す。礎盤（板）及び植物質の敷設物は、礎盤（板）10点のうち分析した5点はすべてスギ材であり、ほかの礎盤（板）もスギ材の可能性が高い。また植物質の敷設物は、分析したP01ではスギの削片と表皮という結果が出ている。柱材加工に際して生じた副産物を底面及び底面近くに敷いたものと思われる。遺物は礎盤（板）（379～382・384～389）、植物質の敷設物（390）のほか、P03から斎串（383）、P05から須恵器杯蓋（1）・土師器片、P07から板材片1点、P08から土師器・須恵器の小片、木片1点が出土している。なお、本建物は柱穴の掘形規模、礎盤（板）や植物質の敷設物、礎盤（板）に残る柱の圧痕（384～388）などから倉庫と推定している。

SB055（図版16・17・51・58）

南東部の17C・18B～C・19Cグリッドに位置する側柱建物である。東側約2mにSB056が存在し、西側はSB146と重複する。桁行4間（9.00m）、梁行2間（5.20m）の長方形で、面積は46.80m^{2}を測る。主軸方向はN-86°-Wを示し、東西棟となる。柱間寸法は桁行の北側が0.75～2.25m、南側2.10～2.40mで、北側にばらつきが見られる。これはP14・18が変則的に位置するためであり、これを除けば、おおむね1間2.25m前後となる。梁行方向が2.60～2.70mで、1間2.65m前後となる。柱穴は南西隅の柱穴が調査区外のため認められなかったが、これ以外はいずれも掘形を持つ。規模は径30～120cm、深さ20～82cmにばらつきが認められるものの、ほぼ直線状に並ぶ。柱根はP07・11・12で出土したが遺存状態は悪い。柱根形状を留めたP07を見る限り、太さ15.6×24.0cmの芯外分割材が用いられている。また柱痕はP08・10・15・18に認められ、これを見る限り、太さ15～30cm程度の柱根が据えられていたと推定される。これらの柱根・柱根はほぼ1直線に並ぶ。柱穴の底面には礎盤（板）・敷設

1）　宮本長二郎氏のご教示による。

物などは認められない。なお本遺構内で検出された18C-P01は位置的に見て桁行・梁行の中心に位置する。しかし、ほかの柱穴に比べ、規模（31×25cm）が小さく、深さ（8cm）が浅い。周辺にほかの遺構のピットが認められないことから本遺構に関連する可能性が高い。遺物は柱根（391）以外、P07から須恵器有台杯（2）・無台杯（3・4）、P18から須恵器無台杯（5）のほか、P06・08・11・12・14・15から土師器片・須恵器片が少量出土している。

本遺構の西側は既述のとおりSB146と重複し、柱穴位置はほぼ同じと推定される。しかし新旧関係は明らかにできなかった。また、隣接するSB056とは主軸方向や規模・構造など相似点が多い。したがって、新旧関係は不明であるものの、極めて近い時期に構築された可能性が高い。

SB056（図版16・18・51・58）

南東部の18～19Bグリッドに位置する側柱建物である。南東部の遺構群のうち最も東に位置する建物で、西側約2mにSB055が存在する。また北側は河川跡により大きく失われている。したがって、確認できる範囲で桁行3間（7.20m）、梁行2間（4.30m）の長方形を呈し、面積は30.96m^{2}を測る。ただし、本遺跡で検出した梁行2間の側柱建物の例から、桁行は東側の調査区外に延びることが予想されるため、桁行・面積はこれより大きくなる。主軸方向はN-86°-Wで、東西棟となる。柱間寸法は桁行方向がP04-05間の0.80mを除き、1間2.15m前後とほぼ等間隔となる。しかし、梁行方向は2.0～2.80mとばらつきが大きい。柱並びは桁行方向がほぼ直線状に並ぶのに対し、梁行は並びが悪い。柱穴はいずれも掘形を持つものの、規模が径50～84cm、深さ26～69cmでばらつきが大きい。これらの柱穴では柱根がP02で、柱痕がP01・03・05・19で認められた。これを見る限り20～30cm前後の柱が据えられていたものと推定される。なおP02の柱根はスギの芯外分割材である。遺物はP02の柱根（392）以外にP01～03・05・19から土師器片・須恵器片が少量出土している。

本遺構は既述のように隣接するSB055と主軸方向や規模・構造など相似点が多い。したがって、新旧関係は不明であるものの、極めて近い時期に構築された可能性が高い。

SB058（図版8・11・51・59）

南東部の14～15Cグリッドに位置する側柱建物である。ほぼ同位置にSB059・143・144と重複するが、新旧関係は明らかでない。南北3間（5.25～5.52m）、東西2間（4.54～4.62m）で、南北方向がわずかに長くなる。面積は25.54m^{2}を測る。長軸方向はN-9°-Eである。平面形は南北方向の内側の柱（P02・03・07・08）がやや外側へ張り出すため、樽形を呈する。柱間寸法は東西方向が2.25～2.37mとほぼ均等である。これに対し南北方向は、1・3間目が長く（1.82～2.29m）、2間目が短く（1.48～1.49m）、変則的な柱間寸法となる。柱穴はいずれも掘形を持つ。規模は径63～98cm、深さ28～70cmを測るが、南北方向の内側の柱穴が小さく、深さも浅くなる。柱根はP08で、柱痕はP01～04・07・09で認められた。これを見る限り太さ20cm前後の柱が据えられていたものと推定される。また南北方向の内側の柱（P02・03・08）の掘形底面には、木片や樹皮などの植物質敷設物が敷かれていた。同様の柱であるP07は敷設物が検出されなかったものの、覆土下層は植物遺体を多く含むことから敷設物があった可能性もある。なお、P08の柱根はクリの芯外分割材を用いている。遺物はP08の柱根（397）のほか、P01から木簡（394）・木簡状木製品（393）、P04から木片5点・須恵器無台杯（6）、P05から木片3点・土師器無台椀（7・8）、P06から板材2点（395・396）、P09から木片1点、P01・02・07・10から土師器片・須恵器片が少量出土している。

SB059（図版８・12・51・60）

南東部の14C～D・15Cグリッドに位置する側柱建物である。ほぼ同位置にSB058・143・144と重複する。西側は調査時の暗渠で一部破壊されている。桁行３間（8.54～8.55m）、梁行２間（4.50～4.53m）の長方形で、面積は38.48m^{2}を測る。主軸方向はN-84°-Wを示し、東西棟となる。桁行東側から１間目（P04－08間）の内側にP09があり、間仕切り柱の可能性もある。柱間寸法は調査時の暗渠の破壊で不明確な点があるものの、桁行方向北側の東から3.06・3.83・1.61mと不揃いになる。南側の柱間寸法もこれにほぼ対応する[1)]。梁行方向は遺存する東側では2.21～2.29mとほぼ等間隔となる。柱穴は調査時の暗渠で２基破壊されているものの、すべて掘形を持つ。規模はばらつきが大きく、径56～101cm、深さ38～72cmを測る。覆土は灰色～青灰色の粘土～シルトを主体とし、炭化物粒を含む。柱根はP02～04で出土し、柱痕はP01・05・07・08で確認された。これらを見る限り20～30cm程度の柱根が据えられていたものと推定される。なおP02～04で出土した柱根の樹種はすべてクリ材で、樹種選択された可能性が高い。材はP02・03が芯持丸太材、P04は芯外分割材である。遺物は柱根のほか、P01・05から木片各１点、P09から須恵器無台杯（9）・土師器無台椀（10）、P01・03～05・07から土師器片・須恵器片が少量、P01から板材片１点、P05から木片２点、P07から板材片１点が出土している。なおP08は15C-P03と、P01はSB144-P08と重複するが、いずれもこれより新しい。

SB102（図版８・13・51・61）

南東部の14～15Bグリッドに位置する側柱建物である。北西側約3mにSB049、西側約2mにSB050がある。P08がSK101と重複するが、上部はこれに破壊され、SK101より古くなる。東側は調査区外に延びるため全容は明らかでない。検出できた範囲で桁行４間（8.96m）、梁行２間（4.96m）の長方形で、推定面積44.44m^{2}を測る。主軸方向はN－83°-Wを示し、東西棟となる。柱間寸法は確認できる範囲で桁行南側の西から2.11・2.21・2.76・1.90、梁行西側の北から2.26・2.70mで不揃いとなるものの、柱並びはほぼ一直線となる。柱穴はP02が調査時の暗渠で一部破壊、P08はSK101のため上部が破壊されているものの、すべて掘形を持つ。P02・08を除いた柱穴の規模は、径46～85cm、深さ33～51cmを測る。覆土は炭化物粒の有無で２層に識別され、少量含む１層は柱痕と推定される。これを見る限り、太さ15～25cm程度の柱根が据えられていたと推定される。なお、柱穴には柱根や礎盤（板）・敷設物などは認められなかった。遺物はP03から土師器片、P06から須恵器甕（11）・土師器片が出土している。

SB137（図版16・19・51・62）

南東部の15B・16B～C・17Bグリッドに位置する側柱建物である。西側はSB048の柱穴と一部重なるが、これを切っている。また沢山川用水が本遺構の中央を縦断し、梁行の柱穴を破壊している。また北東側は調査区外に延びている。したがって、全容はあきらかで無いが、検出された柱穴から桁行５間（11.50m）×梁行２間（5.00m）の長方形で、推定面積57.50m^{2}を測る。主軸方向はN-76°-Wを示し、東西棟となる。柱間寸法は桁行方向で西側から2.00・2.50・2.30・2.30・2.40mとなる。１間目がやや短いもののこれ以外はほぼ等間隔になる。柱並びはP12がやや内側に並ぶ以外、ほぼ一直線状に並ぶ。梁行方向は既述のように沢山川用水で中間の柱が破壊されているため不明である。柱穴は検出されたもの

1）桁行方向の南側の西から１間目はSB058－P09と表示したが、どちらの遺構の柱穴か明らかでない。ここでは本遺構の柱穴に共有するものとして記述している。

を見る限りいずれも掘形を持つ。規模は径74～116cm、深さ40～84cmを測り、ほかの掘立柱建物に比べ柱穴掘形は大きい。柱穴の覆土は、炭化物粒を含む灰色～青灰色系の粘土を主体とし、炭化物粒の多さで柱痕と推定できる。したがって、P09・10を除く9基で柱痕が確認された。これを見る限り、太さ約25cm程度の柱が用いられていたものと推定される。またP11は底面に礎盤（板）5枚（403～407）が敷かれていた。樹種は1点のブナ属を除き、すべてスギ材である。遺物はP11の礎盤（板）以外に、P03から板材・角材各1点（401・402）、P11から斎串1点（408）、P12から板材片1点、P03から古墳時代中期の土師器高杯（12）、8世紀末～9世紀中葉の須恵器稜椀（13）・須恵器杯（14）、P04から土師器無台椀（15）、P08から須恵器無台杯（16）のほか、P04・06・08・09から木片、P02・05・07～11から土師器片・須恵器片が出土している

SB138（図版16・18・51・62）

南東部の17Cグリッドに位置する。4基の柱穴が鉤形に並ぶことから、掘立柱建物の北東隅部と推定した。SB146と重複するが、新旧関係は不明である。また本遺構の大部分は、南・西側の調査区外に延びる。

周辺の建物の柱並び、軸方向から東西等の側柱建物と推定される。したがって、桁行2間（4.88m）以上、梁行1間（2.62m）以上、面積12.74m^{2}以上の規模になる。主軸方向はN-79°-Wを示す。検出された柱穴を見る限り、柱間寸法は桁行方向が2.34～2.54m、梁行方向が2.62mである。柱穴はいずれも掘形を持ち、径52～96cm、深さ32～66cmを測る。柱穴覆土は炭化物粒を含む灰色系の粘土を主体とする。P01で柱根（409）が残り、P02・04・06で柱痕が確認された。P01は径9.5cmの芯持ち丸太材で、樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節、底面は片面から削られ尖る。P01の柱根、P02・04・06の柱痕から10～15cm程度の柱が使用されたものと推定される。遺物はP01の柱根のほか、P04から木片1点、P01・04から土師器片・須恵器片が少量出土している。

SB143（図版8・13・51・60）

南東部の14C～D・15Cグリッドに位置する。5基の柱穴が鉤形に並ぶことから、掘立柱建物の北東隅部と推定した。ほぼ同位置にSB058・059・144と重複するが、新旧関係は明らかでない。本遺構の西部分は、西側の調査区外に延びる。また、桁行方向北側の柱穴の一部は、調査時の暗渠設置で破壊され、ほぼ中心部分を沢山川用水が縦断する。したがって、検出された柱穴と周辺の建物の柱並び、軸方向から東西棟の側柱建物と推定した。桁行3間（9.12m）以上、梁行2間（6.44m）、面積58.73m^{2}以上の規模になる。主軸方向はN-85°-Eを示し、東西棟となる。検出された柱穴を見る限り、柱間寸法は桁行方向北側の東から1間目が3.41mで、梁行方向は2.93～3.55mである。柱穴はすべて掘形を持ち、径50～107cm、深さ22～54cmを測る。柱穴覆土は若干のばらつきがあるものの、炭化物粒を含む灰色細砂を主体とする。柱根はP01で出土し（410）、P02・04で柱痕が確認された。また、P02の掘形底面付近で木片や樹皮などの植物質敷設物が認められた。P01の柱根は幅11.0cmの芯外分割材で、樹種はクリ、底面付近は加工され薄くなる。P01の柱根、P02・04の柱痕から15cm程度の柱が使用されたものと推定される。遺物はP01の柱根のほか、同柱穴から刀形木製品？1点、用途不明木製品の部材1点、P03で土師器無台椀（17）、P02から土師器片が少量出土している。なお本遺構からの出土でないが、P01東側20cmの地点で包含層最下部付近から鉄斧（437）が出土している。

SB144（図版8・14・51・59）

南東部の14～15Cグリッドに位置する側柱建物である。ほぼ同位置にSB058・059・143が重複す

る。また東側約1mにSB048が存在する。すべての柱穴を検出できたわけではないが、桁行４間（8.27～8.29m）、梁行２間（4.97～4.99m）の長方形と推定され、面積は41.23m^{2}を測る。主軸方向はN－72°-Wを示し、東西棟となる。柱間寸法は検出された柱穴を見る限り、桁行方向が2.05～2.25mとほぼ一定となるものの、梁行方向は不明である。柱穴はすべて掘形を持ち、径68～108cm、深さ58～77cmを測る。柱穴覆土は若干のばらつきがあるものの、一部に炭化物粒を含む灰色系の粘土～シルトを主体とする。柱根はP01で出土（413）し、P02・04～08で柱痕が確認された。P01の柱根は太さ21.0×17.2cmの芯外分割材で、樹種はクリ、底面付近は片面加工され尖る。P01の柱根、P02・04～08の柱痕から太さ20cm程度の柱が使用されたものと推定される。遺物はP01の柱根のほか、P03から土師器片が少量出土している。遺構の新旧関係は、P08がSB059-P01に切られていることから、これより古くなる。

SB146（図版16・20・51・63）

南東部の17B～C・18Cグリッドに位置する。西側はSB138と重複し、東側はSB055に接する。南側は調査区外に延びるため明らかでないが、検出された柱穴の柱並びから、南北棟の側柱建物と推定される。東西棟で桁行２間（5.51m）以上、梁行２間（7.92m）、面積は21.82m^{2}以上と考えられる、主軸方向はN-5°-Eを示す。柱間寸法は検出された柱穴を見る限り、桁行方向が2.62～2.89m、梁行方向が3.06～4.86mである。なお桁行方向の東側の柱穴列は、SB055の西側柱穴列と重なる。検出した柱穴はすべて掘形を持ち、径51～57cm、深さ22～54cmのやや小規模な掘形となる。覆土はP02が灰色系の粘土を主体として炭化物粒を含み、P03は黒褐色シルトと青灰色粘土である。柱の遺存状況ではP02・03で径15cm程の柱痕が確認されている。遺構の切り合い関係は、SB055・138と重複するが、新旧関係は明らかでない。遺物はP03から土師器片が少量出土している。

B　杭　　列

杭と思われる遺構は、5B・12C・13B～C・14B・17Cグリッドでも検出されている。しかし、列状に構築されている杭は、SA009・010の２遺構である。

SA009（図版5・7・50・63）

北西部の遺構群の最も南東側、6B～Cグリッドに位置する。17本の杭がやや蛇行気味に並ぶ。直線距離にして16.35mを測り、杭列方向はおおよそN-55°-Eを示す。これらの杭は5.65mほど間を開け、東側の杭列（P01～09まで6.40m）と西側の杭列（P10～P17まで4.30m）に分かれる。東側の杭はやや蛇行気味に、西側の杭は、P14・15を除くとほぼ直線状に並ぶ。杭間寸法は東側の杭で0.32～1.37m、西側の杭で0.36～1.90mと一定しない。遺存状況の良い杭を見る限り太さ５～10cm前後の杭を用いるが、P05のように21.6cmもの杭も使用されている。いずれも先端は片面または両面から削られ尖る。樹種は分析数８点のうち、クリ３点、カツラ３点、コナラ属コナラ亜属コナラ節２点で多様な樹種が選択されている。杭以外に遺物は出土していない。本遺構はその位置から北西部の遺構群を南東側で区画する役割を持つものと推定され、東側杭列と西側杭列の間は北西部の遺構群の出入り口の可能性も考えられる。

SA010（図版5・7・50・63）

調査区中央部の遺構空白区域の8Bグリッドに位置する。６本の杭がほぼ直線状に並ぶ。長さ2.21m、杭列方向はN-61°-Wを示す。杭間寸法はP01-02間0.75m、P02-03間0.44m、P03-04・P04-05・P05-06間は各0.34mと比較的一定している。杭の遺存状況は良くないものの、太さ５～10cmほどのも

のが用いられ、いずれも先端は片面または両面から削られ尖る。樹種は分析した１点はヤマグワであった。遺物は杭以外出土していない。本遺構は長さも短く、ほかの遺構から離れていることから性格やほかの遺構との関連は不明である。

C 井　　戸

SE014（図版８・14・51・63）

南東部の遺構群の最も西側に当たる14C16グリッドに位置する素掘りの井戸である。北西側はSX018と重複し、これを切って構築している。また東から南側にかけてSB058・059・143・144が存在する。平面は円形、断面は階段状を呈し、径231～214cm、深さ101cmを測る。覆土は炭化物粒子を含む暗灰色粘土を基調とする２層に識別され、下層には菱鉄鉱ブロックが中量混入している。上層の大きく広がる部分と下層の井筒状部分との間でほぼ水平に分かれることから、人為的な堆積と考えられる。覆土最上層には砂岩の搬入礫（451）と板材（423）が置かれており、井戸廃棄に伴う祭祀もしくは儀礼が行われたものと考えられる。なお井戸底面は現在の湧水点より高い所にあり、また底面覆土に砂などの湧水の痕跡を示すものが確認されなかったことから、溜井戸であった可能性が考えられる。遺物は前述した搬入礫と板材のほかに須恵器杯蓋（18）・有台杯（19）・無台杯（20）が出土した。

D 土　　坑

北西部で３基、南東部で８基を数える。北西部の土坑は４～5Bグリッドに、南東部の土坑は15Bグリッドに多く分布し、集中が見られる。

SK001（図版５・７・50・68）

北西部の4B15・20、5B11・16グリッドに位置する。北約1mにSB006、東約1mにSK007が存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸220cm、短軸156cm、深さ12cmを測る。長軸方向はN-72°-Wを示す。底面はわずかに凹凸を持ち、側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状である。覆土は単層で、暗灰色粘土を主体として炭化物粒と植物遺体を多量に含む。遺物は出土していない。

SK007（図版５・７・50・68）

北西部の5B11・12グリッドに位置する。北西約1mにSK001が隣接する。平面形は不整形を呈し、長軸95cm、短軸77cm、深さ12cmを測る。長軸方向はN-53°-Wを示す。底面はやや凹凸があり、側壁の立ち上がりも一定でなく、断面形は不整形を呈する。覆土は炭化粒を少量含む粘土で２層に識別され、１・２層間は凹凸のある堆積をする。遺物は覆土１層から土師器甑（21・22）のほか、土師器片が出土している。

SK008（図版５・７・50・68）

北西部の1B25グリッドに位置する。北～西側は調査時の暗渠により破壊され、全容は明らかでない。平面形・規模は不明で、深さ5cmほどとなる。遺存部分を見る限り、側壁は緩く立ち上がり、断面形は弧状を呈する。覆土は単層で炭化物粒、骨粉を少量含む粘土である。遺物は出土していない。

SK017（図版８・15・50・68）

南東部の遺構群のうち最も西側の13C15・20グリッドに位置する。南側はSX018に接するが、新旧関係は不明である。また北約1.5mにSK019、南東約0.5mにSE014が存在する。平面形は円形を呈し、長軸102cm、短軸95cm、深さ9cmを測る。底面はわずかに凹凸を持ち、側壁は緩やかに立ち上がり、

断面形は台形状を呈する。覆土は単層で、炭化物粒を含む灰色粘土である。遺物は須恵器杯蓋（23）のほか土師器片・須恵器片が出土している。

SK039（図版16・20・51・69）

南東部の土坑が多く分布する15B10グリッドに位置する。南側約1mにSK45が存在する。平面形は楕円形を呈し、長軸92cm、短軸60cm、深さ13cmを測る。長軸方向はN-4°-Wを示す。底面は緩くくぼみ、側壁は緩く立ち上がり、断面形は弧状となる。覆土は炭化物粒を少量含む粘土またはシルトで、3層に識別され、レンズ状の堆積となる。遺物は土師器片1点が出土している。

SK040（図版16・20・51・69）

南東部の土坑が多く分布する15B3・8グリッドに位置する。南西側約2.5mにSK044、南側約1mにSK039が存在する。平面形は長方形を呈し、長軸62cm、短軸49cm、深さ20cmを測る。長軸方向はN-41°-Wを示す。底面はほぼ平坦で、側壁は急斜に立ち上がり、断面形は箱状となる。覆土は炭化物粒を少量含む粘土またはシルトで、4層に識別され、上層はレンズ状の堆積となる。遺物は覆土から須恵器無台杯（24）のほか、土師器片・須恵器片が出土している。

SK041（図版16・20・51・69）

南東部の土坑が多く分布する15B8グリッドに位置する。北側約1mにSK040、西側約1.5mにSK044が存在する。平面形は不整方形を呈し、長軸70cm、短軸60cm、深さ10cmを測る。長軸方向はN-34°-Wを示す。底面は緩くくぼみ、側壁は緩く立ち上がり、断面形は弧状となる。覆土は炭化物粒を少量含む粘土またはシルトで、2層に識別され、レンズ状の堆積となる。遺物は出土していない。

SK044（図版16・21・51・69）

南東部の土坑が多く分布する15B12・13・17・18グリッドに位置する。南側約0.5mにSB044が存在する。上部はSD033と重複し、これに切られている。平面形はほぼ円形を呈し、長軸242cm、短軸223cm、深さ34cmを測る。底面は凹凸が激しく、側壁の立ち上がりは一定していない。断面形は不整の弧状となる。SD033を除いた覆土は4層に識別され、いずれも炭化物粒を少量含む粘土またはシルトである。下層は凹凸のある堆積を示すが、上層はほぼレンズ状の堆積となる。遺物は覆土から須恵器壷（25）のほか、須恵器片・土師器片がややまとまって出土するがいずれも細片である。

SK045（図版16・21・51・70）

南東部の土坑が多く分布する15B10・15、16B6・11グリッドに位置する。北側約1mにSK039が存在する。また、北側でSD033、上面でSD034と重複し、これに破壊されている。平面形は楕円形を呈し、長軸175cm、短軸132cm、深さ15cmを測る。長軸方向はN-89°-Wを示す。底面はやや凹凸があるものの、おおむね平で、側壁はやや急斜に立ち上がる。断面形は台形状となる。覆土は炭化物粒を少量含む灰色粘土で、2層に識別され、レンズ状の堆積となる。遺物は須恵器片・土師器片が少量出土している。

SK101（図版8・15・51・70）

南東部の14B6～8・11・12グリッドに位置する。SB102-P08と重複し、P08の上部を破壊して構築している。平面形は不整形を呈し、長軸265cm、短軸252cm、深さ32cmを測る。底面はやや凹凸があるものの、おおむね平で、側壁は緩く立ち上がる。断面形は台形状となる。覆土は炭化物粒を少量含む粘土またはシルトで、3層に識別され、レンズ状の堆積となる。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土している。

SK106（図版16・21・51・70）

南東部の15C7・8グリッドに位置する。SB048-P06と重複し、P06の上部を破壊している。平面形は不整形を呈し、長軸156cm、短軸120cm、深さ12cmを測る。長軸方向はN-60°-Eを示す。底面は凹凸があり、側壁の立ち上がりは一定しない。断面形は不整形となる。覆土は炭化物粒を含む粘土で、炭化物の多少により2層に識別され、不規則に堆積する。形状、覆土等により上層からの撹乱を推定したが、明確でない。遺物は出土していない。

E　性格不明遺構

SX004（図版5・7・50・70）

北西部の6C6グリッドに位置する炭化物集中遺構である。SB003の南側と重複する。遺構同士の切合いは認められないものの、本遺構が良好に遺存することから、新しいものと推定できる。平面形は不整形、底面はほぼ平坦で側壁はやや緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈する。規模は長軸94cm、短軸65cm、深さ10cmである。長軸方向はN-56°-Wである。覆土は2層に識別されるが、いずれも灰色系の粘土を主体とし、炭化物粒を比較的多く含む。遺物は土師器甑（27）が出土している。

SX018（図版8・15）

南東部の遺構群のうち最も西側の13C19・20グリッドに位置する。南東側にSE014、北側にSK017が重複する。SK017との新旧関係は不明、SE014に切られている。平面形は不整形、底面はほぼ平坦で側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈する。規模は長軸190cm以上、短軸90cm、深さ22cmである。長軸方向はN-44°-Wである。覆土は炭化物粒を含むシルトで、2層に識別される。遺物は出土していない。

SX019（図版8・15・71）

南東部の遺構群のうち最も西側の13C9・14グリッドに位置する。南側約2mにSK017・SX018が存在する。平面形は不整長方形、底面はやや凹凸があり側壁はやや急斜に立ち上がる。したがって、断面形は台形状を呈する。規模は長軸147cm、短軸85cm、深さ22cmである。覆土は単層で、炭化物粒と灰白色粒を含む褐灰色粘土である。遺物は土師器無台椀（28）のほか、土師器片・須恵器片が少量、木片3点が出土している。

SX021（図版8・15・71）

北西部の遺構群と南東部の遺構群の間である10・11Bグリッドに位置する。遺構空白区のため、周辺には遺構は存在しない。北東側は調査区外に延びるため全容は明らかでない。検出された部分を見る限り、平面形は不整形な溝状を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁は凹凸を持ちながら緩やかに立ち上がる。断面形は弧状である。規模は長軸7.68m以上、短軸は2.36～4.30m、深さ24cmを測る。方向はほぼN-32°-Eを示す。覆土は単層で、炭化物粒が混じる灰色粘土である。形状、覆土等から自然の流路または落ち込みの可能性が高い。遺物は遺構内北東寄りと南寄りの底面付近で、古墳時代中期の土師器甕2個体（29・30）が出土している。

SX025（図版15・23・71）

南東部の15B25・15C1～2グリッドに位置する炭化物集中遺構である。西側はSB144、東側はSB048と重複するが、本遺構が良好に遺存することからこれより新しい。またⅠ期畑作溝群のSD065より新しく、Ⅱ期畑作溝群のSD037より古くなる。炭化物の範囲は不整形で、底面はほぼ平坦で南側にわ

ずかに傾斜する。規模は長軸160cm以上、短軸130cm、厚さは1cm前後である。遺物は炭化物集中範囲の北側で多く出土し、土師器甕（31）・椀（32）がある。なお土師器椀（32）はSX027の土師器椀と接合する。

SX027（図版14・23）

南東部の14B24・25グリッドに位置する。平面長方形の浅い掘り込みを持つ遺構である。底面はやや凹凸があり、側壁はやや急斜に立ち上がり、断面形は台形状を呈する。長軸233cm、短軸111cm、深さ14cmを測り、長軸方向はN-72°-Wを示す。覆土は単層で、炭化物粒を含む灰色シルトを主体とする。遺物はSX025と接合した土師器椀（32）のほか、須恵器無台杯（33・34）、土師器無台椀（35）が出土している。遺構の新旧関係はⅠ期畑作溝群のSD062・063より新しく、Ⅱ期畑作溝群のSD033より古くなる。

SX052（図版15・23）

南東部の14C5・10グリッドに位置する。平面長方形の箱状の掘り込みを持ち、上面に砂岩礫が置かれた遺構である。SB058-P04・SB059・144、Ⅰ期畑作溝群のSD064と重複するが、本遺構が良好に遺存することから、これらの遺構より新しいものと推定できる。底面は平坦で、側壁は急斜に立ち上がる。長軸119cm、短軸45cm、深さ34cmを測り、長軸方向はN-75°-Wを示す。覆土は2層に識別され、上層は炭化物粒を含む灰褐色シルト、下層は上層に比べ炭化物粒を多く含む暗灰色シルトで、レンズ状に堆積する。遺物はほかに土師器無台椀（36）が出土している。

SX141（図版8）

南東部の15C22、15D1・2グリッドに位置する。平面不整形の落ち込みである。東側でSB143-P05が重複するが新旧関係は不明である。底面は凹凸を持ち側壁は不規則に立ち上がり、断面形は一定しない。検出した限りでは長さ130cm、幅7～90cmを測る。覆土は単層で、オリーブ黒色粘土に炭化物粒を含む。遺物は須恵器杯蓋（37）・土師器無台椀（38）が出土している。形状から木の根、倒木痕等の自然の落ち込みの可能性が高い。

SX142（図版16・21・71）

南東部の15B20・16B16グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状の小さな掘り込みを持つ遺構である。長軸42cm、短軸25cm、深さ8cmを測り、長軸方向はN-76°-W示す。覆土は単層で、炭化物粒が混じる灰色粘土である。遺物は須恵器無台杯（39）が横位の状態で出土している。

F　溝

総数81条の溝が検出されている。これらははじめにも述べたように遺構の新旧関係・構築時期から大きく三つに分けられる。

① SD136：南東部で検出された掘立柱建物群・井戸・土坑等と同時期のもの。

② Ⅰ期畑作溝群：①の南東部で検出された掘立柱建物群・井戸・土坑等より新しく、③のⅡ期畑作溝群より古くなる。35条を数える。

③ Ⅱ期畑作溝群：岩ノ原遺跡で検出された古代の遺構で最も新しい遺構である。45条を数える。

②・③はいずれも掘り込みが浅く幅も狭いこと、ほぼ直線的で方向性があること、お互いが平行して並ぶことが指摘できる。したがって、これらの溝群は畑作の痕跡を示すものと思われ、これまで「畝状小溝」と呼称されてきた遺構である。

畑作溝群は遺構検出面やその切り合い関係などから、南東部で検出された掘立柱建物群・井戸・土坑等が廃絶された後、あまり時を経ずⅠ期畑作溝群、Ⅱ期畑作溝群の順で構築されている。なお遺物は少量出土しているが、南東部で検出された掘立柱建物群・井戸・土坑等と重複し、時期差があまりないこと、また遺構の性格上からこれらの遺構の遺物が畑作溝に紛れ込んだものと判断される。

SD136（図版16・21・51・62）

南東部の17B16・21、17C1グリッドに位置する。東側をSB137と重複するが新旧関係は不明である。やや弧を描くが南北に延びる短い溝である。長さ3.10m、幅40cm、深さ8cmを測る。横断面形は弧状を呈する。遺物は出土していない。

Ⅰ期畑作溝群（図版4・22・64・65）

SD011～013・024・061～070・091～093・099・100・104・120～125・128～135の計35条である。12C20・25グリッド付近を西端とし、15B18グリッド付近を東端とする一群と、16C9グリッド付近を西端として、17C10・15グリッド付近を東端とする一群が認められる。いずれも平面は直線状に延び、横断面は弧状を呈する。各溝の幅は13～173cm（平均20～50cm）、深さは5～28cm（平均10cm前後）を測る。覆土は単層で、オリーブ灰色～灰色のシルトもしくは粘土が主体となる。溝方向は東西（N-64～86°-W）に延びるもの（SD011～013・024・061～070・091～093・099・100・104・128～133・135）、北東－南西（N-31～39°-E）に延びるもの（SD120～124）にほぼまとめられる。東西方向に伸びる溝は地形の傾斜に直交する。東西方向の溝と北東－南西方向の溝が重複するSD124とSD128・129の新旧関係はSD124のほうが新しい。したがって、北東－南西方向の溝がⅠ期畑作溝群の中で新しいものと推定できる。遺物はSD013で須恵器無台杯（40）、SD024で須恵器有台杯（41）・杯（42）、SD061で須恵器杯（43）、SD065で須恵器有台杯（44）、SD125で須恵器無台杯（45）のほか、SD011・062～064・066・068～070・091～093・099・120～122・124・131・132で土師器片・須恵器片、SD011で板材1点、SD131で板材2点（424・425）、SD026で木片3点が出土している。なおSD061の須恵器杯（43）はⅡ期畑作溝群のSD030出土ものと接合する。

Ⅱ期畑作溝群（図版4・23・66・67）

SD026・029～037・042・047・053・054・071～090・107・108・111～116・119・126・127の計45条である。14B2～14C24グリッドを結ぶ線を西端とし、17B17～18C10グリッドを結ぶ線をほぼ東端とする。ただし、西端は調査時に削平された可能性が高く、東端は河川跡により一部消滅していた。いずれも平面はほぼ直線状に延び、横断面は弧状を呈する。しかし、掘り込みが深い場合は断面が台形状・半円状のものが見られる。幅は13～100cm（平均20～40cm）、深さは4～21cm（平均10cm前後）を測る。溝の方向はほぼ東西（N-66°-W～N-71°-E）となる。覆土は単層で14～15グリッド付近では灰色砂～シルトが、16～18グリッド付近では灰色粘土が主体となる。遺物はSD030で須恵器杯（43）、SD032で須恵器有台杯（46）、土師器無台椀（47）・鍋（48）、SD033で須恵器杯蓋（49～51）・有台杯（52）・無台杯（53）・有耳壺（54・55）、土師器無台椀（56）、SD036で須恵器無台杯（57）・杯（58・59）、SD037で須恵器無台杯（61）・甕（62）、土師器甕（63）、SD080で土師器甕（60）のほか、SD026・029・031・035・042・047・053・054・072～074・076・078・079・081～085・087・088・090・111・114・115・126・127で土師器片・須恵器片が出土している。なおSD030の須恵器杯（43）はⅠ期畑作溝群のSD061出土ものと接合する。また、遺構からの出土ではないが、「萬年通寶」（444）は15C1グリッドのⅦ層（遺物包含層）最下面（SD037の確認面上面に相

当）から、表面を上にして出土している。

G　河　川　跡（図版16・21・51）

南東部の17～19Bグリッドに位置する。SD055の北側を破壊し、上部に沢山川用水が構築されていた。調査区内ではごく一部の範囲が確認されただけであり、遺構確認面が河川跡に落ち込む肩部までの調査で、川底まで検出していない。したがって、規模や深さなどの詳細は不明である。埋土は確認できた限り５層に識別され、砂もしくは砂質シルトを主体とする。土層堆積から最低３回の埋没時期が考えられる。遺物は17世紀中葉の肥前磁器の椀（338）が出土している。遺構との重複関係からSB055より新しく、沢山川用水より古くなる。したがって、存続期間は９世紀後半から17世紀後半に収まるものと判断される。

H　沢山川用水（図版16・21・51）

南東部の14C～D・15C～D・16B～C・17Bグリッドにかけて位置する。平面は直線状で、底面はやや凹凸がある。側壁はほぼ直角に立ち上がり、上端付近で緩くなり、断面形は箱状を呈する。方向はほぼN-85°-Wで、東西方向にのびる。現農道・用水とほぼ同位置にあり、地形の傾斜に直交する。用水底面の南岸寄りには杭が打ち込まれ、下部には杭と岸の間に横板が埋設される。これは用水の護岸のためと考えられる。沢山川用水は遺構の重複関係から最も新しく、南東端は河川跡の上に構築されている。河川跡が埋没した江戸時代に開削され、聞き取り調査によれば昭和初期に用水や農道の付け替えにより埋められたという。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

出土した遺物は土器・陶磁器のほかに木製品、石製品、金属製品、鉄滓、銭貨がある。包含層（Ⅶ層）及びその直下の遺構の覆土中から出土した土器の大多数は古代（8世紀末～9世紀第3四半期）に属するが、古墳時代の土師器甕及び高杯や中世（14世紀）の珠洲焼が少量確認される。陶磁器は表土（Ⅰ・Ⅱ層）及び攪乱中より少量確認される。いずれも近世（16世紀末～18世紀前半）に属する。

木製品は掘立柱建物の柱根や礎盤（板）、杭、用途不明の部材、斎串、木簡及び木簡状木製品が、石製品は砥石や磨石類等が、金属製品は鉄斧や錠前、釘等がそれぞれ確認される。出土位置や層位からその大部分が古代に属する。

土器・陶磁器の種類別の総重量を第２表にまとめた。古代の土師器・須恵器の重量比率は約２：１で、土師器の占める割合が多い。また種類別ごとの遺構内出土土器の占める割合は土師器が約9.8％、須恵器が約5.9％で、須恵器の遺構内出土土器の占める比率が少ないことが伺える。

土師器の出土する場所は調査区北西部の４～６グリッド、南東部の12～20グリッドにほぼ二分され、その間の７～11グリッドではほとんど出土が見られない。特に遺構の位置する場所に多く出土し、北西部ではSB003やSK001・007、南西部ではSB058・059・143・144やSE014の周辺でより多くの出土が確認された。（第11図）

須恵器の出土する場所は土師器と同様４～６グリッド、12～20グリッドにほぼ二分され、その間の７～11グリッドではほとんど出土が見られない。北西部では出土量は少ないが、南東部ではSB058・059・143・144の周辺でより多くの出土が確認された。（第10図）

以下出土遺物の説明を行うが、古代の土器に関しては器種分類を示した上で、遺構内出土土器、包含層出土土器の順に説明を行う。遺構内出土土器は遺構別に、包含層出土土器は先に示した器種分類別に説明を行うものとする。木製品も遺構内出土、包含層出土の順に説明を行うが、石製品、金属製品、銭貨はそれぞれ種類別に説明を行うものとする。

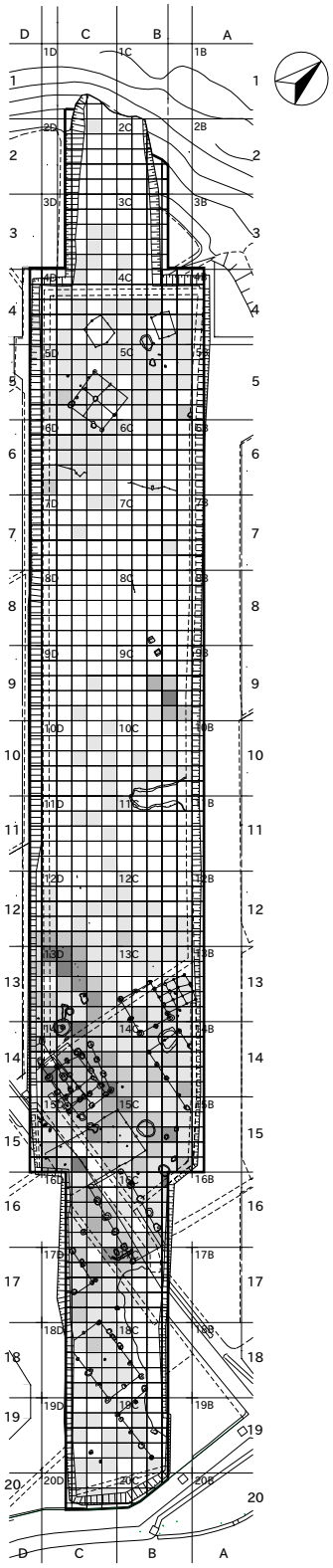
2　古代の土器

A　器 種 分 類（第12図）

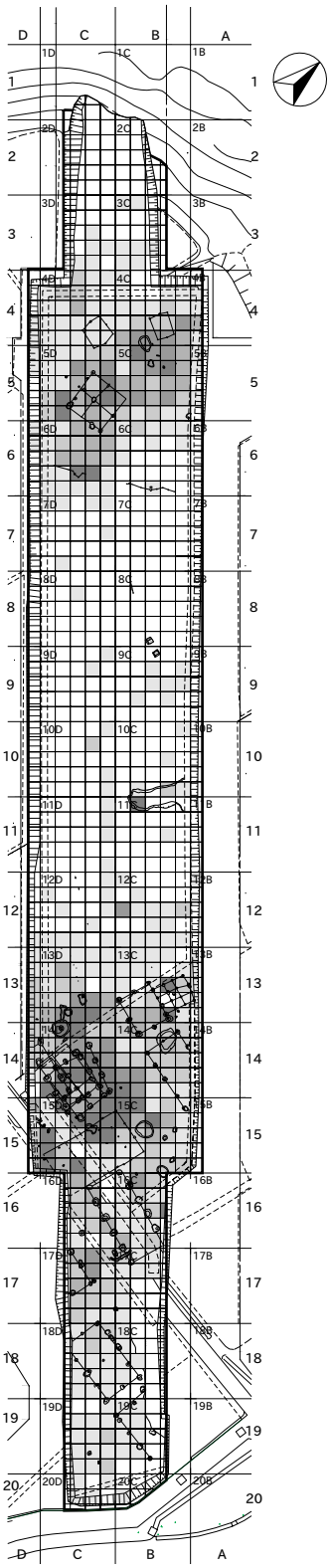
出土土器は古墳時代～近世のものまで確認されるが、出土数の大多数は古代の土器で占められるため、

	古墳時代土師器（kg）	古代土師器（kg）	古代須恵器（kg）	珠洲焼（kg）	近世陶磁器（kg）	合　計（kg）
遺構内出土（河川跡含む）	1.4	12.736	4.487	0	0.086	18.709
遺構外出土（表土・包含層）	0	129.01	71.35	0.525	0.951	201.836
合計	1.4	141.746	75.837	0.525	1.037	220.545

第２表　出土土器種類別一覧表



第10図　須恵器の出土分布図（S＝1/1000）



第11図　土師器の出土分布図（S＝1/1000）

1～200g　201～400g　401～600g
601～800g　801g以上

器種分類は古代の土器のみを対象に行うものとする。まず、須恵器・土師器・黒色土器に大別した後、器種ごとに中別、器形・法量等による細別を行った。分類は滝寺・大貫古窯群［小田ほか2006］・五反田遺跡［渡辺ほか2005］の各報告書、編年的位置付けについては笹沢正史氏の研究［笹沢2003］等を参考にした。

1）須　恵　器

杯蓋（49. 65. 67. 72. 75. 86）　滝寺・大貫古窯跡群の報告書における分類案に準じ、口端部径により法量Ⅰ（17cm以上）、Ⅱ（14～17cm前後）、Ⅲ（12～14cm前後）、Ⅳ（10～12cm前後）の大きさに分類した。法量Ⅲのものが最も多く、ついで法量Ⅱが多い。滝寺・大貫古窯跡群とほぼ同様の傾向を示している。

なお資料化した杯蓋は破片資料が多く、摘みや端部を欠いているものが多く見られるため、摘み・端部形態による分類は行わないことにした。

有台杯（26. 101. 102. 107. 108. 120. 124. 125）　滝寺・大貫古窯跡群の報告書における分類案に準じ、器形では（A）器高の低い箱型、（B）器高5cm以上の深身のものに分類した。滝寺・大貫古窯跡群で見られた口径が20cmを超える浅身で箱型のものは本遺跡では確認できなかった。

また口径により法量Ⅰ（16cm以上）、Ⅱ（13～16cm前後）、Ⅲ（11～13cm前後）、Ⅳ（9～11cm前後）に分類した。器形Ａは法量Ⅲが多く、次いで法量Ⅳが多い。器形Ｂは法量Ⅱがほとんどである。これは滝寺・大貫古窯跡群とほぼ同様の傾向である。なお器形Ａは調査区北西部の遺構集中区、器形Ｂは調査区南東部の遺構集中区より多く出土している。

無台杯（150. 152. 164. 170. 187. 189. 192）　滝寺・大貫古窯跡群の報告書における分類案に準じ、器形では（A）底部の切り離しがヘラ切りの箱型を呈するもの、（B）底部の切り離しが糸切りで底部と体部の境に綾を持ち「二段底」を呈するもの、（C）糸切りの椀型を呈するものとに分類した。

また口径により法量Ⅰ（13cm以上）、Ⅱ（11～13cm）、Ⅲ（11cm以下）に分類した。器形を問わず、法量Ⅱが大部分である。これは滝寺・大貫古窯跡群とほぼ同様の傾向である。なお器形Ａは調査区北西部の遺構集中区及び南東部の遺構集中区で確認されているが、器形Ｂ・Ｃは北西部の遺構集中区では確認できなかった。

稜椀（13）　体部に稜を持ち、口縁部が外反するもの。金属器模倣の仏具と考えられる。本遺跡で確認できたものは図化した２点のみある。

長頸瓶（216）　破片資料のみであり、全体の様相を伺えるものは見られないため、細分していない。12～16グリッドにおいて確認される。

横瓶（220）　破片資料のみであり、全体の様相を伺えるものは見られないため、細分していない。本遺跡で確認できたものは図化した口縁部破片３点のみである。14・16グリッドにおいて確認される。

短頸壺（222）　破片資料のみであるため、細分していない。

有耳壺（54）　本遺跡で確認できたものは図化した体部破片のみである。

甕（11）　破片資料のみであり、全体の様相を伺えるものは少ない。滝寺・大貫古窯跡群の報告書における分類案に準じた口径による分類のみにとどめた。Ⅰ特大甕（50cm以上）、Ⅲ中甕（20～35cm）、Ⅳ小甕（20cm未満）は確認されたが、Ⅱ大甕（35～50cm）は確認できなかった。本遺跡では中甕が多く見られる。

2）土　師　器

無台椀（28. 245. 265）　器形では（A）須恵器を模倣したと考えられる箱型のもの、（B）椀型を呈するものがある。器形Ｂの底部切り離しは、確認されたものすべてが糸切りである。また口径によりⅠ（13cm以上）、Ⅱ（11～13cm）に分類したが、その境界は曖昧である。調査区南東部の遺構集中区において多く確認され、北西部の遺構集中区においては少数しか確認されない。

有台椀（288）　台部破片が１点のみ確認される。

蓋（289）　口端部径23.7cmを呈する大型の蓋が１点のみ確認される。

甕（31. 60）　破片資料が多く、全体の様相を伺えるものは少ない。器形による細分は行わず、口径によりⅠ（19～35cm）、Ⅱ（15cm未満）に分類した。法量Ⅱは調査区南東部の遺構集中区においてのみ確認される。

鍋（315）　破片資料のみであり、全体の様相を伺えるものは少ないため、細分していない。調査区北西部の遺構集中区において多く確認される。

甑（21. 27）　底部が筒抜けになっているもので、垂直に立ち上がるもしくは内傾するもの。口縁部に突帯を巡らすものや、把手が付くものもある。破片資料のみであり、全体の様相を伺えるものは少ないため、細分していない。調査区北西部の遺構集中区においてのみ確認される。

3）黒 色 土 器

無台椀（325. 326）　土師器椀の内面を磨いた後、黒色処理を施したもの。遺構に伴うものは確認されず、全て包含層より出土している。土師器無台椀と同様に口径によりⅠ（13cm以上）、Ⅱ（11～13cm）に分類した。

B　遺構内出土

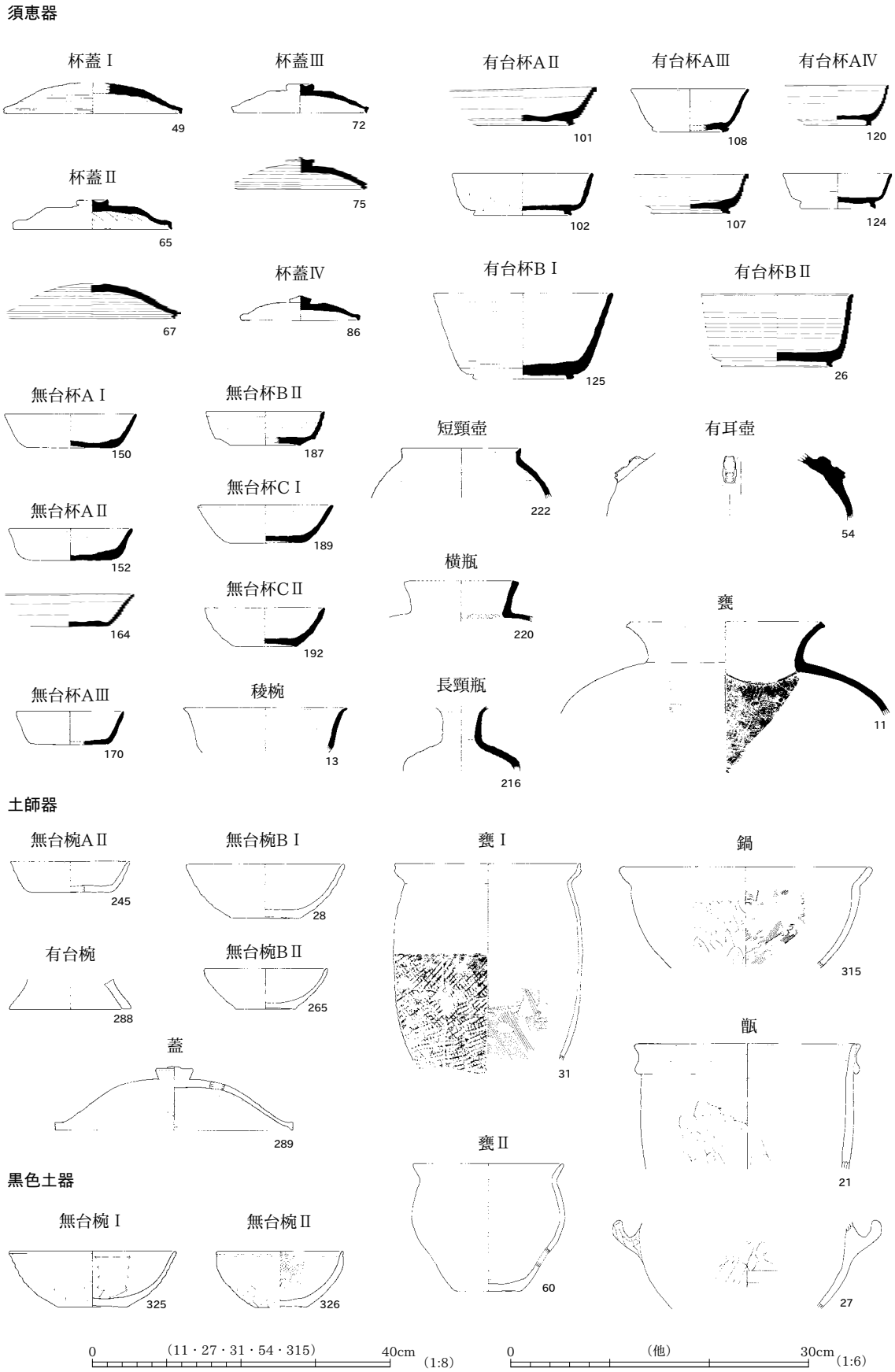
SB050（図版24－1，図版72）　P05から杯蓋（1）が出土している。法量Ⅲに属するもので、体部は山笠状を呈する。摘みの形態は低めの擬宝珠形で、端部は長く垂下する。

SB055（図版24－2～5，図版72）　P07から有台杯（2）及び無台杯Ｃ（3・4）が、P18から無台杯Ｃ（5）がそれぞれ出土している。２は底部のみしか確認されないが、深身の有台杯と考えられる。３は法量Ⅱに属するものである。内面に黒漆が付着しており、比較的薄手の作りをしている。時期は９世紀第３四半期に比定される。４及び５は底部外面に「石井」もしくは「石井庄」の墨書が認められる。

SB058（図版24－6～8，図版72）　P04から無台杯Ａ（6）が、P05から無台椀（7・8）がそれぞれ出土している。６は外面に墨痕の認められる底部破片である。７は底部外面に「庄」と考えられる墨書が認められる。時期は９世紀第３四半期に比定される。

SB059（図版24－9～10，図版72）　P09から無台杯Ｂ（9）及び無台椀（10）が出土している。９は法量Ⅱに属するものである。内外面に火ダスキ痕が認められる。上越市今池遺跡SD003出土土器［坂井ほか1984］に類例が見られ、時期は９世紀第３四半期に比定される。10は法量Ⅱに属するものである。

SB102p06・SD088（図版24－11，図版72）　須恵器中甕（11）が出土している。口縁端部は上端部をわずかに引き上げた形態を呈しており、頸部と体部との境界は強く屈曲している。口縁部別作りで、体部上端部に口縁部を乗せて整形したものと考えられる。外面に自然釉が見られる。胎土から高田平野西側


須恵器
杯蓋Ⅰ
49
杯蓋Ⅲ
72
有台杯AⅡ
101
有台杯AⅢ
108
有台杯AⅣ
120
杯蓋Ⅱ
65
75
102
107
124
67
杯蓋Ⅳ
86
有台杯BⅠ
125
有台杯BⅡ
26
無台杯AⅠ
150
無台杯BⅡ
187
短頸壺
222
有耳壺
54
無台杯AⅡ
152
無台杯CⅠ
189
164
無台杯CⅡ
192
横瓶
220
甕
11
無台杯AⅢ
170
稜椀
13
長頸瓶
216
土師器
無台椀AⅡ
245
無台椀BⅠ
28
甕Ⅰ
31
鍋
315
有台椀
288
無台椀BⅡ
265
甑
21
蓋
289
黒色土器
無台椀Ⅰ
325
無台椀Ⅱ
326
甕Ⅱ
60
27
0
(11・27・31・54・315)
40cm
(1:8)
0
(他)
30cm
(1:6)

第12図　器種分類図

に位置する滝寺窯産のものと考えられ、時期は９世紀前半に比定される。

SB137（図版24－12～16，図版72）　P03から古墳時代の高杯（12）、稜椀（13）及び須恵器杯（14）が、P04から無台椀（15）、P08から無台杯Ｃ（16）がそれぞれ出土している。12は口縁がわずかに外反し、内外面にヘラミガキが施されている。時期は古墳時代中期に比定される。

13は胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は８世紀末～９世紀前半に比定される。14の時期は９世紀中葉に比定される。15は体部外面に墨痕が、16は底部外面に「庄」もしくは「介」の墨書が認められる。

SB143（図版24－17，図版72）　P03から無台椀Ｂ（17）が出土している。法量Ⅰに属する。

SE014（図版24－18～20，図版72）　覆土１層から杯蓋（18）、有台杯Ａ（19）、無台杯Ａ（20）がそれぞれ出土している。18は法量Ⅲに属するものである。頂部の径が大きく、平坦である。摘みは欠損している。端部は短く垂下し、中心部がわずかに屈曲する。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は９世紀中葉に比定される。

19は法量Ⅳに属するものである。底部切り離しはヘラ切りによって行われ、台部は内端接地となる。体部及び底部外面に墨書が確認される。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、北陸系の技法を持って製作されたものと考えられる。時期は９世紀中葉に比定される。

20は法量Ⅱに属するものである。底部切り離しはヘラ切りによって行われる。胎土から佐渡小泊窯産のものと考えられ、時期は９世紀第２四半期に比定される。

SK007（図版25－21～22，図版72）　甑（21・22）が出土している。21・22は同一個体と考えられるが、SK007の覆土中から出土したものは22の一部分で、残りの部分はSK007よりも北側の包含層（4A24・4B4. 5. 8. 14. 19. 20・5B1）から出土している。口縁部下に突帯を巡らし、底部は末広がり状に外反し、内部は筒抜けとなる。

SK017（図版25－23，図版72）　杯蓋（23）が出土している。法量Ⅲに属するもので、体部は山笠状を呈する。摘みは欠損している。端部は長く垂下する。

SK040（図版25－24，図版72）　無台杯Ｃ（24）が出土している。底部外面にヘラ記号が確認される。

SK044（図版25－25，図版72）　壺（25）が出土している。底部に高台が付く。内外面に自然釉が見られる。器形は歪んでおり、体部下半に火ぶくれが確認される。

SK101（図版25－26，図版72）　有台杯Ｂ（26）が出土している。法量Ⅱに属するものである。底部切り離しはヘラ切りによって行われ、高台は外端接地となる。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は９世紀第１四半期に比定される。

SX004（図版25－27，図版72）　甑（27）が出土している。把手の付く体部破片である。

SX019（図版25－28，図版72）　無台椀Ｂ（28）が出土している。法量Ⅰに属するものである。

SX021（図版25－29～30，図版73）　土師器甕（29・30）が出土している。29・30共に内面に輪積み痕が見られることから、ロクロを使用せず成形したものと考えられる。体部は球状を呈し、29は外面下半に斜方向のヘラケズリが、30は外面に縦方向、内面に横方向のハケメがそれぞれ確認される。両者の胎土は小礫を含み、本遺跡出土の古代の土器には見られない特徴を有する。時期はいずれも古墳時代中期に比定される。

SX025（図版25－31，図版73）　土師器甕（31）が出土している。口縁端部は上に摘み上げられたような形状を呈する。外面下半には格子状の叩き目が見られる。

SX025・027（図版25－32，図版73）　土師器椀（32）が出土している。法量Ⅰに属するものである。

SX027（図版25－33～35，図版73）　無台杯Ａ（33）、無台杯Ｃ（34）及び無台椀（35）が出土している。33は法量Ⅱに属する。比較的薄手の作りで、底部切り離しはヘラ切りによって行われる。胎土から佐渡小泊窯産のものと考えられ、時期は９世紀中葉に比定される。34は法量Ⅲに属するものである。

SX052（図版26－36，図版73）　無台椀（36）が出土している。底部切り離しは糸切りである。

SX141（図版26－37～38，図版73）　杯蓋（37）及び無台椀（38）が出土している。37は法量Ⅲに属するもので、体部は山笠状を呈する。摘みの形態は低めの擬宝珠形で、端部は長く垂下する。体部外面に墨痕が確認される。38は法量Ⅱに属する。

SX142（図版26－39，図版73）　無台杯Ｂ（39）が出土している。法量Ⅱに属するものである。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は９世紀第３四半期に比定される。

SD013（図版26－40，図版73）　無台杯Ｃ（40）が出土している。法量Ⅱに属するもので、時期は９世紀第２四半期に比定される。

SD024（図版26－41～42，図版73）　杯（41・42）が出土している。41は外面に「万」の墨書が認められる有台杯の底部破片である。42は底部が確認されないが、器形から深身の有台杯と考えられる。

SD030・061（図版26－43，図版73）　杯（43）が出土している。底部が確認されないが、器形から箱型の有台杯と考えられる。

SD065（図版26－44，図版73）　有台杯Ａ（44）が出土している。法量Ⅲに属するもので、台部は内端接地となる。腰部の稜は明瞭ではない。器形から金属器を模倣したものと考えられる。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は９世紀第２四半期に比定される。

SD125（図版26－45，図版73）　無台杯Ａ（45）が出土している。法量Ⅱに属するものである。

SD032（図版26－46～48，図版73）　杯（46）、無台椀（47）、鍋（48）が出土している。47は台部が欠損しているが、有台杯と考えられる。48の口縁端部は摘み上げられるような形態を呈している。

SD033・037・SK044（図版26－49，図版73）　杯蓋（49）が出土している。法量Ⅰに属するものである。体部は山笠状を呈する。摘みは欠損している。端部は長く垂下し、中心部が屈曲する。

SD033（図版26－50～56，図版73・74）　杯蓋（50・51）、有台杯Ａ（52）、無台杯Ｂ（53）、有耳壺（54・55）、無台椀（56）が出土している。50は法量Ⅲに属するもので、頂部の径が大きく、平坦である。摘みは非常に低い擬宝珠形を呈する。端部はわずかに屈曲する。胎土から高田平野東側に位置する末野窯産のものと考えられる。時期は９世紀第１四半期に比定される。51は体部が山笠状を、摘みは低めの擬宝珠形をそれぞれ呈する。

52は法量Ⅲに属するものである。台部は外端接地であり、腰部に稜を持つ。53も同様に腰部に稜を持つことで二段底を呈している。

54・55は同一個体と考えられるが、体部上半の54のみ外面に付着物が見られ、器面の荒れが著しい。体部上半に台形状の粘土塊を貼り付けた耳を持つ有耳壺と考えられる。底部には高台が付く。

SD036（図版26－57～59，図版74）　杯（57～59）が出土している。57は底部切り離しが糸切りによって行われ、底部外面に「百」の墨書が認められる。

SD080（図版26－60，図版74）　土師器甕（60）が出土している。ロクロ成形の小甕で、外面下半にヘラケズリ調整を施す。

SD037（図版27－61～63，図版74）　無台杯Ａ（61）、須恵器甕（62）、土師器甕（63）が出土してい

る。61は底部外面に「公」の墨書が認められる。63はロクロ成形の小甕で、内面にススが付着している。

C　遺構外出土

1）須　恵　器（図版27～32－64～234，図版74～79）

杯蓋（図版27～28－64～100，図版74～75）　64は法量Ⅰに属するもので、調査区南西部の遺構集中区から出土したものである。摘みは欠損しており、端部は長く垂下し、中心部がわずかに屈曲する。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第1四半期に比定される。

65～70は法量Ⅱに属するものである。このうち65・66は調査区北西部の遺構集中区から出土している。両者共頂部の径が大きく、平坦である。摘みは非常に低い擬宝珠形を呈する。65の端部は長く垂下し、中心部が屈曲する。体部外面に「刀」のヘラ記号が確認される。66の端部は長く垂下する。内面にヘラ記号が確認される。両者共胎土から末野窯産のものと考えられ、北陸系の技法を持って製作されたものと考えられる。時期は8世紀末葉に比定される。

67～70は南西部の遺構集中区から出土したものである。67は体部が山笠状を呈する。摘みは欠損しており、端部は短く「く」の字状に屈曲する。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第1四半期に比定される。69は体部外面に「石井」の墨書が確認され、内面に墨痕が広がっている。転用硯として使用されたことが考えられる。70は体部外面に「中」の墨書が確認される。

71～83は法量Ⅲに属するものである。このうち71・72は北西部の遺構集中区から出土している。71は頂部の径が大きく平坦であるが、器面全体が歪んでおり、一部火ぶくれを起こしている箇所も見受けられる。摘みの形態は低めの擬宝珠形で、端部は長く垂下し、中心部が屈曲する。内面に66と同様のヘラ記号が確認される。胎土から末野窯産のものと考えられ、北陸系の技法を持って製作されたものと考えられる。時期は8世紀末葉に比定される。72は頂部の径が大きく、平坦である。摘みは非常に低い擬宝珠形で、端部が長く「く」の字状に屈曲する。

73～83は南西部の遺構集中区から出土したものである。73は頂部の径が大きく、平坦である。摘みは非常に低い擬宝珠形で、端部がわずかに外反する。胎土から末野窯産のものと考えられ、北陸系の技法を持って製作されたものと考えられる。時期は9世紀第1四半期に比定される。75は体部が山笠状を呈する。摘みは低めの擬宝珠形で、端部は長く垂下する。東海系の技法を持って製作されたものと考えられる。時期は9世紀第2四半期に比定される。77は内面に墨痕が広がり、転用硯として使用されたことが考えられる。80～83は内容が判別できないものの、墨書が確認される。

84～86は法量Ⅳに属するものである。いずれも南西部の遺構集中区から出土している。84・85は内面に墨痕が広がり、転用硯として使用されたことが考えられる。86は頂部の径が大きく、平坦である。摘みは低めの擬宝珠形で、端部が長く垂下する。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第2四半期に比定される。

90の摘みは高さのある擬宝珠形を呈する。91～100は墨書土器である。91～95は「石井庄」、「石□」など石井庄に関連する墨書が確認できる。

有台杯（図版28～30－101～149，図版75～76）　101～124は浅身の細別Ａで、このうち101・102は法量Ⅱに属するものである。101は北西部の遺構集中区から出土したものである。高台は内端接地し、比較的厚手の作りとなる。胎土から高田平野西側に位置する向橋窯産のものと考えられ、時期は8

世紀末葉に比定される。102は南東側の遺構集中区から出土したものである。高台は外端接地し、底部から体部への立ち上がりに丸みを持つ。底部切り離しはヘラ切りを用いていることから北陸系の技法を用い、器形から金属器を模倣したものと考えられる。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第1四半期に比定される。

103～117は法量Ⅲに属するものである。このうち103～107は北西部の遺構集中区から出土している。103は高台が内端接地、104～107は外端接地している。胎土から106は末野窯産、それ以外は滝寺窯産のものと考えられ、時期はいずれも9世紀第2四半期に比定される。

108～117は南西部の遺構集中区から出土している。108～114は高台が内端接地したものである。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第2四半期に比定される。115～117は高台が外端接地したものである。115は底部に墨痕が広がり、転用硯として使用されたことが考えられる。117は体部外面に墨書が見られる。

118～124は法量Ⅳに属するものである。このうち118～120は北西部の遺構集中区から出土している。いずれも高台が外端接地しており、胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第2四半期に比定される。

121～124は南東部の遺構集中区から出土している。いずれも高台が外端接地している。122は胎土から末野窯産のものと考えられ、時期は9世紀第2四半期に比定される。123・124は胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第3四半期に比定される。123は器形から有台杯が椀化しているものと考えられる。124は底部外面に「人」の墨書が確認できる。

125～134は深身の細別Bで、このうち125は法量Ⅰに属するもので、南東部の遺構集中区から出土している。高台が内端接地しており、底部付近で数条の細沈線が横位に巡る。金属器を模倣したものと考えられる。

126～131は法量Ⅱに属するもので、いずれも南東部の遺構集中区から出土している。127は高台が外端接地している。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は9世紀第1四半期に比定される。130は高台の断面が三角形を呈し、外端接地となる。器形から有台杯が椀化しているものと考えられる。

138は底部に墨痕が広がり、転用硯として使用されたことが考えられる。139・145は底部外面に「×」のヘラ記号が確認できる。140～149は墨書土器で、140～145は「石井庄」、「石庄」など石井庄に関連する墨書が確認できる。

無台杯・杯（図版30～31－150～210，図版77～78）　150～179は底部切り離しがヘラ切りの細別Aで、このうち150・151は法量Ⅰに属するものである。150は北西部の遺構集中区から出土したものである。比較的厚手の作りをしており、時期は8世紀末葉に比定される。胎土から向橋窯産のものと考えられる。151は南東部の遺構集中区から出土したものである。器面は歪んでおり、底部外面に「石庄」の墨書が確認される。

152～169は法量Ⅱに属するものである。このうち152～161は北西部の遺構集中区から出土している。152～156は比較的厚手の作りをしているもので、胎土から末野窯産のものと考えられ、時期は8世紀末葉に比定される。157～160の時期は9世紀第1四半期に比定される。内158・160は胎土から末野窯産のものと考えられる。161は比較的薄手の作りをしているもので、胎土から佐渡小泊窯産のものと考えられ、時期は9世紀第2四半期に比定される。

162～169は南東部の遺構集中区から出土している。162～165は胎土から佐渡小泊産のものと考え

られ、時期は９世紀中葉に比定される。

170は法量Ⅲに属するものである。173～179は墨書土器で、いずれも南東部の遺構集中区から出土している。173～178は「石井庄」「石庄」など石井庄に関連する墨書が確認できる。

180～188は二段底を呈する細別Ｂで、いずれも法量Ⅱに属するものである。いずれも南東部の遺構集中区から出土している。184は胎土から滝寺窯産のものと考えられる。今池遺跡SD201出土土器に類例が見られ、時期は９世紀第２四半期に比定される。186・187は比較的薄手の作りをしている箱型の杯で、今池遺跡SD003出土土器に類例が見られる。時期は９世紀第３四半期に比定される。188は体部外面に墨書が確認される。

189～205は底部切り離しが糸切りの細別Ｃで、いずれも南東部の遺構集中区から出土している。このうち189は法量Ⅰに属するもので、胎土から高田平野西側に位置する大貫窯産のものと考えられる。時期は９世紀第２四半期に比定される。

190～197は法量Ⅱに属するものである。このうち190～192は胎土から大貫窯産のものと考えられ、時期は９世紀第２四半期に比定される。197は底径が小さく、口縁が外に広がる器形を呈する。時期は９世紀第３四半期に比定される。

195～204・208～210は墨書土器である。197～201・208・209は「石井庄」「石井」など石井庄に関連する墨書が確認できる。

稜椀（図版31－211，図版78）　北西部の遺構集中区である5B5グリッドから出土した。足高の高台が付き、腰部で屈曲しほぼ垂直に立ち上がるため、腰部に稜を持つ。金属器を模倣したものと考えられる。胎土から高田平野西側の窯で製作されたものと考えられ、時期は９世紀前半に比定される。

長頸瓶（図版31－212～217，図版78）　いずれも南東部の遺構集中区から出土している。213・214は胎土から滝寺窯産のものと考えられる。口縁が外反することで受け口状を呈し、口縁端部が立ち上がる。時期は214が９世紀第１四半期、213が９世紀第２四半期にそれぞれ比定される。

横瓶（図版32－218～220，図版78）　いずれも南東部の遺構集中区から出土している。219は口縁端部の上端をわずかに引き上げる。胎土から滝寺窯産のものと考えられ、時期は９世紀前半に比定される。220は口縁部と体部の繋ぎ目に指頭圧痕が見られる。

壺（図版32－221～224，図版78）　221～223は南東部の遺構集中区から出土している。221は壺類と考えられるもので、体部外面に「＋」のヘラ記号が確認できる。222は短頸壺である。

224は北西部の遺構集中区である6Cグリッドから出土している。薬壺と考えられる短頸壺で、時期は９世紀前半に比定される。

甕（図版32－225～234，図版79）　225・226は須恵器特大甕である。225は口縁端部の下端が長く延び、口縁部に突帯が巡る。口縁部と体部との間に接合痕が認められる。体部外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が見られる。226は口縁端部の下端が長く延び、口縁部外面に２段の櫛描波状文が描かれる。内面に横位の「人」のヘラ記号が確認できる。

227～230は須恵器中甕である。227は口縁端部の中心に稜を持つ。228は受け口状を呈するもので、口縁端部がわずかに立ち上がる。229は口縁下端が長く延びる。230の口縁端部の中心は窪んでおり、体部外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が見られる。口縁部と体部との間に接合痕は見られず、体部上半はナデ肩となる。体部・口縁部一体型の作りをしたものと考えられる。

231は須恵器小甕である。受け口状を呈し、口縁端部が立ち上がる。232・233は口縁部外面に櫛描

波状文が描かれる。大型の甕と考えられる。

2）土　師　器（図版33～36－235～323，図版79～81）

無台椀・椀（図版33～34－235～287，図版79～80）　235～244は法量Ⅰに属するもので、器形はすべて椀形を呈し、底部切り離しは確認できたもの全てが糸切りである。このうち235は北西部の遺構集中区から出土したもので、時期は9世紀第3四半期に比定される。

236～244は南東部の遺構集中区から出土したものである。236はほかの土師器無台椀と比べて器高指数が高く、体部が丸みを帯びて立ち上がる器形を呈する。銅椀等の金属器を模倣したものと考えられる。237の時期は9世紀第3四半期に比定される。241は器形全体に歪みが見られる。243は口径18cmの大型の土師器椀である。244は墨書土器で、体部外面に横位で「木偏」を持つ漢字1字が確認される。

245～266は法量Ⅱに属するものである。このうち245～247は北西部の遺構集中区から出土したものである。245は器形が箱形を呈しており、須恵器杯を模倣したものと考えられる。246・247は器形が椀形を呈しており、底部が小さく口縁が内湾気味に立ち上がる。時期は9世紀第3四半期に比定される。

248～266は南東部の遺構集中区から出土したものである。250・254・263・265は完形で出土したものである。時期は250・254が9世紀第2四半期、263・265が9世紀第3四半期にそれぞれ比定される。

261～263は底部外面にヘラ記号の確認できるものである。263～287は墨書土器で、263～282は「石庄」「石井」など石井庄に関連する墨書が確認できる。

有台椀（図版34－288，図版80）　南東部の遺構集中区である13B21グリッドから出土している。高台部のみしか確認されないため、有台盤の可能性も考えられる。

蓋（図版34－289，図版80）　南東部の遺構集中区である14C11・15C2グリッドから出土している。口端部径23.7cmの大型の蓋で、体部が山笠状を呈する。摘みは低めの擬宝珠形で、端部は長く垂下する。時期は9世紀前半に比定される。盤に付く蓋の可能性が考えられるが、盤は本遺跡では確認できなかった。

甕（図版34～35－290～312，図版80～81）　290～307は法量Ⅰに属するものである。このうち290～295は北西部の遺構集中区から出土している。いずれもロクロ成形で製作されたものである。293の口縁は上端を摘み上げられるような形態を呈し、ほかは上端を摘み上げず、丸く収めている。290の体部下半にはヘラ削り調整痕が確認できる。

296～307は南東部の遺構集中区から出土している。いずれもロクロ成形で製作されたものである。306・307の口縁は上端を摘み上げられるような形態を呈する。296・298・302の体部下半には縦方向のヘラ削り調整痕が確認できる。299の体部下半外面には平行叩き目、内面には同心円当て具痕が確認できる。時期は9世紀中葉に比定される。

308～311は法量Ⅱに属する小甕である。いずれも南東部の遺構集中区から出土している。ロクロ成形で製作されたものである。

312は北西部の遺構集中区である5Cグリッドから出土した丸底を呈する甕である。口縁部は欠損している。ロクロ成形された後、体部下半には縦方向のヘラ削り調整を施す。

鍋（図版35－313～319，図版81）　313～317は北西部の遺構集中区から出土している。313～316の口縁端部は上端を摘み上げず、丸く収めている。体部下半の外面には縦方向のヘラ削り調整痕が確認できる。314の内面にはカキメ、315にはハケメがそれぞれ確認できる。317は鍋の把手部と考えられる。

318・319は南東部の遺構集中区から出土している。318の口縁は上端を摘み上げられるような形態を呈し、体部下半外面には平行叩き目、内面にはカキメが確認できる。外面には炭化物が多く付着している。319の口縁は上端を摘み上げず、丸く収めている。体部下半外面にはヘラ削り調整痕、内面にはハケメが確認できる。

甑（図版36－320～323，図版81）　いずれも北西部の遺構集中区から出土している。320・321は同一個体の可能性のあるもので、320は把手の付いた体部、321は末広がり状に外反し、内部は筒抜けになる底部である。322・323は口縁が内傾し、口縁部に突帯が巡る。

3）黒 色 土 器（図版36－324～328，図版81）

器種は全て無台椀である。324・325は法量Ⅰに属するもので、いずれも南東部の遺構集中区から出土している。内面に横方向のミガキがかけられる。324は口縁が外反し、325は内湾気味に立ち上がる。

326・327は法量Ⅱに属するもので、内面に不定方向のヘラミガキがかけられる。326は北西部の遺構集中区から出土している。口縁部に沈線を意識した窪みが巡る。銅椀を模倣したものと考えられる。327は南西部の遺構集中区から出土している。口縁がわずかに外反する。

3　中近世の土器

A　中世の土器（図版36－329～334，図版82）

329～333は珠洲焼で、いずれも南東部の遺構集中区のⅦ層上面から出土している。329・330は甕である。いずれも吉岡編年のⅣ1期［吉岡1994］に位置づけられることから、時期は14世紀初頭に比定される。331～333は内面に摺目が見られる擂鉢である。いずれも吉岡編年のⅣ3～4期に位置づけられることから、時期は14世紀後半に比定される。

334は擂鉢の底部で、色調がにぶい橙色を呈する。越前焼と考えられる。

B　近世陶磁器（図版36－335～342，図版82）

いずれも表土（Ⅰ・Ⅱ層）及び近世以降の攪乱内から出土している。335は中国青花の小杯で、時期は明末～清初頭期（16世紀末～17世紀初頭）に比定される。

336～338は肥前系磁器である。336は染付瓶で、外面に一重網目文が描かれる。大橋編年のⅢ期［九州近世陶磁学会2000］に位置づけられることから、時期は17世紀後半に比定される。337は伊万里の染付皿で、Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられる。338は古代の包含層であるⅦ層を切るような形で形成された河川跡から出土したものである。椀の底部で、底面には溶着物が認められる。Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる。

339～341は肥前系陶器（唐津焼）である。339は椀の底部で、内外面に黒褐色の鉄釉が施される。大橋編年のⅡ期に位置づけられることから、時期は17世紀前半に比定される。340・341は皿の底部である。340は内外面に灰釉が施される。見込みに胎土目が残る。Ⅰ期に位置づけられるものと考えられ、時期は16世紀末～17世紀初頭に比定される。341は内外面に緑釉が施され、高台には溶着物が認められる。Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。

342は産地不明の陶器の底部である。時期は17世紀半ばに比定される。

4 木 製 品（図版41～46・82～87）

調査で得られた加工のある木材は総数274点である。主なものは建物の柱根47点、同じく礎盤（板）16点、このほか杭35本、木簡1点、木簡状木製品3点、斎串2点などである。これ以外に木材・板材が多く出土しているが、小さな破片が大半を占める。出土地点は南東部の遺構群およびその周辺が多い。柱根・礎盤（板）は建物に伴うものである。

以下、遺構順に木製品の説明をする。

SB002（343～348）　打込み柱式建物の柱根である。すべての底部先端部は尖るように加工されている。347は芯外分割材、これ以外は芯持丸太である。太さ7～21cmと幅を持つが、棟持柱となる344・345は他の柱根に比べやや太くなる。樹種はクリ（343・348）、モクレン属（345・347）、フジキ属（344）、ヌルデ（346）で多様な樹種が用いられる。

SB003（349～354）　総柱建物の柱根である。353を除き、太さ15～20cmの芯外分割材が用いられている。353は太さ6.9～3.0cmと著しく細く、形状からほかの木製品の部材からの転用である。樹種はすべてクリ材で、樹種選択が認められる。

SB006（355～360）　打込み柱式建物の柱根である。すべての底部先端部は尖るように加工されている。またすべて芯持ち丸太材が用いられている。太さは10cm前後を測るが、棟持柱となる356・359は他の柱根に比べやや太くなる。樹種はキハダ（357～359）、モクレン属（355）、カエデ属（356）、ヌルデ（360）で多様な樹種が用いられる。

SB048（361～367）　打込み柱式建物の柱根である。すべての底部先端部は尖るように加工されている。木取りは364・367が芯持ち丸太材、これ以外は芯外分割材である。太さは10～20cmを測る。樹種は未分析の367を除き、すべてクリ材で樹種選択が認められる。なお、361・363は枘穴が認められ、ほかの建物で使用された柱材の転用と考えられる。

SB049（368～378）　368～377は掘形をもつものの打込み柱式建物の柱根である。369・371・373・375は明らかに底部先端部が尖るように加工されている。木取りは369が芯持ち丸太材、これ以外は芯外分割材である。太さは10～25cmを測るが、15～20cm程度のものが用いられている。樹種は368・371・373がスギ材、これ以外はすべてクリ材である。なお、376は枘穴が認められ、ほかの建物で使用された柱材の転用と考えられる。378はクリの柾目材を用いた礎盤（板）である。

SB050（379～390）　379～382・384～389は板目材の礎盤（板）である。380・389を除き、端部はいずれも端正に切られていることから鋸による切断と推定される。379～382、384と385、386～388はそれぞれ重なるように出土し、384～388は柱の重みの痕跡が認められる。樹種は分析した6点（380・384・385・386・389・390）がすべてスギ材で、樹種選択が認められる。383はP03の覆土から出土した斎串である。上部は欠損しているが、長さ44.5cmを測る。下部は剣先状に尖り、側面の切れ込みは認められない。390はP01の底面に敷かれていた植物質の敷設物の一部で、スギ材の木っ端（木片）である。植物質の敷設物にはこのほかスギの表皮も敷かれていた。柱材の加工時に生じた木っ端（木片）や表皮を礎盤（板）代わりに底面に敷き詰めたものと推定できる。

SB055（391）　P07から出土した芯外分割材の柱根で、太さ15.6～24.0cmを測る。樹種はカツラである。底部から正面にかけて穴が穿たれている。運搬用の穴、ほかの建物での使用時に穿たれた穴のいず

れかと思われる。

SB056（392）　芯外分割材の柱根で、太さ11.2～18.4cmを測る。樹種はスギ材である。両側に浅い切れ込みがあることから、ほかの建物で使用された柱材の転用と考えられる。

SB058（393～397）　393はP01の覆土１層から出土した木簡状木製品で、長方形の材の一端を両側から削りとがらせている。長さ12.2cm、幅2.0cmを測る。051型式［鬼頭1990］される。394は同じくP01の覆土３層から出土した付札木簡で、長方形の材の一端を両側から削り尖らせたものである。051型式［鬼頭前掲］となる。長さ9.8cm、幅2.0cmを測る。表に「□□□上黒米」、裏に「十一月ヵ［　　］と墨書されている。395・396はP06から出土した礎盤（板）で、底面に２枚重ねられていた。木取りは板目で、他の礎盤（板）に比べるとやや小ぶりである。397はP06から出土した芯外分割材の柱根で、太さ15.6～24.0cmを測る。樹種はクリである。

SB059（398～400）　P02～04から出土した柱根である。木取りは398・399が芯持ち丸太材、400は芯外分割材である。太さは398が23.1～26.8cm、399は12.0～19.8cm、400が6.5～14.0cmと大きな違いが見られる。樹種はすべてクリである。なお、399は底部先端部がやや尖るように加工されている。

SB137（401～408）　401・402はP09から出土した板目の板材（401）・角材（402）である。長さは401が70.6cm、402が50.8cmを測る。大型品であることから紛れ込みでなく、何らかの意図を持って柱穴に入れられたものと思われる。403～407はP11から出土した礎盤（板）で、底面に５枚重ねられていた。このうち403～406には柱の重みの圧痕が認められる。木取りはすべて板目で、樹種は405がブナ属、これ以外はスギである。なお403には欠込穴、407には欠込状の加工が見られ、ほかの目的で使用された板材の転用品と推定される。408は同じくP11から出土した上部が圭頭状を呈する斎串で、下部は斜めに切り落とされたように切断されている。長さ22.0cm、幅5.1cmを測る。

SB138（409）　P01から出土した芯持ち丸太材の柱根で、太さ7.4～9.5cmを測る。樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。底部先端部は尖るように加工されている。

SB143（410～412）　いずれもP01から出土している。410は芯外分割材野の柱根で、太さ5.0～11.0cmを測る。樹種はクリである。底部先端部は尖るように加工されている。上部は端正に切断されていることから、建物廃棄に際し、抜き取らず地上部のみ切断したものと思われる。411は刀形木製品？思われる木製品、412は用途不明の木製品で、覆土から出土している。何らかの儀礼に使用されたものと思われる。

SB144（413）　P01から出土した芯外分割材の柱根で、太さ21.0cmを測る。樹種はクリである。底部先端部は尖るように加工されている。なお、底部付近に溝状の掘り込みがあり、運搬用の溝、他の建物での使用時に掘り込まれた溝のいずれかと思われる。

SA009（414～421）　杭列に使用された杭で、すべての底部先端部は尖るように加工されている。木取りは414～416・419・420が芯外分割材、417・418・421が芯持ち丸太である。樹種はクリ（414・416・420）、コナラ属コナラ亜属コナラ節（415・419）、カツラ（417・418・421）と多様である。

SA010（422）　杭列に使用された杭で、底部先端部は尖るように加工されている。木取りは芯持ち丸太で、樹種はヤマグワである。

SE014（423）　覆土最上層から出土した板目の板材である。長さ17.9cm、幅10.2cmを測る。出土

状況から搬入礫（451）とともに井戸廃棄に伴う祭祀もしくは儀礼使用されたと推定される。

SD131（424・425）　覆土から出土した板目の板材で、それぞれ長さ66.2cm（424）、65.6cm（425）を測る。

遺構外出土（426～435）　遺物包含層（基本層序Ⅶ層）から出土したものである。したがって、所属時期は8世紀末葉～9世紀第3四半期の範囲に収まる。426～428はいずれも一端が欠損し、全体形が不明である。何らかの木製品の部材と思われる。429は両端が尖るように加工され、上部を穿孔している木札である。長さ19.1cm、幅3.0cmを測る。文字が書かれていないため、木簡状木製品も想定したが不明である。430・431は加工のある棒状の木片の片端に焦げ痕が認められる。432は欠損のため平面形は明らかでないが、上部を圭頭状にした斎串である。下部先端は欠損するが、両側から削り鋭く尖らせている。433は板目の板材破片で、長さ23.2cmを測る。434・435は木簡状木製品で、434は上部を圭頭状、435は方頭にし、下部はいずれも両側から削り尖らせている。434は長さ11.9cm、幅2.2cm、435は長さ11.2cm、幅2.2cmを測る。文字は書かれていないが、付札になるものと予想される。

5　鉄　製　品（図版47・87）

6点出土している。すべて南東部の遺構群のある15B～Cグリッドからの出土である。以下、掲載順に説明する。

436はいわゆる「海老錠」と称する錠前である。弦部は腰部で折れている。錆で腐食が著しいものの弦部の長さ11.2cm、筒部の長さ4.4m幅1.5cmを測る。錆でバネ受板の孔は見えないが、筒部と弦部の接合部では鍵穴が認められる。筒部の断面形は方形（やや逆台形状）である。弦部は筒部の鍵穴側木口部の上位に取り付けられ、腰部の形状は丸く折れ曲がる。錠前の分類Ⅱ群a類［合田1998］に相当する。437は柄装着部が袋式の斧である。袋部の横断面形は不完全鍛着のため、隙間のある長円形を呈する。袋部は長さ≒5.5cm・幅≒3.1cmを測る。斧身の平面形は無肩で、長さ8.9cm、刃部幅は4.0cmを測る。断面形はクサビ形状［渡邉2004］となる。438は基部の上面が扁平で、横断面形が長方形を呈する平釘［金箱1984］である。長さ4.9cm、幅0.7cmを測る。439は刀子と考えられるものである。刃部は長さ2.2cmを測り、刃側が薄く、背側が厚くなる。茎の先端は一部欠損するが、長さ3.6cmを測る。茎と瀬の間には背マチが認められるが、刃との間には刃マチが見られない。使い込まれ、研ぎ減りした刀子と思われる。440は長さ7.2cm、幅2.7cmを測る鉄製品である。片側が薄く、片側が厚くなり、正面下部はつまみ状になる。鎌を想定しているが明確でない。441は長さ5.0cm、幅3.3cm、厚さ0.6cm、重さ34.5gの鉄片である。用途・製品名は不明である。

6　鉄　　滓（図版47・87）

442・443は鉄滓で、椀形鍛冶滓と推定される。重さは442が126.8g、443が75.4gを測る。

7　銭　　貨（図版47・52・87）

15C1グリッドから1枚出土している。444は皇朝十二銭の内、2番目の天平宝字四（760）年に鋳造さ

れた「萬年通寶」である。

8　土　製　品（図版47・87）

14C12グリッドから1点出土している。445は羽口の破片で、推定外径6.5cmを測る。

9　石　製　品（図版47・87）

石製品とされるものは5点出土している。搬入礫は大小合わせて多数出土しているが、掲載したものは1点である。

446～448は砥石である。いずれも破損品であるが、446は面状の砥面のほか、鋭い筋状の砥面が認められる。すべて粗雑な砥石である。449は敲打痕のある礫で、両側縁、下端に敲打痕が認められる。450はいわゆる「パステル形石製品」と呼称されているもので、割れ面の一部が研磨されている。

451はSE014の上面から420の板材と一緒に出土した搬入礫である。大きさ43.8×24.4×22.8cm、重さ35kgを測る。出土状況から板材（420）とともに井戸廃棄に伴う祭祀もしくは儀礼に使用されたと推定される。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　古植生と木材利用

A　はじめに

新潟県上越市向橋に所在する岩ノ原遺跡は、高田平野西部を流れる儀明川右岸の沖積地に立地している。発掘調査の結果、掘立柱建物や土坑、杭列、井戸、畑作溝などの遺構や、土師器や須恵器、木製品、金属製品等の遺物が確認されている。なお、これらの出土遺物から８世紀末葉～９世紀中頃の遺跡とされており、「石井庄」「石庄」と判読される墨書土器が出土したことから、本地域において成立した古代荘園の事例として注目されている。

本報告では、発掘調査成果から課題とされた、1）古植生復元、2）木材利用、といった２題の検証を目的として自然科学分析調査を実施する。

B　試　　料

試料は、基本土層から採取された土壌及び掘立柱建物に伴う建築部材や自然木などからなる。以下に、試料の概要を記す。

1）土壌試料

試料採取地点は、調査区内北西部及び南東部の遺構群に挟まれた遺構・遺物が希薄な地点（7A21グリッド）に相当し、試料は本地点に認められた基本土層より採取されている。基本土層は、下位よりⅧ～Ⅳ層、Ⅱ・Ⅰ層に分層されており、最下位のⅧ層は青灰色粘土、Ⅶ・Ⅵ層は灰色粘土、Ⅴ層は灰色砂とシルトの互層、Ⅳ層は洪水堆積層と考えられる灰白～青灰色砂、Ⅱ層は褐灰色シルト、Ⅰ層は灰褐色シルト（水田耕作土）とされている。このうち、Ⅷ層上面は遺構確認面に相当し、Ⅶ層は古代の遺物包含層である。試料は、Ⅵ層上層（試料番号１）・下層（試料番号２）、Ⅶ層上層（試料番号３）・下層（試料番号４）より採取された土壌４点である。

2）木質遺物

木　製　品

試料は、掘立柱建物の建築部材である柱材（柱根）や礎板、杭列の杭等の計67点（試料番号１～67）である。このうち、試料番号67は、肉眼観察では樹皮と考えられる試料と木片が認められたことから、本分析では両試料を調査対象としている。

自　然　木

試料は、発掘調査区内の各地点に認められた自然木（立木）６点（試料番号68～73）である。これらの試料は、いずれもⅦ層より検出されている。以上の試料のうち、土壌試料４点は花粉分析、植物珪酸体分析、木製品及び自然木74点は樹種同定を実施する。

C　分析方法

1）花粉分析

試料10ccを正確に秤取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20μm以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表・図として示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。100個体以下は「＜100」で表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤［2004］の分類に基づいて同定・計数する。

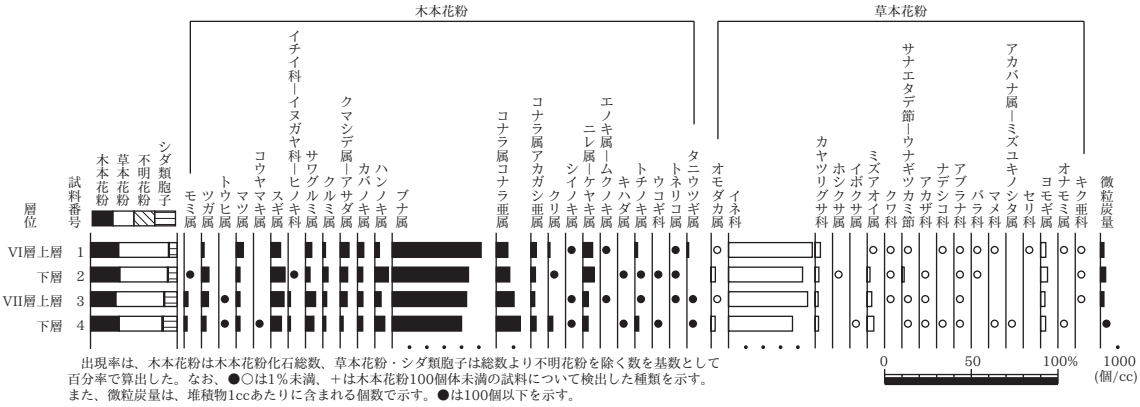
分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、有効数字を考慮し、各分類群の含量を10の位で四捨五入して100単位に丸める。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めており、100個体以下は「＜100」で表示する。また、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

3）樹種同定

各木製品の木取を観察した後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。芯持丸木や自然木等の3断面の切片作成が困難な木製品については、接合面や破損部を利用して数mm角の木片を採取し、木片から3断面の切片を作成する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東［1982］、Wheeler他［1998］、Richter他［2006］を参考としている。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、林［1991］、伊東［1995，1996，1997，1998，1999］や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考としている。



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。
また、微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数で示す。●は100個以下を示す。

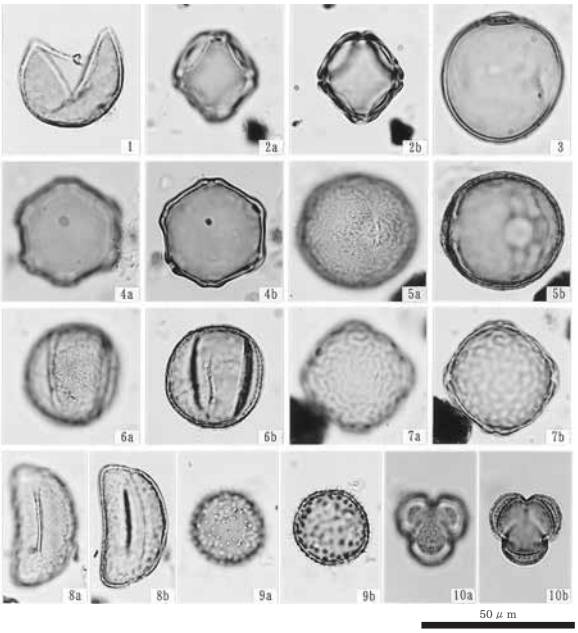
第13図　主要花粉群集の層位分布図

D　結　　果

1）花 粉 分 析

結果を第３表、第13・14図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を＋で表示するに留めている。

４試料からは花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。また、花粉化石群集もいずれも類似し、草本花粉の割合がやや高い。



1. スギ属（Ⅶ層上層；3）
2. ハンノキ属（Ⅶ層上層；3）
3. イネ科（Ⅶ層上層；3）
4. サワグルミ科（Ⅶ層上層；3）
5. ブナ属（Ⅶ層上層；3）
6. コナラ属コナラ亜属（Ⅶ層上層；3）
7. ニレ属－ケヤキ属（Ⅶ層上層；3）
8. ミズアオイ属（Ⅶ層上層；3）
9. オモダカ属（Ⅶ層上層；3）
10. ヨモギ属（Ⅶ層上層；3）

第14図　花粉化石顕微鏡写真

種　類	VI層 上層	VI層 下層	VII層 上層	VII層 下層
試料番号	1	2	3	4
木本花粉				
モミ属	―	1	5	4
ツガ属	3	10	9	6
トウヒ属	―	―	2	1
マツ属単維管束亜属	―	―	―	1
マツ属複維管束亜属	2	―	1	―
マツ属（不明）	6	5	4	4
コウヤマキ属	―	―	―	1
スギ属	11	19	17	14
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	―	2	3	3
サワグルミ属	7	6	13	11
クルミ属	3	7	5	4
クマシデ属ーアサダ属	10	10	9	4
カバノキ属	7	7	7	7
ハンノキ属	5	18	8	13
ブナ属	100	102	96	92
コナラ属コナラ亜属	13	18	23	32
コナラ属アカガシ亜属	6	6	5	7
クリ属	2	2	―	6
シイノキ属	1	―	2	1
ニレ属ーケヤキ属	11	15	7	7
エノキ属ームクノキ属	1	―	1	―
キハダ属	―	1	―	1
ウルシ属	―	―	―	1
モチノキ属	―	―	―	1
カエデ属	―	―	1	―
トチノキ属	3	1	2	5
クロウメモドキ科	―	―	1	―
グミ属	1	―	―	―
ウコギ科	―	1	―	1
ツツジ科	―	―	1	―
イボタノキ属	―	―	―	1
トネリコ属	1	1	1	―
ガマズミ属	―	―	―	1
タニウツギ属	2	―	1	1
草本花粉				
オモダカ属	5	16	7	16
イネ科	287	288	344	251
カヤツリグサ科	18	14	13	13
ホシクサ属	―	1	―	―
イボクサ属	―	―	―	1
ミズアオイ属	2	11	20	26
クワ科	1	2	4	―
サナエタデ節ーウナギツカミ節	5	9	6	3
タデ属	―	―	―	1
アカザ科	―	1	2	1
ナデシコ科	1	―	―	1
アブラナ科	2	1	2	1
バラ科	1	1	―	―
マメ科	1	―	―	1
アカバナ属ーミズユキノシタ属	―	―	―	1
セリ科	1	―	―	―
ネナシカズラ属	―	―	―	1
シソ科	―	―	―	1
ヨモギ属	18	27	19	20
オナモミ属	1	―	―	3
キク亜科	1	1	3	―
不明花粉	5	6	8	10
シダ類胞子				
シダ類胞子	55	71	111	110
合 計				
木本花粉	195	232	224	230
草本花粉	344	372	420	341
不明花粉	5	6	8	10
シダ類胞子	55	71	111	110
総計（不明を除く）	594	675	755	681
1ccあたりの微粒炭量［個］	200	300	200	＜100

1）微粒炭量については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている
2）＜100：100個体未満

第３表　花粉分析結果

木本花粉ではブナ属が多産し、この他の種類では、スギ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等が多く産出し、ツガ属、マツ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、コナラ属アカガシ亜属等を伴う。

草本花粉では、いずれもイネ科が優占し、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属等を伴う。また、オモダカ属、ミズアオイ属、ホシクサ属、イボクサ属等の水湿地生植物に由来する花粉も検出される。

微粒炭量は、試料番号１・３で約200個/cc、試料番号２で約300個/cc、試料番号４で100個/cc未満である。

2）植物珪酸体分析

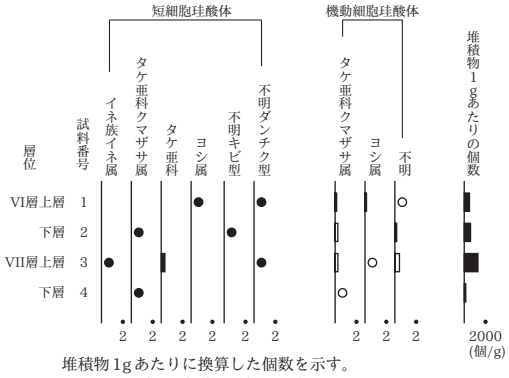
結果を第４表、第15・16図に示す。いずれの試料からも植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど保存状態は不良である。以下に試料の産状を示す。

（個/g）

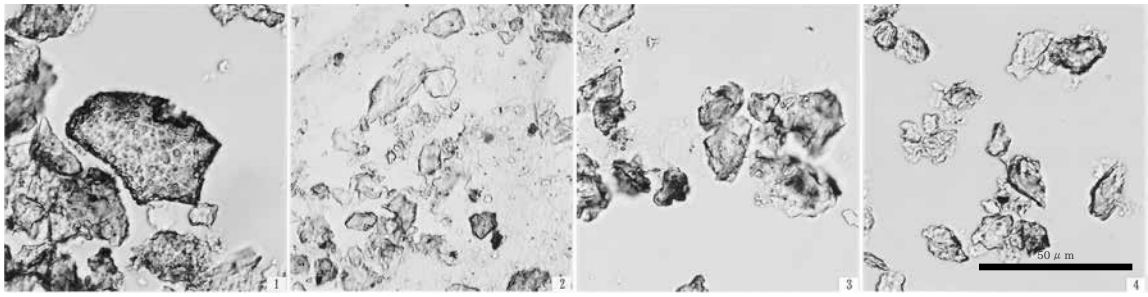
種　類	VI層 上層	VI層 下層	VII層 上層	VII層 下層
試料番号	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	－	－	＜100	－
タケ亜科クマザサ属	－	＜100	－	＜100
タケ亜科	－	－	300	－
ヨシ属	＜100	－	－	－
不明キビ型	－	＜100	－	－
不明ダンチク型	＜100	－	＜100	－
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
タケ亜科クマザサ属	100	300	300	＜100
ヨシ属	100	－	＜100	－
不明	＜100	200	400	－
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	100	200	500	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	400	400	800	100
総　計	500	600	1,300	100

1）含量は、10の位を四捨五入して100単位に丸めている
2）＜100：100個体未満
3）合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

第４表　植物珪酸体含量



第15図　植物珪酸体含量の層位的変化



1. クマザサ属機動細胞珪酸体（VI層下層；2）　2. 状況（鉱物粒子が散在）（VI層上層；1）
3. 状況（鉱物粒子が散在）（VII層上層；3）　4. 状況（鉱物粒子が散在）（VII層下上層；4）

第16図　植物珪酸体顕微鏡写真

各試料の植物珪酸体含量はいずれも少なく、試料番号３（VII層上層）の約1,300個/gが最も多く、この他では、試料番号４（VII層下層）は100個/g程度、試料番号１（VI層上層）や試料番号２（VI層下層）は500－600個/g程度である。

検出された分類群は、試料番号４ではクマザサ属、試料番号３ではクマザサ属やヨシ属等が僅かに認められる。また、試料番号３では、栽培植物のイネ属が検出されるが、短細胞珪酸体のみであり、その含量も100個/g未満である。一方、上位の試料に相当する試料番号２ではクマザサ属等、試料番号１でクマザサ属やヨシ属等がわずかに認められるが、栽培植物のイネ属は検出されない。

3）樹 種 同 定

結果を第５表、第17～19図に示す。柱根や礎盤（板）、自然木等は、針葉樹１種類（スギ）と広葉樹14種類（オニグルミ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、ヤマグワ、モクレン属、カツラ、フジキ属、キハダ、アカメガシワ、ヌルデ、カエデ属、トチノキ、トネリコ属）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

番号	遺構	層位等	器種	木取	樹種
1	SB002-P01		柱根	芯持丸木	クリ
2	SB002-P02		柱根	芯持丸木	モクレン属
3	SB002-P03		柱根	芯持丸木	クリ
4	SB002-P04		柱根	芯持丸木	ヌルデ
5	SB002-P05		柱根	芯持丸木	フジキ属
6	SB002-P06		柱根	割角材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
7	SB002-P07		柱根	割角材	モクレン属
8	SB003-P02		柱根	割材	クリ
9	SB003-P03		柱根	割材	クリ
10	SB003-P05		柱根	割材	クリ
11	SB003-P06		柱根	割材	クリ
12	SB003-P07		柱根	割材	クリ
13	SB003-P08		柱根	芯持丸木	クリ
14	SB006-P01		柱根	芯持丸木	モクレン属
15	SB006-P02		柱根	芯持丸木	カエデ属
16	SB006-P03		柱根	芯持丸木	キハダ
17	SB006-P04		柱根	芯持丸木	キハダ
18	SB006-P05		柱根	芯持丸木	キハダ
19	SB006-P06		柱根	芯持丸木	アカメガシワ
20	SB048-P01		柱根	割材	クリ
21	SB048-P02		柱根	割材	クリ
22	SB048-P03		柱根	芯持丸木	クリ
23	SB048-P04		柱根	割材	クリ
24	SB048-P05		柱根	割材	クリ
25	SB048-P08		柱根	割材	クリ
26	SB049-P01		柱根	割材	スギ
27	SB049-P02		柱根	芯持丸木	クリ
28	SB049-P04		柱根	割材	スギ
29	SB049-P05		柱根	割材	クリ
30	SB049-P06		柱根	割材	クリ
31	SB049-P07		柱根	割材	クリ
32	SB049-P08		柱根	割材	スギ
33	SB049-P11		柱根	割材	クリ
34	SB049-P12		柱根	割材	クリ
35	SB049-P14		礎盤（板）	柾目板	クリ
36	SB049-P17		柱根	割材	クリ
37	SB050-P03		礎盤（板）	板目板	スギ
38	SB050-P04	№1（長）	礎盤（板）	板目板	スギ
39	SB050-P04	№2（短）	礎盤（板）	板目板	スギ
40	SB050-P05		礎盤（板）	板目板	スギ
41	SB050-P06		礎盤（板）	板目板	スギ
42	SB055-P07		柱根	割材	カツラ
43	SB056-P02		柱根	割材	スギ
44	SB058-P08		柱根	割材	クリ
45	SB059-P02		柱根	芯持丸木	クリ
46	SB059-P03		柱根	芯持丸木	クリ
47	SB059-P04		柱根	割材	クリ
48	SB143-P01		柱根	割材	クリ
49	SB144-P01		柱根	割材	クリ
50	SA009-P12		杭	柾目板状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
51	SA009-P13		杭	角材	クリ
52	SA009-P14		杭	芯持丸木	カツラ
53	SA010-P04		杭	芯持丸木	ヤマグワ
54	SB137-P09		板材	板目板	スギ
55	SB137-P11	№1	礎盤（板）	板目板	スギ
56	SB137-P11	№2	礎盤（板）	板目板	スギ
57	SB137-P11	№3	礎盤（板）	板目板	スギ
58	SB137-P11	№4	礎盤（板）	柾目板	ブナ属
59	SB137-P11	№5	礎盤（板）	板目板	スギ
60	SB138-P01		柱根	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
61	SA009-P01		杭	板目板	クリ
62	SA009-P02		杭	割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
63	SA009-P03		杭	柾目板	クリ
64	SA009-P04		杭	芯持丸木	カツラ
65	SA009-P05		杭	芯持丸木	カツラ
66	SA050-P01	底面	敷物（木片）	柾目板	スギ
67	SA050-P01	底面	敷物（木片）	柾目板	スギ
			敷物（樹皮）	―	樹皮
68	5B	VII層	自然立木１	―	ヤマグワ
69	4C・5C	VII層	自然立木２	―	トチノキ
70	6E	VII層	自然立木３	―	トチノキ
71	9B	VII層	自然立木４	―	トネリコ属
72	11C	VII層	自然立木５	―	フジキ属
73	11C	VII層	自然立木６	―	オニグルミ

第５表　樹種同定結果

・**スギ**（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２－４個。放射組織は単列、１－15細胞高。

・**オニグルミ**（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または２－３個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、１－４細胞幅、１－40細胞高。

・**ブナ属**（*Fagus*）ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に２－３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・**コナラ属コナラ亜属コナラ節**（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Prinus*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道

管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・**クリ**（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は２－３列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－15細胞高。

・**ヤマグワ**（*Morus australis* Poiret）クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では最初単独、後２－４個が複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－５細胞幅、１－50細胞高。

・**モクレン属**（*Magnolia*）モクレン科

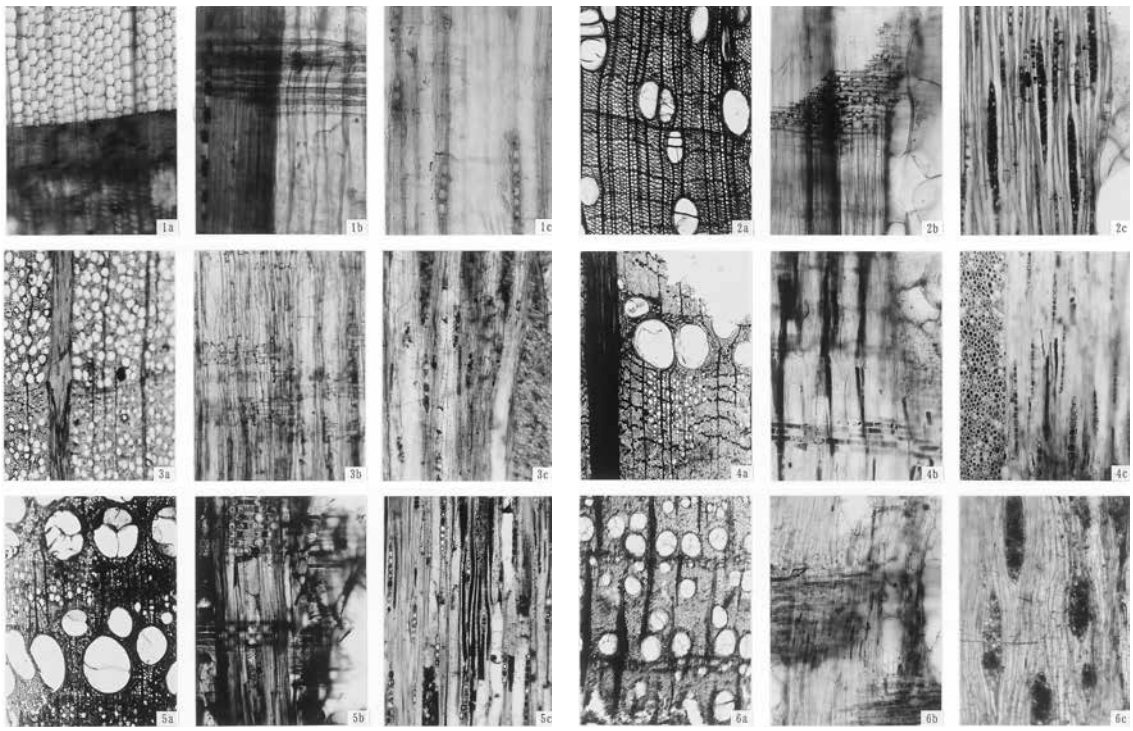
散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２－４個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－40細胞高。

・**カツラ**（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独、希に２個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は１－２細胞幅、１－30細胞高。

・**フジキ属**（*Cladrastis*）マメ科

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では最初単独または２－３個が放射方向に複合し、年輪界付近では塊状に複合して径を減少させながら配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔



1. スギ（SB049-P04；28）　2. オニグルミ（Ⅶ層自然立木６；73）　3. ブナ属（SB137-P11；58）
4. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SB002-P06；6）　5. クリ（SB048-P05；24）　6. ヤマグワ（SA010-P04；53）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：2-6a
200μm：1a・2-6b, c
100μm：1b, c

第17図　木材顕微鏡写真（1）

は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1－5細胞幅、1－60細胞高。

・**キハダ**（*Phellodendron amurense* Ruprecht）ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3－5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、多数が塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1－5細胞幅、1－30細胞高。

・**アカメガシワ**（*Mallotus japonicus*（Thunb.）Mueller-Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

環孔材で、孔圏部は3－5列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は単独または2－4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は単列、異性、1－30細胞高。

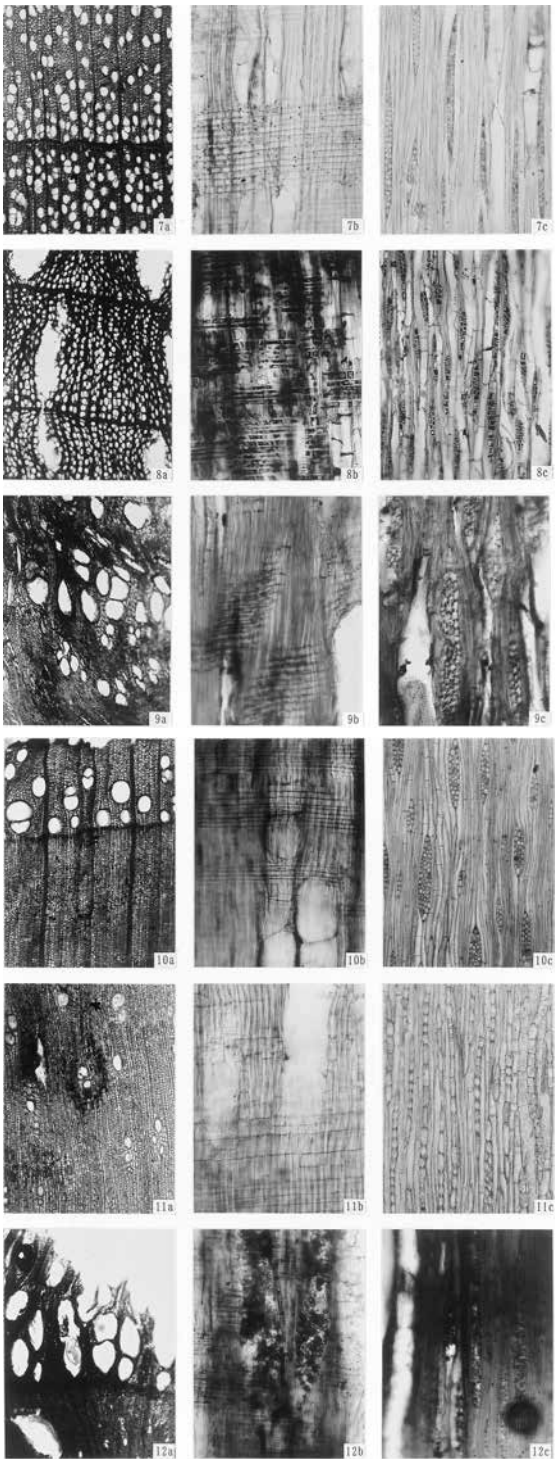
・**ヌルデ**（*Rhus javanica* L.）ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は3－5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、2－4個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1－3細胞幅、1－30細胞高。

・**カエデ属**（*Acer*）カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2－3個が主として放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1－5細胞幅、1－30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・**トチノキ**（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属



7. モクレン属（SB002-P02；2）
8. カツラ（SA009-P04；64）
9. フジキ属（Ⅶ層自然立木5；72）
10. キハダ（SB006-P04；17）
11. アカメガシワ（SB006-P06；19）
12. ヌルデ（SB002-P04；4）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第18図　木材顕微鏡写真（2）

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2－3個が主として放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1－15細胞高。

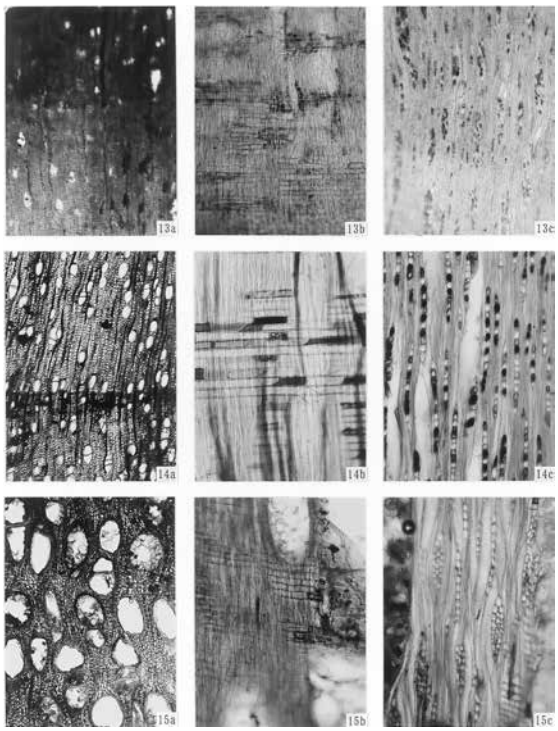
トチノキの特徴である放射組織の階層状配列が明瞭ではないが、板目でやや揃う傾向があること、道管

内壁にらせん肥厚が見られることからトチノキに同定した。

・**トネリコ属**（*Fraxinus*）モクセイ科

環孔材～散孔材で、道管は単独または２個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管壁は比較的厚壁となる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１－４細胞幅、１－30細胞高。

道管配列の特徴から根株部分の可能性がある。



13. カエデ属（SB006-P02；15）
14. トチノキ（Ⅶ層自然立木３；70）
15. トネリコ属（Ⅶ層自然立木４；71）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第19図　木材顕微鏡写真（3）

E　考　　察

1）古　植　生

下層の遺物包含層（Ⅶ層）及びその上位層（Ⅵ層）の花粉分析結果では、いずれの試料も花粉群集が類似する傾向を示した。これらの花粉群集のうち、比較的広域の植生を反映する木本類では、ブナ属が多産し、この他に、スギ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等が多く認められ、ツガ属、マツ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、コナラ属アカガシ亜属等を伴うといった特徴が認められた。多産したブナ属は、コナラ亜属等ともに冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、サワグルミ属やハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属等は、河畔や低湿地等の適湿地に林分を形成する種類であることから、当時の本地域では、西頸城丘陵等の後背丘陵や山地部にブナ属を主体とする落葉広葉樹林が分布し、部分的にツガ属等の針葉樹も生育しており、丘陵の谷部や周辺河川の河畔等の低湿地には、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属等が林分を形成し、低地部にはスギ属やアカガシ亜属等が生育していたと推測される。なお、Ⅶ層から検出された自然立木には、オニグルミやヤマグワ、フジキ属、トチノキ、トネリコ属が認められた。これらは沢沿いや河畔、林縁、斜面地等に生育する種類であり、花粉群集にもこれらを含む分類群が認められている。このことから、遺跡周辺にも河畔林や林縁に生育するような木本類が生育していたことが窺われる。

本地域における花粉分析結果を概観すると、三角田遺跡（上越市）の８世紀初頭～中世にかけて分析調査では、ブナ属とハンノキ属が多産することから同様の落葉広葉樹林や低湿地林の存在が指摘されている。なお、花粉群集の割合をみると、三角田遺跡ではハンノキ属がブナ属と同程度検出されている［パリノ・サーヴェイ株式会社2006］が、本遺跡ではブナ属が優占する結果が認められた。この点については、高田平野の中央付近に位置する三角田遺跡と、高田平野西端部で山地に近接する本遺跡の立地環境を反映していると考えられ、本遺跡では後背の山地・丘陵における植生を強く反映してことが推測される。

一方、草本類では、花粉ではイネ科が優占し、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属等が伴うといった傾向が認められた。植物珪酸体では、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属等が僅かに検出された。このうち、タケ亜科等のイネ科、カヤツリグサ科の一部、ヨモギ属等は、開けた明るい場所を好む人里植物を多く含む分類群であり、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、アブラナ科、

キク亜科等も同様の分類群であることから、本遺跡や遺跡周辺には、これらの草本類が生育していたと推測される。また、オモダカ属、ヨシ属、ミズアオイ属、ホシクサ属、イボクサ属等の水湿地生植物に由来する花粉・植物珪酸体も検出されたことから、周囲にはこれらの草本類が生育する水湿地も存在したと考えられる。

ところで、前述の三角田遺跡では、古代～中世の花粉群集の比較から、多産していたハンノキ属の減少と、草本類、特にイネ科が増加する傾向が認められ、湿地林の減少とイネ科が生育する開けた場所の増加が想定されている［パリノ・サーヴェイ株式会社2006］。本分析結果では、花粉群集に変化は認められなかったが、花粉群集における草本類の占める割合はやや高く、草本類では特にイネ科が多産した。この結果から、Ⅶ層堆積時の周囲はすでに開けた景観となっていたと推測されるが、上記したような変化の有無やその変遷については、さらに調査事例を蓄積し、検討することが望まれる。

微粒炭については、既存の研究によると、微粒炭量の変化から火入れ等の植生干渉が推測されており［安田，1987；松井・近藤1992］、微粒炭は人間活動と密接に関係しているとされている。本分析結果では、遺物包含層のⅦ層とその上位のⅥ層の微粒炭量は少なく、大きな変化は認められなかった。

なお、Ⅶ層上層（試料番号3）からは、栽培植物のイネ属の植物珪酸体が検出されたが植物珪酸体の保存状態は不良であり、イネ属の植物珪酸体含量も少なかった。そのため、本遺跡におけるイネの利用が示唆されるが、稲作の可能性については言及することはできない。

2）木材利用

木製品は、掘立柱建物跡の構築部材である柱材（柱根）及び礎盤（板）を主体とし、この他に板材、杭、敷物からなる。柱材の種類構成（第6表）では、12棟の掘立柱建物の柱材（44点）からは10種類の木材が認められた。検出された木材は、クリ（27点）が最も多く、次いでスギ（4点）、モクレン属（3点）、キハダ（3点）等であり、クリは、重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する種類であり、この他の種類も強度や耐朽性の高い種類が多い。一方、強度や保存性の低い種類（アカメガシワ）も認められたことから、利用される木材の材質は多様と言える。

1棟あたりの調査試料の多い掘立柱建物（SB002，003，006，048，049）では、SB002・SB006は種類数が多く雑多な傾向にありSB006からはクリは認められなかった。一方、SB003・SB048は全てクリで構成され、SB049はクリが多く利用される傾向を示した。またSB059では、試料数は3点と少ないが、全てクリであったことから、SB003・SB049と同様の傾向を示すと考えられる。

また、これらの種類構成と掘立柱建物の規模を比較すると、1間×1～2間となるSB002・SB006では多様な木材によって構成される一方、2間×2間の総柱のSB003、2間×3間のSB059、3間×3間の総柱のSB049、3間×5間のSB048ではクリが主体、あるいは多いといった種類構成を示した。これらの傾向から、掘立柱建物の規模によって、木材利用が異なることが推定される。なお、試料とした柱材には芯持丸木と割材が認められたが、本分析結果からは樹種と加工方法の関係は見出せなかった。

周辺地域では、三角田遺跡において古代の掘立柱建物の柱材を対象とした調査成果があり、オニグルミを主として、この他にカツラやトネリコ属の利用が認められている［パリノ・サーヴェイ株式会社2006］。本分析結果で認められたクリが多く利用される傾向や種類構成とは異なる結果であり、両遺跡の立地環境や植生の違いを反映している可能性がある。

礎盤（板）は、SB050・SB137から出土した10点と、SB049から出土した礎盤（板）と考えられる1

点からなり、３種類の木材が認められた。礎盤（板）の種類構成では、スギが多く認められ（9点）、この他に、ブナ属（SB137）、クリ（SB049）が各１点みであった。この結果から、礎盤（板）と柱材とでは利用される木材の種類構成が異なっていたことが指摘される。また、スギが多く認められたことを考慮すると、柱材の強度や耐久性のある木材の利用に対して、礎盤（板）では木理が通直で割裂性があり、板状の加工が容易なスギ材が重点的に利用されたと推定される。

器種名・遺構名	樹種	スギ	オニグルミ	ブナ属	コナラ節	クリ	ヤマグワ	モクレン属	カツラ	フジキ属	キハダ	アカメガシワ	ヌルデ	カエデ属	トチノキ	トネリコ属	樹皮	合計
柱根	SB002				1	2		2		1			1					7
	SB003					6												6
	SB006							1			3	1		1				6
	SB048					6												6
	SB049	3				7												10
	SB055								1									1
	SB056	1																1
	SB058					1												1
	SB059					3												3
	SB138				1													1
	SB143					1												1
	SB144					1												1
礎盤(板)	SB050	5																5
	SB137	4		1														5
礎盤(板)	SB049					1												1
敷物	SB050	2															1	3
板材	SB137	1																1
杭	SA009				2	3	1		3									9
自然立木			1				1			1					2	1		6
計		16	1	1	4	31	2	3	4	2	3	1	1	1	2	1	1	74

第６表　器種別種類構成

SB050－P01の底面から出土した敷物には、木片と樹皮が認められた。木片はいずれも柾目板状を呈し、樹種はスギであった。敷物の用途については不明であるが、礎盤（板）と同じスギであった点は注目される。

杭列（SA009）の杭材（9点）は、芯持丸木と割材（板目板・柾目板・角材・割材）からなり、４種類の木材が認められた。杭材の加工方法と種類構成に着目すると、芯持丸木（4点）にはカツラとヤマグワ、割材（5点）にはコナラ節とクリが認められ、加工方法によって樹種が異なる傾向がある。このうち、ヤマグワを除く種類は、柱材に認められており、ヤマグワは自然立木に認められた種類である。

引用文献

伊東隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 p.81-181　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 p.66-176　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 p.83-201　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 p.30-166　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 p.47-216　京都大学木質科学研究所

株式会社古環境研究所　2006　「第Ⅵ章 自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ 用言寺遺跡Ⅰ』p.53-62 新潟県教育委員会･財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

近藤錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48 p.46-64

島地　謙・伊東隆夫　1982　『図説木材組織』p.176　地球社

林　昭三　1991　『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

松井　健・近藤鳴雄　1992　『土の地理学－世界の土・日本の土－』p.122　朝倉書店

安田喜憲　1987　『文明は緑を食べる』p.227　読売新聞社

パリノ・サーヴェイ株式会社　2006　「第Ⅵ章 自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第154集 一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅲ 三角田遺跡』p.46-62　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）　2006　『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』p.70 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）　海青社　［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998　『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』p.122　伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社　［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

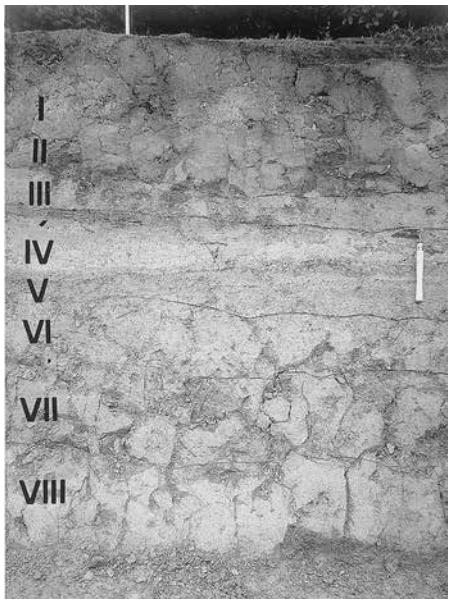
2　上越市岩ノ原遺跡のテフラ分析

A　はじめに

上越市岩ノ原遺跡において、主に次の２つの点の解明を目的として調査・分析をおこなった。①８世紀末葉～９世紀中頃の遺物包含層であるⅦ層中に含まれる火山灰様白色物質が、実際に火山灰であるかどうか。②焼山の平安時代の噴出物である高谷池火山灰層グループｃ（YK-KGc）の検出と、遺物包含層との層位関係の解明。なお、現地調査は、2006年８月29日と９月６日におこなった。細野 衛氏（東京自然史研究機構）・宮地直道氏（日本大学）・早田 勉氏（古環境研究所）には、白色斑紋の同定に関してご意見を賜った。記して深謝申しあげます。

B　地質断面に見られる地層の概要

岩ノ原遺跡の基本層序は、発掘担当者によって、上位より、Ⅰ層～Ⅷ層までの８層に区分されている（第20図）。このうち、Ⅰ層（10～20cm）は水田耕作土である灰褐色のシルト質土壌層、Ⅱ層（10～20cm）は褐灰色シルト質土壌層、Ⅲ層（０～20cm）は暗青灰色シルト質土壌層、Ⅳ層（10～20cm）は灰白色～青灰色の細粒～中粒砂層、Ⅴ層（０～30cm）は灰色の細粒～中粒砂とシルトの互層、Ⅵ層（10～30cm）は青灰色～緑灰色のシルト～粘土質土壌層、Ⅶ層（10～25cm）は暗灰色～青灰色のシルト～粘土質土壌層、Ⅷ層（下限不明で10cm以上）は青灰色粘土層である。Ⅳ層とⅤ層は、いずれも植物の小片を含むシルト～粘土の薄層を挟んで数層に細分される。この２層は、すぐ北側を流れる儀明川による洪水堆積層と考えられる。



第20図　5A22グリッドにおける地層断面

いずれの層にも、黄褐色～赤褐色を呈する酸化鉄の沈積によって形成された管状ないし点状の斑鉄［山崎1960］が認められる。なお、岩ノ原遺跡は、活断層である高田平野西縁断層に近接した地点に位置するが、発掘グリッドには噴砂・割れ目などの地震の痕跡は見出されていない。

C　Ⅶ層中に認められる灰白色斑紋

Ⅶ層は、発掘グリッド全域に分布し、８世紀末葉～９世紀中頃の遺物包含層となっている。シルト～粘土分に富んだ土壌層で、炭質物の小片（長さ1.5cm以上のものが多い）が、ほぼ全体に散在している。新鮮な断面では、青灰色～緑灰色を呈するが、空気に触れると多くの部分が鉄さび様の黄褐色～赤褐色に変化する。時間が経過した地質断面において、褐色と化したⅦ層は、他の地層と際だった差異を示す。

ところで、Ⅶ層の新鮮な断面には、特徴的な灰白色の斑紋が認められる（第21図）。斑紋をなすものは、球状に近い団塊・不定形の団塊・層状・縞状のものなど様々で、Ⅶ層全体に散在している。ただし、グリッドの南端部では、Ⅶ層は砂成分が多くなり、そこではこの種の斑紋は認められなくなる。団塊として産出するものは、径3cm以下のものが多い。輪郭ははっきりしているものから不鮮明なものまで様々であ

る。多くは柔らかいが、なかには硬い瘤様の芯を持っているものも認められる。空気に触れると、灰白色からやや黄色味をおびた灰色を経て、やがて淡黄褐色に変化する。また、乾燥すると石のように硬くなる。採取した白い部分を水中に放置すると、水酸化鉄様の黄褐色の物質に変わる。加熱すると酸化鉄様の黒褐色の物質に変わり、また、過酸化水素水と激しく反応して、褐色～赤褐色の物質に変わる。

第21図　Ⅶ層中の白色斑紋（矢印の先など）

この白色物質は、一見、火山灰堆積物が土壌と攪拌されたときと類似した産状を示す。また、Ⅶ層は、新潟焼山火山の平安時代の火山灰である高谷池火山灰層グループc（YK-KGc）［早津・新井1985；早津1994］の降下層準と近似した層準にあることから、当初、焼山の火山灰ではないかという疑念がもたれていた。そのため、今回、白色物質とその周辺の土壌を採取し、テフラ分析をおこなった（分析の方法は3項と同様）。その結果、白色物質・周辺の土壌とも、火山起源の鉱物やガラスはほとんど含まれていないことが判明した。したがって、この物質を火山灰の堆積物と同定することはできない。また、Ⅶ層中には、火山灰の降下層準を認めることができない。

低湿地の土壌中に産する白色の物質には、菱鉄鉱（Siderite）および藍鉄鉱（vivianite）の存在が知られている。岩佐［1959］および山崎・吉沢［1961］は、水田土壌中にみられる灰白色の斑紋・結核について報告し、これを菱鉄鉱（炭酸鉄，FeCO3）と同定している。菱鉄鉱は、炭酸鉄を主成分とする炭酸塩である。これらの報告にみられる菱鉄鉱の特徴・産状は、上記白色物質のそれらに一致し、上記物質は、炭酸鉄を主成分とする菱鉄鉱の可能性が大きいと考えられる。採取直後の菱鉄鉱は、水中で、容易に黄褐色の針鉄鉱に変わるといい［菅野1964］、この特徴も上記性質と一致する。

菅野［1964］によると、炭酸鉄の斑紋・結核は、湿田・半湿田の下層土中に多く、とくに黒泥質の沼沢性堆積物を母材とする地下型水稲土中に広く認められ、砂質土中には認められないという。山崎・吉沢［1961］は、菱鉄鉱の斑紋・結核の生成には、分解しやすい有機物の存在が関係しているとみられることを実験によって示した。堆積性菱鉄鉱の形成には、嫌気性バクテリアによる有機物腐敗が大きく関与しており、Eh=0～－0.6（Ehは酸化還元電位，小さいほど還元的）、pH=6～10という非常に限られた環境と鉄イオンの多いことが条件とされている［早川1998］。

藍鉄鉱は、鉄と燐酸が結合して形成される含水燐酸塩鉱物で、骨などを起源として生じることもあるため、低地の遺跡ではときどき認められるという。藍鉄鉱は、空気に触れ酸化すると、暗青色～暗緑色に変化するのが特徴であり［坂巻・中野1996］、黄褐色に変化する今回の物質とは異なるようである。

いずれにせよ、Ⅶ層中の白色物質は、鉄を主成分とした物質であることは間違いなく、菱鉄鉱である可能性が大きいといえる。確実な同定のためには、今後、元素分析によってその組成を明らかにする必要がある。

D　Ⅵ層の火山灰分析

岩ノ原遺跡の南東約2.5km地点にある上越市用言寺遺跡では、2006年発掘において焼山の高谷池火山灰層グループc（YK-KGc）が見い出されている。したがって、岩ノ原遺跡も、KGcの降灰域に含まれている可能性があるため、KGc検出の目的でテフラ分析をおこなった。上記２項のように、Ⅶ層はテフラを含まないことがすでに判明している。またⅤ層・Ⅳ層は、洪水性の砂層であり、テフラを含む可能性はほとんどない。そのため、対象とした地層は、年代と保存条件からKGcを含む可能性のあるⅥ層に限定した。

方法は、発掘グリッド北端の掘り込み断面において、Ⅵ層（層厚30cm）の土壌を垂直に5cm間隔で採取し（全部で6試料）、自然乾燥させた後、それぞれの20gに水を加えて十分攪拌し、粘土分を流し去った後、超音波洗浄機で約20分洗浄した。それらを自然乾燥させた後、実体顕微鏡下で構成粒子の同定と相対的量比の測定をおこなった。

分析の結果、6試料のどれからも有意の火山灰構成物質を検出することができなかった。KGcは、約1,000年前の平安時代の噴出物であり、887年と989年の噴火記録のどちらかあるいはその両方に対応する噴火の産物であると考えられている［早津1985，1994］。また、上越市用言寺遺跡において、KGcは、9世紀～11世紀の間に噴出したことが明らかになっている。したがって、KGcの降下層準は、Ⅶ層中かその直上位にあるはずである。岩ノ原遺跡がKGcの分布域から外れていたとは考えにくいので、降下したものの保存される条件になかったとみるのが妥当であろう。

E　ま　と　め

Ⅶ層中の灰白色物質とその周辺の土壌およびⅥ層のテフラ分析をおこない、以下の結果を得た。

① Ⅶ層中の灰白色物質は、火山灰の堆積物ではない。炭酸鉄を主成分とした菱鉄鉱である可能性が大きい。また、Ⅶ層の他の部分からも、火山灰は検出されなかった。

② 焼山のKGc火山灰を含む可能性のあるⅥ層のテフラ分析をおこなったが、火山灰の検出はできなかった。

引用文献

岩佐　安　1959　「水田土壌中の灰白色炭酸鉄結核について」『ペドロジスト』3 p.53-58

坂巻幸雄・中野聡志　1996　「藍鉄鉱」『新版地学事典』p.1372-1373　地学団体研究会編　平凡社

菅野一郎　1964　『日本の土壌型―その生成・性質・研究法―』p.469　農山漁村文化協会

早川浩司　1998　「菱鉄鉱ノジュール」『堆積学辞典』p.436　堆積学研究会編　朝倉書店

早津賢二　1994　「新潟焼山火山の活動と年代―歴史時代のマグマ噴火を中心として―」『地学雑誌』103（2）p.149-165

早津賢二・新井房夫　1985　「妙高火山群テフラ地域のテフラ層」『妙高火山群―その地質と活動史―』p.256-306　早津賢二編　第一法規出版

山崎欣多　1960　「水田土壌の生成論的分類に関する研究」『富山県農試報告』No.特1,1-105

山崎　伝・吉沢孝之　1961　「水田土壌中にみられる炭酸第一鉄（$FeCO_3$）の斑紋・結核について（第1報 炭酸第一鉄の斑紋・結核の産状、組成およびその生成について）」『北陸農業試験場報告 No.2』p.1-16

渡辺満久・堤　浩之・宮内崇裕・金　幸隆・藤本大介　2002　1：20,000都市圏活断層地図「高田」　国土地理院技術資料D・1-No.396.

第Ⅶ章　ま　と　め

これまで遺構と遺物について事実報告を中心に記述してきた。その結果、８世紀中葉に上越地方で成立した「東大寺領石井庄」関連の遺構・遺物であることが明らかになった。ここでは今一度整理し、若干の検討を加えまとめとする。

１　岩ノ原遺跡出土の文字資料について

Ａ　木　　簡

【釈文】

・「□　□　□　上　黒　米　」

〔十一月ヵ〕

・「□　□　［　　］　」

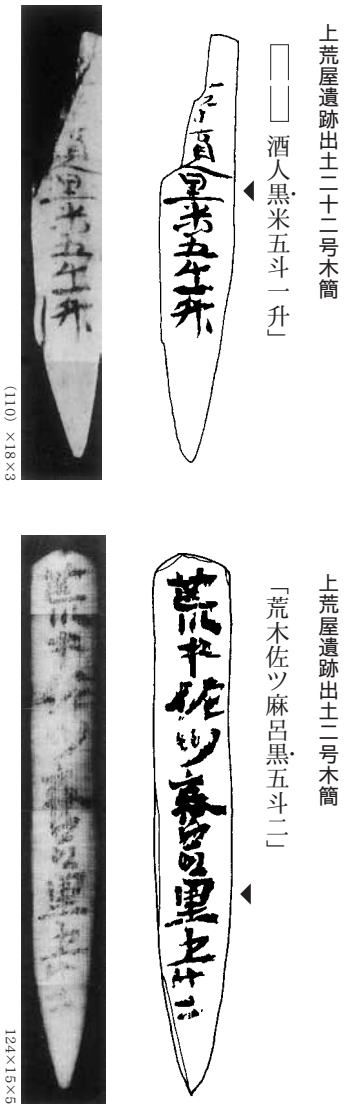
99×20×5　051型式

木簡は大きな欠損もなく、ほぼ完形で残存している。わずかながら欠損しているのが裏面の上端部で、約2mmほどが削り取られている。調整は両面に施されており、裏面は不明瞭だが、表面ではそれがよく確認される。調整に伴う刃物痕跡も表面の上端部付近にわずかに残っている。

墨痕の残りは両面ともにごく薄く、肉眼ではその有無をようやく確認できる程度で、文字の判読はむずかしい。デジタルカメラの赤外撮影でも判明できず、Hamamatu社製赤外装置によって【釈文】に提示したような判読が可能となった。「上黒米」の上には三文字分と思われる墨痕が確認できたが、字画の一部を見出したにすぎない。裏面では確実な判読にまで至った文字はない。

なお、本木簡はSB058を構成する柱穴P1の掘形埋土と思われる覆土中から出土している。この付近は掘立柱建物の建て替えが４回想定され、本調査区の中で最も多い。同じ遺構からほかに木簡や木簡状木製品が出土していないことから、一括の廃棄や廃棄遺構（ゴミ捨て穴）などへの投棄によるものとは考えがたい。

「黒米」の墨痕は一見すると「里米」に見える。「黒」の最後の筆画である墨点４つを省略した字体は、平城宮京や長岡京など宮都出土の木簡には数例しか確認されなかったが[1]、荘園関係の遺跡から出土



第22図　「黒（米）」木簡の字体例
（金沢市教委　1993・2000）

1）『平城宮木簡』や『長岡京木簡』などに掲載されている写真で字体を確認できたものに限られる。『平城宮木簡概報』などにも「黒米」を記した木簡が見出されるので、これらの中にも「里米」と記したものが含まれている可能性はある。

した木簡には少なからず見出される。例えば、東大寺領横江荘関連遺跡とされる金沢市上荒屋遺跡出土二十二号木簡「酒人黒米五斗一升」（第22図参照）がその典型的な例である［金沢市教委1993］。この他にも本木簡と同様に「黒米」の上に「上（タテマツル）」が記されている同三十五号木簡「山人上黒米五斗」木簡なども同様の例である[1]。上荒屋遺跡出土の米に関する木簡では「白米」を「白」、「黒米」を「黒」と省略している例も散見する。二号木簡「荒木佐ツ麻呂黒五斗二」（第22図参照）がその一例で、これらを参考にして、本木簡でも「黒」の４つの墨点がない「里」の字体が記されたものと判断した。一方、奈文研木簡データベースによれば「黒米」と記された木簡は、宮都や大宰府以外では上荒屋遺跡でしか検出されていない。本木簡で「黒米」が判読できたことは、遺跡の性格を考慮する一つの重要な指標といえる。

「上（タテマツル）」が記された荘園遺跡出土の木簡は、富山県入善町じょうべのま遺跡出土二号木簡「丈部吉稚丸上白米五斗十月七日」にも見出される。藤井一二氏はじょうべのま遺跡出土木簡を中心に考察した結果、「上」「某丸」の用字例が九世紀以降と指摘する［藤井一二1988］。出土遺物から９世紀第３四半期を中心とする時期と考えられる本木簡の時期と、藤井氏の見解は一致するものと見なされる。これらの遺跡から出土した付札木簡について吉岡康暢氏は、その書式が「貢進者＋（上）＋貢進物＋量目」であると指摘され、上荒屋遺跡で17点（051型式13、019型式3、059型式1）、じょうべのま遺跡で２点（051・033型式各1）、金沢市戸水大西遺跡で２点の出土を確認されている［松任市教委1996］。また吉岡氏は、上荒屋遺跡出土木簡が８世紀末～９世紀初頭に相当することや、これらの木簡に多い形状（頭頂部が鋭い三角形ないし圭頭で下端を尖らせる051型式）の木簡が長岡京の越前・近江・美濃からの春米貢進木簡として定数出土していることから、同様の性格の木簡であると考えられている。本木簡も051型式という形状であり、「上黒米」という記載内容などから同じく、荘園遺跡で出土する春米関係の貢進付札の可能性が考えられる。

吉岡氏が指摘する書式に従えば、本木簡の表面の上から３文字分の墨痕には人名が記されていた可能性が推測される。こうした貢進者の人名に関して藤井氏は、じょうべのま遺跡の「丈部吉稚丸」を庄長（庄預）の可能性を含めた在地の有力農民と考定している。一方、吉岡氏はそれを踏まえつつも、上荒屋遺跡出土木簡の中に貢進者が14名も見られて藤井氏の見解では十分とは考えがたく、貢進者（木簡）の人名が墨書土器にも見出されるので、有力農民の他に、それに仲介させて買田契約を結ぶ直接耕作者たる百姓も入れるべきとされている。貢進者と墨書土器の関係を見出す具体例として氏は、三十五号木簡などに見える「山人」が墨書土器の「山人」と対応し、墨書土器の年代が９世紀前半ないし中葉前後で木簡の年代と整合することと合わせて述べている。こうした指摘を参考とするならば、本木簡も具体的な人名が不明なものの、本遺跡出土の墨書土器No.83に人名と思われるものが含まれていることも考慮した上で、人名の可能性が推察される。

裏面の判読については、二案が想定される。一つは第３文字目の残った墨痕が「广（マダレ）」として見取れるので、荘園遺跡から出土したことも考慮して、これを「庄」と判読する。この場合、第１文字目を「土」と読み「土□庄」と見なす。上述のように「土」の上方がわずかながら削られており、ここに墨痕があったとすれば「王」などの可能性も考えられる。しかし、そこまで上端部一杯に詰めて書く必要性が見出されないことから、この削りは墨書以前の木簡の成形に伴うものと推測し、元々墨痕はないものと判断した。このように「土□庄」とすると、越後国内の東大寺領荘園「土井荘」との関係が想起される。こ

1）報告書に掲載されている赤外写真が不鮮明なため図示してはいない。

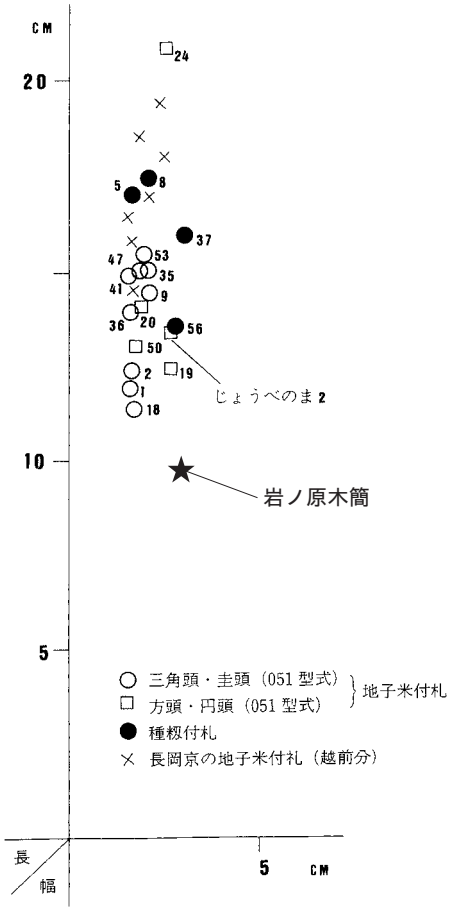
の荘園は越後国内の東大寺領初期荘園に関する史料の中で石井荘と一緒に散見する荘園であり、一例として「東大寺封戸荘園并寺用帳」や「東大寺領諸国荘家田地目録」などの史料が上げられる。木簡の裏面に荘園の名称を記したものとしては、金沢市戸水大西遺跡出土木簡に「飛駄満地万呂五斗/中庄〈十四条七里/廿九［　］〉」がある［出越茂和1994］。こうした観点から第２文字目の「井」に相当する部分に縦画２本の墨痕が見出されているので、その横画に当たる墨痕を詳細に探したが見出されなかった。戸水大西遺跡出土木簡は出土地点に所在したと思われる荘園か施設名を記したと考えられるのに対し、石井荘と推定される本遺跡で「土井庄」の木簡が出土する可能性も低いと推測され、「土□庄」とは判読しがたいと考えられる。

もう一つが【釈文】にも記したように、月日の記載を想定する理解である。その根拠としては、上述した「上（タテマツル）」書式の付札木簡の裏面に月日を記載する例が見出されるためである。具体的には上荒屋遺跡二十四号木簡「八作万呂五斗/二月十五日□」などである。ほかに、じょうべのま遺跡二号木簡なども月日が記され類例といえる。この観点から墨痕を勘案すると、「土」と思われる文字は一文字分ではなく、「十一」という二文字が連続して表記されたと考えられ、つづく墨痕も横画の部分が明瞭ではないが「月」と推測される。それ以下の日付の部分については具体的な日数を想定できなかったが、「廿□日」などが考えられるのかもしれない。「土□庄」と解するよりも、「月」に相当する部分の判読が適当と考えられるので【釈文】としてこちらの判読を提示した。

裏面に関してもう一つ注目されるのが下端部に近い墨痕の中に、左側面にかかりそこで墨痕が途切れているものが見出される点である。付札木簡へ転用以前の木簡の墨痕が残ってしまったのか、付札として以前に使用した時の墨痕がそのまま削られずに残ったのか、詳細は不明である。

以上のように「上黒米」という記載内容の他に、裏面に月日が記載された可能性など、荘園遺跡で出土する木簡と近似する点が見出されることから、この木簡の性格は黒米に付けられた春米貢進付札と考えられる。ただし、春米付札木簡の類例と比較した時、相違する点も見出される。その一つが法量、特に長さの問題である。吉岡氏が春米貢進付札木簡の法量について、長さと幅の関係をまとめたのが第23図である。この中に本木簡の法量を図示すると（図中★印）、長さの点では若干短いことが明らかである。

その長さと関連してか、書式の上で量目が記載されていない点がもう一つの問題といえる。 白米黒米の如何に関わらず、春米付札木簡には五斗を基準とする量目が記載されている[1]。ところが、本木簡では「黒米」以下には墨痕が認められず、量目が記載された可能性は考えがたい。「五斗」前後というほぼ決まった量目を記すために、略した可能性も想定



第23図　春米付札木簡の法量グラフ
（松任市教委1996）

1）黒米の場合には五斗でなく、それよりも多い五斗一升～二升程度が記されている場合もある。

されるが、このような類例は見出せなかった。法量が近似し時期的に近い胎内市（旧中条町）蔵ノ坪遺跡出土の米貢進木簡では「五斗」という量目が記載されているのを考慮すると、本木簡に量目が記載されていない理由は見出せず不明である。これらの問題点については、出土木簡が一点だけであることからこれ以上の言及はむずかしく後考としたい。

最後に、文字が残っていないが、同じような形状で元々は付札であったと思われる木簡状木製品１点が本木簡の近くで出土している。吉岡氏は、こうした付札木簡は米の京進などにともない付け替えられ廃棄されたと考えられている。柱穴埋土内から出土した本木簡の廃棄までのルートが問題となるが、木簡状木製品を含めても点数が少なく不明な点も多いため、当面、不要となって廃棄されていたものが、建て替えに伴い偶発的に入り込んだものと解し、意図的な投棄とすることは避けておきたい。

B　墨 書 土 器

文字の一部と思われるものも含めて全部で100点が出土した。須恵器に69点、土師器に31点が記されている。器種別にみると、杯類が71点、杯蓋が18点、その他壷類に１点である。東大寺領初期荘園石井荘を決定した「石井庄」や「石庄」「石」などこの荘園に関わるものが51点と圧倒的に多く、何らかの一文字だけを書いた墨書土器は19点と少ない。これらの土器の年代は、９世紀第２四半期～第３四半期を中心とする時期に相当する。出土地点はSB058の周辺に主に集中するが、一部SB051付近にも、集中が見られる（図版37参照）。こうした墨書土器の集中状況は、墨書に深く関係する転用硯の集中具合とも一致する。これも参考にすれば土器への墨書自体もSB058やSB051周辺で行われ、墨書土器もここで使用された可能性が推測される。ただし、廃棄に至った理由は不明である。墨書土器はほとんどが遺物包含層の第Ⅶ層からの出土となっている。しかしながら、遺構確認のためその検出確認面をやや掘り下げたこともあり、一部は本来なら遺構内遺物であった可能性も推測される。以下、石井荘関係のものと、単なる一文字の墨書土器に分けて記述する。

1）石井荘関係墨書土器

明らかに「石井庄」と墨書されたものだけでなく、「石庄」や「石」「庄」と判読されたものも含める。それらも石井荘関係とする根拠は、金沢市藤江Ｂ遺跡で同様の出土例が見出せるからである。藤江Ｂ遺跡では、「石田庄」と書かれた墨書土器のほかに、それを略したと見られる「石田」の墨書土器が出土し、「石」と記した墨書土器も採取されている［金沢市1999］。これを参考とすれば、本遺跡の「石庄」や「石」も「石井庄」を省略して墨書されたと見なすことができよう。

可能性の高いものも含めて数えると、三文字の「石井庄」と確認したのは７点、「石井」が５点、「石庄」は18点、「石」一文字としたものは14点、「庄」一文字と見なしたものは７点である。

「石井庄」と判読した７点の中でも、No.197だけが須恵器の体部外面に横位で墨書されている。No.92の「庄」の部分は墨痕が不明瞭であるが、本遺跡の墨書土器で三文字目として推測されるのは「庄」以外考えがたいので「石井庄」と判読した。No.5やNo.140に関しては特に問題ないと思われるが、墨痕の欠損が多いNo.173・No.197・No.199については、以下のように解し判読した。No.197は「石」の最終画と思われる墨痕が残っていること、No.173は「井」の下に「庄」の上半分が残り「石」のハライと思われる墨痕が見出せたためである。No.199は底部外面の墨痕の一部が横一画の墨線として体部外面にかかっている。これを「庄」の最終画とみなし、「石」の文字の大きさを参考として概ねの文字の割付

を考えると三文字分を推測するのが適当であり、「石」の下にわずかに残る縦画の墨痕を「井」の一部と見なせることから、「石井庄」と推測した。

「石井」と確実に判読できるものはNo.69だけである。No.198とNo.270は「石」の下に残る墨痕が縦画で、「庄」と判読することはむずかしいため「石井」とした。No.4は「石」の下に残る墨痕が横画二条のため、後述する「庄」の横画が延びたこの遺跡独特の「庄」の字の一部とも考えられるが、マダレのハライに当たる墨痕が確認できなかったので、「井」とした。No.69以外については、「井」と思われる墨痕以下が欠損しているので、厳密にいえば「石井庄」の可能性も否定できない。

「石庄」は石井荘関係の墨書土器の中では最も点数が多い。須恵器に墨書されたものが9点、土師器に記されたものが9点で、半分ずつの割合である。特徴の一つとしていえるのは、No.91の杯蓋を除くとすべてが底部外面に記されている。墨痕はNo.151・No.266・No.267が大変明瞭に残っているが、その他はすでに墨痕の薄れているものが多く、明瞭な墨痕の字体を参考として判読した。特に二文字目の「庄」は、非常に薄い墨痕の中に以下の要素のいずれかが見出されたものについて「庄」と判断した。①マダレのハライに相当する墨痕が見出せること。②本遺跡の「庄」の字体の特徴の一つとしてツクリ「土」の最初の横画が非常に長く、マダレのハライを横切って左側に突出する傾向があるので、これと思われる墨痕が確認できること。③「庄」のツクリを「ム」と記す傾向も一方で見出せるので、これと思われる墨痕が確認できること。以上の3点のいずれかが確認されることを基準とした。

「石」と判読した文字の下にわずかに墨痕が確認できるだけのNo.94やNo.263・No.273は、二文字以上であったことは確実だが、明確に「石庄」と判読できる根拠はない。だが、No.94は同じ杯蓋外面の墨書でも、「石井」と墨書されたNo.69とは墨書方向が異なり、むしろ、No.91と同じく中央のツマミ付近にロクロの回転方向に準じて墨書されていたので、「石庄」とした。No.263は「石」以下の部分が土器表面の剥落などにより非常に荒れており、土器に付着した汚れなどと区別しづらく、墨痕か否かも疑わしい。そうした中でも墨がのっている部分だけは高く残り劣化を免れたと推測されるので墨痕の残存を認めた。その上で土師器の体部外面に横位で墨書されているのは「石庄」か「石」に限られるため、「石庄」の可能性を示した。ただ、この土器も底部外面に「×」のヘラ書が残っているが、同じものはNo.200やNo.201など「石」が記されたものに見出される。このことを重視すればNo.263は「石」一文字の可能性も残っている。

「石」一文字が墨書されていたのは13点である。これらの中にはNo.95やNo.279のように、明らかに「石」の下には墨痕が確認されず、当初からこれ一文字が墨書されたものもある。一方で、No.274やNo.275のように「石」の下が欠損したため「石」だけが残り、本来は以下に文字が存在した可能性が想定されるものもある。「石」の判読基準の一つに、「口」にあたる墨痕の有無を基準とした。他方、これに分類した墨書土器の墨痕の残存具合に関しては概ね残りがよい。「石」一文字の墨書土器の中でもNo.145・No.200・No.201は、特徴的な字体で書かれ、管見の限りでは同様の字体例を見出せていない。No.200の筆跡を丹念に追っていくと、特に「口」の部分が筆順を無視して大きくくずされていると見なされる。このように筆跡・筆順を主たる根拠として「石」が適当と判断した[1)]。No.200を「石」と判読できれば、墨痕が若干薄いものの筆順が同じなので、No.145も同様に「石」と判読される。さらにこう

1）「石」と確定することに関しては、これらの写真を、舘野和己氏（奈良女子大学）や渡辺晃宏・山本崇・馬場基・浅野啓介氏（奈良文化財研究所）などにも見てもらい、同じく「石」と判読され、同意を得られたこともある。

した観点から、No.201も若干「口」の部分のくずしがぎこちないが、筆順がほぼ同じくなるので「石」と判断した。ただ、この墨書土器については最終画が大きく円を描くように長くのばされるという特徴もある。そのため、長く延ばされた部分を「石」以外の文字と見なし、もう一文字分が記されている可能性を指摘する見解もある[1)]。二文字目を否定する明瞭な根拠を持ち合わせないのでその可能性を消し去ることはできないが、同じ東大寺領初期荘園遺跡である上荒屋遺跡出土の「東庄」墨書土器には「庄」の最後の横画を非常に長く下方に延長する字体が多々見られる［金沢市教委1993］。後述するNo.7のように本遺跡でも「庄」と思われる墨書土器の中に同じく最終画を延ばしたと思われる字体が見出せるので、No.201についても別の一文字と解するより、最後の横画が筆勢などによって長く延ばされたと解釈した[2)]。

このほかにもNo.177は「口」の部分を欠損しているものの、「石」の可能性が高い。No.280は、土器の割れ口部分に「口」の一部かと思われる縦画の墨痕を見出せたので「石」と判読した。No.287は、残っている墨痕だけでは字体を確定することはむずかしいが、土師器の体部外面に横位で記されていることは明らかである。土師器の体部外面に横位で墨書されているものは、No.270やNo.271・No.272など石井荘関係の墨書土器で「石」が墨書される可能性が高いこと、この墨書土器の墨痕は後述する字体分類の（1）に近く、「石」の最終画を斜め右下に下げ止める字体と見なせること。さらには、残った墨痕の上には別の文字の墨痕を見出しがたく、それより上には文字が記された可能性が少ないことから、「石」一文字と判断した。

「庄」と判読したものは、No.7を除きほとんどが、その文字の上の部分の墨痕を喪失しているので、元々、「庄」一文字だけで記されたとは断定しがたい。むしろ、「石井庄」や「石庄」と墨書されていたものの一部が残ったと思われる。No.209やNo.281・No.282の判読は特に問題ないと思われるが、No.178に関しては「庄」の下半分が、No.204に関しては左半分が残ったと見なした。No.7については、上述したように上荒屋遺跡で見られる「庄」と同様に最終画が下方に延ばされたものと思われる。この墨書土器だけが何故、このような字体で記されたのかという考察は後考に期したい。

最後に石井荘関係の墨書土器に関連する類例として、十日町市柳木田遺跡出土の「石井」墨書土器がある［十日町市史編さん委員会1996］。点数は少ないが、本遺跡出土の墨書土器「石井」の類例であり、「宮処」と記された墨書土器1点とともに出土している。これとの関係についても、今後の課題としておきたい。

2）一文字墨書土器

「石」や「庄」と書かれたものを除いて、漢字一文字が墨書された土器は19点である。出土点数はどの文字も1～2点で、いずれかに集中する傾向も見出せない。また、上荒屋遺跡では一文字の墨書土器が「東庄」段階につづく時期に後発して出現すると報告されているが［金沢市1993］、本遺跡では墨書土器全体がほぼ同時期なので時期差と考えることもむつかしい。「庄」など荘園を示唆する墨書土器と単なる一文字墨書土器が一緒に出土した事例として、県内では上越市（旧頸城村）榎井A遺跡［頸城村教委1998］などが見出される。

最初に、文字内容ごとに大別すると以下のように分類される。

1）写真を見て頂いた、奈文研の方々からはこうした指摘もあった。

2）仮に二文字目が記されたとしても、字画数が多い文字とは考えがたいので、漢数字のような簡単な文字と考えられる。確かに、本遺跡の墨書土器には漢数字も見出されるが、これらはすべて単独の一文字で墨書されている。他方「石」以下には「庄」以外に続く文字が本遺跡では見出せないので、こうした観点からも、「石」一文字が適当と考えた。

（イ）数字を記した墨書土器…「六」「百」「万」

（ロ）人名の一部を記した可能性があるもの…「公」「□□〔足ヵ〕」

（ハ）職名を記した墨書土器…「介」「卿もしくは郷」「丁」

（ニ）その他…「人」「文」「中」「主」

「万」については、周知のように「万呂」の「万」が記された可能性があり、人名の一部が記されたとも解されるが、一応漢数字として分類した。

「公」を人名の一部とした根拠としては、上越市（旧板倉町）五反田遺跡出土の墨書土器に「兼公」という墨書土器が見出されるためである。五反田遺跡の報告書で、筆者はこれを人名として判読したが［新潟県教委2005］、このほかにも上荒屋遺跡三十六号木簡には「浄公上白米五斗」と記されている［金沢市教委1993］。64ページでも報告したように吉岡氏の見解に従えば、「浄公」は人名と解されて「公」を冠した人名が見出されるので、墨書土器の「公」を人名の一部として推測した。なお、県内では他に長岡市（旧和島村）八幡林遺跡出土の墨書土器にも「公」が見られる［小林ほか2004］。

職名とした中のNo.16「介」は特段判読に問題ないと思われるが、この文字の近くにはもう一つ墨痕が見出された。これに関しては「庄」などの可能性を考えたが、墨痕がうすい上に、文字とする十分な根拠が見出されなかったため、「介」墨書時の運筆・筆勢などにより墨が単に付いただけとみなした。No.179は「介」の下半が残ったと考えられる。No.98も墨痕がうすく「郷」か「卿」か判断できなかった。「介」の墨書土器を重視すれば「卿」の可能性が考えられるが、管見の限りではこれを書いた墨書土器は見出しえていない。一方で荘園関係の文書類には所在地の郷名などが記載されることが少なくない。そうした点では「郷」の方が墨書される可能性が高いが、決定できる材料を見出し得なかったので、両方の可能性を示すに止めておく。No.99「丁」は縦画の頂部が横画より突き出て記されている。「丁」の墨書土器の県内での出土例は新潟市小犬丸遺跡と柏崎市箕輪遺跡・下沖北遺跡で各１点ずつ出土している［小林ほか2004］。これをNo.96の「田」墨書土器などと一緒に考えるならば、横江庄遺跡でも「田」と「丁」が一緒に出土しており、本章Ａの米に関する木簡が出土していることもあわせて考慮すれば、“田丁”など耕作民との関係が推測される。

No.196「文」の墨書土器は管見の限りでは県内では類例を見出せず、県外でも千葉県白幡前遺跡や村上込ノ内遺跡、長野市原町遺跡などで見出されただけで類例が少ない。No.70「中」に関しては、五反田遺跡に１点類例が見出させる。なお、No.210の「田」もその近くに「田」以外の墨痕が確認される。これもNo.16「介」同様に文字の可能性を考慮したが、適当な文字がないため墨痕が偶発的に着いたものと見なした。No.146については類例が検索できなかったものの、「山」と「下」の合字と判読した。No.195の「下」とともにもう一文字墨書された「木」は非常に墨痕がうすく、写真では明瞭にそれを表せていないが、肉眼観察では何とか墨痕を確認できる。ただ、「下」と比較すると「木」は別筆の可能性も考えられる。

3）石井荘関係墨書土器にみる手の数

上荒屋遺跡出土の墨書土器では、数量的な豊富さを背景に字体の違いから筆（手）の数に関する検討が行われている。荘園遺跡である本遺跡も一定数の墨書土器に恵まれ、若干ながら、字体の相違が見られるようなので、その点を明示しておきたい。

上荒屋遺跡では「東庄」墨書土器について、「東」と「庄」のそれぞれの字体の分類にもとづき６人程度の書き手を推測している。本遺跡の場合「石」と「庄」の点数が多く、これらを対象とすべきと思われ

るが、画数や字体に特徴の少ない「石」よりも「庄」の方が特徴が明瞭に現れていると思われるので、「庄」の字体の相違を中心に分類し、「石」でそれを補完した（番号は墨書土器のNo.を示す）。

（1）「庄」のツクリ「土」の横画が、マダレのハライより左側に大きく突き出る。

「石」は「口」の最終画が右斜め下方向に止める。

141・143・144・151・174

（95・276・279は「石」のみ、209・282は「庄」一文字だけだが、この可能性が高い）

（2）「庄」の「土」の横画が、マダレのハライの右側に収まる。

「石」の「口」では最終画が右斜め上方向に撥ねる。

264・265・266・274・281

（274は「石」だけだが、この分類の可能性が高い）

（3）「石」の第１画目をハネとして書き、「口」を記すのに３画で記さず筆を廻して略す。

145・200・201

（3）には「庄」の字がなく「石」だけでの分類であるが、それだけでも十分にほかと異なると考えられるため分別・分類した。（1）と（2）の相違は「庄」を基本として分類したが、「石」の最終画でも相違が見取れる。この「石」だけに注目してさらに細分する可能性も考えられた。しかしながら、「石」の字体では相違があると見なされるものの、「庄」では相違を明示できず同筆の可能性が想定されるものがある。例えば（1）の中では、No.151とNo.141・No.144を比較すると、前者は「石」の最終画を右斜め下方向に止めるのに対し、後者の「石」は特段書きクセのない標準的な字体であり明らかに異なる。だが、「庄」では両者とも「土」に代わり「ム」を記し、その筆画に大きな相違を認めることはむつかしい。（2）でも同様のことが指摘される。具体的には、No.264は右斜め上に撥ねるが、No.266はハネのない標準的な字体で「石」だけを見ると違う字体と見なされる可能性がある。しかし、「庄」を見た場合には、両者ともマダレのハライの左側に横画が突き出すことはなく、「土」を「ム」と記した可能性が見出せる点では同筆とみなすべきと思われる[1]。以上のような例から、「石」の最終画の相違で細分することは避けた。No.151やNo.264のように、各々の分類に見られる独特の「石」の字体が生じる要因については明確な根拠は見出していない。おそらく、「石」のように字画数が少なく簡易な文字の場合、荘園の「所」のような管理施設で日常的に文字を筆記する識字層ならば、標準的な字体の「石」を書き記すことも、そうでない個性的な字体を記すことも両方可能であったのではないかと推測される[2]。

以上のような分類に立脚すれば、少なくとも石井庄には２～３人の筆記者が存在したことが明らかである。これらの筆記者が各々時期差をもって所在していた可能性もあるが、土器の年代が９世紀前半ごろの一定期間に限定されていることや、遺構の時期差が判明していないことから別々に存在したと解することは避けておきたい。ほかの何らかの要因によりこの２～３人が別々にいた可能性もあるが、それが具体的に想定できないので、当面、同時にこの位の人数の筆記者が存在したと報告しておく。上荒屋遺跡では６人前後とされているのと比較すると、約半数しか確認できなかったこととなる。

1）（2）の場合、No.266などでは「石」の第１画目の横画の最後をしっかり止めている様相が見出され、No.264でも同様の様相が看取できることも、同筆と見なした一因である。

2）こうしたことは、われわれが日常的にも行っていることである。ある文字を楷書で念入りに筆記することもあれば、必要に応じて行書のような略字・崩し字を筆記する場合もある。筆記者の差異というより状況の相違などによるものとも考えられる。よって筆の違いを示す要件とはなりがたいと考えられ、手の数を示す要件とはしなかった。

もう一つ注目されるのが、No.151の二文字の「石庄」とNo.95の一文字の「石」は（No.276・279も含まれる可能性がある）、同筆の可能性が高いことである。こうした事例を見ると、「石庄」という二文字の墨書土器と「石」一文字だけのものは同一の筆記者により書かれたと見なされ、何らかの事情により二文字で「石庄」と記す場合と一文字で「石」しか記さない場合があったと解される。

C　刻書・ヘラ書

須恵器の底部外面や体部外面に「×」とヘラ書されたものが5点あるが、これらは窯記号の一種と見なされるので特に言及しない。唯一、文字が記されたものとしては、No.65の須恵器杯蓋に「刀」とヘラ書されたものがある。文字資料の中でこの土器だけは時期が古く8世紀代のものである。このヘラ書に関しては、同じ文字のヘラ書が上越市内の他の遺跡で出土しており注目される。それは上越市縄手遺跡出土の須恵器杯蓋と有台杯の底部にヘラ書されたものである［上越市史編さん委員会2003］[1)]。須恵器有台杯のヘラ書は実測図が『上越市史』に掲載されているが、杯蓋のヘラ書については、外面であると記載されているだけである［上越市史編さん委員会2002］。杯蓋に関しては、具体的に記された部位や書かれている方向、書体などについて、写真や実測図がないので、有台杯のヘラ書も含めたNo.65との比較検討や関連性については、後考としたい。

2　出土土器の編年的位置

岩ノ原遺跡の発掘調査では、古墳時代～近世までの土器・陶磁器が出土したが、大多数を占めるのが古代の土師器・須恵器であった。8世紀末葉～9世紀第3四半期までのものが継続して見られる。

出土状況を見ると、調査区北西部の遺構集中区と南東部の遺構集中区より出土した土器の年代には大まかな違いが見受けられる。しかしその中における良好な遺構一括資料を確認するまでには至らなかった。

ここでは、型式変化の顕著な土師器・須恵器の食膳具を時期別ごとに概観する。器種ごとの形態変化を追うために、有台杯・土師器無台椀については器高指数（器高／口径×100）を、無台杯については底径指数（底径／口径×100）を用いて検討を行うものとする。

1期（笹沢編年Ⅳ－2期・8世紀末葉［笹澤2003］）

須恵器杯蓋、有台杯、無台杯がある。出土数は少ない。いずれも北西部の遺構集中区でのみ確認される。杯蓋は法量Ⅱ（66）、Ⅲ（71）がある。比較的厚手の作りで、摘みは非常に低い擬宝珠形を呈する。器形は頂部の径が大きく平坦であり、器高が低いという北陸系の技法が見られる。胎土からいずれも高田平野東側に位置する末野窯産と考えられる[2)]。

有台杯は細別ＡⅡ（101）がある。比較的厚手の作りで、高台が内端接地する。胎土から高田平野西側に位置する向橋窯産のものと考えられる。器高指数は25である。

無台杯は細別ＡⅠ（150）、ＡⅡ（152～156）がある。比較的厚手の作りで、胎土からＡⅠは向橋窯産、

1）『上越市史』資料編2考古では「刻書」とされているが、焼成前にヘラなどで書かれたものをヘラ書、焼成後に堅い金属類で刻まれたものを刻書とするのが近年では一般的と思われる。それは、『上越市史』資料編3古代・中世では、これらをヘラ書としていることで明らかである。よって、本報告ではヘラ書とした。

2）須恵器の産地推定は笹澤正史氏にご教示を得た。

ＡⅡは末野窯産と考えられる。底径指数は60前後（154）、70前後（150・155）、80前後（152・153・156）にほぼ三分される。

2期（笹沢編年Ⅴ－1期・9世紀第1四半期）

須恵器杯蓋、有台杯、無台杯がある。前段階と同様に出土数は少ない。杯蓋、有台杯は南東部の遺構集中区でのみ確認され、無台杯は北西部の遺構集中区でのみ確認された。

杯蓋は法量Ⅰ（64）、Ⅱ（67）、Ⅲ（50・73）がある。法量Ⅲは前段階と同様に北陸系の技法で製作されたものと考えられ、より小型化している。法量Ⅱは器形が山笠状を呈し、器高が高く、東海系の技法で製作されたものと考えられる。胎土から法量Ⅰ・Ⅱは高田平野西側に位置する滝寺窯産、法量Ⅲは末野窯産と考えられる。

有台杯は細別ＡⅡ（102）、ＢⅡ（26・127）がある。いずれも高台は外端接地する。ＡⅡは底部から体部への立ち上がりに丸みがある。底部切り離しがヘラ切りで行われていることから、北陸系の技法で製作されたものと考えられる。ＢⅡはいわゆる深身の有台杯で、高田平野ではこの時期から増加するものと考えられている［笹沢2003］。胎土からいずれも滝寺窯産と考えられる。器高指数はＡⅡが30、ＢⅡが40前後（127）、50前後（26）に二分される。

無台杯は細別ＡⅡ（157～160）がある。前段階のものと比較して大きな違いは見られず、やや小型化する傾向が認められる。胎土から158・160は末野窯産と考えられる。底径指数は70前後（157・158）、80前後（159・160）に二分される。

3期（笹沢編年Ⅴ－2期・9世紀第2四半期）

須恵器杯蓋、有台杯、無台杯に加えて、土師器無台椀が見られるようになる。無台杯もこの段階から細別Ｂ・Ｃが確認される。出土数も前段階よりも多くなる。有台杯、無台杯は北西部及び南東部の遺構集中区で確認される一方、杯蓋、無台椀は南東部の遺構集中区でのみ確認される。

杯蓋は法量Ⅲ（75・79）がある。いずれも東海系の技法で製作されたものと考えられ、北陸系の技法で製作されたものは確認できない。前段階のものと比較して、より小型化している。

有台杯は細別ＡⅢ（44・103～107・109～111・113～114）、ＡⅣ（119～120・122）がある。高台は内端接地するもの（44・103・109～111・113～114）と外端接地するもの（104～107・119～120・122）がある。前段階のものと比較して器壁が薄く、小型化している。胎土から122は末野窯産で、それ以外は全て滝寺窯産と考えられる。器高指数はＡⅢが28～36まで連続して見られ、ＡⅣが30前後（119）、40前後（120・122）に二分される。

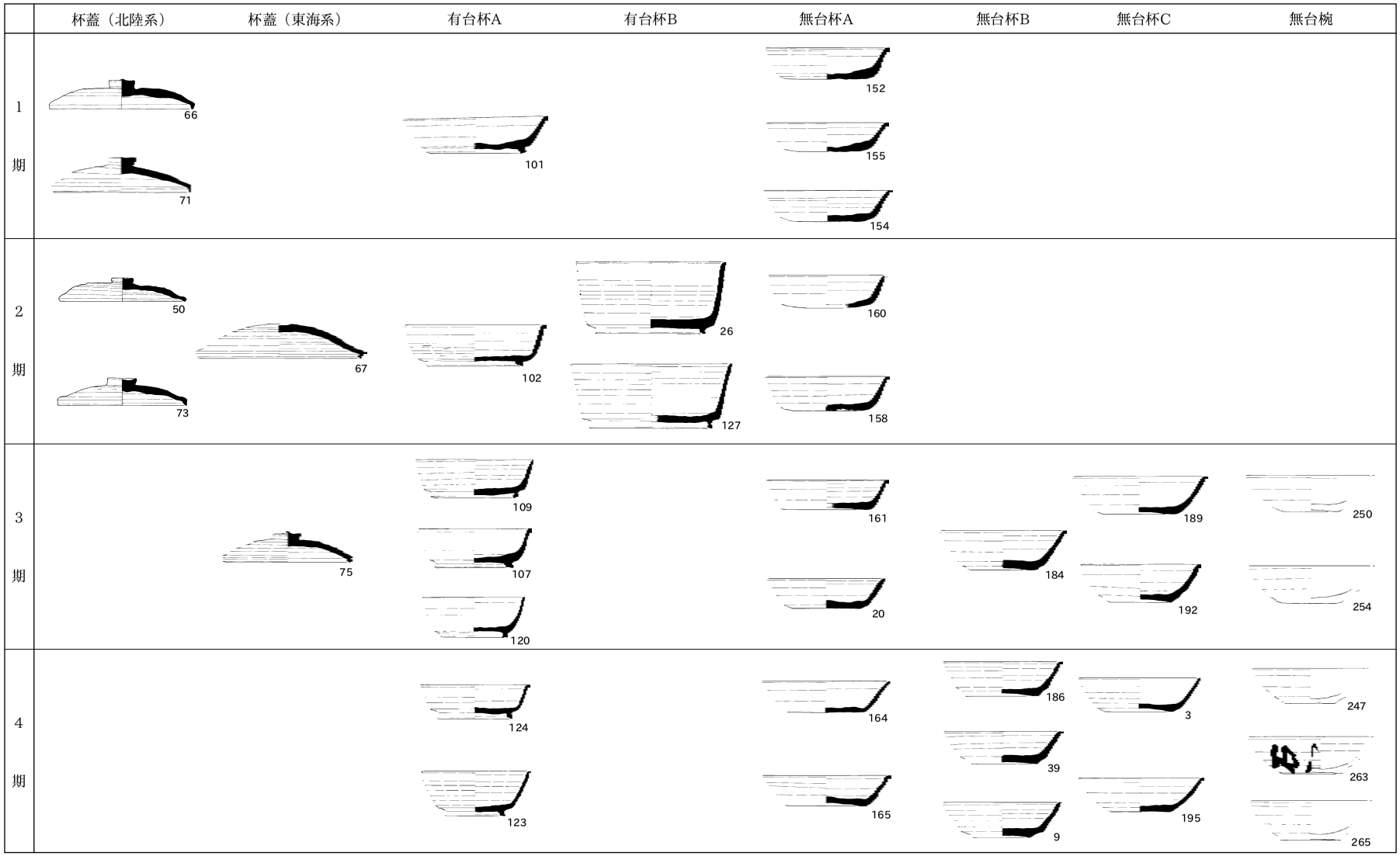
無台杯は細別ＡⅡ（20・161）、ＢⅡ（184）、ＣⅠ（189）、ＣⅡ（40・190～192）がある。胎土からＡは佐渡小泊窯産、Ｂは滝寺窯産、Ｃは大貫窯産と考えられる。底径指数はＡが60前後（20）、80前後（161）に二分され、Ｂが55前後、Ｃが50～58まで見られる。無台杯細別Ｂは今池遺跡SD201出土土器［坂井ほか1984］の中に類例が見られる。

土師器無台椀は法量Ⅱ（250・254）がある。器高指数は28（250）と30（254）に二分される。

4期（笹沢編年Ⅵ－1期・9世紀第3四半期）

有台杯、無台杯、無台椀がある。出土数も前段階と同様に多い。無台椀は北西部及び南東部の遺構集中区で確認される一方、有台杯、無台杯は南東部の遺構集中区でのみ確認される。

有台杯は細別ＡⅣ（123・124）がある。高台は外端接地する。胎土から滝寺窯産と考えられる。器高は30前後（124）、40前後（123）に二分される。



第24図　器種別変遷図（S＝1／6）

無台杯は細別ＡⅡ（164・165）、ＢⅡ（9・39・186・187）、ＣⅡ（3・195）がある。前段階のものと比較して器壁は薄い。胎土からＡは佐渡小泊産、Ｂ（39）は滝寺窯産と考えられる。底径指数はＡが60前後、Ｂが50前後（9）、55前後（39）、60前後（186・187）に三分され、Ｃが50前後（195）、55前後（3）に二分される。細別Ｂは今池遺跡SD003出土土器［坂井ほか1984］の中に類例が見られる。ちなみに本遺跡では今池遺跡SD003出土資料と同様に灰釉陶器は確認されていない。遺跡の時期の下限は高田平野で灰釉陶器が見られる笹沢編年Ⅵ－２期までは下らないものと考えられる。

土師器無台椀は法量Ⅰ（235・237）、Ⅱ（247・248・263・265）がある。器高指数は28前後（235・247）、30前後（237・248・263）、33前後（265）に三分される。

以上、出土した食膳具を４期に区分した。多少のばらつきがあるものの、時期が新しくなるに従い、有台杯は器高指数が高くなることで深身となり、無台杯は底径指数が低くなることで椀化する傾向が認められる。特に有台杯は細別Ｂが出現する２期、無台杯は細別Ｂ・Ｃが出現する３期以降にその傾向が強く現れる。また胎土から推測した生産地であるが、高田平野東側に位置する末野窯、西側に位置する向橋窯、滝寺窯、大貫窯と佐渡小泊窯のものが確認できる。末野窯産は１～２期を中心に見られる一方、向橋窯産は１期のみ、滝寺・大貫窯産は２～４期、佐渡小泊産は３～４期に見られる。

上記以外の器種では稜椀、長頸瓶、横瓶、短頸壺、有耳壺、甕、鍋、甑がある。瓶・壺類が同時期の遺跡と比べて非常に少ない。また稜椀と薬壺と考えられる短頸壺が見られることは、東大寺の荘園施設である本遺跡の特徴を示しているものと考えられる。

3　遺構について

A　掘立柱建物の分類と諸特徴

調査で検出された掘立柱建物は16棟を数える。これらの建物は、建物位置から大きく二分される。記述のとおり、儀明川近くに存在する北西部の建物群の３棟（SB002・003・006）と南東部の建物群の13棟（SB048～050・055・056・058・059・102・137・138・143・144・146）である。

1）北西部の建物群

面積30.25m^{2}の総柱建物１棟（SB003）、7.23m^2・8.69m^{2}の小型の側柱建物が２棟（SB002・006）である。主軸（軸）方位が最大で31°ずれるものの地形の傾斜に直交する東西棟である。SB003は総柱建物であることから倉庫、SB002・006はその規模から居住のためでなく小屋（倉庫）と推定される。これらの建物は、SB003の一部の柱穴を除き、すべて柱穴の掘形がない打込み柱の建物である。また、SB002・006は柱並びから平面亀甲形を呈し、柱材も多様な樹種から構成されるなど在地的な様相が見られる。周辺からの出土遺物からその所属時期は８世紀末葉～９世紀第２四半期の範囲に収まり、南東部の建物群に先行する。ただし、所属時期が長いため、各建物にはそれぞれ時期差のある可能性が高い。

2）南東部の建物群

第25図、図版３のように南東部の建物群は、南から北に緩く傾斜する地形に直交する形で東西方向に３列のまとまりを持って存在する。これらの建物群の属性をまとめると第７表のようになる。各建物は重

建物名	分類	位置	規模	桁行×梁間（m）	面積(m²)	方位	平面形	形態	柱穴の据え方	新旧関係、備考
SB002	北西部の建物群	4～5C	2×2	2.85×3.03	8.69	N－80°－W	亀甲形	側柱	打込柱	小屋風の倉庫
SB003		5～6C	2×2	5.52×5.54	30.25	N－83°－E	方形	総柱	一部打込柱	倉庫
SB006		4B	1×2	3.01×2.38	7.23	N－66°－W	亀甲形	側柱	打込柱	小屋風の倉庫
SB048	a	15B～C・16C	5×3	11.50×6.56	75.44	N－08°－E	長方形	側柱	打込柱	古SB048→SB137新
SB049		13A～B	3×3	4.34×3.67	15.90	N－17°－E	ほぼ方形	総柱	掘形＋打込柱	古SB049→SB050新、倉庫
SB058		14～15C	3×2	5.39×4.58	25.54	N－09°－E	樽形	側柱	掘形	
SB146		17B～C・18C	2～×2	5.51～×7.92	21.82～	N－05°－E	長方形？	側柱	掘形	
SB050	b	13～14B	2×2	5.21×4.55	23.71	N－78°－W	ほぼ方形	側柱	掘形	古SB049→SB050新、倉庫
SB137		15B・16B～C	5×2	11.50×5.00	57.50	N－76°－W	長方形	側柱	掘形	古SB048→SB137新、律令官衙的
SB138		17C	2～×1～	4.88～×2.62～	12.74～	N－79°－W	長方形？	側柱	掘形	律令官衙的？
SB144		14～15C	4×2	8.28×4.98	41.23	N－72°－W	長方形	側柱	掘形	古SB144→SB059新、律令官衙的
SB055	c	18B・17～19C	4×2	9.00×5.20	46.80	N－86°－W	長方形	側柱	掘形	律令官衙的
SB056		18～19B	3～×2	7.20～×4.30	30.96～	N－86°－W	長方形	側柱	掘形	律令官衙的
SB059		14C～D・15C	3×2	8.55×4.52	38.48	N－84°－W	長方形	側柱	掘形	古SB144→SB059新
SB102		14～15B	4×2	8.96×4.96	44.44	N－83°－W	長方形	側柱	掘形	律令官衙的
SB143	その他	14C～D・15C	3～×2	9.12～×6.44	58.73～	N－83°－E	長方形？	側柱	掘形	律令官衙的？

第７表　掘立柱建物属性表

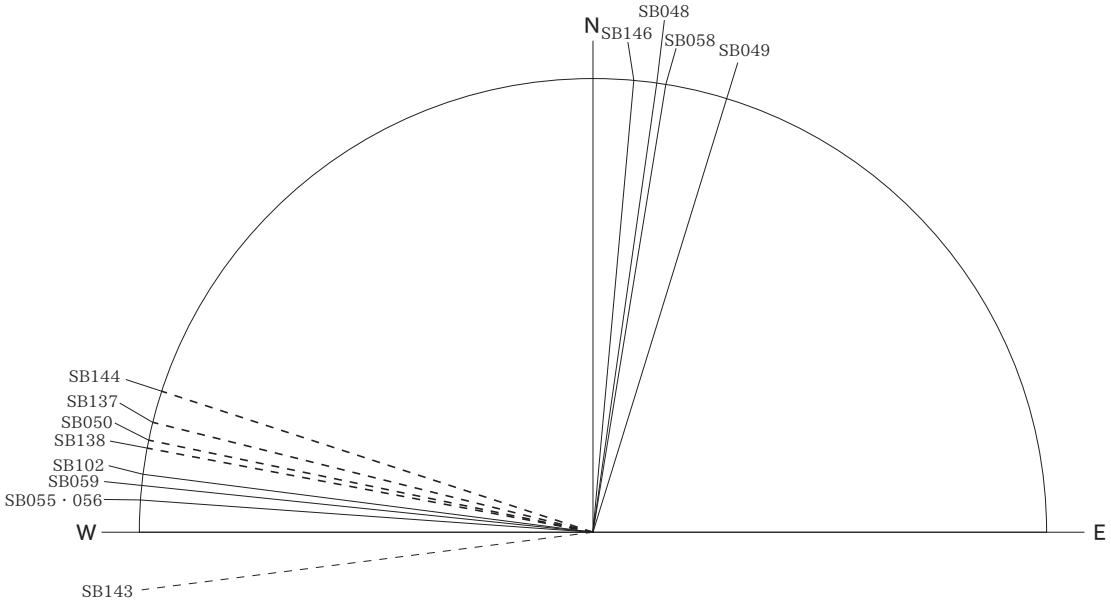
複または近接していることから同時期でなく、時期差をもつものと考えられる。しかし、各建物の時期を決める遺物の出土もなく、建物同士の重複関係が分かる例も少なかった。発掘調査及び整理をとおして個々の建物の時期を検討したが、有効な分類基準が見出せなかった。したがって、明確な根拠に乏しいが、建物配置、主軸（長軸・軸）方向、建築様式[1)]、重複関係から仮に３つのグループに分類を試みた。遺構配置図に色分けしたものが第25図となり、主軸（長軸・軸）方向を図化すると第26図のようになる。

これらの建物群の所属時期は、出土遺物から９世紀第２四半期～第３四半期に収まるものと考えられる。しかし、９世紀第１四半期の遺物も少量出土することから、一部の建物は同時期まで遡る可能性もある。

ａグループ：SB048・049・058・146の建物で方位がN－５～17°－Eを示すものである。方位から南北棟を示すという特徴を持ち、地形に沿った（平行）建物である。面積75.44m²の建物を筆頭に、同規模となる可能性を持つSB146、面積25.54m²の付属棟ともいえるSB058、総柱建物で倉庫と推定されるSB049からなる。これらの建物群は次のような特徴が認められる。①SB048は打込み柱、SB049は小さな柱穴を持つ打込み柱となる建物である。②SB058のように柱並びで内側の柱

第25図　南東部の掘立柱建物の分類図

1）律令官衙に多く見られる梁行２間×桁行４～５間で、柱並びや柱間寸法も整然とした建物と、そうでないSB048・058・146などに見られる在地的な建築様式と考えられる建物である



第26図　南東部の掘立柱建物の方位

が外方に据えられるものがある。またSB049の北側の柱並びも同様な特徴が見られる。③すべての建物で柱間寸法に規則性が少なく、等間隔の柱間寸法にならないものが多い。④律令官衙に多く見られる梁行2間×桁行4～5間の掘立柱建物が認められない。

これらの諸特徴は、在地的な建築様式と考えられ、北西部の建物群に共通する事柄も多く、南東部の建物群の中では最も古い建物に位置づけられるものと考えている。またb・cグループとの新旧関係とも矛盾しない。

bグループ：SB050・137・138・144の建物で方位がN－72～79°－Wを示すものである。方位から東西棟を示すという特徴を持ち、地形に直交する建物である。同じく東西棟のcグループとは4～14°北寄りの方位となる。SB138は調査区外に延びるため詳細は明らかでないが、面積57.50m^{2}のSB137を筆頭にこれよりやや小さいSB144、倉庫と推定されるSB050からなる。これらの建物群は次のような特徴が認められる。①倉庫と推定されるSB050以外は律令官衙の建物に多く見られる梁行2間×桁行4～5間の掘立柱建物である。②建物の柱穴掘形の規模はa・cグループに比べやや大きく、平面形も方形のものが多い。

方位やこれらの特徴からbグループは、aグループとcグループの中間的な時期に位置付けられるものと考えている。またa・cグループとの新旧関係とも矛盾しない。

cグループ：SB055・056・059・102の建物でN－83～86°－Wを示すものである。方位から東西棟を示すという特徴を持ち、地形に直交する建物である。同じく東西棟のbグループとは4～14°西寄りの方位となる。SB056・102は調査区外に延びるため全容は明らかでないが、いずれも面積40m^{2}前後の建物で占められる。これらの建物群は次のような特徴が認められる。①SB059は梁行2間×桁行3間と桁行がやや小さいものの、これ以外の3棟は律令官衙の建物に多く見られる梁行2間×桁行4～5間の掘立柱建物である。②建物の柱穴掘形の規模はbグループに比べ小さく、平面形も楕円（円）形のものが多くなる。

方位やこれらの特徴からｃグループは、ｂグループより新しいものと考えられ、南東部の建物群の中では最も新しいものと考えている。またａ・ｂグループとの新旧関係とも矛盾しない。

その他：いずれのグループにも属さないものである。SB143の建物でＮ－83°－Ｅを示すものである。方位から東西棟を示すという特徴を持ち、地形に直交する建物である。ただし、同じく東西棟のｂ・ｃグループとは大きく異なり、最も方位の近いSB055・056とは11°のズレとなる。調査区外に延びるため詳細は明らかでない。

このように南東部の遺構群を仮に３つのグループに分類し、グループごとに特徴を記述した。これに対し、ａグループは主軸方向がｂ・ｃグループに比べ約90°ズレるが、見方を変えれば軸方向は同一とも考えられる。また、重複関係も３例（古SB048→SB137新、古SB049→SB050新、古SB144→SB059新）で少ないという指摘がある。分類が適切であるかどうか、建物群変遷の原因は何かなどを含め、さらに検討する必要がある。

以上、岩ノ原遺跡の調査で検出された掘立柱建物について明確な結論は出ていないが、若干の検討を加えてみた。調査面積が限られているため不確実な点も多く見られるが、建物群についてまとめてみたい。

① 北東部の建物群は規模の大小があるもののいずれも倉庫で、儀明川に近いという立地から物資の搬出入のためのものと推定できる。時期は８世紀末葉～９世紀第２四半期の範囲に収まる。また物資の積み下ろし場所は検出されていないが、現地形から推定すると調査区の北に接する入り江状の低地と推定される。

② 南東部の建物群は出土した墨書土器から東大寺領石井荘の荘所である。時期は９世紀第１四半期に遡る可能性があるものの、第２四半期～第３四半期を中心とする。

③ 南東部の建物群は地形に直交する形で３列に分布し、遺構配置に強い規則性が見られる。全体の建物配置は並列となる。したがって、石川県横江荘遺跡［吉岡1983］、富山県じょうべのま遺跡［富山県教委1975］、高瀬遺跡［富山県教委1972］などにみられるような「コ」の字配置は認められない。

④ これらの遺跡に見られた有庇建物や面積100m^{2}を越えるような大型建物は認められない。加賀・能登の掘立柱建物を類型化し、100m^{2}前後の建物で有庇建物を主屋とする集落（第Ⅱ類）の一つに荘園遺跡を上げている［湯尻1983］が、これらの荘園遺跡と比べるとやや小規模な建物群で構成される。また、有力社寺が主導する荘園を細分［宇野2001］し、有力社寺主導１型（郡衙関連遺跡より小規模で、庇付きで面積100m^{2}を越える大型掘立柱建物からなる荘園）とした荘園より明らかに小規模な荘園といえる。

4　石井荘と岩ノ原遺跡

第Ⅱ章歴史的環境でも述べたとおり、石井荘は天平勝宝五（753）年四月九日に置かれたことが分かる（大治五（1130）年「東大寺諸荘園文書并絵図目録」）。その地は「府辺之要地（国府周辺の要地）」（永治二（1142）年三月「越後国留守所牒」）とされ、その規模は田六十五町一段七十四歩（天暦四（950）年「東大寺封戸荘園並寺用雑物目録」）とされている。10世紀半ばの石井庄が荒廃している時期［萩野1986b］での規模であることから、当初はこれよりも大きな規模だった可能性は高い。

このように成立当初の位置・規模は不明であるものの、その後、８世紀末葉～９世紀第２四半期には石井荘の物資の搬出入の場所として北西部の建物群が構築された。したがって、この時期の荘所の位置は、

物資の搬出入に際し、倉庫を必要とする距離と推定できる。具体的な位置は不明であるものの、岩ノ原遺跡から大きく離れた場所に位置したとは考えにくい。少なくともこれまで比定されていた上越市三和区（旧中頸城郡三和村）神田［井上1986］、あるいは関川右岸域は想定できないものと考えられる。

さらに９世紀第１四半期に遡る可能性があるものの、第２四半期には石井荘の荘所が岩ノ原遺跡に移ってきた。それと共に北西部の建物群は機能を失い、必要性がなくなったものと考えられる。しかし、北西部の遺構群周辺には９世紀第２四半期～第３四半期の土器がわずかに出土することから、建物群は不要でも物資の搬出入の場所としての機能は保っていたものと想定される。

９世紀第３四半期を過ぎると、突然に岩ノ原遺跡の荘所、物資の搬出入場所は、断絶している。以後、荘所の周辺はⅠ期畑作溝群、Ⅱ期畑作溝群が構築されるように、あまり時を経ず畑地化されたものと考えられる。このように荘所の廃絶後、急速に畑地化されている例は石川県横江荘でも確認されている［宇野2001］。この後の石井荘の荘所の具体的な位置は不明であるが、保延二（1136）年石井荘が沼垂郡豊田荘と交換される（「右少弁藤原資信書状」）まで越後国府の周辺に存在したものと思われる。

なお、遺跡の位置した字名は、北西部の遺構群周辺が「大字京田（きょうでん）字細田（ほそだ）」、南東部の遺構群周辺が「大字向橋字内沖（うちおき）」である。遺跡名となった「岩ノ原（いわのはら）」は遺跡から約50m南東に隣接する「大字中田原（なかだはら）字岩ノ原（いわのはら）」の字名に由来する。荘園名の「石荘（いわのしょう）」「石井荘（いわいのしょう）」の「石（いわの）」が「岩ノ（いわの）」に転化し、字名として現在まで残されてきたものと考えられる。

要　　約

1　岩ノ原遺跡は、新潟県上越市大字向橋字内沖303番地１ほかに所在する。遺跡は北西約4.5kmの儀明集落付近に源を発する儀明川右岸の沖積地に立地する。標高約21mを測り、現況は水田である。

2　調査は北陸新幹線建設に伴い、平成18年５月１日～11月22日まで実施した。調査面積は7,500m^{2}である。

3　調査の結果、上層・下層の２面とされた遺跡の上層は、中世以降の遺物が散発的に出土するのみであった。したがって、下層の古代の文化層を遺跡とした。

4　下層からは古墳時代と平安時代の遺構・遺物が検出された。遺構数は掘立柱建物16棟、杭列２列、溝81条、井戸１基、土坑11基、性格不明遺構９基、その他ピット・杭である。このうち古墳時代の遺構・遺物は、古墳中期の遺物少量と性格不明遺構１基で、残りは平安時代の遺構・遺物である。

5　平安時代の遺構の分布は、調査区北西部と南東部に分かれる。北西部の遺構群は掘立柱建物３棟、土坑３基、杭列１列、性格不明遺構１基で、南東部の遺構群は掘立柱建物13棟、井戸１基、土坑８基、性格不明遺構７基、溝81条である。この間約60m離れるが、遺構・遺物はほとんど検出されない。

6　北西部の遺構群は伴出土器から８世紀末葉～９世紀第２四半期に収まり、建物３棟は倉庫と小屋風の倉庫であり、物資の搬出入に関する施設と推定される。

7　南東部の遺構群は、その新旧関係から最も古い遺構は掘立柱建物13棟、溝１条、井戸１基、土坑８基、性格不明遺構７基である。時期は伴出土器から一部が９世紀第１四半期に遡る可能性があるものの、９世紀第２四半期～第３四半期に収まる。また、多数の「石庄」「石井庄」の墨書土器から、８世紀中葉に上越地方で成立した東大寺領石井庄の荘所と推定できる。次いでⅠ期畑作溝群とされた溝35条で、最も新しい遺構はⅡ期畑作溝群とされた溝45条、性格不明遺構３期である。これらは荘所とされる最も古い遺構が廃棄された後、あまり時を経ずⅠ期畑作溝群、Ⅱ期畑作溝群が構築されたものである。したがって、荘所が廃絶された後、畑地として利用された。

8　南東部の建物群は、地形に直交する形で３列に分布し、配置に強い規則性が見られる。建物の配置は、並列または縦列配置となり、荘所遺跡に見られる「コ」の字配置をとらない。またもっとも大きい建物面積も約75m^{2}で、100m^{2}を超える有庇建物は検出されていない。石川県横江庄、富山県の高瀬遺跡、じょうべのま遺跡と比較するとやや小規模な荘所である。

9　遺物は土器（土師器・須恵器）の他に木製品、金属製品、鉄滓、銭貨などである。これらの遺物は遺物包含層及び遺構覆土から出土し、８世紀末葉～９世紀第３四半期の範囲に収まる。このほか古墳時代中期の土師器、中世（14世紀）の珠洲焼が少量出土している。

10　墨書土器は100点出土し、「石井庄」７点、「石井」５点、「石庄」18点、「石」14点、「庄」７点、その他一文字19点、不明30点である。土器年代から９世紀第２四半期～第３四半期に相当する。

11　転用硯、荷札木簡・木簡状木製品、錠前、鉄斧、鉄滓、羽口などの遺物から荘所としての管理・生産の機能が窺える。

12　遺跡名の岩ノ原は、遺跡に隣接する「大字中田原字岩ノ原」の字名に由来する。荘園名の「石荘（いわのしょう）」「石井荘（いわいのしょう）」の「石（いわの）」が「岩ノ（いわの）」に転化し、現在まで残ってきたものと考えられる。

引用・参考文献

相沢　央　2004　「第三節 頸城郡の人々と暮らし」『上越市史 通史編１ 自然・原始・古代』新潟県上越市

伊藤正義　1986　「東大寺領越後国石井荘相論と豊田荘相傳事件小考」『日本中世の諸相 上巻』 安田元久先生退官記念論集刊行委員会

市澤 哲・高橋一樹　2004 「第四章 越後古代荘園と説話世界」『上越市史 通史編１ 自然・原始・古代』 新潟県上越市

井上慶隆　1973　「越後の条里制と石井荘の位置」『かみくひむし 第11号』

宇野隆夫　2001　『荘園の考古学』 青木書店

大橋康二　2000　「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

荻野正博　1986a　「第五章 第六節 初期荘園の成立と推移」「第六章 第二節 荘園と国衙領」『新潟県史 通史編１ 原始・古代』 新潟県

荻野正博　1986b　東大寺領越後国石井荘の歴史」『政治社会史論叢』 山田英雄先生退官記念会

小口雅史　1996　「荘所の形態と在地支配をめぐる諸問題」『土地と在地の世界をさぐる―古代から中世へ―』 山川出版社

小田由美子ほか　2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

小矢部市教育委員会　1998 「建築部材群」『桜町遺跡』 小矢部市・小矢部市観光協会

春日真実　1997　「越後・佐渡における９世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999　「第４章古代 第２節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 古志書院

春日真実　2005　「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会

加藤晋平　1973　「第六章 第二節 越後国分寺と国衙」『新井市史 上巻』新潟県新井市

加藤　学ほか 2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集 用言寺遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

金沢市　1999　『金沢市史 資料編19 考古』 金沢市

金沢市教育委員会　1993 『上新屋遺跡（二）奈良・平安時代（1)』 金沢市教育委員会

金沢市教育委員会　2000 『上新屋遺跡　Ⅳ　中世・馬具・木簡・木製品』 金沢市教育委員会

金箱文夫　1984　「近世の釘」『物質文化』第43号　物質文化研究会

亀田隆之　1998　「石井荘」『国史大辞典 第一巻』

川村　尚ほか 2005　『佐渡小泊窯跡群Ⅰ』 佐渡市教育委員会

北野博司　2003　「江向遺跡」『上越市史 資料編２ 考古』 新潟県上越市

鬼頭清明　1990　『木簡』 ニュー・サイエンス社

頸城村教育委員会　1998 『榎井Ａ遺跡』

合田芳正　1998　『古代の鍵』 ニュー・サイエンス社

小島幸雄・中村美恵子　1984 『新潟県上越市 本長者原廃寺確認調査概要』 新潟県上越市教育委員会

小島幸雄　1989　『下馬場古窯跡群確認調査報告書（市内遺跡群発掘調査事業)』新潟県上越市教育委員会

小島幸雄ほか 2002　『新潟県上越市 市内遺跡発掘調査概要報告書 新田畑遺跡』 新潟県上越市教育委員会

小林昌二ほか 2004　『新潟県内出土古代文字資料集成』

坂井秀弥　1982　『栗原遺跡 （第４次・第５次発掘調査概報)』 新潟県教育委員会・新井市教育委員会

坂井秀弥　1983　『栗原遺跡第６次発掘調査概報』 新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか 1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会

坂井秀弥 ほか1986　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第40集 一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会

桜町遺跡発掘調査団　2005 「資料編」『桜町遺跡シンポジウム　考古資料から建築材・建築技術を考える』 桜町遺跡発掘調査団

笹沢正史　1997　「越後頸城郡内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

笹澤正史　2002　「上越地方最大の須恵器窯跡群ー末野・日向窯跡群ー」『三和村史 自然・考古編』 新潟県三和村
笹沢正史　2003　「第５章古代 第１節時代概説」『上越市史　資料編２　考古』 新潟県上越市
佐藤　慎・高橋　勉　2002 『新井市埋蔵文化財調査報告書 第28集 栗原遺跡 第12次・13次発掘調査報告書』 新潟県新井市教育委員会
出土銭貨研究会北陸ブロック　2000 『機内・七道からみた古代銭貨』 出土銭貨研究会
上越市史編さん委員会　2003 『上越市史 資料編２ 考古』 上越市
上越市史編さん委員会　2003 『上越市史 資料編３ 古代・中世』 上越市
鈴木俊成・春日真実ほか　1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡東地区』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高島忠平・橋本正・舟崎久雄　1974 『井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』 富山県教育委員会
高田平野団体研究グループ　1981 「高田平野の第四系とその形成史ー新潟県の第四系・そのXXIVー」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号　新潟大学教育学部高田分校
高野武男　2002　「第１章 第１節 地形と地質の概観」「第１章 第２節 上越市と周辺地域の地形」『上越市史　資料編１ 自然』 新潟県上越市
高橋　保　2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第150集 海道遺跡・大塚遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　勉　1996　『平成７年度 新井市遺跡確認調査報告書 倉田遺跡』 新潟県新井市教育委員会
出越茂和　1994　「石川・戸水大西遺跡」『木簡研究』第18号　木簡学会
出越茂和　1998　「古代墨書土器の諸問題」『古代墨書土器の諸問題』 （社）石川県埋蔵文化財保存協会
戸根与八朗ほか　1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第32集 宮野遺跡』 新潟県教育委員会
十日町市史編さん委員会　1996 『十日町市史』資料編２考古
土橋由理子　2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第151集 蛇谷遺跡・炭山遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
富山県教育委員会　1975 『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要（3）』 入善町教育委員会
富山県教育委員会　1972 『高瀬遺跡発掘調査概報』 富山県教育委員会
外山政子　1987　「甑についてー平安時代の甑を中心にしてー」『（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第４号 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要
中林隆之　2004　「第二章 第一節 越後国の誕生」『上越市史 通史編１ 自然・原始・古代』 新潟県上越市
中林隆之　2004　「第二章 第四節 古代頸城平野の開発と荘園」『上越市史 通史編１ 自然・原始・古代』 新潟県上越市
秦 繁治・坂井秀弥　1990 『法花寺遺跡（廃寺）他発掘調査報告書ー三和村の遺跡と開発史ー』 新潟県三和村教育委員会
秦 繁治・小林昌二ほか　1998 『榎井Ａ遺跡』 新潟県頸城村教育委員会
藤井一二　1988　「国指定史跡『じょうべのま遺跡』と寺領荘園」『日本海地域史研究』第８輯
北陸建設弘済会　1981 『新潟県平野部の地盤図集（柏崎・高田平野編）』
星 奈津子　1997　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第85集 大洞原Ｃ遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
松任市教育委員会　1996 『東大寺領横江庄遺跡 Ⅱ』 松任市教育委員会
山田英雄　1986　「第五章 第二節 国郡制の成立・整備」『新潟県史 通史編１ 原始・古代』 新潟県
湯尻修平　1983　「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会
吉岡康暢　1983　『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
渡邉　晶　2004　『日本建築技術史の研究ー大工道具の発達史ー』 中央公論美術出版
渡邊裕之ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集 台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

掘立柱建物（SB）柱穴観察表

（　）は現存値

SB002

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	4C14・15			19.64	19.48			16			柱根有	P01-02：1.57	打込み柱。
P02	4C9	円形	台形状	19.78	19.64	28	24	14	有		柱根有	P02-03：1.41	棟持柱。
P03	4C9			19.75	19.56			19			柱根有	P03-07：1.44	打込み柱。
P04	5C6			19.75	19.63			12			柱根有	P04-01：2.77	打込み柱。
P05	4C5			19.74	19.30			44			柱根有	P05-04：1.65	棟持柱。打込み柱。
P06	4C5			19.73	19.64			9			柱根有	P06-05：1.60	打込み柱。
P07	4C4			19.78	19.65			13			柱根有	P07-06：1.50	打込み柱。

SB003

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	5C14・15・19・20	楕円形	台形状	19.84	19.60	110	72	24	有			P01-02：2.98 P01-04：2.28	
P02	5C13			19.84	19.58			26			柱根有	P02-05：2.28	打込み柱。
P03	5C7	円形	台形状	19.80	19.36	(50)	46	44	有		柱根有	P03-02：2.69	
P04	5C15			19.92	19.58			34			柱根有	P04-05：2.82 P04-07：3.12	打込み柱。
P05	5C9	楕円形	台形状	19.86	19.50	74	60	36	有			P05-06：2.80	
P06	5C3			19.86	19.13			73			柱根有	P06-03：2.73	打込み柱。
P07	6C1・6	円形	台形状	19.82	19.60	52	50	22	有		柱根有	P07-08：2.51	打込み柱か。
P08	5C5	円形	台形状	19.74	19.30	40	40	44	有		柱根有	P08-05：3.27	打込み柱か。

SB006

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	4B14	楕円形	漏斗状	19.70	19.41	30	15	29	有		柱根有	P01-02：1.41	打込み柱か。
P02	4B13	円形	台形状	19.64	19.55	24	22	9	有		柱根有	P02-03：1.05	棟持柱。打込み柱か。
P03	4B8			19.65	19.47			18			柱根有	P03-06：3.02	打込み柱。
P04	4B15			19.70	19.45			25			柱根有	P04-01：3.00	打込み柱。
P05	4B10			19.68	19.47			21			柱根有	P05-04：1.27	棟持柱。打込み柱。

SB048

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	15B21			20.40	19.94			46			柱根有	P01-02：2.03	打込み柱。
P02	15B22			20.38	19.80			58			柱根有	P02-03：2.24	打込み柱。
P03	15B18			20.38	19.94			44			柱根有	P03-04：2.24	打込み柱。
P04	15B19			20.39	19.75			64			柱根有	P04-08：2.07	打込み柱。
P05	15C2			20.35	20.10			25			柱根有	P05-01：2.08	打込み柱。
P06	15C7	楕円形	台形状	20.21	20.04	28	18	17	不明			P06-05：1.86	＜SK106。
P07	15C13	不明	不明	20.34	(20.16)			18	不明		不明	P07-06：（1.74）	調査時の暗渠で破壊。
P08	15B20・25			20.32	20.00			32			柱根有	P08-09：1.10	打込み柱。
P09	15B25	楕円形	弧状	20.32	(20.27)	17	12	5				P09-10：0.89	試掘調査で破壊。打込み柱か。
P10	15B25	楕円形	台形状	(20.13)	20.01	22	13	12					打込み柱か。
P11	15C2・3			20.54	20.41			13			柱根有	P11-05：1.68	打込み柱。
P12	15B23			20.38	20.25			13			柱根有	P12-11：1.52 P12-13：1.67	打込み柱。
P13	15B24	不整楕円形	台形状	20.33	20.21	18	12	12	不明			P13-08：1.83	
P14	15C19			20.22	19.84			38			柱根有	P14-07：（3.38）	打込み柱。
P15	15C25	楕円形	台形状	20.43	20.03	38	21	40	不明			P15-14：2.53	打込み柱か。

SB049（1）

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	13B2	方形	漏斗状	20.29	19.70	28	27	59	有		柱根有	P01-02：1.50	打込み柱。
P02	13B3・13A23	長方形	漏斗状	20.21	19.82	67	38	39	有	植物	柱痕有	P02-03：0.95 P02-06：1.68	打込み柱。
P03	13A23・24	方形	漏斗状	20.30	19.86	27	25	44	有		柱根有	P03-04：1.16 P03-07：1.54	打込み柱。
P04	13A24	方形	漏斗状	20.31	19.76	31	31	55	有		柱根有	P04-08：1.32	打込み柱。
P05	13B8	方形	漏斗状	20.32	19.58	24	23	74	有		柱根有	P05-01：1.60 P05-06：1.18	打込み柱。
P06	13B3	方形	漏斗状	20.32	19.82	25	22	50	有		柱根有	P06-07：1.27 P06-10：1.22	打込み柱。
P07	13B4	方形	漏斗状	20.34	19.70	23	22	64	有		柱根有	P07-08：1.20 P07-11：1.33	打込み柱。
P08	13B4	方形	漏斗状	20.36	19.65	22	21	71	有		柱根有	P08-12：1.44	打込み柱。

SB049（2）

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P09	13B8	方形	U字状	20.31	19.85	36	33	46	有		柱痕有	P09-05：1.22 P09-10：1.17	打込み柱か。
P10	13B8・9	長方形	漏斗状	20.30	19.77	48	35	53	有			P10-11：1.29 P10-14：1.71	打込み柱か。
P11	15C2・3	方形	U字状	20.30	19.88	31	31	42	有		柱根有	P11-12：1.28 P11-15：1.50	打込み柱。
P12	13B10	長方形	漏斗状	20.36	19.77	21	17	59	有		柱根有	P12-16：1.44	打込み柱。
P13	13B13	楕円形	台形状	20.21	19.86	46	45	35	有		柱痕有	P13-09：1.65	打込み柱か。
P14	13B14	方形	U字状	20.34	20.05	31	28	29	有	礎盤(板)	柱痕有	P14-13：1.28	
P15	13B9・10・14・15											P15-14：1.22	SB50-P02に破壊される。
P16	13B10	楕円形	台形状	20.35	19.89	57	57	46	有		柱痕有	P16-15：1.23	
P17	13B9	方形	台形状	20.33	19.98	38	32	35	有		柱根有	P17-06：0.93 P17-07：0.91 P17-10：0.94 P17-11：0.90	打込み柱か。心柱。

SB050

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	13B13	円形？	階段状	20.19	19.88	85	(42)	31	有	植物	柱痕有	P01-02：3.43	調査時の暗渠により一部破壊。
P02	13B9・10・14・15	長方形	台形状	20.33	19.92	63	52	41	有		柱痕有	P02-03：1.82	＞SB049-P15。
P03	13B10	方形	台形状	20.36	19.58	85	79	78	有	植物・礎盤(板)	柱痕有	P03-08：2.17	
P04	13B24	方形	台形状	20.26	19.74	75	71	52	有	礎盤(板)	柱痕有	P04-07：2.24	
P05	13B20・25、14B5	長方形	台形状	20.38	19.95	83	61	43	有	礎盤(板)	柱痕有	P05-04：2.87	＜SD104。
P06	14B16	方形	台形状	20.40	19.83	86	80	57	有	礎盤(板)	柱痕有	P06-05：2.30	
P07	13B8・19	方形？	階段状	20.22	19.71	79	(54)	51	有		柱痕有	P07-01：2.36	調査時の暗渠により一部破壊。
P08	14B11	方形	台形状	20.38	19.79	54	50	59	有	植物	柱痕有	P08-06：2.33	柱痕上面から礫出土。

SB055

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P06	18C5・19C1	楕円形	漏斗状	20.42	19.94	90	70	48	有			P06-07：2.40	
P07	18C10	楕円形	U字状	20.48	19.66	(70)	56	82	有		柱根有	P07-08：2.10	
P08	18C9・14	楕円形	漏斗状	20.50	10.78	120	76	72	有		柱痕有	P08-09：2.30	
P09	18C13	楕円形	V字状	20.40	20.16	46	38	24	有				
P10	18B19	円形	台形状	20.34	19.66	(70)	70	68	有		柱痕有	P10-13：2.70	
P11	18B23	楕円形	台形状	20.36	19.86	(64)	54	50	有		柱根有	P11-10：2.25	
P12	18B22	楕円形	V字状	20.32	19.70	95	62	62	有		柱根有	P12-11：2.25	
P13	18B25	方形	台形状	20.33	19.94	58	54	39	有			P13-06：2.60	
P14	18C1	円形	台形状	20.34	20.06	(70)	70	28	有			P14-18：0.75	
P15	17C10・18C6	楕円形	V字状	20.32	10.88	68	50	44	有		柱痕有	P15-14：1.80	
P17	18C11	楕円形	半円状	20.40	20.20	36	30	20	有			P18-12：2.00	
P18	18C1・2	楕円形	漏斗状	20.28	19.98	94	(54)	30	有		柱痕有	P13-08：1.83	

SB056

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	19B14・15	円形	漏斗状	20.32	19.94	56	54	38	有		柱痕有	P01-02：2.10	
P02	19B18.19	円形	台形状	20.30	20.00	84	80	30	有		柱根有	P02-03：2.20	
P03	19B23	楕円形	台形状	20.38	19.82	(50)	40	56	有		柱痕有	P03-04：2.15	
P04	19B22	楕円形	U字状	20.40	19.94	60	50	46	有			P04-05：0.80	
P05	19B21・22、19C1・2	円形	漏斗状	20.44	19.75	66	60	69	有		柱痕有	P05-20：2.80	
P19	18B20	楕円形	台形状	20.34	20.08	84	58	26	有		柱痕有	P19-20：2.00	
P20	19B16	楕円形	半円状	20.36	19.94	50	40	42	有				

SB058（1）

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	15C16	円形	台形状	20.31	19.67	92	84	64	有	植物	柱痕有	P01-02：1.87	＜SD099＜SD026
P02	14C15、15C11	方形	台形状	20.34	20.00	70	63	34	有	植物	柱痕有	P02-03：1.49	＜SD029・030
P03	14C10	方形	階段状	20.32	20.02	63	60	30	有		柱痕有	P03-04：1.93	＜SD037
P04	14C5・10	方形	台形状	20.37	19.77	85	72	60	有		柱痕有	P04-05：2.29	＜SD024・065＜SX052
P05	14C9	方形	台形状	20.40	19.70	67	66	70	有			P05-06：2.25	＜SD065
P06	14C13	方形	台形状	20.37	19.80	73	68	57	有			P06-07：2.29	
P07	14C18	楕円形	台形状	20.37	19.95	79	51	42	有		柱痕有	P07-08：1.48	＜SD069

SB058（2）

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P08	14C18・19・23・24	方形	階段状	20.32	20.04	71	66	28	有	植物	柱根有	P08-09：1.82	＜SD092＜SD029
P09	14C24	楕円形	階段状	20.27	19.73	98	76	54	有		柱痕有	P09-10：2.37	＜SD093＜SD026
P10	14C20・25	長方形	台形状	20.28	19.78	82	63	50				P10-01：2.25	＜SD026

SB059

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	15C12	方形	階段状	20.46	19.80	100	87	66	有		柱痕有	P01-02：2.29	
P02	15C6	方形	台形状	20.15	19.66	63	59	49	有		柱根有	P02-03：2.21	
P03	14C5・15C1	方形	階段状	20.40	19.99	68	64	41	有	植物	柱根有	P03-04：3.06	＜SD065
P04	14C9	長方形	台形状	20.60	19.88	84	48	72	有		柱根有	P04-05：3.83	＜065
P05	14C12・13	長方形	台形状	20.40	19.88	101	82	52	有		柱痕有	P05-06：（1.61）	＜SD068＜SD037
P06	14C17	長方形？	台形状？	20.33	(20.19)	(78)	(31)	(14)	有			P06-07：（4.53）	調査時の暗渠により一部破壊。
P07	14C23・24、14D3	長方形	台形状	20.35	19.83	136	79	52	有		柱痕有	P07-SB58・P09：1.70	＞15C-P13
P08	14C20,15C16	方形	台形状	20.35	19.97	56	52	38	有		柱痕有	P08-01：2.97 P08-SB58・P09：3.88	＜SD070・091
P09	14C15	長方形	台形状	20.55	19.88	67	51	67	有			P09-02：3.07 P09-04：2.29 p09-08：2.22	

SB102

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	14B1	方形	台形状	20.38	19.87	55	54	51	有		柱痕有	P01-08：2.26	
P02	14B2	長方形	台形状	20.37	20.07			30	有		柱痕有	P02-01：2.40	
P03	14B12・13	長方形	台形状	20.42	20.02	61	49	40	有		柱痕有	P03-04：2.11	
P04	14B13	方形	台形状	20.41	20.08	59	55	33	有		柱痕有	P04-05：2.21	
P05	14B9	方形	台形状	20.43	20.08	61	53	35	有		柱痕有	P05-06：2.74	
P06	14B5	方形	台形状	20.31	19.86	46	46	45	有		柱痕有	P06-07：1.90	
P07	15B1	楕円形	台形状	20.30	19.86	85	59	44	有		柱痕有		
P08	14B7	方形	台形状	20.21	20.00	24	23	21	有		柱痕有	P08-03：2.70	＜SK101。上部はSK101により破壊。

SB137

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P02	17B16・17・21・22	円形	階段状	20.18	19.48	84	72	70	有		柱痕有	P02-03：2.40	＜SD089
P03	16B25、17B21	方形	階段状	20.20	19.36	94	90	84	有		柱痕有	P03-04：2.30	
P04	16B24・25、16B4・5	楕円形	漏斗状	20.18	19.38	104	86	80	有		柱痕有	P04-05：2.24	
P05	16C3・4	長方形	漏斗状	20.24	19.50	116	88	74	有		柱痕有	P05-06：2.50	＜SD111
P06	16C7・8	楕円形	台形状	20.24	19.70	108	90	54	有		柱痕有	P06-07：2.00	
P07	16C6・7	楕円形	台形状	20.24	19.84	80	56	40	有		柱痕有	P07-12：4.70	
P08	16B14	楕円形	階段状	20.28	19.76	106	90	52	有		柱痕有	P08-09：2.30	
P09	16B13・18	楕円形	台形状	20.32	19.82	110	92	50	有			P09-10：2.30	
P10	16B17・18	（円形）	箱状	20.28	19.72	(100)	(96)	56	有			P10-11：2.50	
P11	16B16・17・21・22	楕円形	箱状	20.32	19.60	102	86	72	有	礎盤(板)	柱痕有	P11-12：2.00	
P12	15B25、16B21	円形	台形状	20.46	20.02	74	70	44	有				

SB138

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	17C13・14	円形	台形状	20.28	19.96	82	70	32	有		柱根有	P01-02：2.62	＜SD124＜SD073
P02	17C8	円形	U字状	20.24	19.58	52	46	66	有		柱痕有	P02-03：2.54	＜SD078
P04	17C12	楕円形	V字状	20.20	19.70	80	64	50	有		柱痕有	P04-05：2.34	＜SD130＜SD080
P06	17C11・16	長方形	箱状	20.20	19.68	96	78	52	有		柱痕有		＜SD081

SB143

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	15C16・17	方形	台形状	20.16	19.90	58	51	26	有		柱根有	P01-02：2.93	＜SD099＜SD026
P02	14C15、15C11	長方形	台形状	20.58	20.04	74	50	54	有	植物	柱痕有	P02-03：3.41	
P03	14C14・19	方形	台形状	20.48	19.95	60	60	53	有				＜SD070・091
P04	14C21・22、14D1・2	長方形	台形状	20.32	19.94	107	(70)	38	有		柱痕有		調査時の暗渠により一部破壊。
P05	15C22	楕円形	半円状	20.19	19.97	50	34	22	有			P05-01：3.55	＜SX141

SB144

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	14C15・20	長方形	台形状	20.36	19.64	85	58	72	有		柱根有	P01-02：2.21	＜SD092＜SD029
P02	14C19	長方形	階段状	20.45	19.68	108	85	77	有		柱痕有		
P04	14C7	方形	台形状	20.38	19.86	83	82	47	有		柱痕有	P04-05：2.05	＜SD063＜SD033
P05	14C8	方形	台形状	20.37	19.72	68	68	65	有		柱痕有	P05-06：2.25	＜SD068・064
P06	14C4・9	方形	台形状	20.40	19.82	81	68	58	有		柱根有	P06-07：2.24	＜SD064
P07	14C5	方形	階段状	20.40	19.67	73	68	73	有		柱痕有		＜SD064
P08	15C12	方形	階段状	20.46	19.80	100	87	66	有		柱痕有	P08-01：（3.18）	＜SB059-P01

SB146

柱穴番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	標高（m）		規模（cm）			掘形	敷設物	柱遺存状況	柱間寸法（m）	備考
				確認面	底面	長軸	短軸	深さ					
P01	17C11	円形	U字状	20.21	19.99	（51）	44	22	有			P01-02：3.06	＜SD130
P02	17C8	長方形	U字状	20.28	19.74	57	45	54	有		柱痕有	P02-03：4.86	＜SD080
P03	17B24・25、17C4・5	方形	階段状	20.30	19.85	56	47	45	有	植物	柱痕有	P03-04：2.89	
P04	17C10、18C6	楕円形	V字状	20.32	19.88	68	50	44	有		柱痕有	P04-05：2.62	SB55-P15と重複。新旧不明。
P05	18C11	楕円形	半円状	20.40	20.20	36	30	20	有				SB55-P17と重複。新旧不明。

杭列（SA）観察表

（　）は現存値

SA009

柱穴番号	位置（グリッド）	標高（m）		深さ（cm）	杭遺存状況	杭間寸法（m）
		確認面	底面			
P01	6B25	19.75	19.62	13	杭有	P01-02：0.32
P02	6B25	19.87	19.75	12	杭有	P02-03：0.43
P03	6B20	19.74	19.60	14	杭有	P03-04：1.23
P04	6B20	19.72	19.70	2	杭有	P04-05：1.37
P05	6B15	19.69	19.59	10	杭有	P05-06：0.73
P06	6B15	19.71	19.62	9	杭有	P06-07：0.80
P07	6B10	19.63	19.55	8	杭有	P07-08：0.68
P08	6B10	19.72	19.60	12	杭有	P08-09：0.82
P09	6B10	19.72	19.59	13	杭有	

柱穴番号	位置（グリッド）	標高（m）		深さ（cm）	杭遺存状況	杭間寸法（m）
		確認面	底面			
P10	6C23	19.77	19.68	9	杭有	P10-11：1.90
P11	6C19	19.85	19.78	7	杭有	P11-12：0.35
P12	6C14・19	19.89	19.68	21	杭有	P12-13：0.40
P13	6C14	19.91	19.69	22	杭有	P13-14：0.43
P14	6C14	19.91	19.81	10	杭有	P14-15：0.67
P15	6C14	19.88	19.77	11	杭有	P15-16：0.82
P16	6C14	19.86	19.64	22	杭有	P16-17：0.36
P17	6C9・14	19.89	19.71	18	杭有	P17-01：5.65

SA009

柱穴番号	位置（グリッド）	標高（m）		深さ（cm）	杭遺存状況	杭間寸法（m）
		確認面	底面			
P01	8B21	19.77	19.68	9	杭有	P01-02：0.75
P02	8B16	19.81	19.72	9	杭有	P02-03：0.44
P03	8B16	19.82	19.78	4	杭有	P03-04：0.34

柱穴番号	位置（グリッド）	標高（m）		深さ（cm）	杭遺存状況	杭間寸法（m）
		確認面	底面			
P04	8B17	19.82	19.68	14	杭有	P04-05：0.34
P05	8B17	19.82	19.73	9	杭有	P05-06：0.34
P06	8B17	19.81	19.77	4	杭有	

溝（SD）観察表

（　）　現存値

溝番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	規模			方向	覆土	備考
				長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）			
SD136	17B	屈曲	弧状	3.10	40	8		単層	

Ⅰ期畑作溝群（1）

溝番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	規模			方向	覆土	備考
				長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）			
SD011	12～14C	屈曲	弧状	（12.00）	30～173	10	N-74°-W	単層	＞SX019
SD012	13C	屈曲	弧状	（4.00）	19～50	5	N-66°-W	単層	
SD013	12～14C	やや蛇行気味	弧状	（11.00）	40～90	14	N-74°-W	単層	
SD024	14C	やや蛇行気味	弧状	3.58	27～42	15	N-77°-W	2層、レンズ状	＞SB058-P04、=SD064、＜SX052
SD061		やや蛇行気味	弧状	4.66	36～56	9	N-75°-W	単層	
SD062	14B～C	やや蛇行気味	弧状	（8.50）	28～75	19	N-82°-W	単層	＞SB144-P04、＜SX027・SD033
SD063	14B～C	やや蛇行気味	弧状	（8.50）	26～60	15	N-82°-W	単層	＞SB144-P04・05、＜SX027・SD033
SD064	14B～C、15B	やや蛇行気味	弧状	（13.60）	18～75	8	N-82°-W	単層	＞SB144-P05～07・SK044
SD065	14～5C	湾曲	弧状	（7.90）	27～36	6	N-86°-W	単層	＞SB058-P04・05・SB059-P03・04・SB144、=SD068
SD066	14B	湾曲	弧状	（7.00）	18～35	5	N-77°-W	単層	
SD067	13～14C、14B	やや湾曲気味	弧状	（7.80）	24～70	11	N-75°-W	単層	＜SD032
SD068	14C	直線状	弧状	（6.20）	23～45	5	N-75°-W	単層	＞SB059-P05・SB058・SB144、=SD065、＜SD037
SD069	14C	やや蛇行気味	弧状	（5.15）	31～70	5	N-79°-W	単層	＞SB058-P07・SB059・SB144
SD070	14C	直線状	弧状	（4.50）	17～57	4	N-82°-W	単層	＞SB059-P09・SB143-P03

Ⅰ期畑作溝群（2）

溝番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	規模			方向	覆土	備考
				長さ(m)	幅（cm）	深さ(cm)			
SD091	14C	直線状	半円状	3.30	16～33	10	N-77°-W	単層	＞SB059-P09・SB143-P03・SB058・SB144、=SD070
SD092	14C	やや蛇行気味	台形状	(4.20)	60～75	28	N-75°-W	2層、レンズ状	＞SB058-P09・10・SB059・SB143
SD093	14C	やや蛇行気味	弧状	(4.50)	38～80	6	N-77°-W	単層	＞SB058-P08・SB144-P01・02・SB059・SB143、＜SD026
SD099	15C	屈曲	弧状	(1.40)	30	10	N-65°-W	単層	＞SB058-P01・SB143-P01、＜SD026
SD100	13～14B	直線状	弧状	(11.30)	13～22	6	N-76°-W	単層	＜SD031
SD103	13～14B	直線状	弧状	(3.10)	20～47	5	N-78°-W	単層	＞SB050、＜SD047
SD104	13～14B	やや蛇行気味	弧状	(3.00)	25～50	8	N-75°-W	単層	＞SB050-P05
SD120	17C	直線状	弧状	(3.70)	50	12	N-34°-E	単層	
SD121	17C	直線状	弧状	(3.50)	50	10	N-31°-E	単層	
SD122	17C	直線状	弧状	(6.00)	40～60	12	N-39°-E	単層	＜SD072～074・077
SD123	17C	直線状	弧状	(6.10)	40～85	10	N-32°-E	単層	＜SD072・073・075～078・080
SD124	17C	直線状	弧状	(5.60)	40	10	N-31°-E	単層	＞SD128・129・SB138-P01、=SD125、＜SD073・075～078
SD125	17C	やや蛇行気味	弧状	(3.60)	50	8	N-6°-E	単層	＜SD076・078・080・081・084、=SD124
SD128	16～17C	直線状	弧状	(4.40)	20～47	8	N-73°-W	単層	＜SD124
SD129	16～17C	やや湾曲気味	台形状	5.20	40	10	N-73°-W	単層	＜SD124
SD130	16～17C	やや蛇行気味	弧状	3.90	25～70	10	N-74°-W	単層	
SD131	16～17C	やや蛇行気味	弧状	5.50	20～60	14	N-85°-W	単層	
SD132	16～17C	直線状	不整形	2.25	20	8	N-82°-W	単層	=SD134
SD133	16～17C	直線状	弧状	2.10	20	8	N-79°-W	単層	=SD134
SD134	16～17C	直線状	弧状	(1.70)	20	10	N-70°-E	単層	=SD132
SD135	16～17C	直線状	弧状	2.25	30～60	10	N-64°-W	単層	

Ⅱ期畑作溝群（1）

溝番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	規模			方向	覆土	備考
				長さ(m)	幅（cm）	深さ(cm)			
SD026	14～15C	直線状	弧状	(6.35)	22～48	10	N-84°-W	単層	＞SD093・099・SB058-P01・09・10・SB059-P08・SB143
SD029	14～15C	直線状	弧状	(6.97)	22～32	7	N-84°-W	単層	＞SD092・093・SB058-P01・09・10・SB059-P08・SB143・SB144
SD030	14～15C	直線状	弧状	(7.29)	13～32	5	N-83°-W	単層	＞SD091・092・SB058-P02・08・SB144-P02
SD031	13～15B	やや蛇行気味	弧状	(17.20)	20～50	8	N-81°-W	単層	＞SD100
SD032	13～15B	やや蛇行気味	弧状	(20.60)	27～63	6～18	N-79°-W	単層	＞SD067
SD033	15B	直線状	弧状	(21.00)	27～87	8～21	N-81°-W	単層	＞SD034・062・063・SB144-P04・SK044・045・SX027
SD034	15B	直線状	弧状	(1.40)	22	10	N-66°-W	単層	＞SK045、＜SD033
SD035	15～16B	やや湾曲気味	弧状	6.10	23～60	4	N-81°-W	単層	＞SD116、=SD037
SD036	15B～C	直線状	台形状	6.51	29～44	10	N-85°-W	単層	＞SB048・SK106
SD037	14～15C・15～16B	やや蛇行気味	弧状	(23.41)	18～80	3～20	N-82°-W	単層	＞SD065・068・069・SB058-P03・SB059-P05・SB048、=SD035
SD042	13～15B	直線状	弧状	(14.00)	40～53	9	N-79°-W	単層	＞SB102
SD047	13～14B	直線状	弧状	2.97	21～31	8	N-77°-W	単層	＞SD103
SD053	15B～C	やや湾曲気味	弧状	4.64	24～73	6	N-77°-W	単層	＞SB048
SD054	15C	直線状	弧状	(1.72)	32	8～12	N-75°-W	単層	
SD071	18C	直線状	不整形	(2.50)	36	12	N-80°-E	単層	
SD072	17C	直線状	弧状	2.44	60～75	10	N-90°-E	単層	＞SD122
SD073	17C	やや湾曲気味	弧状	(7.50)	40	11	N-81°-E	単層	＞SD122～124
SD074	17B～C	直線状	弧状	(4.60)	32	6～18	N-84°-E	単層	＞SD122
SD075	17C	直線状	弧状	(3.20)	40	10	N-79°-E	単層	＞SD123
SD076	17C	直線状	弧状	2.80	48	4	N-82°-W	単層	＞SD123
SD077	17C	直線状	弧状	(1.50)	36	8～21	N-86°-W	単層	＞SD122
SD078	17C	やや蛇行気味	半円状	(8.20)	20～50	10	N-81°-E	単層	＞SD123～125、=SD79
SD079	17C	やや湾曲気味	弧状	(2.00)	20～50	12	N-86°-W	単層	=SD78
SD080	17B～C	直線状	弧状	(9.30)	60	10	N-80°-E	単層	＞SB138-P02・03・SD123～125
SD081	17B～C	やや湾曲気味	台形状・半円状	(8.70)	30～80	10～20	N-81°-E	単層	＞SD125・SB138-P06、=SD82～84
SD082	17C	湾曲	弧状	(3.00)	20～40	6	N-79°-W	単層	=SD081
SD083	17C	直線状	半円状	4.50	20～40	12	N-70°-W	単層	=SD081・082・084
SD084	17B～C	湾曲	弧状	(9.00)	30	8	N-89°-E	単層	=SD081・083・085
SD085	17C		台形状	(2.50)		7	N-73°-W	単層	=SD084
SD086	17B～C		弧状			8		単層	=SD087
SD087	16C・17B～C	やや湾曲気味	弧状	(7.00)	25～40	6	N-89°-E	単層	=SD086
SD088	16C・17B～C	やや湾曲気味	弧状	(8.50)	25～100	4	N-82°-E	単層	=SD089・090
SD089	17B	やや湾曲気味	弧状	(3.00)	25	8	N-83°-E	単層	=SD088

Ⅱ期畑作溝群（2）

溝番号	位置（グリッド）	平面形	断面形	規模			方向	覆土	備考
				長さ(m)	幅（cm）	深さ(cm)			
SD090	16C	直線状	半円状	(2.00)	30	12	N-72°-W	単層	=SD088
SD107	13A～B	やや蛇行気味	弧状	(3.56)	20～31	7	N-74°-W	単層	＞SB049
SD108	13B	直線状	弧状	(1.40)	18	7	N-73°-W	単層	＞SB049
SD111	16B～C	直線状	台形状	(3.90)	30	8	N-75°-E	単層	
SD112	17～18C	直線状	弧状	1.70	40	8	N-76°-E	単層	
SD113	16B	直線状	弧状	(1.30)	35	10	N-89°-W	単層	
SD114	16B	直線状	弧状	(1.60)	20	8	N-83°-W	単層	=SD115
SD115	16B	やや湾曲気味	弧状	(1.70)	20	10	N-90°-W	単層	=SD114
SD116	16B	直線状	弧状	(3.30)	30	6	N-87°-W	単層	＜SD035
SD119	16B	直線状	弧状	(0.80)	30	6	N-88°-W	単層	
SD126	18C	直線状	弧状	2.70	40	12	N-87°-W	単層	
SD127	18C	直線状	弧状	(2.70)	35	14	N-71°-E	単層	

土器観察表（1）

掲載番号	遺構名・出土地点	層位	種類	器種・細分	遺存部位・遺存率	口径	底径	器高	焼成・色調	胎土	切り離し・方向	調整	時期	備考
1	SB050p05 13B25	覆土 Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部破片	12.5		2.9	還元炎・紫灰色	白	糸切り？・右	外面上半ロクロケズリ		
2	SB055p07	覆土	須恵器	有台杯	底部破片		9		還元炎・青灰色	白	糸切り			滝寺窯産か
3	SB055p07	覆土	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部破片	12.3	6.8	3.4	還元炎・青灰色	白・石	糸切り	ロクロナデ	9世紀第3四半期	内面黒漆付着
4	SB055p07 18C9	覆土 Ⅶ	須恵器	無台杯C	底部破片		6		還元炎・灰白色	白・砂粒	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石井カ」
5	SB055p18	覆土	須恵器	無台杯C	底部破片		6.4		還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石井庄」
6	SB058p04	覆土1	須恵器	無台杯A	底部破片		9		還元炎・灰白色	白・石	ヘラ切り			底部外面墨痕
7	SB058p05 14C9	覆土1 Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部1/3		6.5		酸化炎・にぶい橙色	白	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	墨書：底部外面「庄カ」
8	SB058p05	覆土1	土師器	無台椀	体部～底部1/3		5.8		酸化炎・にぶい橙色	白・石	糸切り？	ロクロナデ		風化激しい
9	SB059p09 14C13.21・15B24・15C4	覆土1 Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	11.8	5.6	3.5	還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	火だすき痕
10	SB059p09・SD036	覆土	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/3	12.6	6.5	3.8	酸化炎・浅黄色	白・石・角	糸切り	ロクロナデ		
11	SB102p06・SD088 12B10・14B5.9.19.20・14C5. 11.21・15B1.5.17・16B16	覆土 Ⅶ	須恵器	甕Ⅲ	口縁部～体部破片	25.4			還元炎・青灰色	白・石・雲		口縁部ロクロナデ、体部外面カキメ、体部内面同心円当て具後カキメ	9世紀前半	外面自然釉。滝寺窯産か
12	SB137p03 16B25	覆土 Ⅶ	土師器	高杯	口縁部～体部1/3	16.7			酸化炎・にぶい橙色	白・石		内外面ヘラミガキ	古墳時代中期	
13	SB137p03 17B21・17C6.9.11.14.15	覆土 Ⅶ	須恵器	稜椀	口縁部～体部破片	16.2			還元炎・灰白色	白		ロクロナデ	8世紀末～9世紀前半	滝寺窯産か
14	SB137p03・SD084 17B21	覆土 Ⅶ	須恵器	杯	口縁部～体部破片	12			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石		ロクロナデ	9世紀中葉	外面スス付着
15	SB137p04	覆土	土師器	無台椀	体部～底部破片		5		酸化炎・浅黄橙色		糸切り	ロクロナデ		墨書：体部外面「□」
16	SB137p08	覆土	須恵器	無台杯C	底部破片		6		還元炎・灰白色	白・石・黒色粒子	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「介」
17	SB143p03	覆土	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部破片	13.8	7.7	4	酸化炎・浅黄橙色	石	糸切り	ロクロナデ		
18	SE014	覆土1	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部破片	13.6			還元炎・灰白色	白	糸切り	外面上半ロクロケズリ	9世紀中葉	滝寺窯産か
19	SE014	覆土1	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部1/3	10.8	6.4	3.4	還元炎・明青灰色	白	ヘラ切り？	ロクロナデ	9世紀中葉	墨書：底部外面「□」。滝寺窯産か
20	SE014 13C15・14C17・14D2	覆土1 Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部3/4	12	6.8	3	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	佐渡小泊窯産か
21	4B4.5.8.14.19.20・5B1	Ⅶ	土師器	甑	口縁部～体部破片	22.2			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角・雲		外面上半カキメ、下半ヘラケズリ、内面ロクロナデ	9世紀？	22と同一個体
22	SK007 4A24・4B4	覆土 Ⅶ	土師器	甑	体部～底部破片		20.6		酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角・雲	ヘラ切り	外面ヘラケズリ、内面ハケメ、ユビオサエ	9世紀？	21と同一個体
23	SK017 13C19	覆土1 Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部1/3	13			還元炎・青灰色	白・砂粒	糸切り・右	外面上半ロクロケズリ		
24	SK040	覆土	須恵器	無台杯C	底部破片		6.2		還元炎・青灰色	白	糸切り・右			底面ヘラ記号「－」
25	SK044 13C3・15B7.8.13.14・15C5・ 16B6.24	覆土 Ⅶ	須恵器	壺	体部～底部破片		11.7		還元炎・灰色	黒色粒子		外面下半ロクロケズリ、内面下半ナデ		内外面自然釉。焼き歪み、火ぶくれあり
26	SK101 13B14.24・13C1.4・13D2・ 14B4.10.14	覆土 Ⅶ	須恵器	有台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	15	11	7.3	酸化炎・にぶい橙色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第1四半期	滝寺窯産か
27	SX004	覆土	土師器	甑	体部破片				酸化炎・橙色	白・石・角		外面ヘラケズリ、内面カキメ後ユビオサエ		
28	SX019 13C9.14	覆土1 Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部2/3	15.8	7	5.4	酸化炎・灰白色	石・角	糸切り・右	ロクロナデ		
29	SX021	覆土	土師器	甕	口縁部～底部破片	13.6	2.8	推定 20	酸化炎・にぶい黄橙色	角・小礫	ヘラ切り	外面下半ヘラケズリ、内面上半輪積み痕、下半ハケメ	古墳時代中期	
30	SX021	覆土	土師器	甕	口縁部～底部1/2	19.4	4.4	28.1	酸化炎・にぶい橙色	石・角・小礫		外面ハケメ後下半ミガキ、内面ハケメ	古墳時代中期	
31	SX025	覆土	土師器	甕Ⅰ	口縁部～底部1/3	24.8			酸化炎・にぶい黄橙色	白・角・雲		外面上半カキメ、下半格子叩き、内面上半カキメ、下半ハケメ		外面スス付着
32	SX025・SX027	覆土1	土師器	椀Ⅰ	口縁部～体部破片	13.4			酸化炎・にぶい黄橙色	白		ロクロナデ		
33	SX027 15C11	覆土 Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/2	11.8	8.4	3	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀中葉	佐渡小泊窯産か
34	SX027	覆土1	須恵器	無台杯CⅢ	口縁部～体部破片	10.7	5	3	還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
35	SX027	覆土1	土師器	無台椀	体部～底部破片		6.6		酸化炎・浅黄橙色	石	糸切り・右	ロクロナデ		
36	SX052	覆土1	土師器	無台椀	体部～底部破片		5.6		酸化炎・にぶい橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		外面スス付着。底面ヘラ記号「×」
37	SX141	覆土	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部破片	12.8		3.3	還元炎・青灰色	白		外面上半ロクロケズリ		体部外面「□」。転用硯
38	SX141	覆土	土師器	無台椀Ⅱ	口縁部～底部2/3	12.4	6.1	4.3	酸化炎・にぶい黄橙色	石	糸切り・右	ロクロナデ		
39	SX142	覆土1	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部3/4	12	6.6	3.3	還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	滝寺窯産か
40	SD013 13C7.8	覆土1 Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部1/2	13	7	3.8	酸化炎・橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	
41	SD024	覆土1	須恵器	有台杯	底部破片		8.6		酸化炎・にぶい黄橙色	白・石	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「万」
42	SD024 14C5.9.10	覆土 Ⅶ	須恵器	杯	口縁部～体部1/2	14			還元炎・明青灰色	白		ロクロナデ		
43	SD030・SD061 13C19・14C10.13.15.23・14D2	覆土 Ⅶ	須恵器	杯	口縁部～体部破片	11.8			酸化炎・橙色	白・石		ロクロナデ		

土器観察表（2）

掲載番号	遺構名・出土地点	層位	種類	器種・細分	遺存部位・遺存率	口径	底径	器高	焼成・色調	胎土	切り離し・方向	調整	時期	備考
44	SD065 14C8	覆土1 Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/2	11.8	6.3	4.2	還元炎・明青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
45	SD125 17C6.11	覆土 Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	13	7.8	3	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・左	ロクロナデ		
46	SD032	覆土1	須恵器	有台杯？	底部破片		12		酸化炎・橙色	白		ロクロナデ		
47	SD032	覆土1	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/3	13.5	5.4	4	酸化炎・にぶい橙色	白	糸切り・右	ロクロナデ		
48	SD032	覆土1	土師器	鍋	口縁部～体部破片	38			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石		内外面カキメ		
49	SD033・SD037・SK044 15B16.17	覆土 Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅰ	頂部～端部1/2	18			還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子		外面上半ロクロケズリ		
50	SD033 14B20・15B16.21・15C1	覆土 Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部1/2	12.7		2.4	還元炎・青灰色	白	糸切り？・右	外面上半ロクロケズリ	9世紀第1四半期	末野窯産か。外面自然釉
51	SD033 14B25・15B12.21.25	覆土 Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部～体部破片				還元炎・青灰色	白	糸切り？	外面上半ロクロケズリ		
52	SD033	覆土	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/3	13	9	4	還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
53	SD033 14B16.18.19	覆土 Ⅶ	須恵器	無台杯B	体部～底部破片		7		還元炎・明青灰色	白	糸切り	ロクロナデ		
54	SD033 14C4.5・15B16	覆土 Ⅶ	須恵器	有耳壺	体部破片				還元炎・紫灰色	白・黒色粒子				外面付着物、器面荒れ。55と同一個体か
55	SD033・15Bp7 14B2.7.24.25・ 14C3.4.5.8.9.12.14・ 15B16.18.22・15C2.3.10.25	覆土1 Ⅶ	須恵器	有耳壺	体部～底部破片		14		還元炎・青灰色	白		外面平行叩き後一部ロクロケズリ、内面ロクロナデ		54と同一個体か
56	SD033	覆土1	土師器	無台椀	体部～底部破片		5.5		酸化炎・浅黄橙色	白・石	糸切り	外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ		
57	SD036	覆土1	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		6.2		還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「百」
58	SD036	覆土1	須恵器	杯	口縁部～体部破片	13			還元炎・灰白色	石・黒色粒子		ロクロナデ		
59	SD036	覆土1	須恵器	杯	口縁部～体部破片	14			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
60	SD080 17B24・17C3.4.8.12	覆土 Ⅶ	土師器	甕Ⅱ	口縁部～底部破片	15	6.4	13	酸化炎・橙色	白・石・雲	ヘラ切り？	外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面ロクロナデ		
61	SD037 15B17・15C2	覆土1 Ⅶ	須恵器	無台杯A	体部～底部破片		5.6		還元炎・灰白色	白	ヘラ切り・左	ロクロナデ		墨書：底部外面「公」
62	SD037 14C21.23	覆土 Ⅶ	須恵器	甕	体部破片				還元炎・青灰色	白・雲・黒色粒子		外面格子叩き後カキメ、内面同心円当て具後カキメ		
63	SD037	覆土1	土師器	甕Ⅱ	口縁部～体部破片	13			酸化炎・にぶい橙色	石		ロクロナデ		内面スス付着
64	17C8.13	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅰ	体部～端部破片	18			還元炎・青灰色	白		外面上半ロクロケズリ	9世紀第1四半期	滝寺窯産か
65	5B1.5	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅱ	頂部～端部1/2	15.8		2.3	還元炎・青灰色	白・黒色粒子	ヘラ切り・右	外面ロクロナデ、内面不定方向のナデ		ヘラ記号：体部外面「刀」。東部丘陵産か
66	5B18.19・5C5・6C1	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅱ	頂部～端部1/3	14.7		2.9	還元炎・暗青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	末野窯産か。内面ヘラ記号「－」
67	17C4.9.10	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅱ	頂部～体部1/3	16.7			還元炎・青灰色	白	糸切り・右	外面上半ロクロケズリ	9世紀第1四半期	滝寺窯産か
68	15C2	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅱ	体部～端部破片	17			還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子		ロクロナデ		
69	17C11	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅱ	体部～端部1/3	14.6			還元炎・暗青灰色	白		外面上半ロクロケズリ		墨書：体部外面「石井」。転用硯
70	18C12	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅱ	体部～端部破片	14.8			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		墨書：体部外面「中」
71	5C12.13.16.19	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部3/4	14		3.5	還元炎・灰白色	石・黒色粒子		ロクロナデ	8世紀末葉	末野窯産か。内面ヘラ記号「－」
72	5B11.13・5C4.25	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部破片	13.4		2.8	還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		
73	18C7	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部2/3	13.1		2.8	還元炎・灰色	白	ヘラ切り？・右	外面上半ロクロケズリ	9世紀第1四半期	末野窯産か
74	15B12.22・15C1	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部1/2	12.7		2.7	還元炎・青灰色	白・石	糸切り？・右	外面上半ロクロケズリ		
75	14C15・15C15	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部2/3	13		3.1	還元炎・青灰色	白・石	糸切り？・右	外面上半ロクロケズリ	9世紀第2四半期	
76	14C15.19	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部1/2	12.2		3.5	還元炎・青灰色	白・石	糸切り？	外面上半ロクロケズリ		
77	16C13	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	完形	12.2		2.8	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り？・右	外面上半ロクロケズリ		転用硯
78	14C15	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部破片	12.2		3.3	還元炎・青灰色	白	糸切り？	外面上半ロクロケズリ		
79	13C13.17.18	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	頂部～端部3/4	13			還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子	糸切り・右	外面上半ロクロケズリ	9世紀第2四半期	
80	15C1	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	体部～端部破片	14			還元炎・青灰色	白		外面上半ロクロケズリ		墨書：体部外面「十カ」。転用硯
81	17B16	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	体部～端部破片	13.6			還元炎・青灰色	白・黒色粒子		ロクロナデ		墨書：体部外面「□」
82	18C11	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	体部～端部破片	13			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		墨書：体部外面「□」
83	16C11	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅲ	体部～端部破片	13			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		墨書：体部外面「□□〔足カ〕」
84	15C1.2.7	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅳ	頂部～端部破片	11.7			還元炎・明青灰色	白		外面上半ロクロケズリ		転用硯
85	15C15	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅳ	体部～端部1/3	9.4			還元炎・青灰色	白		外面上半ロクロケズリ		転用硯
86	16C11	Ⅶ	須恵器	杯蓋Ⅳ	頂部～端部1/2	11.7		2.4	還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り・右	外面上半ロクロケズリ	9世紀中葉	滝寺窯産か
87	5C8.10.13	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部～体部2/3				還元炎・灰白色	白	糸切り・右	外面上半ロクロケズリ		
88	12D5	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部～体部1/3				還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	外面上半ロクロケズリ		
89	14B18	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部～体部1/3				還元炎・青灰色	白		外面上半ロクロケズリ		
90	13D5	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部破片				還元炎・青灰色	白・砂粒	糸切り？・右？	ロクロナデ		
91	14C18	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部～体部破片				酸化炎・浅黄橙色	白		外面上半ロクロケズリ		墨書：体部外面「石□〔庄カ〕」
92	14C11	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部～体部破片				還元炎・青灰色	白・石		外面上半ロクロケズリ、内面滑らか		墨書：体部外面「石井庄」。内面墨痕。転用硯
93	13D3	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部破片				還元炎・灰白色	白		外面上半ロクロケズリ		墨書：頂部外面「□〔石カ〕井庄」
94	15C17	カクラン	須恵器	杯蓋	頂部～体部破片				還元炎・灰白色	白		ロクロナデ		墨書：体部外面「石□」。転用硯
95	16C12	Ⅶ	須恵器	杯蓋	体部破片				酸化炎・黄橙色	白		ロクロナデ		墨書：体部外面「石」
96	15C22	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部破片				還元炎・青灰色	白				墨書：ツマミ上部「田」。転用硯

土器観察表（3）

掲載番号	遺構名・出土地点	層位	種類	器種・細分	遺存部位・遺存率	口径	底径	器高	焼成・色調	胎土	切り離し・方向	調整	時期	備考
97	18C8	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部破片				還元炎・灰白色	白・砂粒		ロクロナデ		墨書：頂部外面「主」
98	15C21	カクラン	須恵器	杯蓋	頂部～体部破片				酸化炎・にぶい黄橙色	白	ヘラ切り？・右	外面上半ロクロケズリ		墨書：体部外面「□」
99	15C22	Ⅶ	須恵器	杯蓋	体部破片				酸化炎・にぶい黄橙色	白		外面上半ロクロケズリ		墨書：体部外面「丁」。転用硯
100	17B21	Ⅶ	須恵器	杯蓋	頂部破片				還元炎・灰白色	白		ロクロケズリ		墨書：頂部外面「□」。転用硯
101	5C19	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅡ	完形	14.4	9.2	3.6	還元炎・灰白色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	向橋窯産か。内外面スス付着
102	14B19.24	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	14	5.8	4.2	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り	外面下半ロクロケズリ	9世紀第1四半期	墨書：底部外面「六」。滝寺窯産か
103	5B1.14・6C6	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部破片	11.1	7.6	3.2	還元炎・青灰色	白・石・雲・黒色粒子	ヘラ切り	ロクロナデ	9世紀第2四半期	内外面自然釉
104	4B20・5B6.11	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/2	11.2	8	3.1	還元炎・青灰色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
105	5B15.20	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部2/3	12.6	8.6	3.8	酸化炎・橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
106	6C8	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/2	12.5	8.2	3.6	還元炎・紫灰色	白・黒色粒子	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	末野窯産か。外面自然釉
107	4C10・5C16	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/2	11.2	7.7	3.9	還元炎・暗青灰色	白・石・砂粒	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
108	14C3	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/3	11.6	6.5	4.3	還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
109	17C7	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部3/4	12	8	4	還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
110	12C8.20.23.25	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部3/4	12.5	7	4.2	還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
111	13B11	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/2	11.8	7	3.8	還元炎・灰白色	白	ヘラ切り？・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
112	14C8.15.20	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部破片	12	8.5	3.5	還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		
113	14B4	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部3/4	11.7	7.7	3.8	酸化炎・にぶい橙色	白・石・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
114	19C5	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部3/4	11.4	7.6	3.5	還元炎・青灰色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
115	14C25	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部破片	12.4	8.1	4.2	還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		転用硯
116	14C25	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/3	11.7	6	4.1	還元炎・青灰色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		
117	12B5・13D2	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅢ	口縁部～底部1/3	12	8.2	3.4	還元炎・灰白色	白・黒色粒子	糸切り	ロクロナデ		墨書：体部外面「□」
118	4C3.11.13.17	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部破片	10.7	7.8	3.3	還元炎・暗青灰色	白・角		ロクロナデ		
119	6C4	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部1/3	10.6	7.2	3.2	還元炎・青灰色	白・砂粒	糸切り・左	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か。内面自然釉
120	6C11.22	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	完形	10.2	6.7	4	還元炎・暗青灰色	白・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
121	13C10・14C23	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部1/3	10	7.2	4	還元炎・青灰色	白・砂粒	糸切り	ロクロナデ		
122	13C17.20.24・14C11.12.16	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部1/2	10	6.2	3.8	還元炎・紫灰色	白・黒色粒子	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	末野窯産か
123	14B18	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部1/2	10.7	6	4.5	還元炎・青灰色	白・石・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	滝寺窯産か
124	14B4	Ⅶ	須恵器	有台杯AⅣ	口縁部～底部3/4	10.8	7.4	3.5	還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	墨書：底部外面「人」。滝寺窯産か
125	13C10・13D7・15C15.18	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅠ	口縁部～底部1/2	18	10	8.6	還元炎・青灰色	白・石・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ		滝寺窯産か
126	12B20・13B12.17	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅠ	口縁部～底部1/3	15.2	9.6	6.6	還元炎・明青灰色	白	ヘラ切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」
127	14C13.15・15C11.16	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	16.2	12.4	6.6	還元炎・青灰色	白・砂粒	糸切り？・右？	ロクロナデ	9世紀第1四半期	滝寺窯産か
128	15C24.25	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅡ	口縁部～底部破片	14.5	10	6.5	還元炎・暗青灰色	白・石		ロクロナデ		
129	14C3.7	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅡ	口縁部～底部破片	14.2	10	6.3	還元炎・青灰色	白・雲	糸切り	ロクロナデ		
130	15C16	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	14	8	5.6	還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子・砂粒	ヘラ切り	外面下半ロクロケズリ		
131	14C7.25	Ⅶ	須恵器	有台杯BⅡ	口縁部～底部破片	15.6	8	5.8	還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子		ロクロナデ		
132	6B23	Ⅶ	須恵器	有台杯B	体部～底部破片		10		還元炎・暗青灰色	白・石・砂粒		ロクロナデ		
133	13C15・14C12.14.15.17.19	Ⅶ	須恵器	有台杯B	体部～底部破片		10.7		還元炎・青灰色	白・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ		
134	15C12	Ⅶ	須恵器	有台杯B	体部～底部破片		8.4		還元炎・青灰色	白・角	糸切り	ロクロナデ		
135	10B20	Ⅶ	須恵器	有台杯	体部～底部破片		9.8		還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	
136	5D1・6C17	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		7.5		還元炎・暗青灰色	白・砂粒	糸切り・右	ロクロナデ		
137	16B5・16C4	Ⅶ	須恵器	有台杯	体部～底部2/3		8.3		酸化炎・橙色	白・石	ヘラ切り・右	ロクロナデ		
138	14C13・15B21	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		7.6		還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		転用硯
139	15B25.15C5	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		8.5		還元炎・明青灰色	白・石	糸切り・右？	ロクロナデ		ヘラ記号：底部外面「×」
140	14C21・14D3	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		8.4		還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石井庄」
141	13C14.20	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		7		還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
142	15C15	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		7.2		還元炎・灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
143	11C3	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		8		還元炎・灰白色	石	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
144	16B15・17C11	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		8		還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
145	13C16	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		7		還元炎・青灰色	白	糸切り			墨書：底部外面「石」ヘラ記号：底部外面「×カ」
146	15C20	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		10.2		還元炎・青灰色	白	ヘラ切り？	底部内面不定方向のナデ		墨書：底部外面「□」
147	13C20	Ⅶ	須恵器	有台杯	体部～底部破片		10		還元炎・青灰色	白	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」
148	17C3	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片		7.6		還元炎・灰白色	石・砂粒	ヘラ切り？	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」
149	15C23	Ⅶ	須恵器	有台杯	底部破片				還元炎・青灰色	白	糸切り			墨書：底部外面「□」（墨点3点のみ）
150	5B19・5C4・6C1	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅠ	口縁部～底部1/2	13.2	9	3.4	還元炎・灰白色	白・海	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	向橋窯産か。内外面スス付着
151	17B16	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅠ	完形	13.5	8.4	3.2	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」。歪み
152	5B15・6B11	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部3/4	12.2	9.6	3.2	還元炎・灰白色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	外面スス付着
153	6B11	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	12.5	9.8	3.9	還元炎・灰白色	白・角	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	底部スス付着
154	5B16・5C14.18.19・6C11	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	12.8	7.8	3.1	還元炎・灰白色	白	ヘラ切り	ロクロナデ	8世紀末葉	
155	6C2.3.9	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部2/3	12.2	8.3	2.9	還元炎・明青灰色	白・石	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	
156	5A24	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	12.7	9.8	3.5	還元炎・灰白色	白・石・砂粒	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	底面ヘラ記号「×」、スス付着
157	5C3.16	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	完形	11.8	8.5	3.3	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第1四半期	
158	4B20	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/2	12.2	8.6	3.4	還元炎・灰白色	白・角	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第1四半期	末野窯産か
159	5C3.8	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部3/4	12.2	9.2	2.9	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀第1四半期	
160	5C10・6C12	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	11.6	9.2	3.4	還元炎・灰白色	白・石	ヘラ切り	ロクロナデ	9世紀第1四半期	末野窯産か
161	6C13	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部破片	12	9.5	3	還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り	ロクロナデ	9世紀第2四半期	佐渡小泊窯産か

土器観察表（4）

掲載番号	遺構名・出土地点	層位	種類	器種・細分	遺存部位・遺存率	口径	底径	器高	焼成・色調	胎土	切り離し・方向	調整	時期	備考
162	14B21	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/2	12	6	3	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀中葉	佐渡小泊窯産か
163	14B22	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部2/3	12.1	8.2	3.1	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀中葉	佐渡小泊窯産か
164	14B22	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部1/3	12.8	7.8	3.3	還元炎・灰白色	白・石・砂粒	ヘラ切り？・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	佐渡小泊窯産か
165	15C2	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部3/4	12.7	8	3	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・左	ロクロナデ	9世紀第3四半期	佐渡小泊窯産か
166	13C4.10	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部破片	12	9.7	3	還元炎・灰白色	白		ロクロナデ		
167	15D4	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部破片	12	8	3.2	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り	ロクロナデ		
168	14B22	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部破片	12.4	8.7	3.1	還元炎・青灰色	白	ヘラ切り？・右	ロクロナデ		
169	15C1	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅡ	口縁部～底部破片	13	8.4	3.7	還元炎・灰白色	白・石・砂粒		ロクロナデ		
170	14B4	Ⅶ	須恵器	無台杯AⅢ	口縁部～底部破片	10.7	7.8	3.3	還元炎・灰白色	石・砂粒	ヘラ切り？	ロクロナデ		
171	5C4	Ⅶ	須恵器	無台杯A	底部破片		9.6		還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り・右	ロクロナデ	8世紀末葉	
172	6C13	Ⅶ	須恵器	無台杯A	体部～底部2/3		9.3		還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ		佐渡小泊窯産か
173	15C25	カクラン	須恵器	無台杯A	底部破片				還元炎・灰白色	白	ヘラ切り			墨書：底部外面「石井庄」
174	19B16	Ⅶ	須恵器	無台杯A	底部破片		7.6		還元炎・青灰色	白	ヘラ切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
175	15C15	Ⅶ	須恵器	無台杯A	体部～底部破片		7		還元炎・青灰色	白	ヘラ切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
176	18C4.9	Ⅶ	須恵器	無台杯A	底部破片		8		還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り・左？	ロクロナデ		墨書：底部外面「石カ」
177	不明	不明	須恵器	無台杯A	底部破片		8		還元炎・青灰色	白	ヘラ切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□〔石カ〕」
178	15C24	Ⅶ	須恵器	無台杯A	底部破片				還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・右？			墨書：底部外面「庄カ」
179	15C17	カクラン	須恵器	無台杯A	底部破片		6.7		還元炎・青灰色	白	ヘラ切り？			墨書：底部外面「□」。内面墨痕
180	13C15・14B23・14C11.16	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部1/2	11.2	6.7	3.7	還元炎・紫灰色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		末野窯産か
181	14C4	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部破片	12.2	8	4.1	還元炎・青灰色	白	糸切り	ロクロナデ		
182	15B24・15C4	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部破片	11.6	7	3.5	還元炎・灰白色	白	糸切り	ロクロナデ		
183	15C16	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部破片	11.5	7.7	3.3	還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
184	17C15.16	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部2/3	12.6	7	4	還元炎・灰白色	石・砂粒	糸切り・右？	ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
185	17B21・17C1	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	12	6	4	還元炎・灰白色	白・石	糸切り	ロクロナデ		
186	17C2.7	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	12	7.4	3.5	還元炎・青灰色	白	糸切り？	ロクロナデ	9世紀第3四半期	
187	17B21	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	11.8	7	3.3	還元炎・青灰色	白・石・黒色粒子	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	
188	17B16.21	Ⅶ	須恵器	無台杯BⅡ	口縁部～底部1/3	12.5	6.6	3.7	酸化炎・にぶい橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：体部外面「□」
189	18C2.6.11	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅠ	口縁部～底部1/2	13.3	7.7	3.8	還元炎・灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	大貫窯産か
190	14C5・15B17.22.23・15C3	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部1/3	12.6	6.3	3.8	還元炎・明青灰色	白・黒色粒子	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	大貫窯産か
191	13C10	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部1/3	12.8	7	3.8	還元炎・青灰色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	大貫窯産か
192	15B5	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部2/3	12	6.4	3.8	還元炎・青灰色	白・石・砂粒	糸切り・左	ロクロナデ	9世紀第2四半期	大貫窯産か
193	15B3	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部破片	12	6.8	4.5	還元炎・灰白色	白・石	糸切り	ロクロナデ		
194	14C11	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部破片	12.6	8	3.8	還元炎・灰白色	白	糸切り	ロクロナデ		
195	14B22	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部1/2	12.5	6.2	3.4	還元炎・灰白色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	墨書：底部外面「下□〔木カ〕」
196	13C18.19.23	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部1/3	12.3	7.2	3.6	還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「文」
197	13D5	Ⅶ	須恵器	無台杯CⅡ	口縁部～底部破片	12.4	6.8	3.9	還元炎・灰白色	黒色粒子	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：体部外面横位「石井庄」
198	16B12	Ⅶ	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		7		還元炎・青灰色	白・雲		ロクロナデ		墨書：体部外面横位「石井」
199	13D5	Ⅶ	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		7		還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石□〔井カ〕□」。体部外面墨痕
200	14C11	Ⅶ	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		7		還元炎・灰白色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石」（略草字体）ヘラ記号：底部外面「×」
201	14C6	Ⅶ	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		7		還元炎・明青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石カ」（特異字体）ヘラ記号：底部外面「×」か
202	15C23	カクラン	須恵器	無台杯C	底部破片		6.6		還元炎・灰白色	白・石・黒色粒子	糸切り・右？	ロクロナデ		墨書：底部外面「□〔庄カ〕」
203	16C9	Ⅶ	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		6.8		還元炎・灰白色	黒色粒子	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」
204	13B10	Ⅶ	須恵器	無台杯C	体部～底部破片		7		還元炎・青灰色	白	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「□〔庄〕」
205	14C20.25・14D2	Ⅶ	須恵器	無台杯C	底部破片		6		還元炎・灰白色	石・黒色粒子	糸切り・右	ロクロナデ		転用硯
206	4B18.20.25	Ⅶ	須恵器	杯	口縁部破片	13			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
207	5B18・6C1.12	Ⅶ	須恵器	杯	口縁部破片	12.8			還元炎・青灰色	白・石		ロクロナデ	9世紀第2四半期	
208	14C12	Ⅶ	須恵器	杯	口縁部破片				還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		墨書：体部外面横位「井」
209	19B21	Ⅶ	須恵器	杯	底部破片				還元炎・青灰色	白	ヘラ切り・左	ロクロナデ		墨書：底部外面「庄」
210	14C2	Ⅶ	須恵器	杯	底部破片				酸化炎・にぶい橙色	白	糸切り			墨書：底部外面「田」か
211	5B5	Ⅶ	須恵器	稜椀	底部破片		10.7		還元炎・灰白色	白・黒色粒子	ヘラ切り	ロクロナデ	9世紀前半	
212	15B14	Ⅶ	須恵器	長頸瓶	口縁部破片	10.8			還元炎・暗青灰色	白		ロクロナデ	9世紀第3四半期	
213	14C9	Ⅶ	須恵器	長頸瓶	口縁部破片	11			還元炎・明青灰色	白		ロクロナデ	9世紀第2四半期	滝寺窯産か
214	14D2	Ⅶ	須恵器	長頸瓶	口縁部破片	14			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ	9世紀第1四半期	滝寺窯産か
215	12B25・12C5	Ⅶ	須恵器	長頸瓶	口縁部破片				還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
216	16C13	Ⅶ	須恵器	長頸瓶	頸部～体部破片				還元炎・青灰色	白・石		ロクロナデ		
217	15C23	Ⅶ	須恵器	長頸瓶	頸部～体部破片				還元炎・灰色	白・雲・黒色粒子		ロクロナデ		
218	14B10・14C5	Ⅶ	須恵器	横瓶	口縁部～体部破片	10.8			還元炎・灰白色	白・石		ロクロナデ		
219	14C24 14C19.24	Ⅰ Ⅶ	須恵器	横瓶	口縁部～体部破片	10			還元炎・明青灰色	白		ロクロナデ	9世紀前半	滝寺窯産か
220	16C13	Ⅶ	須恵器	横瓶	口縁部～体部破片	10.4			還元炎・青灰色	白		外面ロクロナデ、体部内面指頭圧痕		
221	16B15	Ⅶ	須恵器	壺	体部～底部破片		6.4		還元炎・青灰色	白・石	ヘラ切り	ロクロナデ		ヘラ記号：体部外面「＋」
222	13D4	Ⅶ	須恵器	短頸壺	口縁部～体部破片	12			還元炎・青灰色	白		ロクロナデ		
223	14B12.14・17B21・17C7.11	Ⅶ	須恵器	壺	頸部～体部1/2				還元炎・紫灰色	白		外面上半ロクロナデ、下半ロクロケズリ		

土器観察表（5）

掲載番号	遺構名・出土地点	層位	種類	器種・細分	遺存部位・遺存率	口径	底径	器高	焼成・色調	胎土	切り離し・方向	調整	時期	備考
224	6C2.3.7.11.12	Ⅶ	須恵器	短頸壺	体部～底部破片		5.4		還元炎・灰白色	白	ヘラ切り・右	ロクロナデ	9世紀前半	
225	12C15.22.25・ 13C11.12.16.17.21・14C7	Ⅶ	須恵器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	62			還元炎・青灰色	白		口縁部ロクロナデ、体部外面平行叩き、体部内面同心円当て具		
226	13C13	Ⅶ	須恵器	甕Ⅰ	口縁部破片	59.2			還元炎・暗青灰色	白・石		外面櫛描波状文2段		ヘラ書：内面横位「人」
227	9B5	Ⅶ	須恵器	甕Ⅲ	口縁部破片	35.2			還元炎・青灰色	石		ロクロナデ		内外面荒れ
228	17B18	Ⅶ	須恵器	甕Ⅲ	口縁部破片	26			還元炎・暗青灰色	白		内面カキメ？		
229	12B24・13B11・14C6・15C11	Ⅶ	須恵器	甕Ⅲ	口縁部～体部破片	27			還元炎・灰白色	白・石・砂粒		ロクロナデ		
230	11C5・12C14.20・ 13C5.13.14.16.18	Ⅶ	須恵器	甕Ⅲ	口縁部～体部破片	24.6			還元炎・青灰色	白・雲		口縁部ロクロナデ、体部外面平行叩き後カキメ、体部内面同心円当て具		
231	13C14	Ⅶ	須恵器	甕Ⅳ	口縁部破片	13.8			還元炎・暗青灰色	白		ロクロナデ		内面荒れ
232	13C12.17	Ⅶ	須恵器	甕	口縁部破片				還元炎・灰白色	白・石		外面櫛描波状文2段		
233	15C1・15D2	Ⅶ	須恵器	甕	口縁部破片				還元炎・灰白色	白		外面櫛描波状文		
234	6C25	Ⅶ	須恵器	甕	体部破片				還元炎・青灰色	白		外面平行叩き後カキメ、内面同心円当て具		
235	5B24	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/3	15	6.5	4.3	酸化炎・橙色	石	糸切り？	ロクロナデ	9世紀第3四半期	
236	14C9	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/3	14	6	5.6	酸化炎・にぶい橙色	白		ロクロナデ		内面スス付着
237	16C11 15C10	Ⅶ カクラン	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/3	16	6	4.7	酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角	糸切り	ロクロナデ	9世紀第3四半期	
238	16B17	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/2	14.2	6.6	3.9	酸化炎・橙色	白・石・角	糸切り・右	ロクロナデ		外面スス多く付着
239	15C7.13	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/3	14	6	5	酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角	糸切り・右	ロクロナデ		
240	14C14	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部3/4	13.3	6	3.6	酸化炎・浅黄橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		
241	12B10	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/2	13.1	6.2	3.7	酸化炎・浅黄橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		ゆがみ
242	14C4.9	Ⅶ	土師器	無台椀BⅠ	口縁部～底部1/2	13.6	7	3.6	酸化炎・灰白色	白	糸切り？・右？	ロクロナデ		
243	19C2	Ⅶ	土師器	椀BⅠ	口縁部～体部破片	18			酸化炎・浅黄橙色	白・石		ロクロナデ		
244	16C6	Ⅶ	土師器	椀BⅠ	口縁部～体部破片	14			酸化炎・にぶい黄橙色	角		ロクロナデ		墨書：体部外面横位「□」
245	5B20	Ⅶ	土師器	無台椀AⅡ	口縁部～底部破片	12	8	3.1	酸化炎・橙色	石・角		ロクロナデ		
246	4B25	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部2/3	12	5.5	3.4	酸化炎・橙色		糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	
247	5B9	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/3	11.8	5	3.5	酸化炎・浅黄橙色	白	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	
248	12B3	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部破片	13	6.2	3.6	酸化炎・浅黄色	石		ロクロナデ		
249	13A21	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部破片	13	6.5	3.7	酸化炎・浅黄色	石		ロクロナデ		
250	14C3	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	完形	13	5.6	3.7	酸化炎・にぶい橙色	石	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	
251	15B13	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/2	13	8	3.7	酸化炎・浅黄橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		
252	15B16	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/2	13	5.4	3.6	酸化炎・にぶい橙色	白・角	糸切り？	ロクロナデ		
253	14C5	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/2	13	6	3.7	酸化炎・浅黄橙色	石	糸切り・右	ロクロナデ		
254	13C15	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	完形	12.8	6	3.9	酸化炎・橙色	白・石・角	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第2四半期	
255	19C5	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	完形	12.8	7.1	3.8	酸化炎・浅黄橙色	白・石	糸切り	ロクロナデ		ゆがみ
256	17C14	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部2/3	12.6	5.4	3.9	酸化炎・にぶい橙色	白・角	糸切り	ロクロナデ		
257	13C21	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部破片	12	5.5	3.7	酸化炎・灰白色			ロクロナデ		
258	13C14	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部破片	12	5	3.1	酸化炎・浅黄橙色	白		ロクロナデ		
259	14C17	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部破片	12	6.5	3	酸化炎・橙色	石		ロクロナデ		
260	14B8.21	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/3	11.8	4	3	酸化炎・橙色	白	糸切り・右？	ロクロナデ		
261	14C19	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/2	13	6	3	酸化炎・橙色	白・雲	糸切り・右	ロクロナデ		底面ヘラ記号「×」
262	14C4.9.14	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部2/3	13	6	3.9	酸化炎・浅黄橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		口縁部スス付着、底面ヘラ記号「×」
263	13C10	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	完形	12.6	6.4	3.7	酸化炎・浅黄橙色	白・角	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	墨書：体部外面「石□」ヘラ記号：底部外面「×」
264	13C13.14.15	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部1/3	12.6	6.4	3.8	酸化炎・にぶい橙色	白・石・角	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
265	13C15	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	完形	12.2	6.1	4	酸化炎・にぶい橙色	白・石・雲	糸切り・右	ロクロナデ	9世紀第3四半期	墨書：底部外面「石庄」
266	13C15	Ⅶ	土師器	無台椀BⅡ	口縁部～底部3/4	12.3	6.3	4.2	酸化炎・にぶい橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
267	13C15	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部1/3		6		酸化炎・浅黄橙色	白・雲	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
268	15C1	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部破片		5.6		酸化炎・にぶい黄橙色	白・石	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄」
269	19C5	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		5.6		酸化炎・橙色	白・角	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「石庄カ」
270	14C8	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部破片		6		酸化炎・にぶい黄橙色	白・角	糸切り	ロクロナデ		墨書：体部外面横位「石□〔井カ〕」
271	不明	不明	土師器	無台椀	体部～底部破片		6		酸化炎・にぶい黄橙色	白	糸切り・右？	ロクロナデ		墨書：体部外面横位「石□〔庄カ〕」
272	15D3	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		5.4		酸化炎・にぶい黄橙色	白	糸切り・右			墨書：体部外面「□□〔石井カ〕」
273	13C15	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		7		酸化炎・にぶい黄橙色	白・角	糸切り			墨書：底部外面「石□」
274	13C20	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		6		酸化炎・にぶい黄橙色	石	糸切り			墨書：底部外面「石」
275	13C24	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		6.6		酸化炎・にぶい橙色	白・雲	糸切り			墨書：底部外面「石」
276	14C24	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		6		酸化炎・橙色	白	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「石」
277	15C24	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		6.4		酸化炎・にぶい黄橙色	白・石	糸切り			墨書：底部外面「石カ」
278	15C16	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片				酸化炎・にぶい黄橙色		糸切り			墨書：底部外面「石」
279	14C5	Ⅶ	土師器	椀	底部破片				酸化炎・にぶい黄橙色	白	糸切り			墨書：底部外面「石」
280	14C19	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部破片		6.6		酸化炎・橙色	白	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□〔石カ〕」
281	13C10	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部破片		7		酸化炎・にぶい黄橙色	白・角	糸切り			墨書：底部外面「庄」
282	不明	不明	土師器	椀	体部破片				酸化炎・にぶい黄橙色	雲		ロクロナデ		墨書：体部外面横位「庄」
283	14C11	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部破片		5.2		酸化炎・橙色	白・石	糸切り・右	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」
284	14C19	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		6		酸化炎・にぶい黄橙色	白	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」（墨線2本）
285	14C19	Ⅶ	土師器	無台椀	体部～底部破片		5.6		酸化炎・浅黄橙色	角	糸切り	ロクロナデ		墨書：底部外面「□」

土器観察表（6）

掲載番号	遺構名・出土地点	層位	種類	器種・細分	遺存部位・遺存率	口径	底径	器高	焼成・色調	胎土	切り離し・方向	調整	時期	備考
286	15C24	Ⅶ	土師器	無台椀	底部破片		5.6		酸化炎・にぶい黄橙色	白	糸切り			墨書：底部外面「□」
287	16C6	カクラン	土師器	椀	口縁部～体部破片				酸化炎・浅黄橙色	石		ロクロナデ		墨書：体部外面横位「□〔石カ〕」
288	13B21	Ⅶ	土師器	有台椀	台部破片		12.1		酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角		ロクロナデ		
289	14C11・15C2	Ⅶ	土師器	蓋	頂部～端部破片	23.7		6.3	酸化炎・浅黄橙色	白・石		外面上半ロクロケズリ？	9世紀前半	
290	5C19	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	21.2			酸化炎・にぶい黄色	白・石・角		外面下半ヘラケズリ、内面カキメ		
291	4B24	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	22			酸化炎・橙色	白・石・角		内外面カキメ		
292	5C14	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	20			酸化炎・にぶい黄橙色	石・角		内外面カキメ		内外面スス付着
293	5C3.9.10	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	19			酸化炎・にぶい黄橙色	石		ロクロナデ		内外面スス付着
294	6C1	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	22			酸化炎・浅黄橙色	白・石・雲		外面上半カキメ、下半ヘラケズリ、内面カキメ		
295	5B11.16	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	20			酸化炎・にぶい黄橙色	石・角		内面カキメ		
296	13C5・14C6	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	31.8			酸化炎・橙色	白・石		外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面ロクロナデ		
297	15B5	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	19.4			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石		ロクロナデ		
298	19C5	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	22.2			酸化炎・浅黄橙色	白・石・角		外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ		
299	13B8	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	20.8			酸化炎・にぶい黄橙色	白・角		外面上半ロクロナデ、下半平行叩き、内面上半ロクロナデ、下半同心円当て具		外面スス付着
300	15C25	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	20			酸化炎・浅黄橙色	石		ロクロナデ		
301	15C16.17	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	26.8			酸化炎・にぶい黄橙色	石・角・雲		ロクロナデ		外面スス付着
302	13C15	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	24.5			酸化炎・浅黄橙色	石		外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面ロクロナデ		
303	15C25・15D4	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	28			酸化炎・にぶい黄橙色	石・角		外面下半ヘラケズリ		
304	15C24	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	23.8			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角		ロクロナデ		
305	15C16	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	22			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角・雲		外面カキメ		外面スス付着
306	16B8	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	24			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角		内面ハケメ		
307	15C1.2	Ⅶ	土師器	甕Ⅰ	口縁部～体部破片	25			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石		内外面カキメ		
308	13C8	Ⅶ	土師器	甕Ⅱ	口縁部～体部破片	15			酸化炎・橙色	白・石・角		ロクロナデ		
309	15C23	Ⅶ	土師器	甕Ⅱ	口縁部～体部破片	14			酸化炎・にぶい黄橙色	角		内外面カキメ		内外面スス多く付着
310	13B4	Ⅶ	土師器	甕Ⅱ	口縁部～体部破片	13.6			酸化炎・橙色	白		ロクロナデ		口縁部内面スス付着
311	14C5	Ⅶ	土師器	甕Ⅱ	口縁部～体部破片	15			酸化炎・橙色	白		ロクロナデ		
312	5C19.20.24	Ⅶ	土師器	甕	体部～底部1/3				酸化炎・にぶい橙色	白・石・角		外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面上半カキメ、下半ナデ		内外面スス付着
313	6C7	Ⅶ	土師器	鍋	口縁部～体部破片	39.7			酸化炎・灰白色	石		外面上半カキメ、下半ヘラケズリ		外面スス付着
314	6C11.12	Ⅶ	土師器	鍋	口縁部～体部破片	34.5			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石・角		外面上半カキメ、下半ヘラケズリ、内面カキメ		内外面スス付着
315	5B1.6.7.11.16	Ⅶ	土師器	鍋	口縁部～体部破片	33.2			酸化炎・にぶい黄橙色	石		外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ		
316	4B25	Ⅶ	土師器	鍋	口縁部～体部破片	22			酸化炎・橙色	白・角		外面上半カキメ、下半ヘラケズリ		内外面スス付着
317	5B16	Ⅶ	土師器	鍋	体部破片				酸化炎・にぶい黄橙色	石				把手部、外面スス付着
318	14B25	Ⅶ	土師器	鍋	口縁部～体部破片	38			酸化炎・橙色	白・石・角		外面上半カキメ、下半平行叩き目、内面カキメ		外面スス多く付着
319	15B7	Ⅶ	土師器	鍋	口縁部～体部破片	31			酸化炎・橙色	白・石		外面上半ロクロナデ、下半ヘラケズリ、内面ハケメ		
320	4B18.20	Ⅶ	土師器	甑	体部破片				酸化炎・淡黄色	白・石・角				321と同一個体か
321	5B14・5C7・6C2.3	Ⅶ	土師器	甑	底部破片		22		酸化炎・淡黄色	白・石・角				320と同一個体か
322	5B11.13.15.16・5C4.18	Ⅶ	土師器	甑	口縁部～体部破片	17			酸化炎・にぶい橙色	石		外面カキメ		口縁内傾
323	5C3	Ⅶ	土師器	甑	口縁部～体部破片	25.2			酸化炎・にぶい黄橙色	白・石		外面上半カキメ、下半ヘラケズリ、内面カキメ		口縁内傾、内面スス付着
324	15D3	Ⅶ	黒色土器	椀Ⅰ	口縁部破片	19			酸化炎・橙色	白		外面ロクロナデ、内面ミガキ		
325	14C25 15C21	Ⅶ カクラン	黒色土器	無台椀Ⅰ	口縁部～底部1/2	16.6	6.8	5.6	酸化炎・にぶい黄橙色	白・石	糸切り	外面上半ロクロナデ、下半ロクロケズリ、内面ミガキ		
326	5B11.14・5C15	Ⅶ	黒色土器	無台椀Ⅱ	口縁部～底部1/3	12.6	5.2	5.6	酸化炎・灰白色	白・石		外面下半ヘラケズリ、内面ヘラミガキ		
327	16B8	Ⅶ	黒色土器	無台椀Ⅱ	口縁部～底部1/3	10.6	4.8	5	酸化炎・にぶい橙色	白・雲	糸切り？	外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ		
328	18B23	Ⅶ	黒色土器	無台椀	体部～底部破片		6		酸化炎・浅黄橙色	白・雲	ヘラ切り？	内面ミガキ		
329	13B10	Ⅶ	珠洲焼	甕	口縁部破片				還元炎・青灰色	白			14世紀初頭	
330	14B5	Ⅶ	珠洲焼	甕	体部破片				還元炎・青灰色	白			14世紀初頭	
331	16B23	Ⅶ	珠洲焼	擂鉢	体部破片				還元炎・青灰色	白		ロクロナデ	14世紀後半	
332	19B15	Ⅶ	珠洲焼	擂鉢	体部破片				還元炎・青灰色	白		ロクロナデ	14世紀後半	
333	13C5	Ⅶ	珠洲焼	擂鉢	体部破片				還元炎・青灰色	白		ロクロナデ	14世紀後半	
334	15C10	Ⅶ	越前焼	擂鉢	底部破片		11.2		酸化炎・にぶい橙色	白		ロクロナデ		
335	16B	カクラン	磁器	小杯	底部破片		2.5					ロクロ成形、施釉	16世紀末～17世紀初頭	中国青花
336	不明	カクラン	磁器	瓶	頸部破片					黒色粒子		ロクロ成形、施釉	17世紀後半	肥前。染付瓶
337	15D1	Ⅱ	磁器	皿	底部破片		4.5			白		ロクロ成形、施釉	17世紀後半～18世紀前半	伊万里。染付皿
338	17B16（河川跡）	砂層	磁器	椀	底部破片		4.7					ロクロ成形、施釉	17世紀半ば	肥前。底部溶着物あり
339	16C2	カクラン	陶器	椀	底部破片		3.2					ロクロ成形、施釉	17世紀前半	唐津
340	不明	Ⅰ	陶器	皿？	底部破片		4.1					ロクロ成形、施釉	16世紀末～17世紀初頭	唐津
341	不明	Ⅰ	陶器	皿	底部破片		3.6					ロクロ成形、施釉	17世紀前半	唐津。火ぶくれ、高台に溶着物あり
342	15C13	カクラン	陶器	不明	底部破片		4.2					ロクロ成形、施釉	17世紀半ば	

墨書土器一覧表（1）

図版№	グリッド	遺構№	層位	種別	器種	部位	文字内容	判読備考	備考
140	14C21			須恵器	有台杯	底部外面	「石井庄」		
5		SB055-P18	覆土	須恵器	無台杯	底部外面	「石井庄」		
197	13D5			須恵器	無台杯	体部外面	「石井庄」	横位	
92	14C11			須恵器	杯蓋	外面	「石井庄」		転用硯
173	15C25		カクラン	須恵器	無台杯	底部外面	「石井庄」		
93	13D3			須恵器	杯蓋	外面	「□〔石ヵ〕井庄」		
199	13D5			須恵器	無台杯	底部外面	「石□〔井ヵ〕□」	三文字目の墨痕の一部は体部外面に延びたか	
198	16B12			須恵器	無台杯	体部外面	「石井」	横位	
271	不明			土師器	無台杯	体部外面	「石□〔庄ヵ〕」	横位	
69	17C11			須恵器	杯蓋	外面	「石井」		転用硯
270	14C8			土師器	無台杯	体部外面	「石□〔井ヵ〕」	横位	
272	15D3			土師器	無台杯	体部外面	「□□〔石井ヵ〕」	横位	
142	15C15			須恵器	有台杯	底部外面	「石庄」		
4	18C9	SB055-P7	覆土	須恵器	無台杯	底部外面	「石井ヵ」		
141	13C14,20			須恵器	有台杯	底部外面	「石庄」		
151	17B16			須恵器	無台杯	底部外面	「石庄」		
175	15C15			須恵器	無台杯	底部外面	「石庄ヵ」		
174	19B16			須恵器	無台杯	底部外面	「石庄」		
143	11C3			須恵器	有台杯	底部外面	「石庄」		
144	16B15,17C11			須恵器	有台杯	底部外面	「石庄」		
91	14C18			須恵器	杯蓋	外面	「石□〔庄ヵ〕」		
264	13C13,14,15			土師器	無台杯	底部外面	「石庄」		
266	13C15			土師器	無台杯	底部外面	「石庄」		
267	13C15			土師器	無台杯	底部外面	「石庄」		
265	13C15			土師器	無台杯	底部外面	「石庄」		
268	15C1			土師器	無台杯	底部外面	「石庄」		
269	19C5			土師器	無台杯	底部外面	「石庄ヵ」		
94	15C17		カクラン	須恵器	杯蓋	外面	「石□」	下に文字が続くかは残存せず不明	転用硯
273	13C15			土師器	無台杯	底部外面	「石□」	墨痕は確認できるが、判読できず	
263	13C10			土師器	無台杯	体部外面	「石□」	横位。二文字目の墨痕を認めるが、判読できない。	
						底部外面	「×」(ヘラ記号)		
95	16C12			須恵器	杯蓋	外面	「石」		
145	13C16			須恵器	有台杯	底部外面	「石」		
						底部外面	「×ヵ」(ヘラ記号)		
200	14C11			須恵器	無台杯	底部外面	「石」		
						底部外面	「×」(ヘラ記号)		
201	14C6			須恵器	無台杯	底部外面	「石ヵ」		
						底部外面	「×」(ヘラ記号)		
177	不明			須恵器	無台杯	底部外面	「□〔石ヵ〕」	下に文字が続くかは残存せず不明	
176	18C4.9			須恵器	無台杯	底部外面	「石ヵ」		
274	13C20			土師器	無台杯	底部外面	「石」		
276	14C24			土師器	無台杯	底部外面	「石」		
275	13C24			土師器	無台杯	底部外面	「石」		
277	15C24			土師器	無台杯	底部外面	「石ヵ」		
280	14C19			土師器	無台杯	底部外面	「□〔石ヵ〕」	下に文字が続くかは残存せず不明	
279	14C5			土師器	無台杯	底部外面	「石」		
278	15C16			土師器	無台杯	底部外面	「石」		
209	19B21			須恵器	無台杯	底部外面	「庄」	上にも文字のあった可能性あり	
204	13B10			須恵器	無台杯	底部外面	「□〔庄ヵ〕」	上にも文字のあった可能性あり	
178	15C24			須恵器	無台杯	底部外面	「庄ヵ」	上にも文字のあった可能性あり	
287	16C6		カクラン	土師器	杯	体部外面	「□〔石ヵ〕」	横位。下に文字が続くかは残存せず不明	
282	不明			土師器	杯	体部外面	「庄」	横位ヵ。上にも文字のあった可能性あり	
281	13C10			土師器	無台杯	底部外面	「庄」	上にも文字のあった可能性あり	
7	14C9	SB058-P5	1層	土師器	無台杯	底部外面	「庄ヵ」	上にも文字のあった可能性あり	
202	15C23		カクラン	須恵器	無台杯	底部外面	「□〔庄ヵ〕」	上にも文字のあった可能性あり	
102	14B19,24			須恵器	有台杯	底部外面	「六」		
57		SD36	1層	須恵器	無台杯	底部外面	「百」		
41		SD24	1層	須恵器	有台杯	底部外面	「万」		
16		SB137-P8	覆土	須恵器	無台杯	底部外面	「介」		
179	15C17		カクラン	須恵器	無台杯	底部外面	「□」	「介」や「月」などの一部ヵ	底内墨痕
99	15C22			須恵器	杯蓋	外面	「丁」		転用硯
97	18C8			須恵器	杯蓋	外面	「主」		
98	15C21		カクラン	須恵器	杯蓋	外面	「□」	「卿」もしくは「郷」か	

墨書土器一覧表（2）

図版№	グリッド	遺構№	層位	種別	器種	部位	文字内容	判読備考	備考
83	16C11			須恵器	杯蓋	外面	「□□〔足ヵ〕」		
61	15B17,15C2	SD037	1層	須恵器	無台杯	底部外面	「公」		
146	15C20			須恵器	有台杯	底部外面	「□」	「山」と「下」の合字ヵ	
195	14B22			須恵器	無台杯	底部外面	「下□〔木ヵ〕」	「下」と「□〔木〕」は別筆ヵ	
196	13C18,19,23			須恵器	無台杯	底部外面	「文」		
124	14B4			須恵器	有台杯	底部外面	「人」		
210	14C2			須恵器	杯	底部外面	「田」		
96	15C22			須恵器	杯蓋	鈕内上面	「田」		転用硯
70	18B12			須恵器	杯蓋	外面	「中」		
81	17B16			須恵器	杯蓋	外面	「□」	「平」などの可能性がある	
80	15C1			須恵器	杯蓋	外面	「十カ」		転用硯
82	18C11			須恵器	杯蓋	外面	「□」	「石」の可能性あり。№38の類似字形か。	
188	14C11			土師器	無台杯	底部外面	「□」	「石」の可能性あり。№95は近似字形か	
117	12B5,13D2			須恵器	有台杯	体部外面	「□」	横位。「石」の一部ヵ	
208	14C12			須恵器	杯	体部外面	「井」	横位	
100	17B21			須恵器	杯蓋	外面	「□」	逆位。「栝」と思われる墨痕が判読される。	転用硯
19		SE014	1層	須恵器	有台杯	底部外面	「□」	墨点2点のみ	
147	13C20			須恵器	有台杯	底部外面	「□」	墨線2点のみ	
203	16C9			須恵器	無台杯	底部外面	「□」	「井」や「主」などの一部ヵ	
148	17C3			須恵器	有台杯	底部外面	「□」	「井」などの一部ヵ	
126	12B20,13B12, 13B17			須恵器	有台杯	底部外面	「□」		
244	16C6			土師器	杯	体部外面	「□」	横位。木ヘンもしくは禾ヘンか	
15		SB137-P4	覆土	土師器	無台杯	体部外面	「□」	正位ヵ。払いの墨線1条のみ	
149	15C23			須恵器	無台杯	底部外面	「□」	墨点3点のみ	
283	14C15			土師器	無台杯	底部外面	「□」	墨点のみ。「石」や「井」の一部ヵは判読できず	
285	15C24			土師器	無台杯	底部外面	「□」	墨痕のみ	
284	14C19			土師器	無台杯	底部外面	「□」	墨線2条のみ	
286	15C25			土師器	無台杯	底部外面	「□」	墨線2条のみ	
65	5B1,5			須恵器	杯蓋	外面	「刀」(ヘラ書)		東部丘陵産。出土地点が離れるため、図版37には掲載せず
221	16B5			須恵器	壺	体部外面	「＋」(ヘラ記号)		
	17B16,21			須恵器	無台杯	体部外面	「□」	墨書方向は判断できず	
掲載外		SX141	覆土	須恵器	杯蓋	外面	「□」	墨線1条のみ。「石」の一部かも	転用硯
掲載外	15B22			須恵器	無台杯	底部外面	「□」	墨線1条のみ	
掲載外	15C1			須恵器	無台杯	底部外面	「□」	墨線1条のみ	
掲載外	15C9		カクラン	須恵器	無台杯	底部外面	「□」	墨線1条のみ	
掲載外	15C25			須恵器	有台杯	底部外面	「□」	墨線1条のみ	
掲載外	15D3			須恵器	無台杯	底部外面	「□」	墨線1条のみ	
掲載外	16B		カクラン	須恵器	無台杯	底部外面	「□」	墨線1条のみ	
掲載外	14C19			土師器	無台杯	底部外面	「□」	墨線2条の交差のみ	
掲載外	16B14			土師器	無台杯	底部外面	「□」	「石」の可能性あり	
139	15C5,25			須恵器	有台杯	底部外面	「×」(ヘラ記号)		

木製品観察表（1）

No.	遺構名・出土地点	層位・取上げNo.等	品名	樹種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	木取り	備考
343	SB002-P01		柱根	クリ	63.9	9.9	9.3	芯持丸太	底部先端部は両面加工で尖る。
344	SB002-P05		柱根	フジキ属	78	18.0	21.1	芯持丸太	棟持柱。底部先端部は両面加工で尖る。
345	SB002-P02		柱根	モクレン属	54.5	12.7	11.9	芯持丸太	棟持柱。底部先端部は両面加工で尖る。
346	SB002-P04		柱根	ヌルデ	25	11.0	6.2	芯持丸太	底部先端部は両面加工で尖る。
347	SB002-P07		柱根	モクレン属	31.8	7.2	8.1	芯外分割材	底部先端部は片面加工で尖る。
348	SB002-P03		柱根	クリ	38.2	11.6	10.0	芯持丸太	底部先端部は両面加工で尖る。
349	SB003-P07		柱根	クリ	69.2	18.0	19.0	芯外分割材	底部先端部は加工でやや尖る。側面に加工痕あり。
350	SB003-P06		柱根	クリ	98.6	18.3	16.0	芯外分割材	底部先端部は加工でやや尖る。側面に加工痕あり。
351	SB003-P02		柱根	クリ	53.5	16.0	9.0	芯外分割材	側面に加工痕あり。
352	SB003-P03		柱根	クリ	72.4	21.0	14.6	芯外分割材	側面に加工痕あり。
353	SB003-P05		柱根	クリ	35.4	6.9	3.0	柾目	木製品の部材からの転用品。ほぼ全面に加工痕あり。
354	SB003-P08		柱根	クリ	80.4	20.2	19.6	芯持丸太	側面に加工痕あり。
355	SB006-P01		柱根	モクレン属	26.4	8.5	7.8	芯持丸太	底部先端部は片面加工で尖る。
356	SB006-P02		柱根	カエデ属	15.5	12.1	10.5	芯持丸太	棟持柱。底部先端部は片面加工で尖る。
357	SB006-P03		柱根	キハダ	19.2	8.1	6.9	芯持丸太	底部先端部は片面加工で尖る。
358	SB006-P04		柱根	キハダ	25.4	8.7	9.1	芯持丸太	底部先端部は両面加工で尖る。
359	SB006-P05		柱根	キハダ	24.9	13.0	12.0	芯持丸太	棟持柱。底部先端部は両面加工で尖る。
360	SB006-P06		柱根	アカメガシワ	15.7	8.3	8.7	芯持丸太	底部先端部は両面加工で尖る。
361	SB048-P05		柱根	クリ	40.0	16.1	14.8	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。枘穴あり。
362	SB048-P01		柱根	クリ	64.0	17.6	15.0	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
363	SB048-P02		柱根	クリ	58.4	11.4	12.0	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。90度ずれて枘穴あり。
364	SB048-P03		柱根	クリ	77.6	20.0	21.5	芯持丸太	底部先端部は加工で尖る。
365	SB048-P04		柱根	クリ	102.0	14.7	10.0	芯外分割材	底部先端部は加工でやや尖る。
366	SB048-P08		柱根	クリ	64.6	16.0	12.8	芯外分割材	底部先端部は加工でやや尖る。
367	SB048-P14		柱根		31.5	12.3	13.2	芯持丸太	底部先端部は両面加工で尖る。側面に加工痕あり。
368	SB049-P01		柱根	スギ	101.3	26.3	20.0	芯外分割材	側面に加工痕あり。
369	SB049-P03		柱根	クリ	63.7	21.4	18.4	芯持丸太	底部先端部は加工でやや尖る。側面に加工痕あり。
370	SB049-P05		柱根	クリ	102.0	17.5	16.0	芯外分割材	
371	SB049-P08		柱根	スギ	94.0	23.0	14.5	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。側面加工痕あり。
372	SB049-P06		柱根	クリ	52.0	28.0	16.5	芯外分割材	
373	SB049-P04		柱根	スギ	62.0	23.4	21.0	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。側面加工痕あり。
374	SB049-P17		柱根	クリ	39.4	27.3	15.2	芯外分割材	
375	SB049-P11		柱根	クリ	60.8	19.8	19.2	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
376	SB049-P07		柱根	クリ	74.0	19.6	16.0	芯外分割材	正裏面に枘穴、竿穴あり。側面加工痕あり。
377	SB049-P12		柱根	クリ	25.9	9.6	9.8	芯外分割材	側面に加工痕あり。
378	SB049-P14	底面	礎盤（板）	クリ	24.7	9.6	4.5	柾目	
379	SB050-P03	底面-No.4	礎盤（板）		23.2	9.2	2.1	板目	
380	SB050-P03	底面-No.1	礎盤（板）	スギ	26.6	18.6	5.9	板目	
381	SB050-P03	底面-No.2	礎盤（板）		36.8	18.5	2.2	板目	
382	SB050-P03	底面-No.3	礎盤（板）		39.0	14.2	2.2	板目	
383	SB050-P03	覆土	斎串		44.5	3.9	1.2	板目	
384	SB050-P04	底面-No.1	礎盤（板）	スギ	41.8	19.8	3.5	板目	柱重圧痕あり。
385	SB050-P04	底面-No.2	礎盤（板）	スギ	40.0	19.0	4.4	板目	柱重圧痕あり。
386	SB050-P05	覆土下層	礎盤（板）	スギ	33.7	16.0	2.6	板目	柱重圧痕あり。
387	SB050-P05	覆土下層	礎盤（板）		37.6	9.7	3.6	板目	柱重圧痕あり。
388	SB050-P05	覆土下層	礎盤（板）		40.5	11.4	3.4	板目	柱重圧痕あり。
389	SB050-P06	側壁	礎盤（板）	スギ	41.0	18.6	5.1	板目	正裏面に加工痕あり。
390	SB050-P01	底面	敷物（木片）	スギ	12.3	7.4	1.7	柾目	
391	SB055-P07		柱根	カツラ	64.0	24.0	15.6	芯外分割材	底部から正面に加工穴あり。
392	SB056-P02		柱根	スギ	81.2	18.4	11.2	芯外分割材	両側に浅い切れ込みあり。
393	SB058-P01	覆土1層	木簡状木製品		12.2	2.0	0.2	板目	
394	SB058-P01	覆土3層	木簡		9.8	2.0	0.5	柾目	表「□□□上黒米」、裏「十一月ヵ［　　］」。付札木簡。
395	SB058-P06	底面－No.1	板材		23.2	10.0	1.0	板目	
396	SB058-P06	底面－No.2	板材		14.0	6.1	1.9	板目	
397	SB058-P08		柱根	クリ	48.2	20.6	17.4	芯外分割材	
398	SB059-P02		柱根	クリ	53.3	26.8	23.1	芯持丸太	
399	SB059-P03		柱根	クリ	38.2	19.8	12.0	芯持丸太	底部先端部は加工でやや尖る。
400	SB059-P04		柱根	クリ	24.7	14.0	6.5	芯外分割材	
401	SB137-P09	覆土	板材	スギ	70.6	10.9	2.0	板目	
402	SB137-P09	覆土	角材		50.8	2.7	1.4	板目	
403	SB137-P11	底面-No.3	礎盤（板）	スギ	31.3	21.7	6.5	板目	右側面に欠込穴あり。柱重圧痕あり。
404	SB137-P11	底面-No.1	礎盤（板）	スギ	34.6	13.9	2.8	板目	柱重圧痕あり。
405	SB137-P11	底面-No.4	礎盤（板）	ブナ属	35.0	14.1	3.3	板目	柱重圧痕あり。
406	SB137-P11	底面-No.2	礎盤（板）	スギ	31.5	17.0	2.9	板目	柱重圧痕あり。

木製品観察表（2）

No.	遺構名・出土地点	層位・取上げNo.等	品名	樹種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	木取り	備考
407	SB137-P11	底面-No.5	礎盤（板）	スギ	23.0	15.6	5.9	板目	正面左上部に浅い窪みあり。左側面下部はは欠込穴か。
408	SB137-P11	覆土	斎串		22.0	5.1	0.7	板目	鶏頭状
409	SB138-P01		柱根	コナラ属 コナラ亜属コナラ節	31.1	9.5	7.4	芯持丸太	底部先端部は片面加工で尖る。
410	SB143-P01		柱根	クリ	56.0	11.0	5.0	芯外分割材	上端は切断されている。底部先端部は加工で尖る。側面に加工痕あり。
411	SB143-P01	覆土-No.1	刀形木製品？		26.2	4.3	1.0	板目	
412	SB143-P01	覆土-No.2	用途不明木製品		22.3	2.6	2.3	板目	
413	SB144-P01		柱根	クリ	74.2	21.0	21.0	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。底部付近に溝状の掘り込みあり。
414	SA009-P01		杭	クリ	35.3	6.9	3.4	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
415	SA009-P02		杭	コナラ属 コナラ亜属コナラ節	20.1	9.4	6.4	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
416	SA009-P03		杭	クリ	61.6	7.2	1.8	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
417	SA009-P04		杭	カツラ	36.2	5.4	5.1	芯持丸太	底部先端部は加工で尖る。
418	SA009-P05		杭	カツラ	64.0	21.6	20.8	芯持丸太	底部先端部は加工で尖る。
419	SA009-P12		杭	コナラ属 コナラ亜属コナラ節	23.6	9.6	4.3	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
420	SA009-P13		杭	クリ	27.9	5.7	3.1	芯外分割材	底部先端部は加工で尖る。
421	SA009-P14		杭	カツラ	34.3	12.2	6.8	芯持丸太	底部先端部は加工で尖る。
422	SA010-P04		杭	ヤマグワ	27.2	6.3	6.1	芯持丸太	底部先端部は加工で尖る。
423	SE014	覆土1層	板材破片		17.9	10.2	3.2	板目	
424	SD131	覆土-No.1	板材		66.2	5.6	1.9	板目	
425	SD131	覆土-No.2	板材		65.6	8.0	1.4	板目	
426	3C23	Ⅶ	用途不明木製品		21.5	3.9	1.8	板目	
427	15C23	Ⅶ	用途不明木製品		13.7	3.4	1.2	板目	
428	9C12	Ⅶ	用途不明木製品		9.5	6.7	1.1	板目	
429	4D5	Ⅶ	有孔木製品		19.1	3.0	0.6	板目	
430	4B24	Ⅶ	木片		11.2	1.5	0.5	板目	下端部焦げ痕あり。
431	5B20	Ⅶ	木片		16.6	1.7	1.4	柾目	下端部から中央部は焦げ痕あり。
432	12B15	Ⅶ	斎串		21.9	1.8	0.4	柾目	
433	12C15	Ⅶ	板材		23.2	3.3	0.9	板目	
434	12C14	Ⅶ	木簡状木製品		11.9	2.2	0.5	板目	付札。
435	12C15	Ⅶ	木簡状木製品		11.2	2.2	0.4	柾目	付札。

鉄製品観察表

No.	遺構名・出土地点	層位等	器種等	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重さ（g）	遺存状態	備考
436	15B14	Ⅶ	錠前	11.2	1.5	3.1		弦部折れ	いわゆる「海老錠」。筒部長4.4cm。
437	15C17	Ⅶ	鉄斧	8.8	4.0	2.3	86.7	完形	
438	15C11	Ⅶ	釘	4.9	0.7	0.6	8.5	完形	
439	15C25	Ⅶ	刀子？	5.8	0.7	0.2	2.9	下端欠損	
440	SD32	覆土	刃物類？	7.2	2.7	0.9	39.1	完形？	
441	15B22	Ⅶ	鉄片	5.0	3.3	0.6	34.5	完形？	

鉄滓観察表

No.	遺構名・出土地点	層位等	種類等	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重さ（g）	備考
442	15C8	Ⅶ	椀型鍛冶滓	6.2	5.8	2.5	126.8	
443	15C4	Ⅶ	椀型鍛冶滓	6.3	2.8	2.7	75.4	

銭貨観察表

No.	遺構名・出土地点	層位等	銭名	直径（cm）	厚（cm）	重さ（g）	備考
444	15C1	Ⅶ	萬年通寶	2.5			皇朝十二銭。天平宝字四年（760）初鋳。

土製品観察表

No.	遺構名・出土地点	層位等	器種等	遺存状態	外径（cm）	内径（cm）	重さ（g）	備考
445	14C12	Ⅶ	羽口	破片	6.5（推定）			

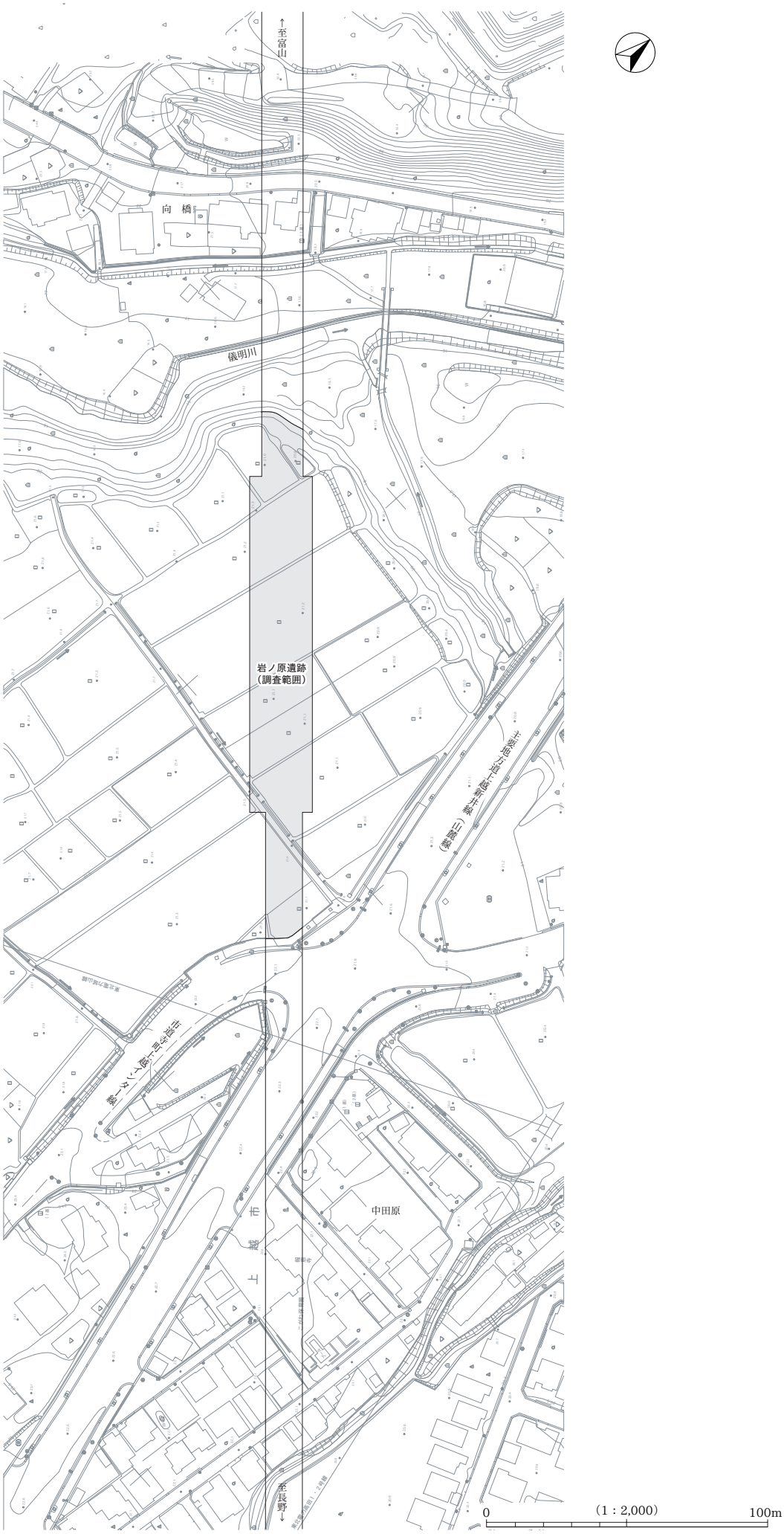
石製品観察表

No.	遺構名・出土地点	層位等	器種等	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備　考
446	5B23	Ⅶ	砥石	26.0	12.6	8.7	2,000	安山岩	2/3	被熱。
447	18B18	Ⅶ	砥石	8.4	7.6	4.2	385	砂岩	1/2	両面、片側面に砥面あり。
448	15C20	Ⅶ	砥石	8.2	5.6	1.9	127	凝灰岩	破片	両面に砥面あり。
449	13D1	Ⅶ	敲打痕のある礫	13.5	10.9	2.9	485	安山岩	完形	両側縁、下端に敲打痕あり。
450	14C22	Ⅶ	パステル形石製品	2.8	0.7	0.6		凝灰岩	完形？	割れ面の一部に研磨痕あり。
451	SE014	覆土1層	搬入礫	43.8	24.4	22.8	35,000	凝灰岩	完形	井戸廃棄儀礼に使用か。

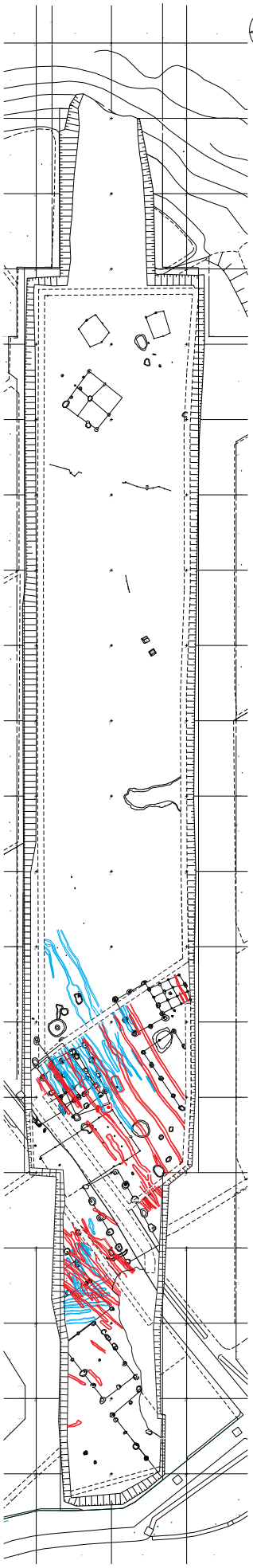
図　　版

調査範囲と周辺の地形

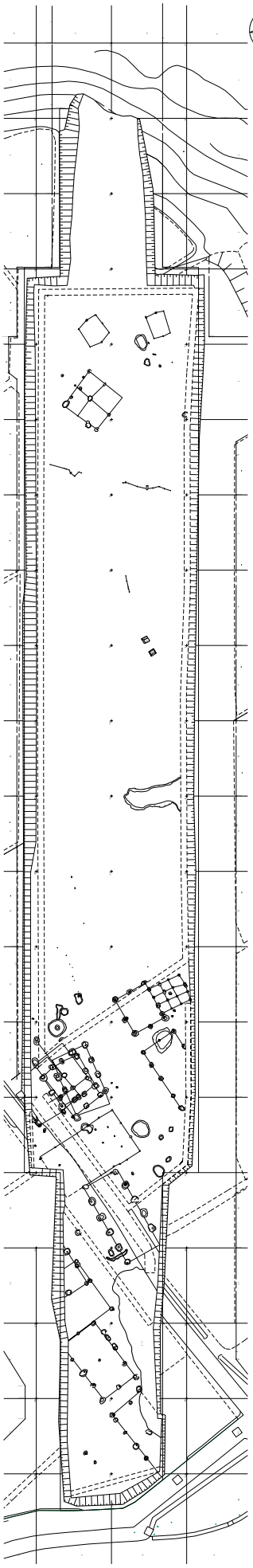
図 版 1



遺構全体図１　全遺構　遺構全体図２　掘立柱建物・土坑・井戸ほか



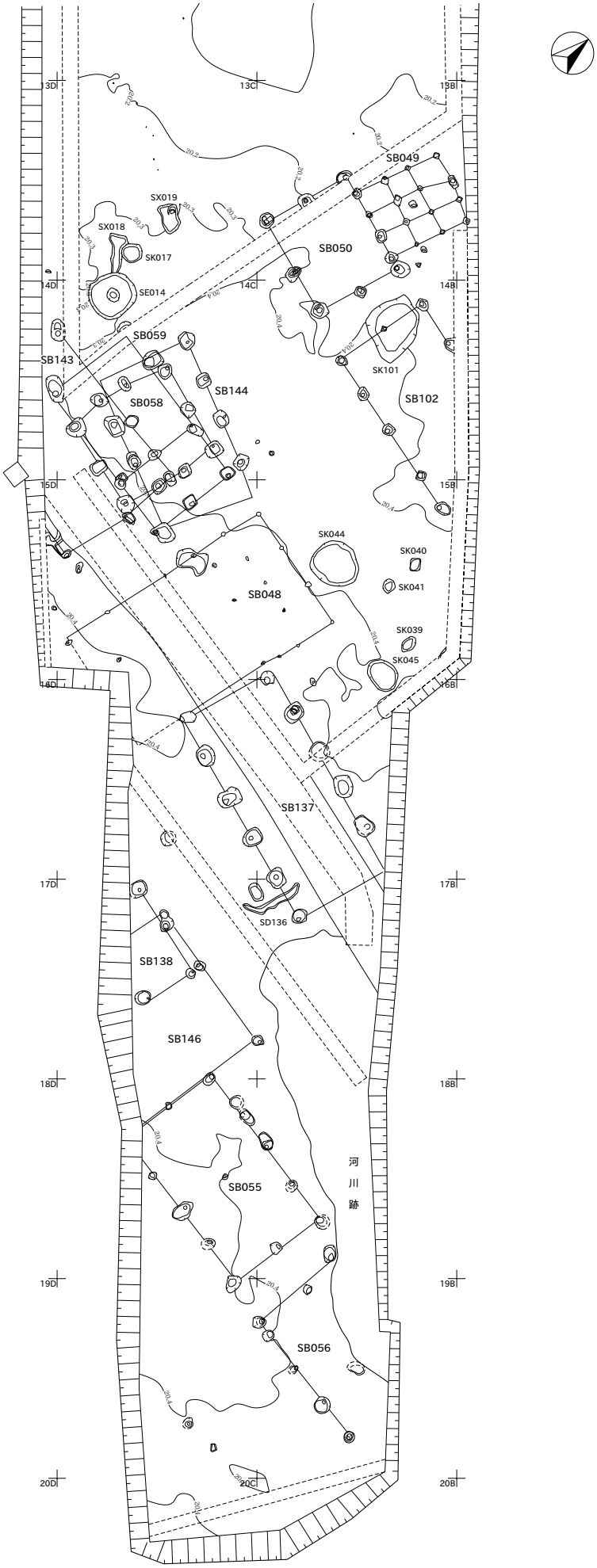
遺構全体図1



遺構全体図2

畑作溝群（Ⅰ期）
畑作溝群（Ⅱ期）

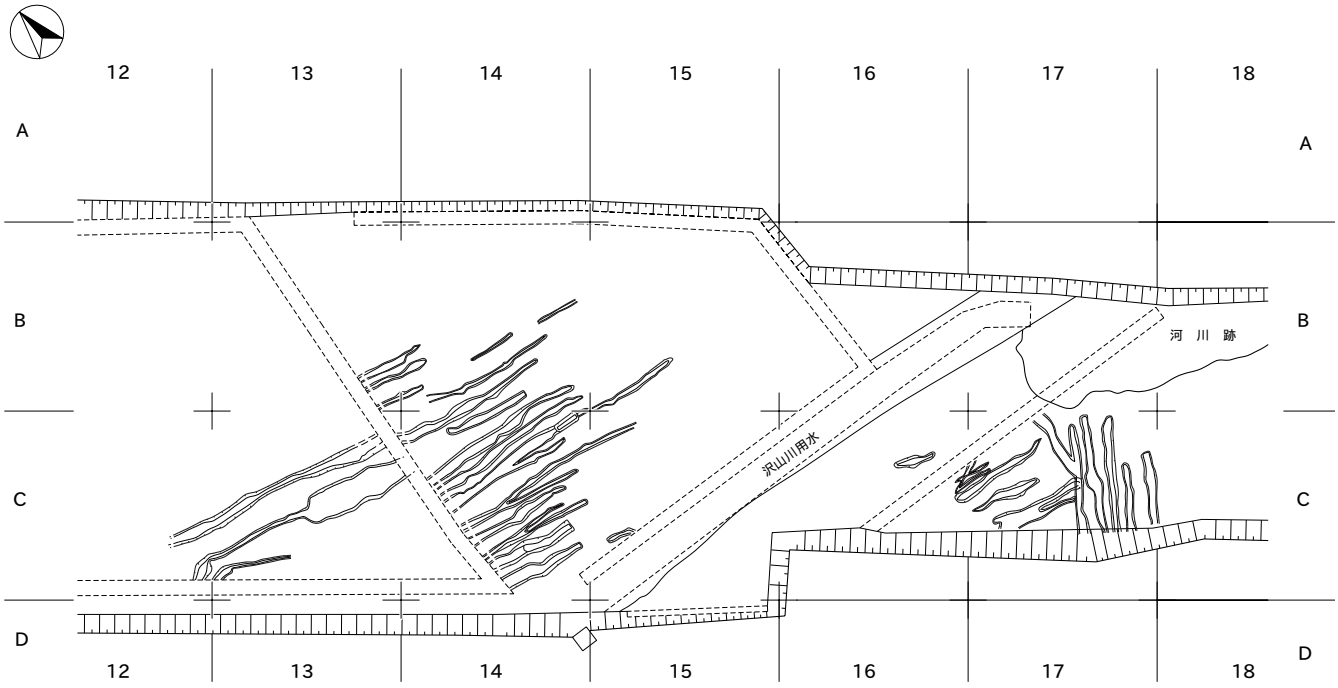
0　（1：800）　40m



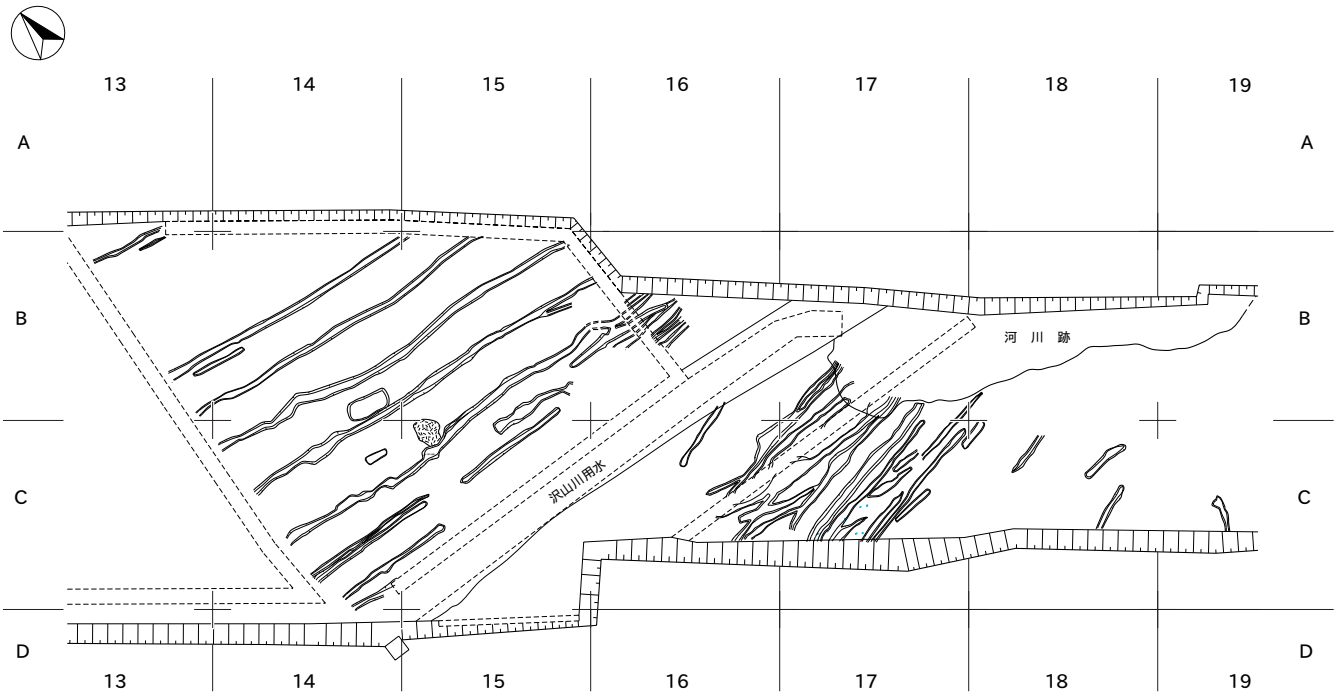
掘立柱建物群ほか

0　（1：300）　15m

遺構全体図４　畑作溝群（Ⅰ期）　遺構全体図５　畑作溝群（Ⅱ期）ほか

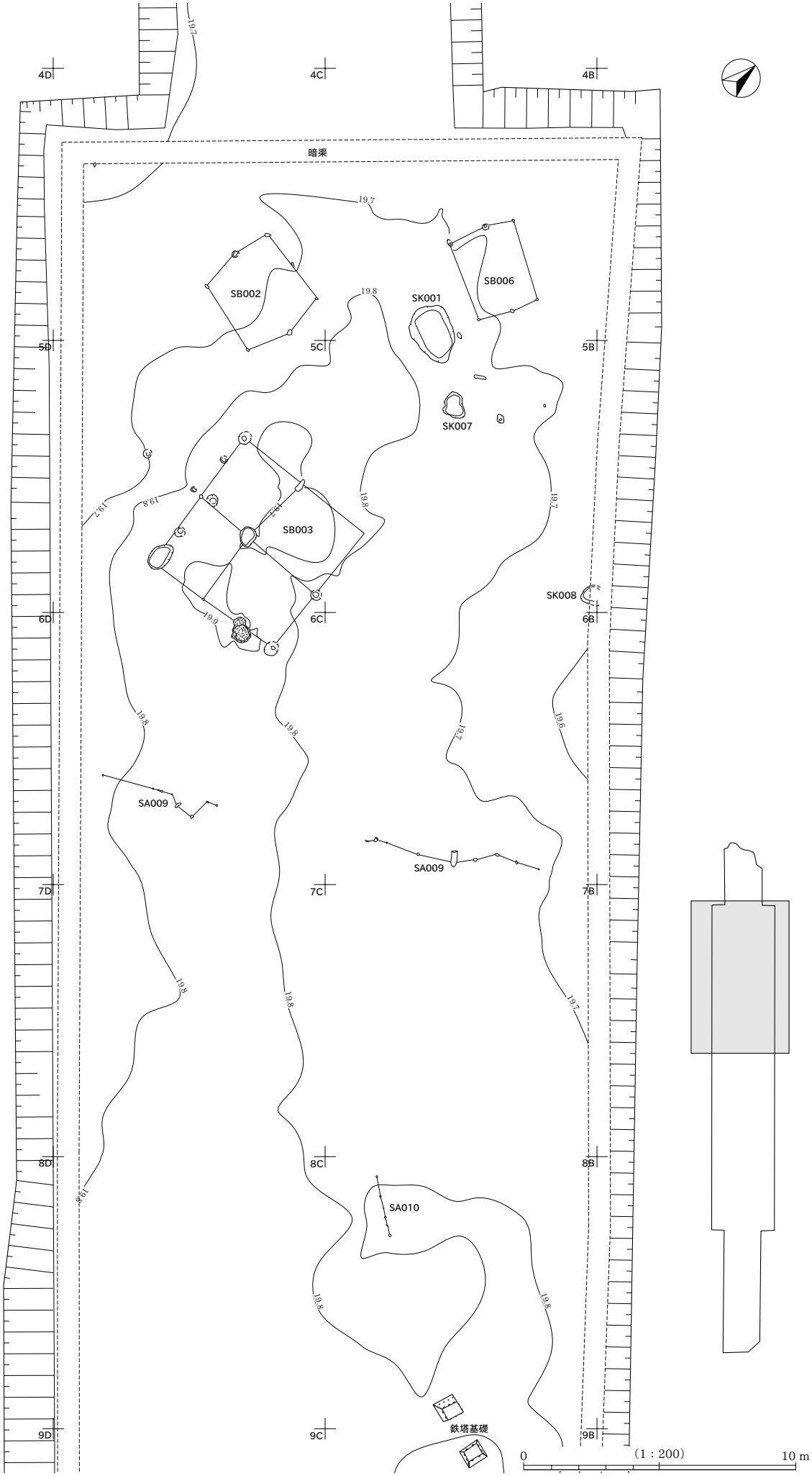


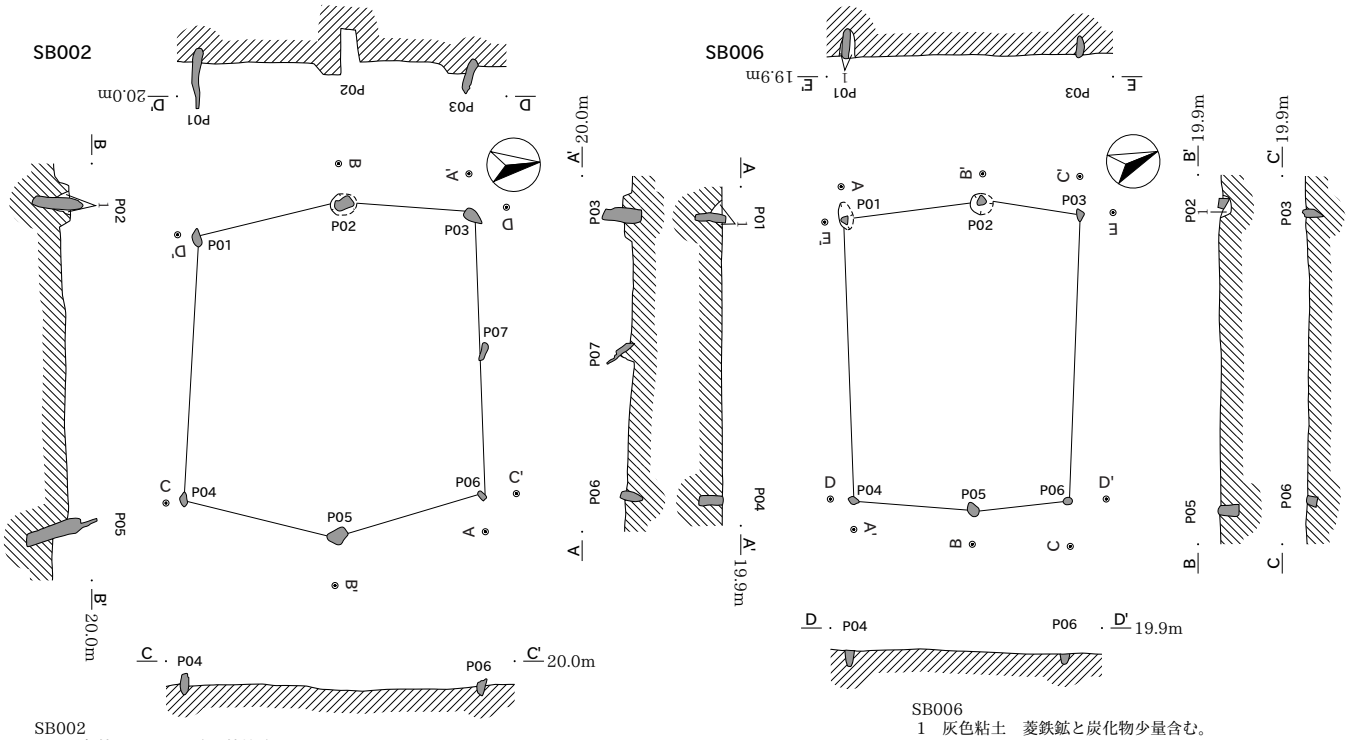
畑作溝群（Ⅰ期）



畑作溝群（Ⅱ期）ほか

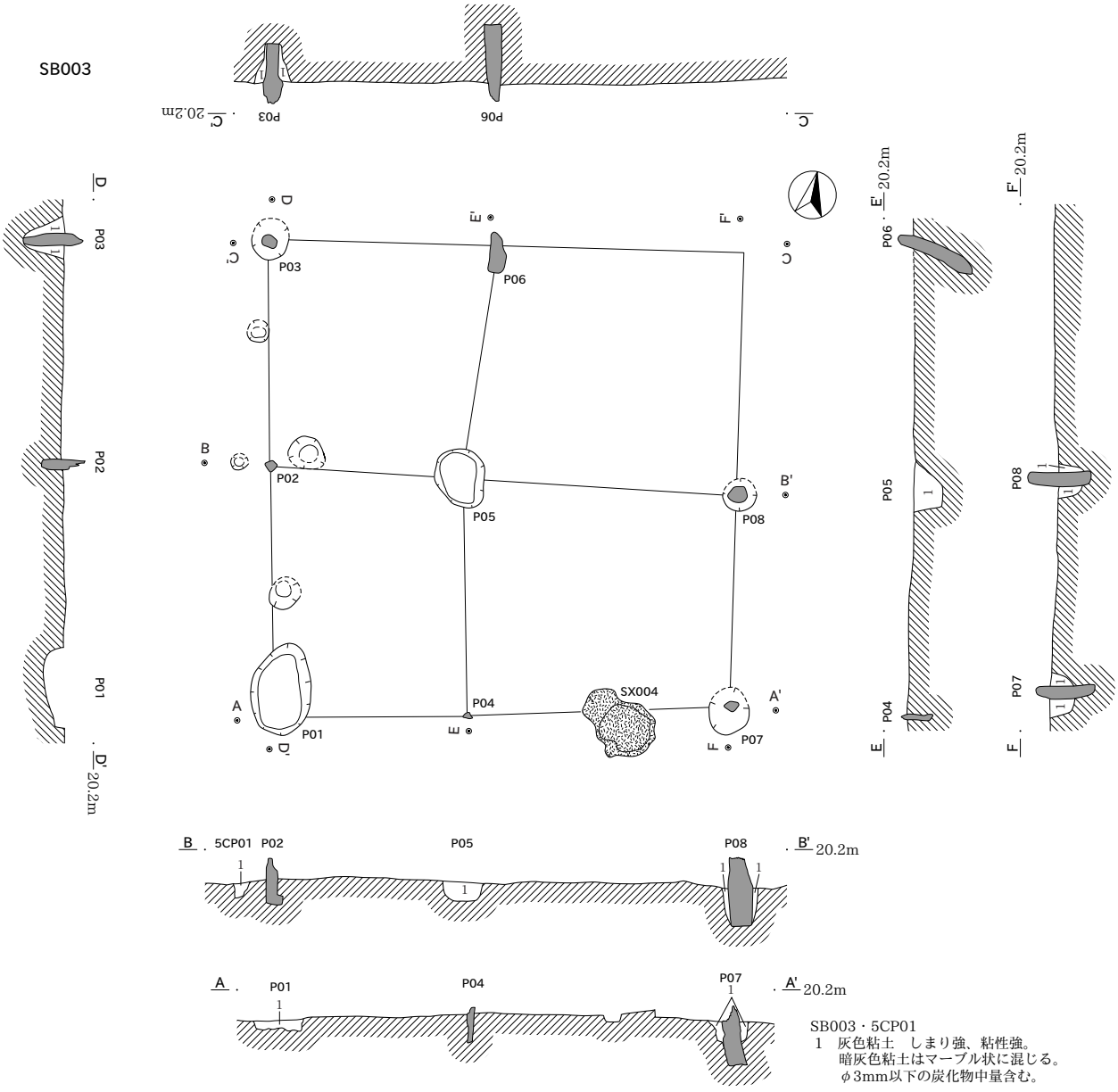
0　(1：400)　20m


4D
4C
4B
暗渠
SB002
SB006
SK001
5D
5C
5B
SK007
SB003
SK008
6D
6C
6B
SA009
SA009
7D
7C
7B
8D
8C
8B
SA010
9D
9C
9B
鉄塔基礎
0
(1：200)
10 m



SB002
1　灰色粘土　しまり強、粘性強。
　　菱鉄鉱と炭化物少量含む。

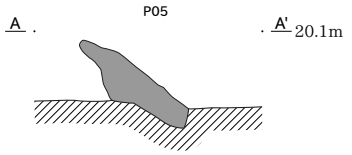
SB006
1　灰色粘土　菱鉄鉱と炭化物少量含む。

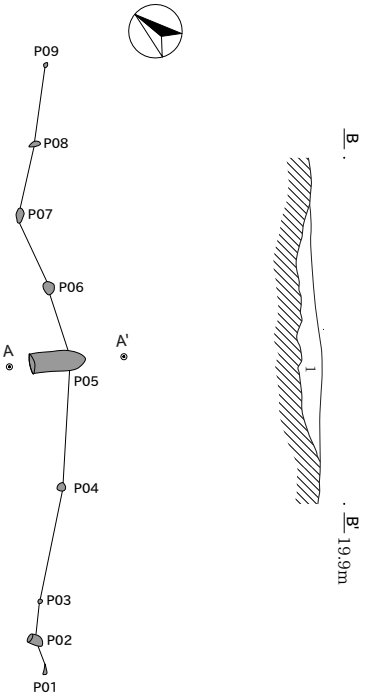


SB003・5CP01
1　灰色粘土　しまり強、粘性強。
　　暗灰色粘土はマーブル状に混じる。
　　φ3mm以下の炭化物中量含む。

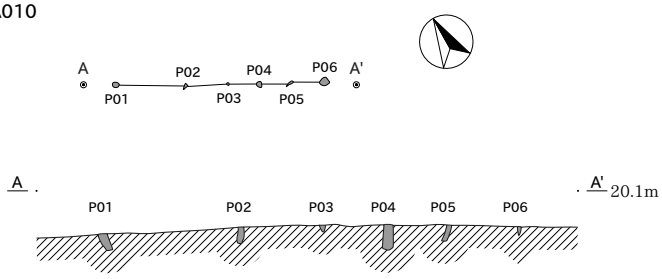
0　(1：80)　4m

SA009

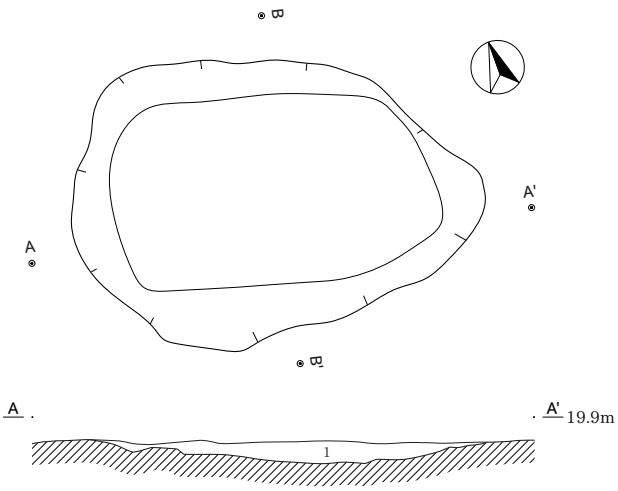




SA010

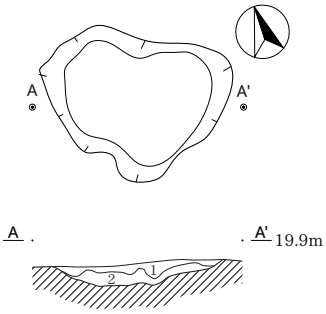


SK001



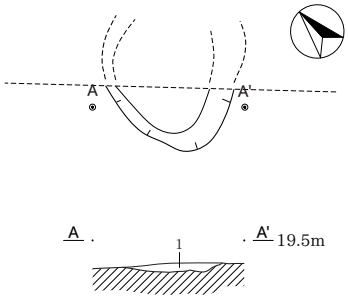
SK001
1　暗灰色粘土　しまりやや強、粘性強。
　　φ10mm以下の炭化物と植物遺体多量含む。

SK007

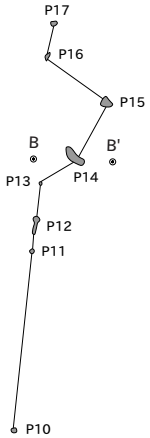


SK007
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。
2　灰色粘土　　炭化物少量含む。

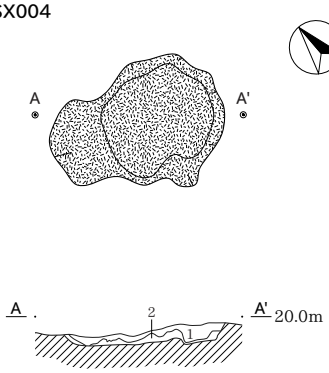
SK008



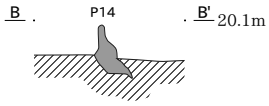
SK008
1　暗灰色粘土　炭化物少量含む。



SX004



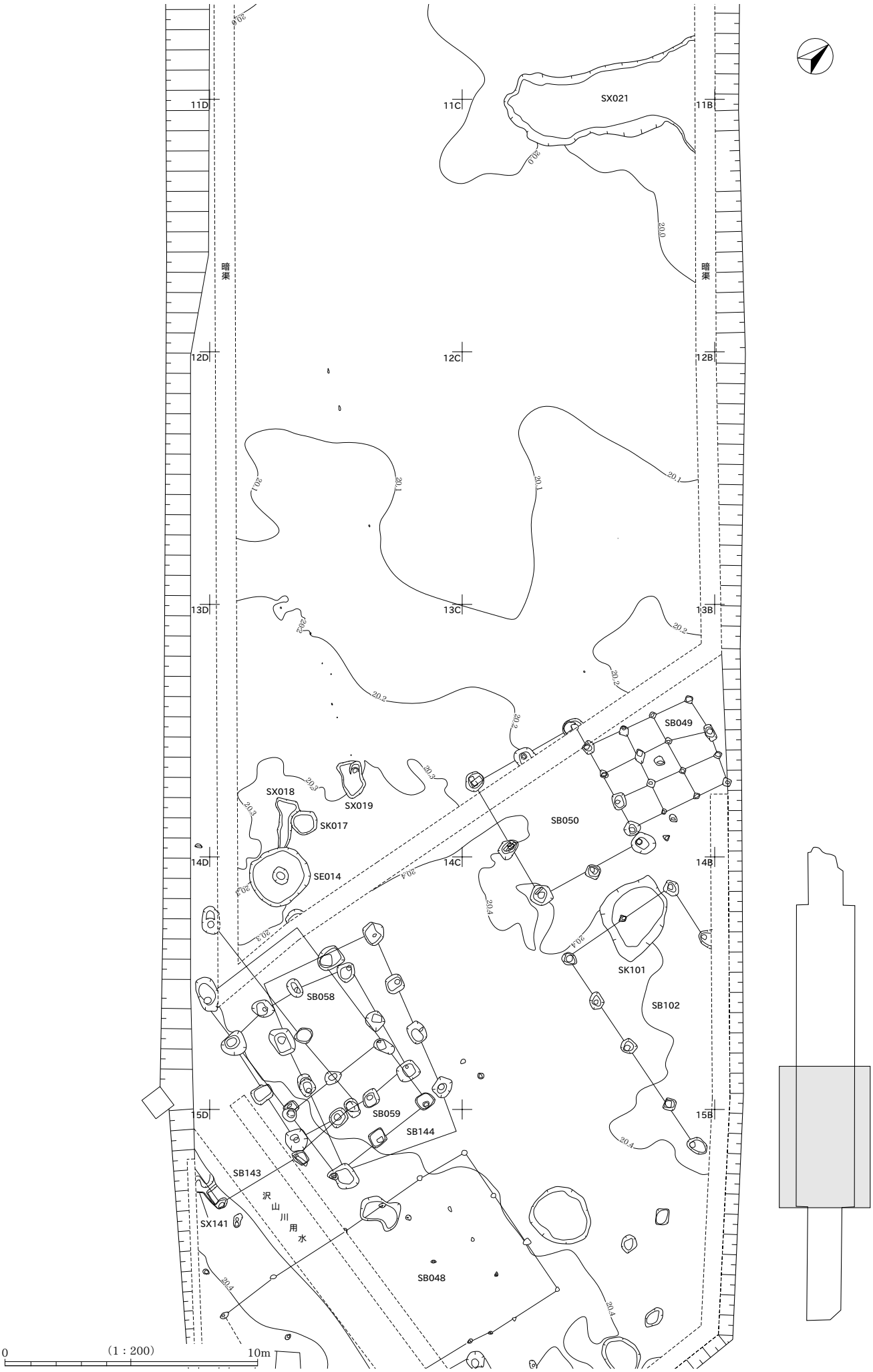
SX004
1　暗灰色粘土　しまり強、粘性強。灰色粘土はブロック状に混じる。
　　φ3mm以下の炭化物多量含む。
2　灰色粘土　　しまり強、粘性強。暗灰色粘土はマーブル状に混じる。
　　φ3mm以下の炭化物中量含む。



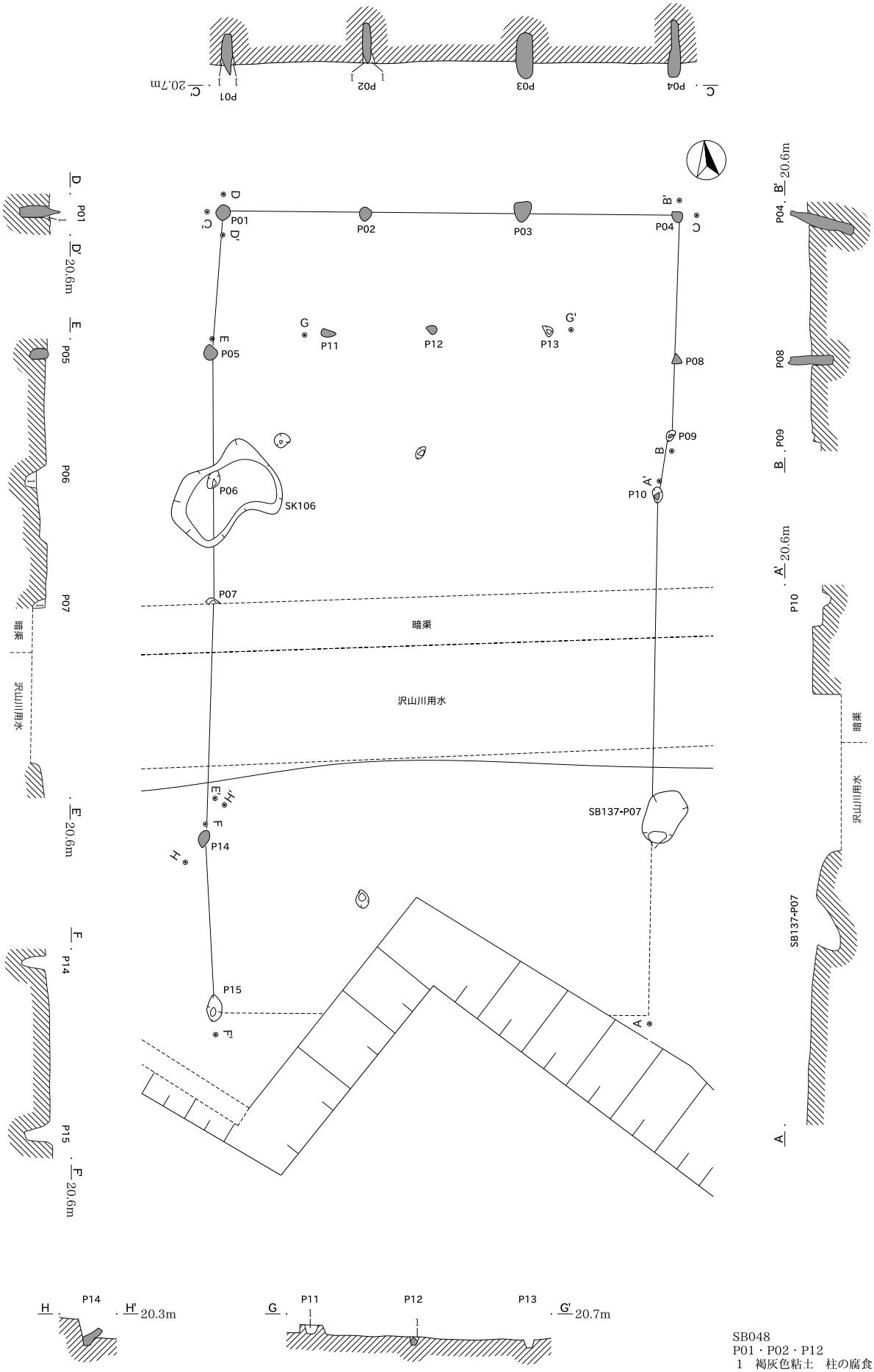
0　（1：80）SA009・010平面　4m

0　（1：40）その他　2m

遺構分割図２


SX021
11D
11C
11B
暗渠
暗渠
12D
12C
12B
13D
13C
13B
14D
14C
14B
15D
15B
SB049
SX018
SX019
SK017
SE014
SB050
SK101
SB102
SB058
SB059
SB144
SB143
SX141
沢山川用水
SB048
20.0
20.1
20.2
20.3
20.4
0
(1：200)
10m

SB048

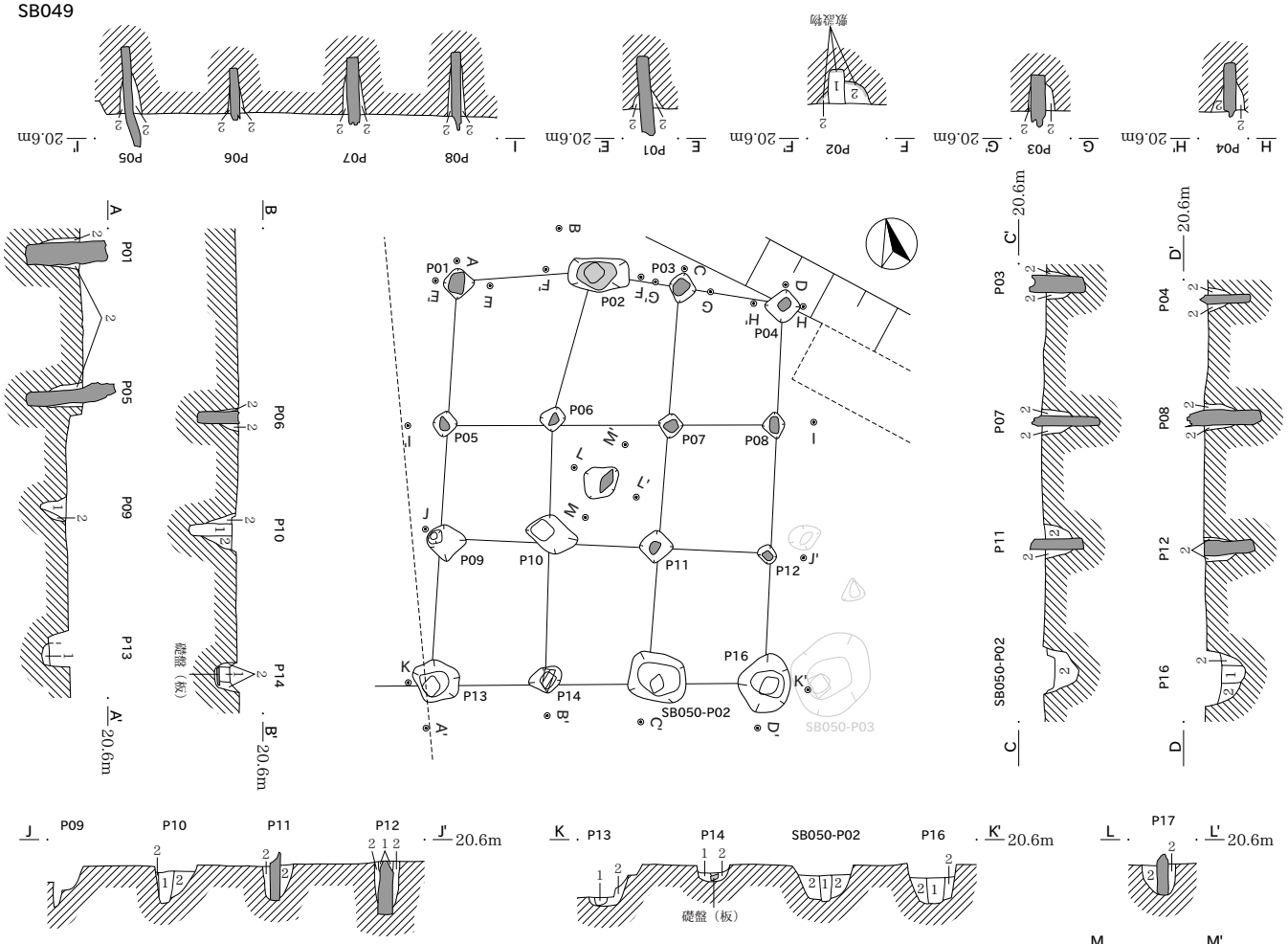


SB048
P01・P02・P12
1　褐灰色粘土　柱の腐食土。

P06・P07・P11
1　褐灰色粘土

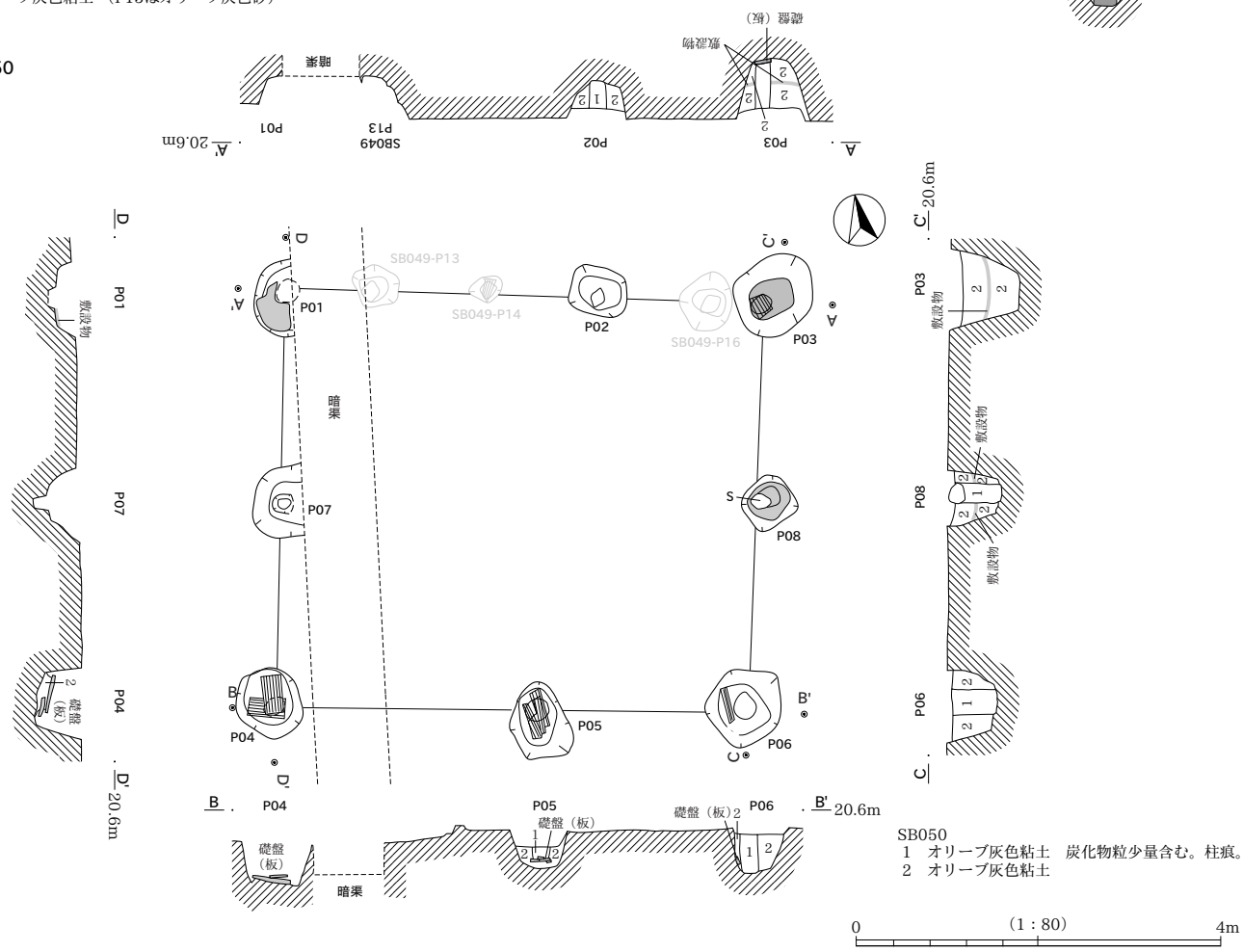
0　(1：80)　4m

SB049



SB049
1　オリーブ灰色粘土　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　オリーブ灰色粘土　（P13はオリーブ灰色砂）

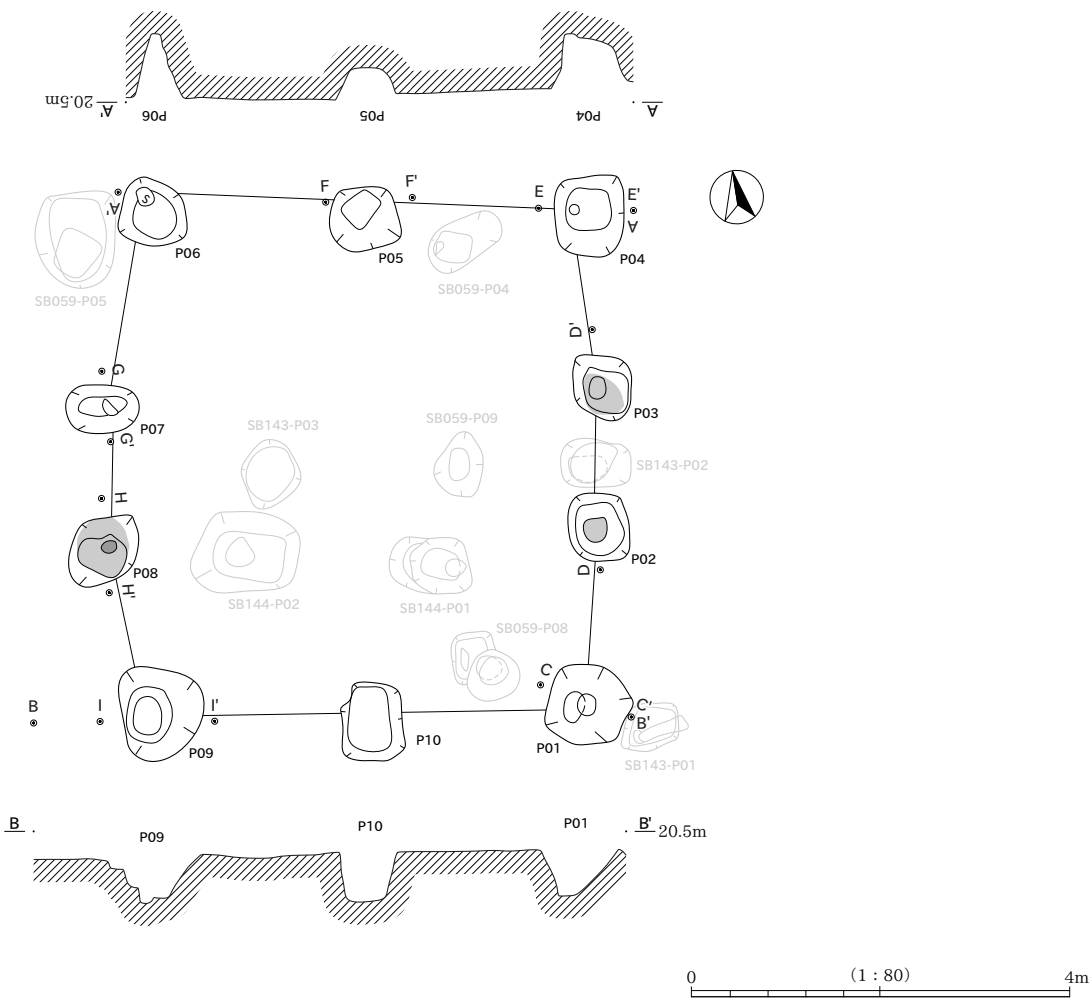
SB050

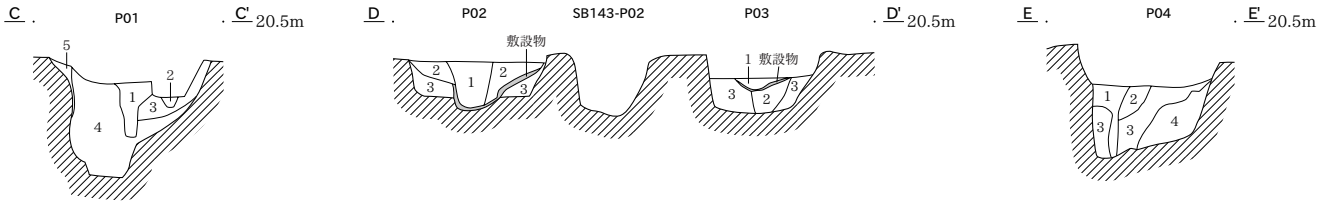


SB050
1　オリーブ灰色粘土　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　オリーブ灰色粘土

0　（1：80）　4m

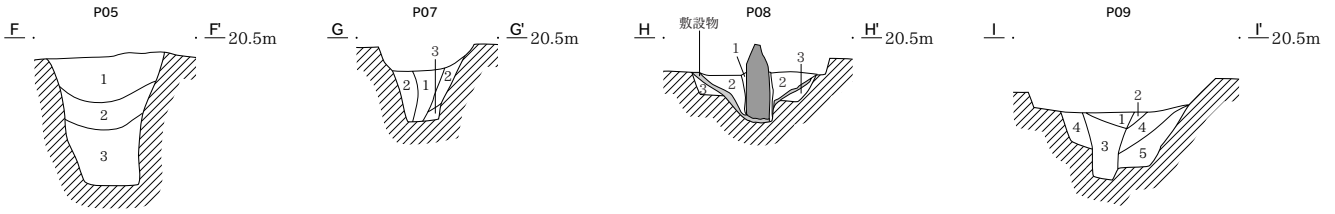
SB058





SB058
P01・P04
1　暗灰色シルト　灰白色粘土ブロック多量、炭化物粒少量含む。柱痕。
2　暗灰色シルト　１層より色調が暗い。
3　灰色シルト　灰白色粘土ブロック少量含む。
4　灰色粘質シルト　炭化物粒中量含む。
5　灰色粘質シルト

P02
1　灰色シルト　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　灰色シルト　炭化物粒微量含む。
3　暗灰色シルト　炭化物粒と灰白色粒少量含む。
P03
1　灰色シルト　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　灰色シルト　炭化物粒少量含む。
3　暗灰色シルト　炭化物粒と灰白色粒少量含む。



P05
1　灰色シルト　炭化物粒少量含む。
2　灰色シルト　炭化物粒中量含む。
3　暗灰色粘土

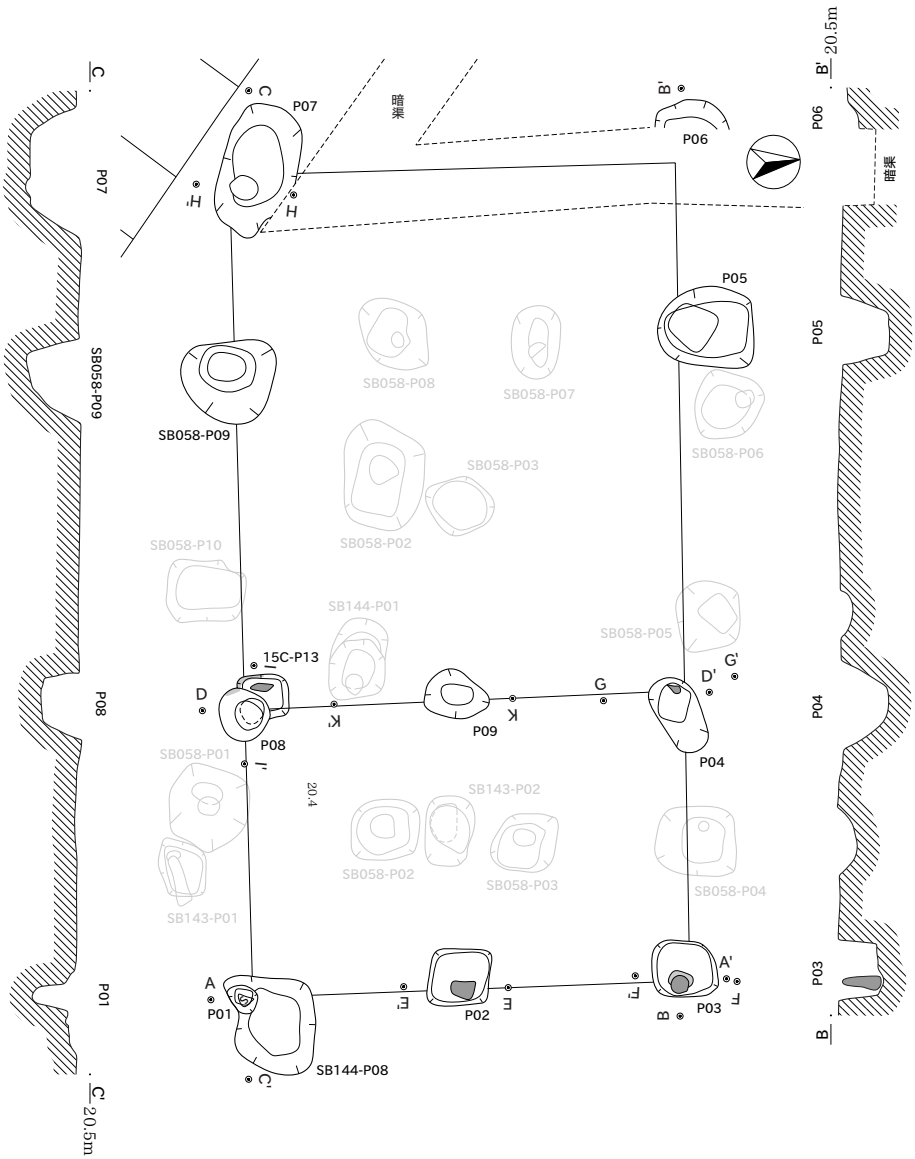
P07
1　灰色シルト　炭化物粒少量。柱痕。
2　灰色シルト　底面付近に植物遺体やや多く混入。
3　暗褐色シルト　腐植物多い。

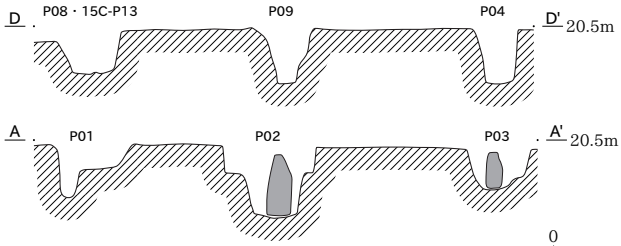
P08
1　暗青灰色シルト　黄灰色シルトブロック中量含む。
2　青灰色シルト
3　暗灰色シルト　菱鉄鉱ブロック中量含む。

P09
1　暗灰色シルトと灰白色シルトの混合土層。柱痕。
2　暗灰色シルト　柱痕。
3　灰色シルト　炭化物粒少量。柱痕。
4　灰色シルト
5　暗灰色シルト　菱鉄鉱中量含む。

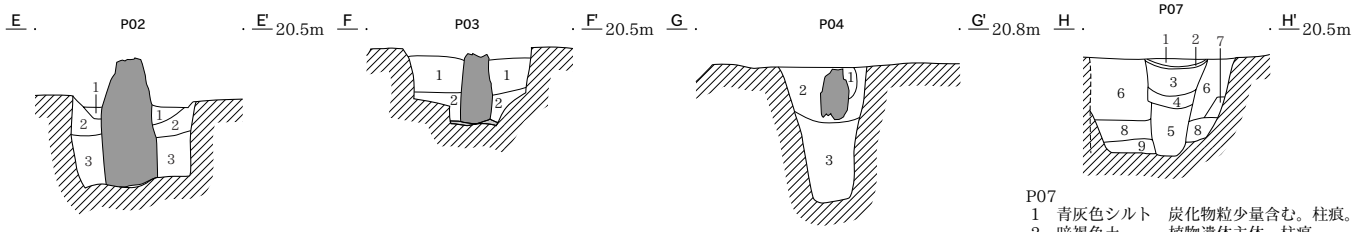
0　(1：40)　2m

SB059





0　(1：80)　4m

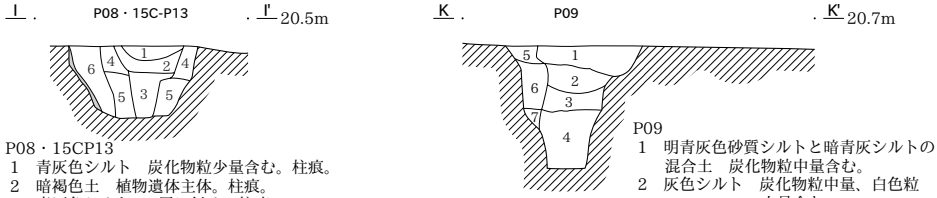


P02
1　青灰色シルト　炭化物粒中量含む。
2　灰色粘質シルト　菱鉄鉱中量含む。
3　暗灰色粘質シルト

P03
1　オリーブ灰色シルト　炭化物粒少量含む。
2　灰色粘質シルト　炭化物粒少量含む。

P04
1　緑灰色砂質シルト　炭化物粒少量含む。
2　暗灰色シルト　炭化物粒多量含む。
3　灰色シルト　炭化物粒少量、菱鉄鉱中量含む。

P07
1　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　暗褐色土　植物遺体主体。柱痕。
3　青灰色シルト　1層に似る。柱痕。
4　暗青灰色シルト　柱痕。
5　暗灰色シルト　柱痕。
6　灰色シルト
7　暗灰色砂質土
8　暗灰色シルト
9　暗灰色シルト

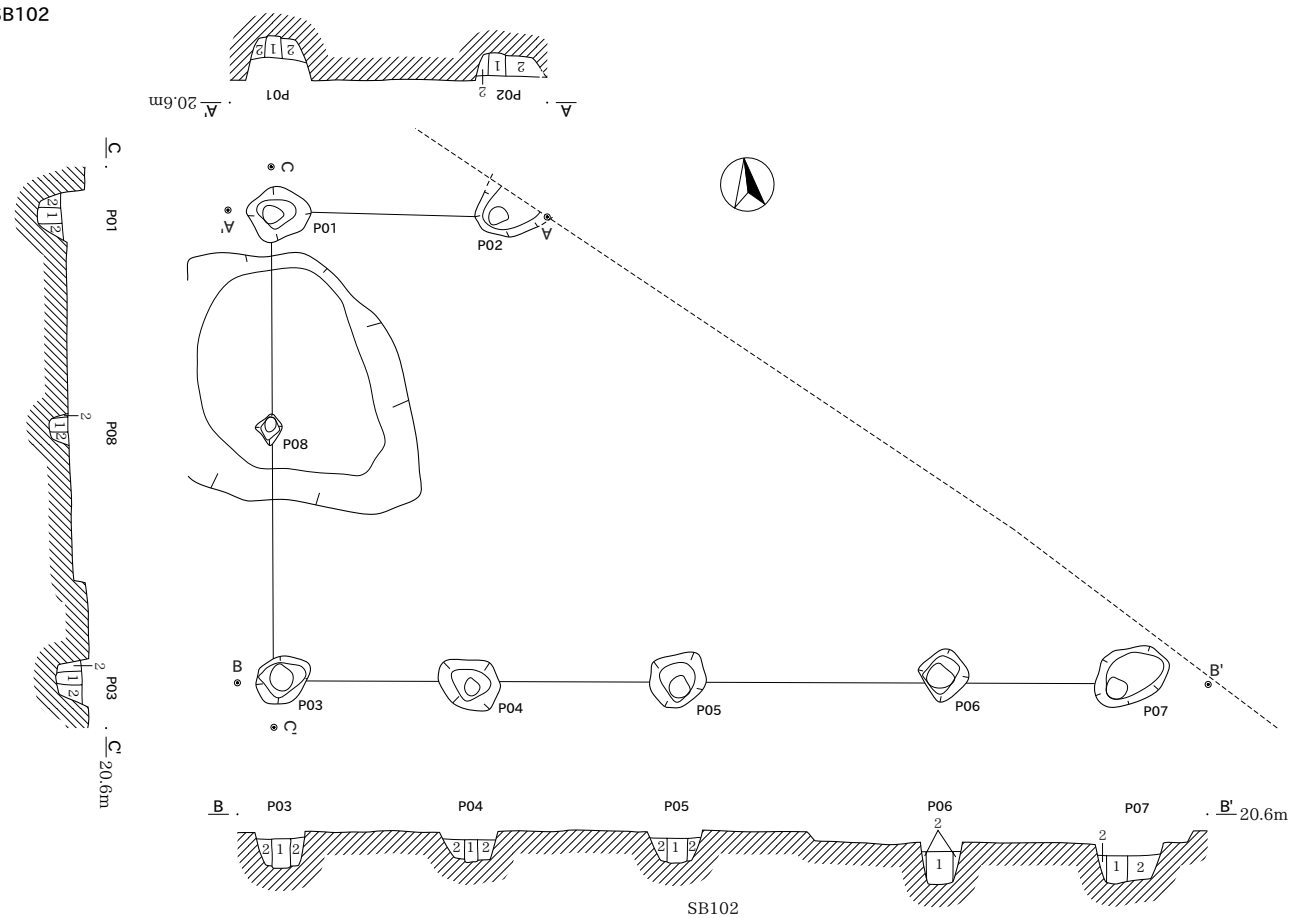


P08・15CP13
1　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　暗褐色土　植物遺体主体。柱痕。
3　青灰色シルト　1層に似る。柱痕。
4　灰色シルト
5　暗灰色シルト　灰白色粒少量含む。
6　灰色シルト　暗灰色ブロック含む。15C-P13の覆土。

P09
1　明青灰色砂質シルトと暗青灰シルトの混合土　炭化物粒中量含む。
2　灰色シルト　炭化物粒中量、白色粒少量含む。
3　緑灰色シルト　炭化物粒少量含む。
4　灰色シルト　炭化物粒中量含む。
5　灰色砂質シルト　炭化物粒少量、白色粒中量含む。
6　暗オリーブ灰色シルト　炭化物粒少量含む。
7　緑灰色粘質シルト　菱鉄鉱多量含む。

0　(1：40)　2m

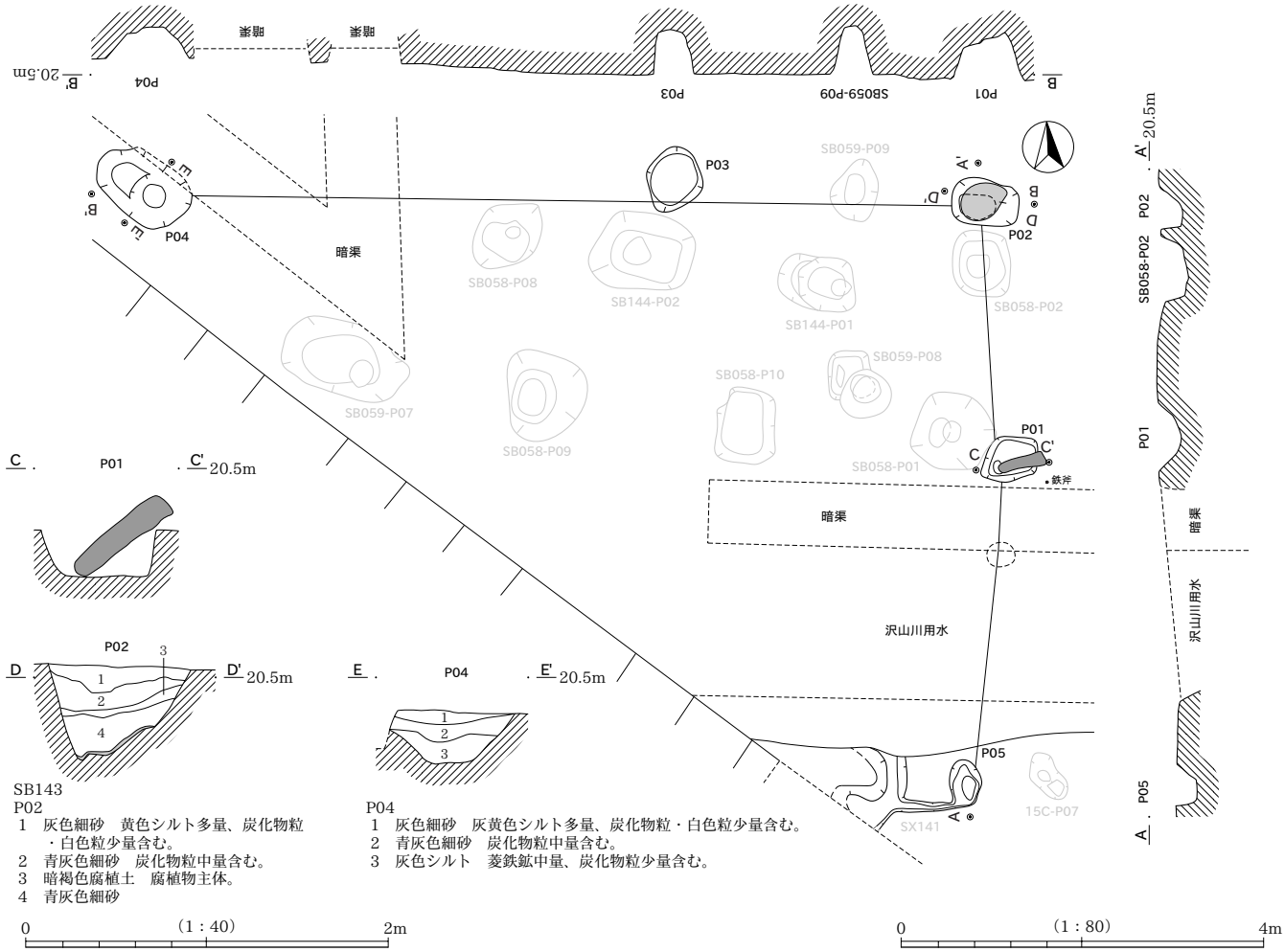
SB102



SB102
1　オリーブ灰色粘土　炭化物粒少量含む。柱痕。
2　オリーブ灰色粘土

0　(1：80)　4m

SB143



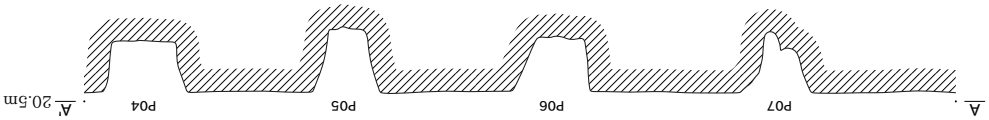
SB143
P02
1　灰色細砂　黄色シルト多量、炭化物粒・白色粒少量含む。
2　青灰色細砂　炭化物粒中量含む。
3　暗褐色腐植土　腐植物主体。
4　青灰色細砂

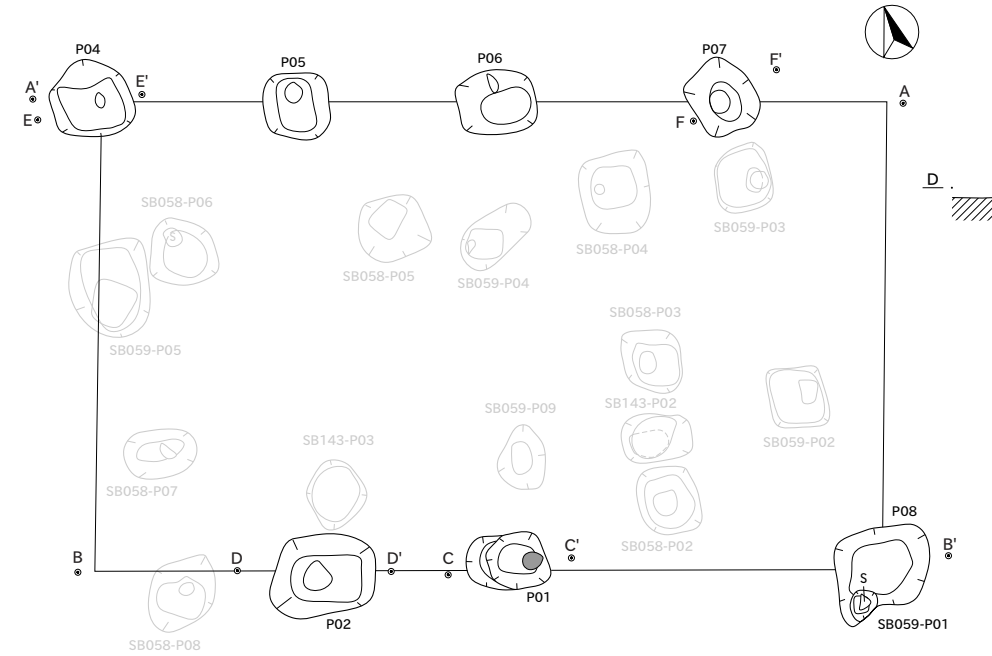
P04
1　灰色細砂　灰黄色シルト多量、炭化物粒・白色粒少量含む。
2　青灰色細砂　炭化物粒中量含む。
3　灰色シルト　菱鉄鉱中量、炭化物粒少量含む。

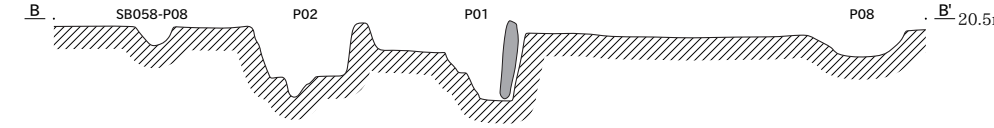
0　(1：40)　2m

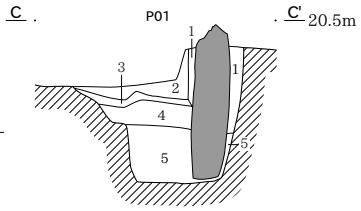
0　(1：80)　4m

SB144

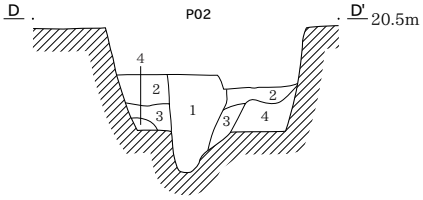




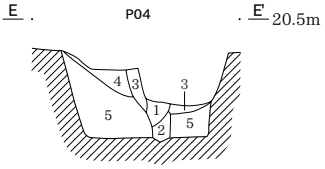




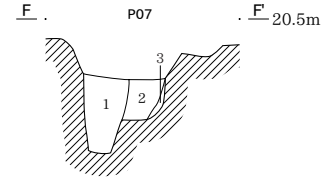
P01
1　灰色粘土
2　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。
3　暗褐色シルト
4　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。
5　暗灰色シルト　菱鉄鉱少量含む。



P02
1　暗灰色シルト　柱痕。
2　灰色粘土
3　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。
4　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。

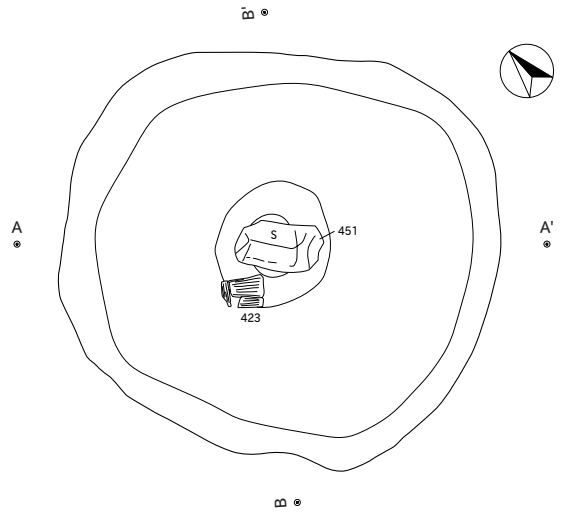


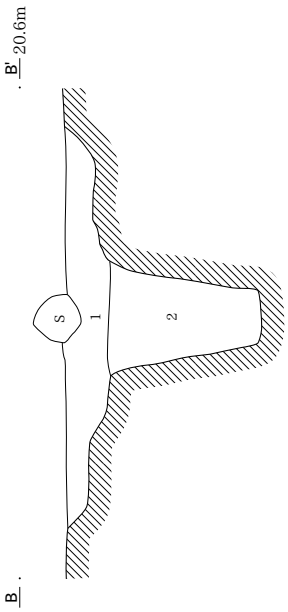
P04
1　灰色粘土　柱痕
2　暗灰色シルト　柱痕。
3　暗褐色シルト
4　青灰色シルト　炭化物粒少量含む。
5　暗灰色シルト　菱鉄鉱少量含む。

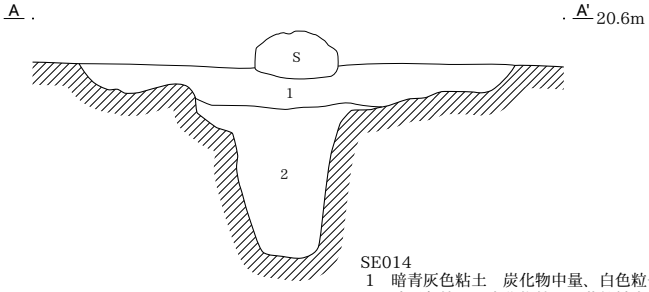


P07
1　灰色シルト　柱痕。
2　暗灰色シルト　炭化物粒少量含む。
3　灰色粘土

SE014

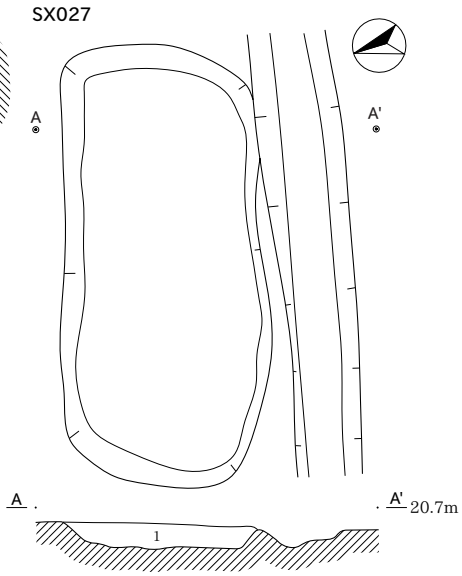






SE014
1　暗青灰色粘土　炭化物中量、白色粒子少量含む。
2　暗灰色粘土　炭化物粒子、菱鉄鉱中量含む。

SX027

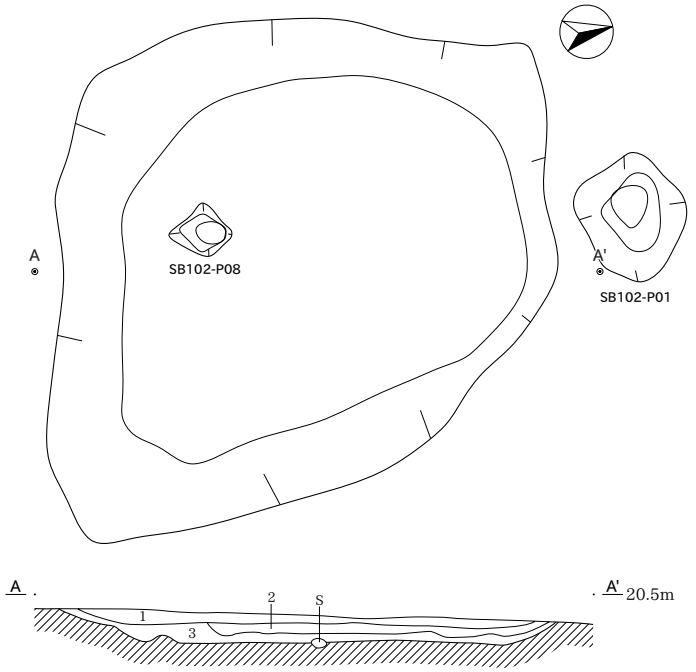


SX027
1　灰色シルト　炭化物粒中量混入。

0　（1：80）SB144平面・エレベーション　4m

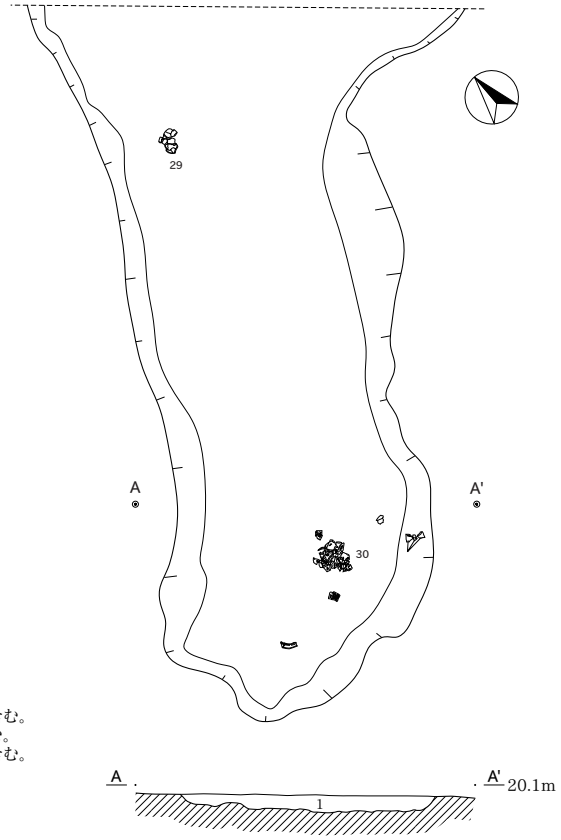
0　（1：40）その他　2m

SK101



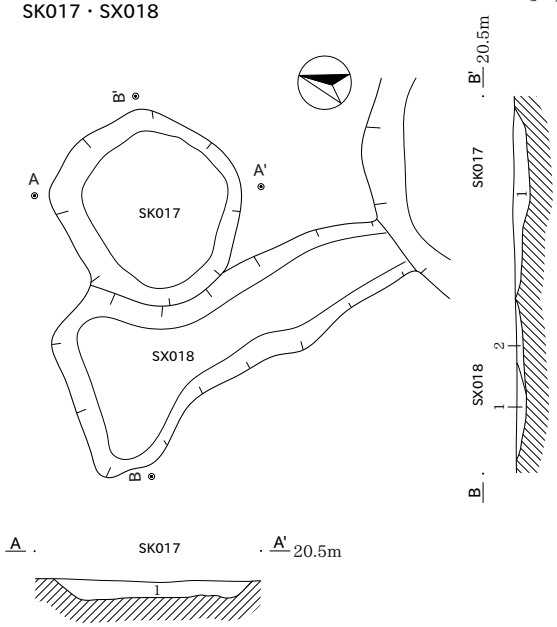
SK101
1　灰色シルト　炭化物粒少量含む。
2　灰色粘土　炭化物粒少量含む。
3　灰褐色粘土　炭化物粒少量含む。

SX021



SX021
1　灰色粘土　粘性強、しまりやや弱。
　φ5～10mmの炭化物粒多量含む。

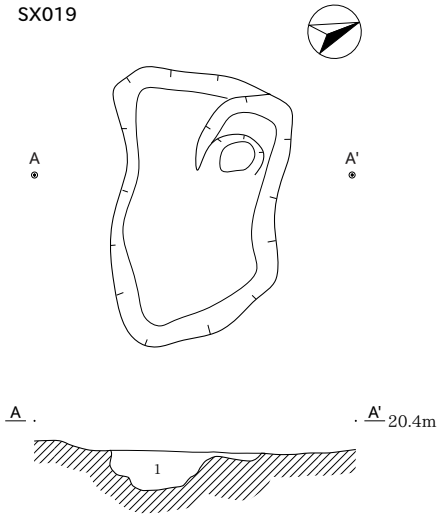
SK017・SX018



SK017
1　灰色粘土　粘性やや強、しまりやや弱。炭化物粒少量含む。

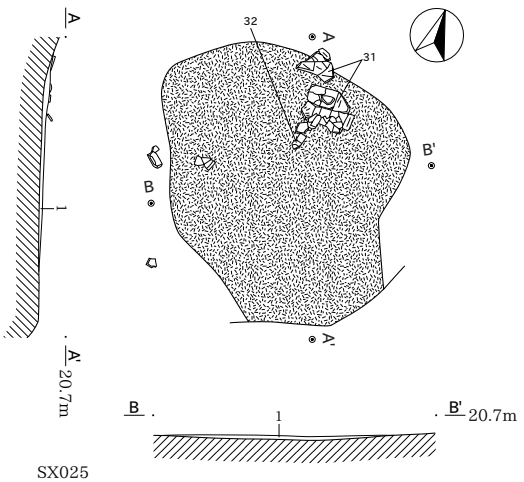
SX018
1　暗灰色粘質シルト　粘性やや強、しまりやや弱。炭化物粒中量含む。
2　灰色シルト　粘性やや弱、しまりやや強。炭化物粒微量含む。

SX019



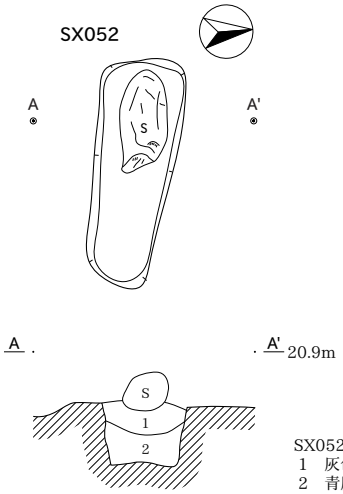
SX019
1　褐灰色粘土　粘性強、しまり弱。
　炭化物粒と灰白色粒中量含む。

SX025



SX025
1　暗灰色粘土　粘性強、しまりやや強。φ5mm以下の炭化物粒多量含む。

SX052

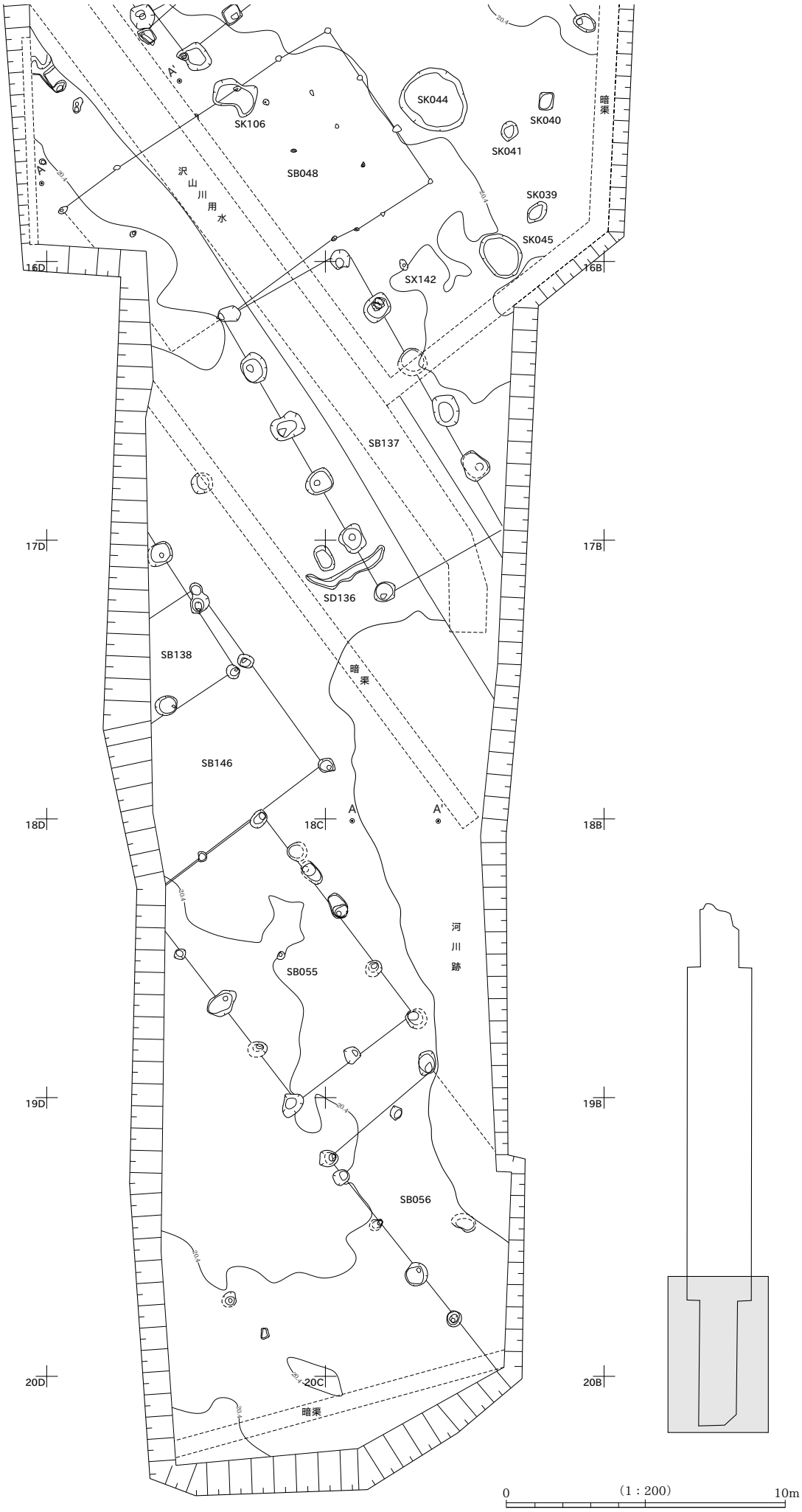


SX052
1　灰色粘土　粘性やや強、しまりやや弱。炭化物粒少量含む。
2　青灰色シルト　粘性やや強、しまりやや強。菱鉄鉱少量含む。

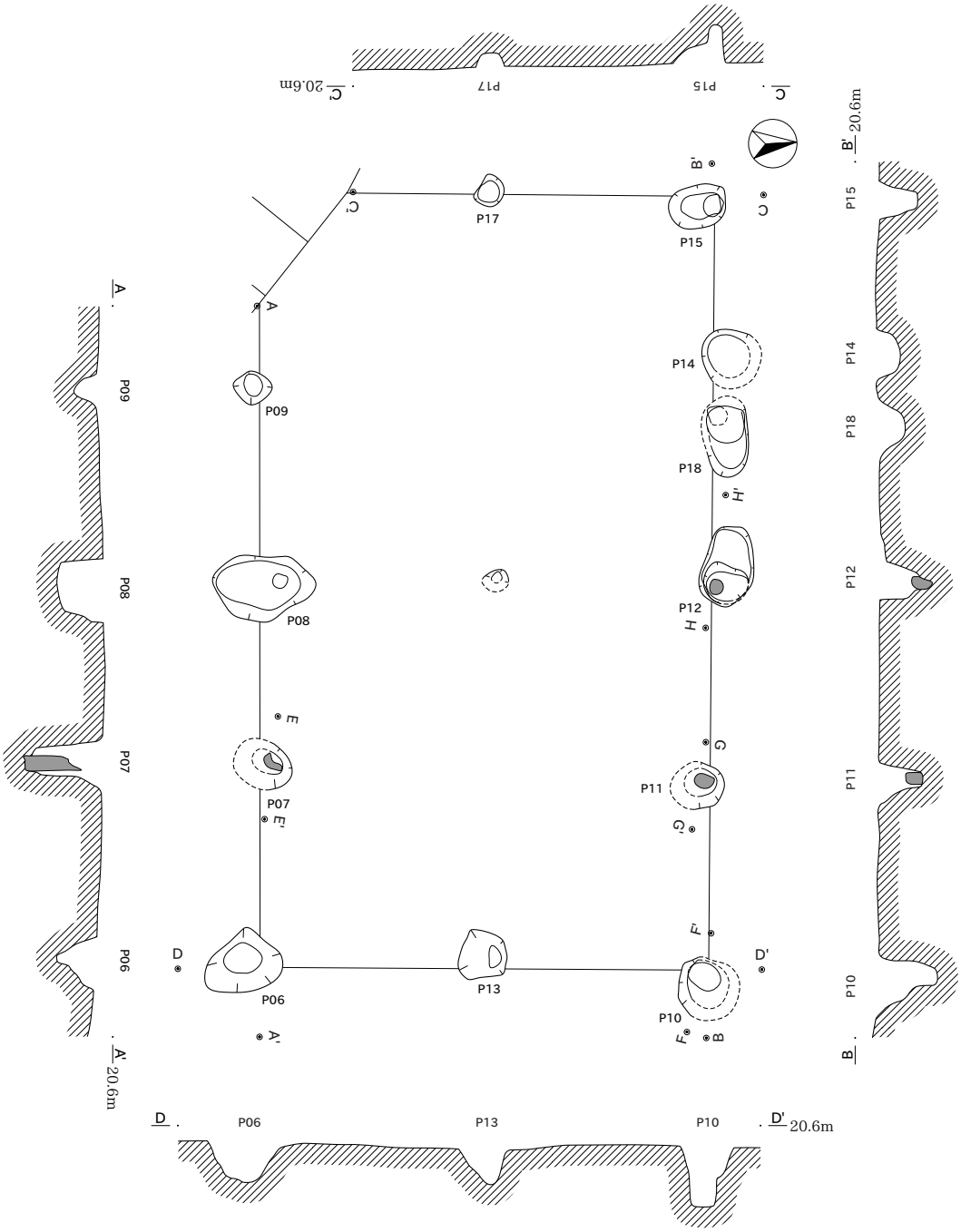
0　（1：80）SX21　4m

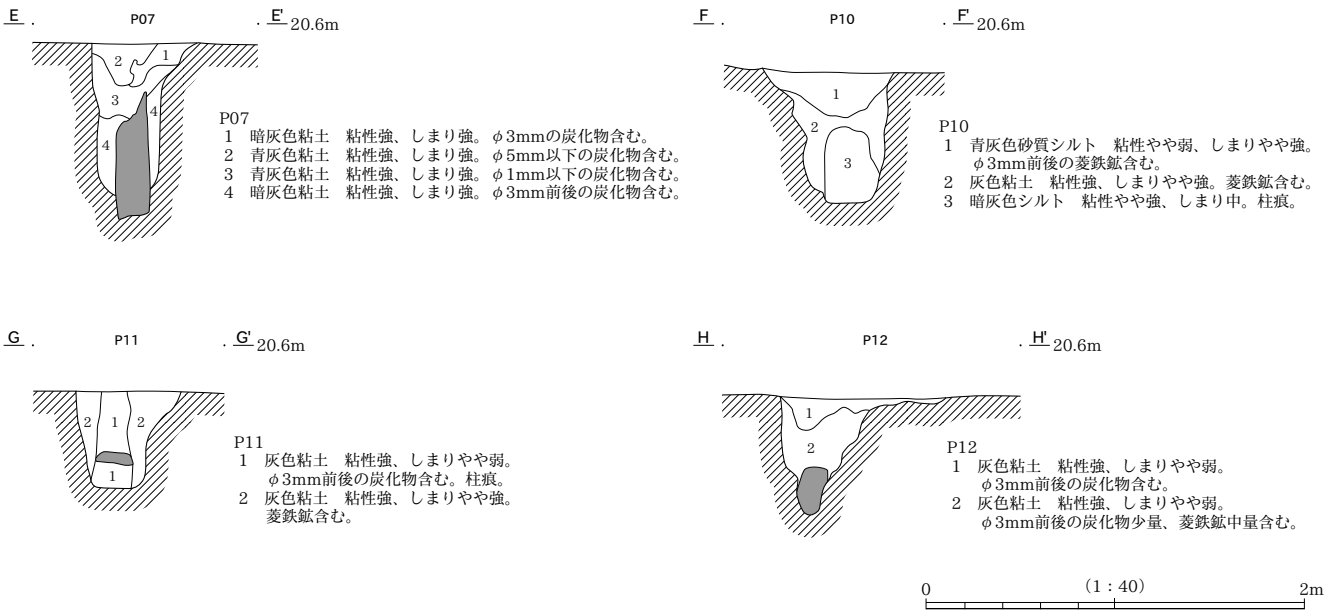
0　（1：40）その他　2m

遺構分割図３


SK106
SK044
SK040
SK041
SK039
SK045
暗渠
沢山川用水
SB048
SX142
SB137
SD136
SB138
SB146
暗渠
河川跡
SB055
SB056
暗渠
16D
16B
17D
17B
18D
18C
18B
19D
19B
20D
20C
20B
A
A'
0
(1：200)
10m

SB055





P07
1　暗灰色粘土　粘性強、しまり強。φ3mmの炭化物含む。
2　青灰色粘土　粘性強、しまり強。φ5mm以下の炭化物含む。
3　青灰色粘土　粘性強、しまり強。φ1mm以下の炭化物含む。
4　暗灰色粘土　粘性強、しまり強。φ3mm前後の炭化物含む。

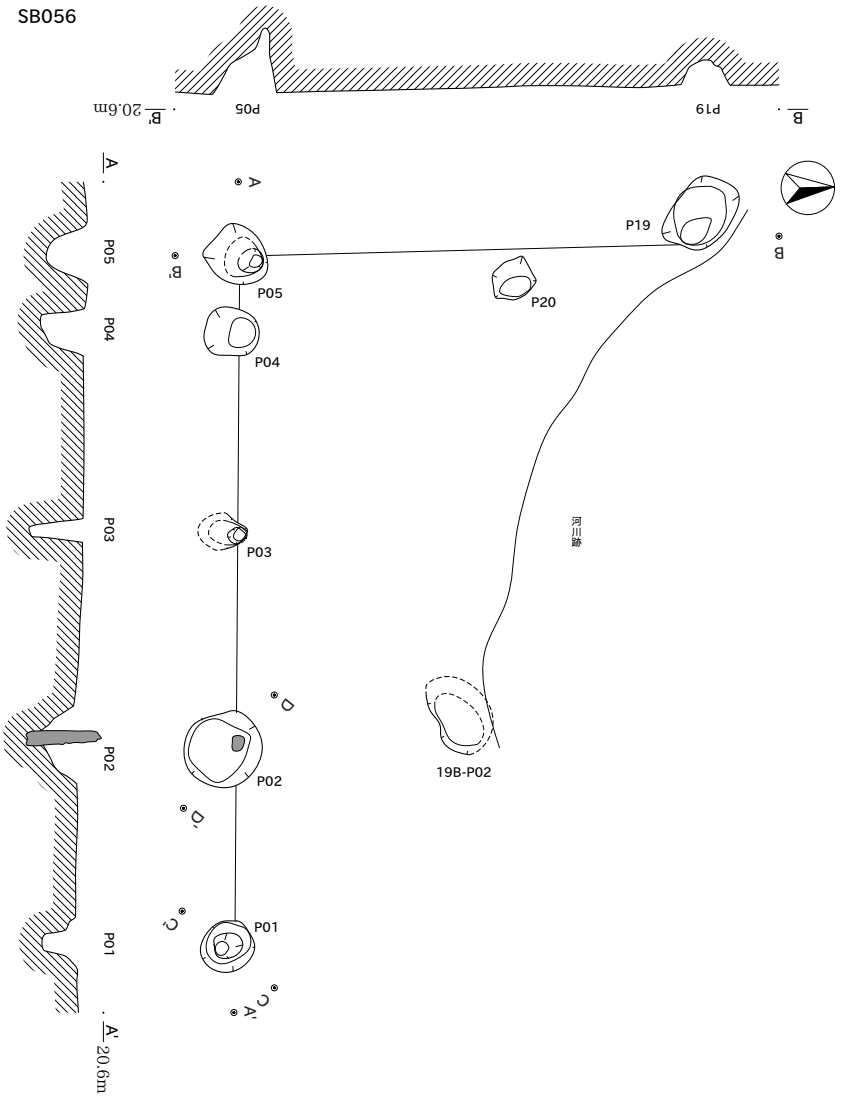
P10
1　青灰色砂質シルト　粘性やや弱、しまりやや強。φ3mm前後の菱鉄鉱含む。
2　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。菱鉄鉱含む。
3　暗灰色シルト　粘性やや強、しまり中。柱痕。

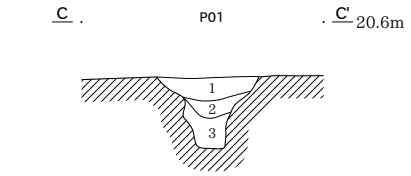
P11
1　灰色粘土　粘性強、しまりやや弱。φ3mm前後の炭化物含む。柱痕。
2　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。菱鉄鉱含む。

P12
1　灰色粘土　粘性強、しまりやや弱。φ3mm前後の炭化物含む。
2　灰色粘土　粘性強、しまりやや弱。φ3mm前後の炭化物少量、菱鉄鉱中量含む。

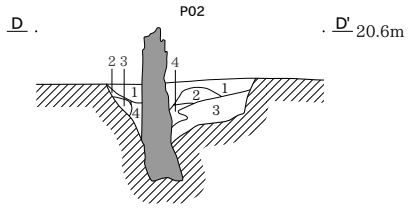
0　(1：40)　2m

SB056



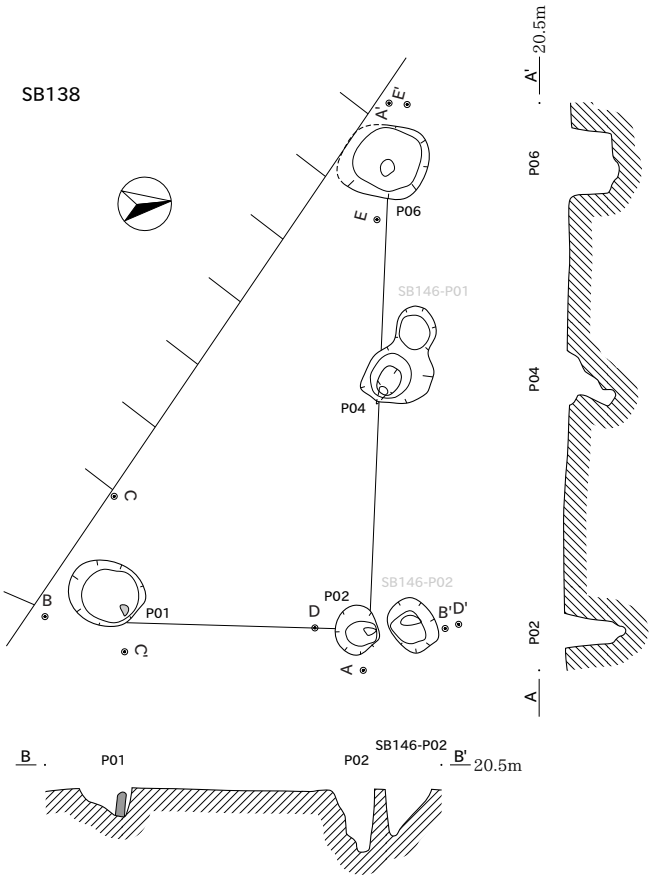


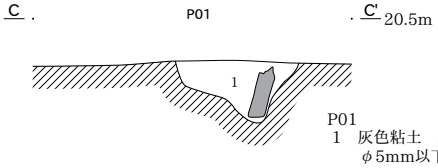
P01
1　灰色粘土　　粘性強、しまり強。
　φ7mm以下の炭化物微量含む。
2　黄灰色粘土　粘性強、しまり弱。
　φ10mm以下の炭化物少量含む。
3　黄灰色粘土　粘性強、しまり弱。
　φ2mm以下の炭化物少量含む。柱痕。



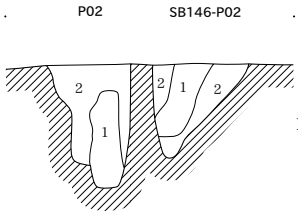
P02
1　灰色シルト　粘性やや弱、しまり強。
　φ1～5mm炭化物とφ1～10mmの酸化鉄をまばらに含む。
2　灰色粘質土　粘性強、しまり強。
　φ1mm前後の炭化物少量、φ2mm前後の酸化鉄微量含む。
3　灰色粘土　　粘性強、しまりやや強。
　φ1～3mmの炭化物をまばらに、菱鉄鉱を多量に含む。
4　灰色砂　　粘性弱、しまり弱。
　φ2mm前後の炭化物微量含む。

SB138

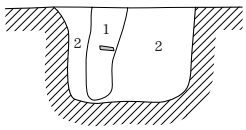




P01
1　灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
　φ5mm以下の炭化物含む。



P02・SB146-P02
1　暗灰色粘土　粘性やや強、しまりやや弱。
　φ10mm以下の炭化物多量含む。柱痕。
2　灰色粘土　　粘性強、しまり強。
　φ3mm以下の炭化物粒少量含む。

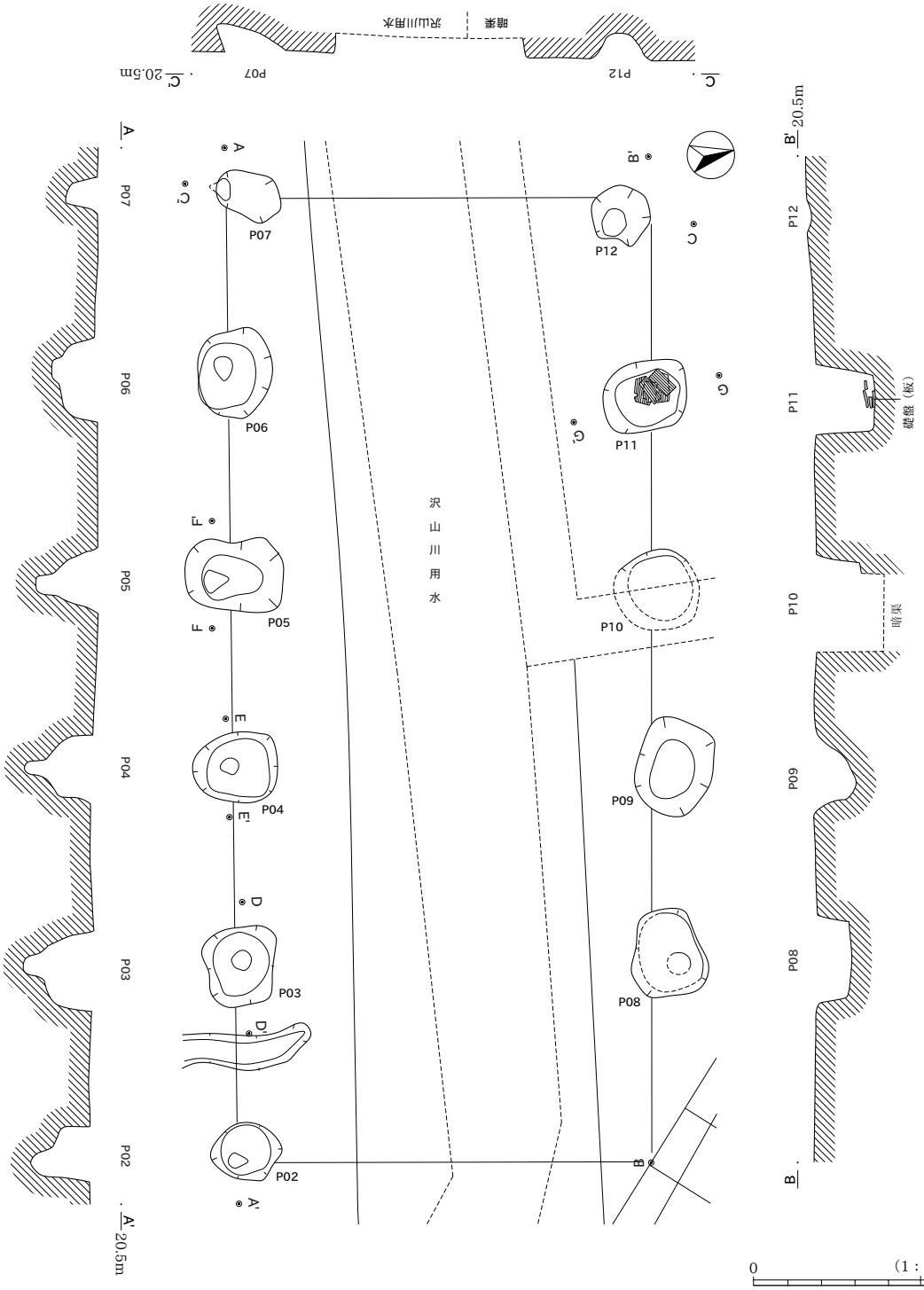


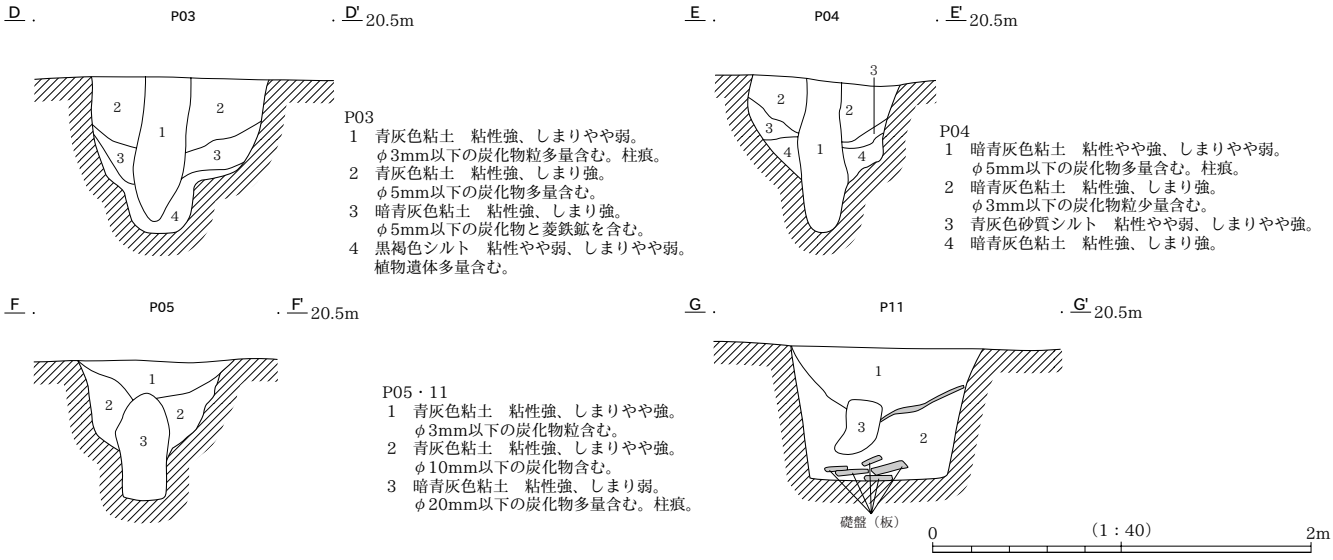
P06
1　灰色粘土　粘性やや強、しまりやや強。
　φ5mm以下の炭化物含む。柱痕。
2　灰色粘土　粘性強、しまり強。
　φ3mm以下の炭化物少量含む。

0　（1：80）SB137・138　平面・エレベーション　4m

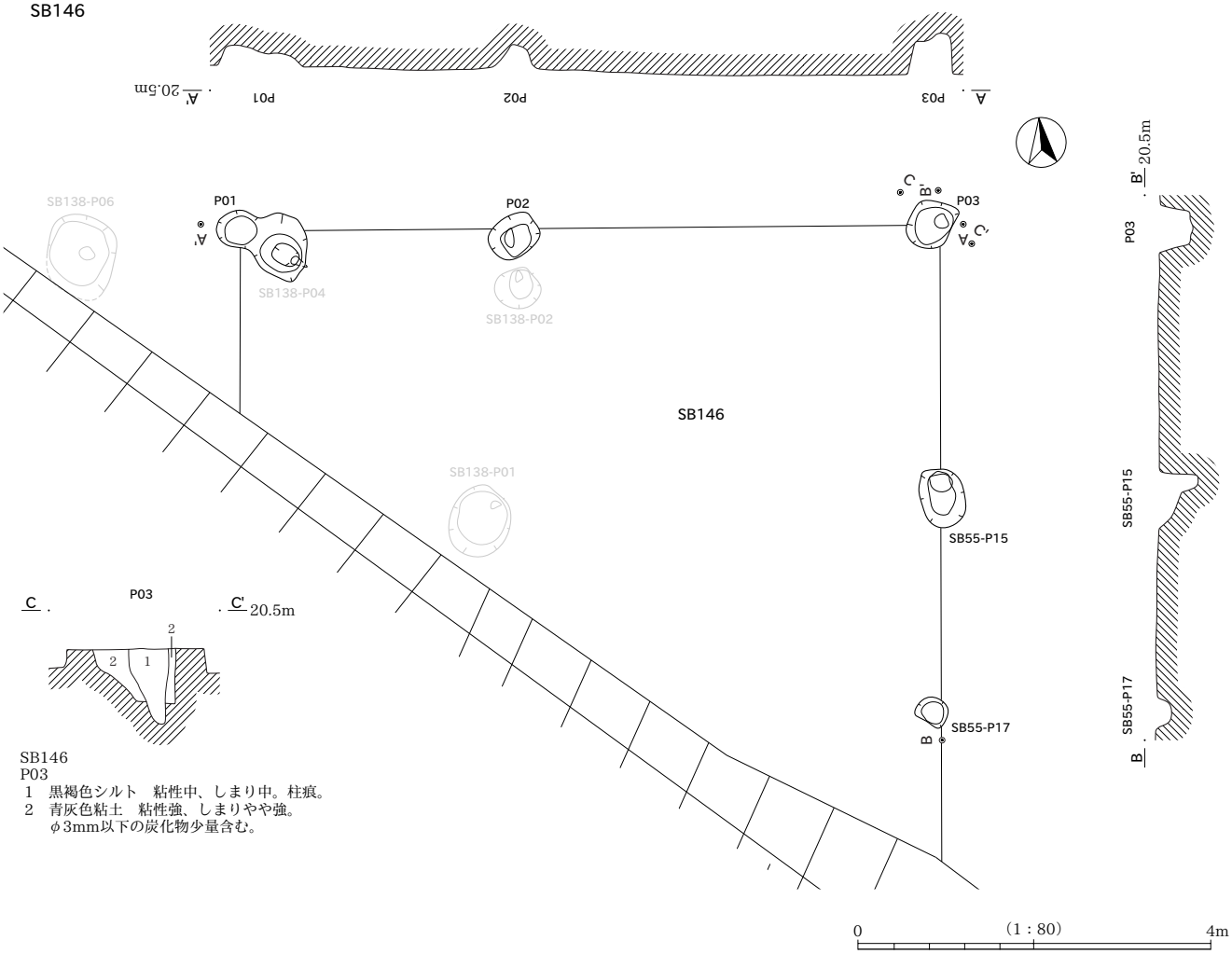
0　（1：40）その他　2m

SB137


暗渠
沢山川用水
C
P12
P07
C'
20.5m
A
P07
P06
P05
P04
P03
P02
A'
20.5m
B'
20.5m
P12
P11
P10
P09
P08
B
礎盤（板）
暗渠
沢
山
川
用
水
0
（1：80）
4m

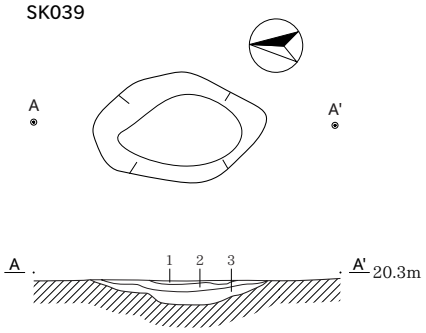

D
P03
D'
20.5m
E
P04
E'
20.5m
P03
1 青灰色粘土　粘性強、しまりやや弱。
φ3mm以下の炭化物粒多量含む。柱痕。
2 青灰色粘土　粘性強、しまり強。
φ5mm以下の炭化物多量含む。
3 暗青灰色粘土　粘性強、しまり強。
φ5mm以下の炭化物と菱鉄鉱を含む。
4 黒褐色シルト　粘性やや弱、しまりやや弱。
植物遺体多量含む。
P04
1 暗青灰色粘土　粘性やや強、しまりやや弱。
φ5mm以下の炭化物多量含む。柱痕。
2 暗青灰色粘土　粘性強、しまり強。
φ3mm以下の炭化物粒少量含む。
3 青灰色砂質シルト　粘性やや弱、しまりやや強。
4 暗青灰色粘土　粘性強、しまり強。
F
P05
F'
20.5m
G
P11
G'
20.5m
P05・11
1 青灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
φ3mm以下の炭化物粒含む。
2 青灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
φ10mm以下の炭化物含む。
3 暗青灰色粘土　粘性強、しまり弱。
φ20mm以下の炭化物多量含む。柱痕。
礎盤（板）
0
（1：40）
2m

SB146

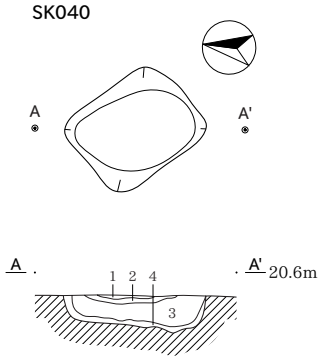


SB146
P03
1　黒褐色シルト　粘性中、しまり中。柱痕。
2　青灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
　φ3mm以下の炭化物少量含む。

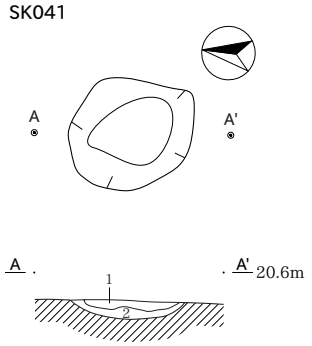
SK039



SK040



SK041



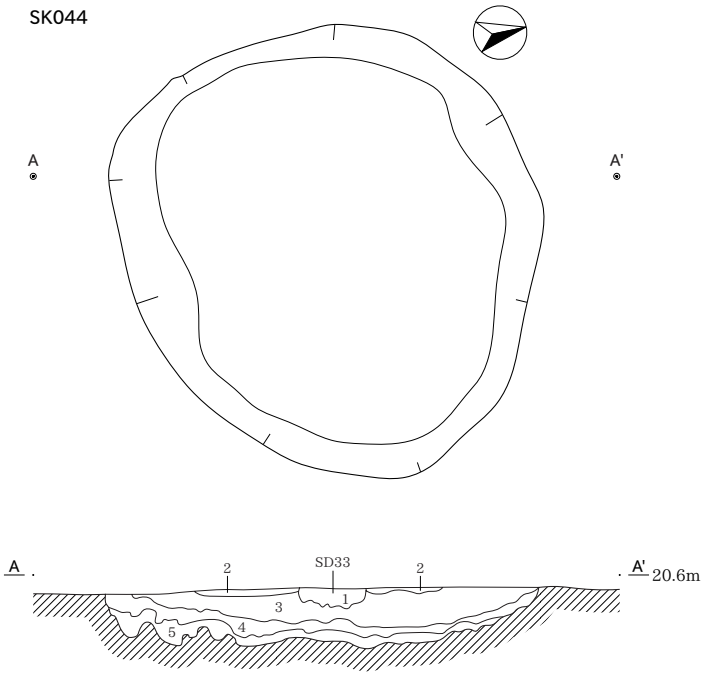
SK039
1　褐灰色シルト　炭化物粒少量含む。
2　灰色粘土と灰色シルトの混合土
　炭化物粒少量含む。
3　灰色シルトと灰色粘土の混合土
　炭化物粒少量含む。

SK040
1　灰色粘土と灰色シルトの混合土
　黒褐色シルトブロック状に含む。
　炭化物粒少量含む。
2　灰色粘土と灰色シルトの混合土
　炭化物粒少量含む。
3　灰色シルト　明度が若干異なる
　2種類の土壌による混合土。
　炭化物粒少量含む。
4　灰色粘土　炭化物少量含む。

SK041
1　灰色粘土と灰色シルトの混合土
　炭化物粒、菱鉱粒少量含む。
2　灰色粘土　炭化物粒少量含む。

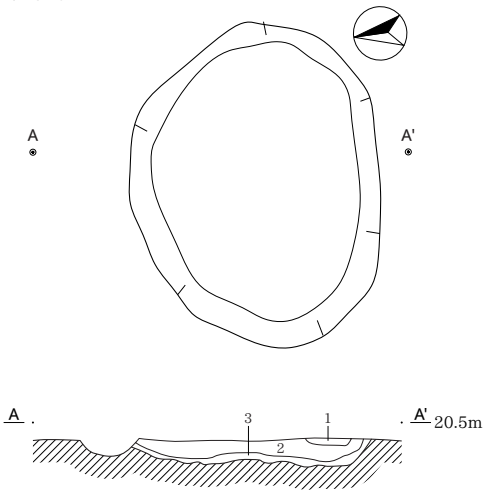
0　(1：40)　2m

SK044



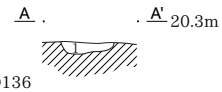
SX044
1　灰白色砂と灰色シルトの混合土　炭化物粒と菱鉄鉱少量含む。SD033の覆土。
2　青灰色砂と暗灰色シルトの混合土　炭化物粒少量含む。
3　暗灰色砂　暗灰色シルト多量、炭化物粒少量含む。
4　灰色シルト　炭化物粒と菱鉄鉱少量含む。
5　灰色砂　灰色シルト・炭化物粒と菱鉄鉱少量含む。

SK045



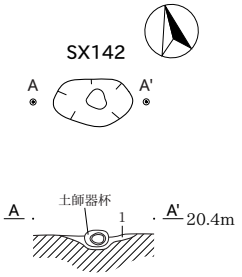
SK045
1　灰色粘土　炭化物粒やや多く含む。
2　灰色粘土　炭化物粒少量含む。
3　灰色粘土　炭化物粒少量含む。
　2層に比べやや暗い。

SD136



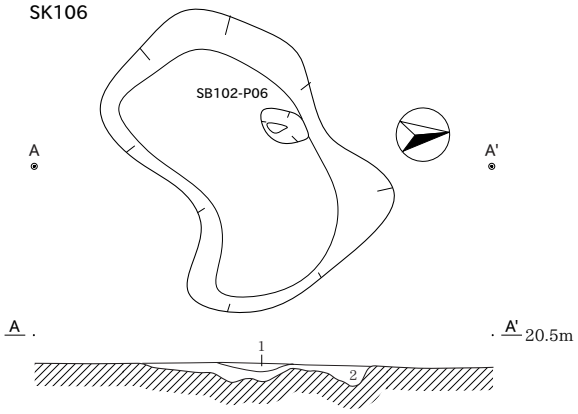
SD136
1　青灰色粘土　粘性強、しまりやや強。
　φ10mm以下の炭化物粒多量に含む。

SX142



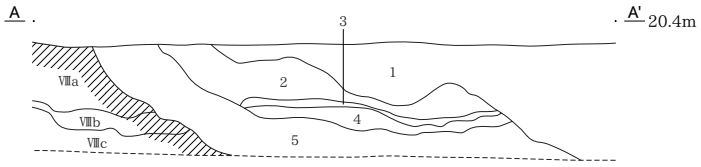
SX142
1　灰色粘土　粘性強、しまり中。
　φ3mm以下の炭化物粒少量含む。

SK106



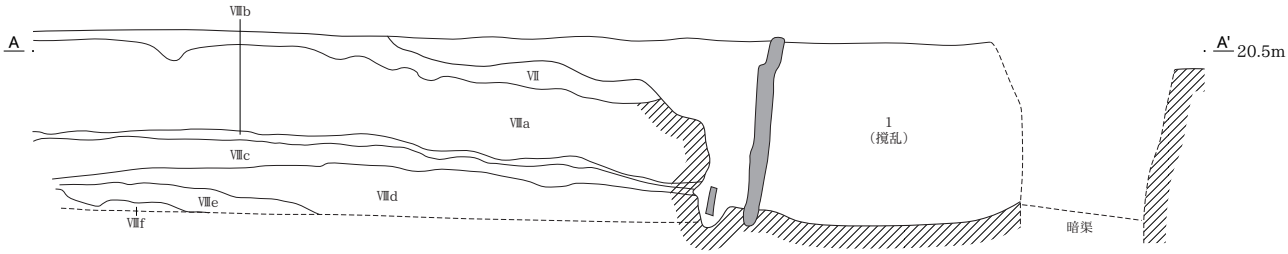
SK106
1　灰色粘土　炭化物粒やや多く含む。
2　オリーブ灰色粘土　炭化物粒少量含む。

河川跡



河川跡
1　灰色砂　粘性なし、しまりなし。
2　明黄褐色砂　粘性なし、しまりなし。
3　灰色砂質シルト　粘性やや弱、しまりやや弱。
4　灰色砂　粘性弱、しまり弱。植物遺体少量含む。
5　青灰色砂質シルト　粘性やや弱、しまりやや弱。

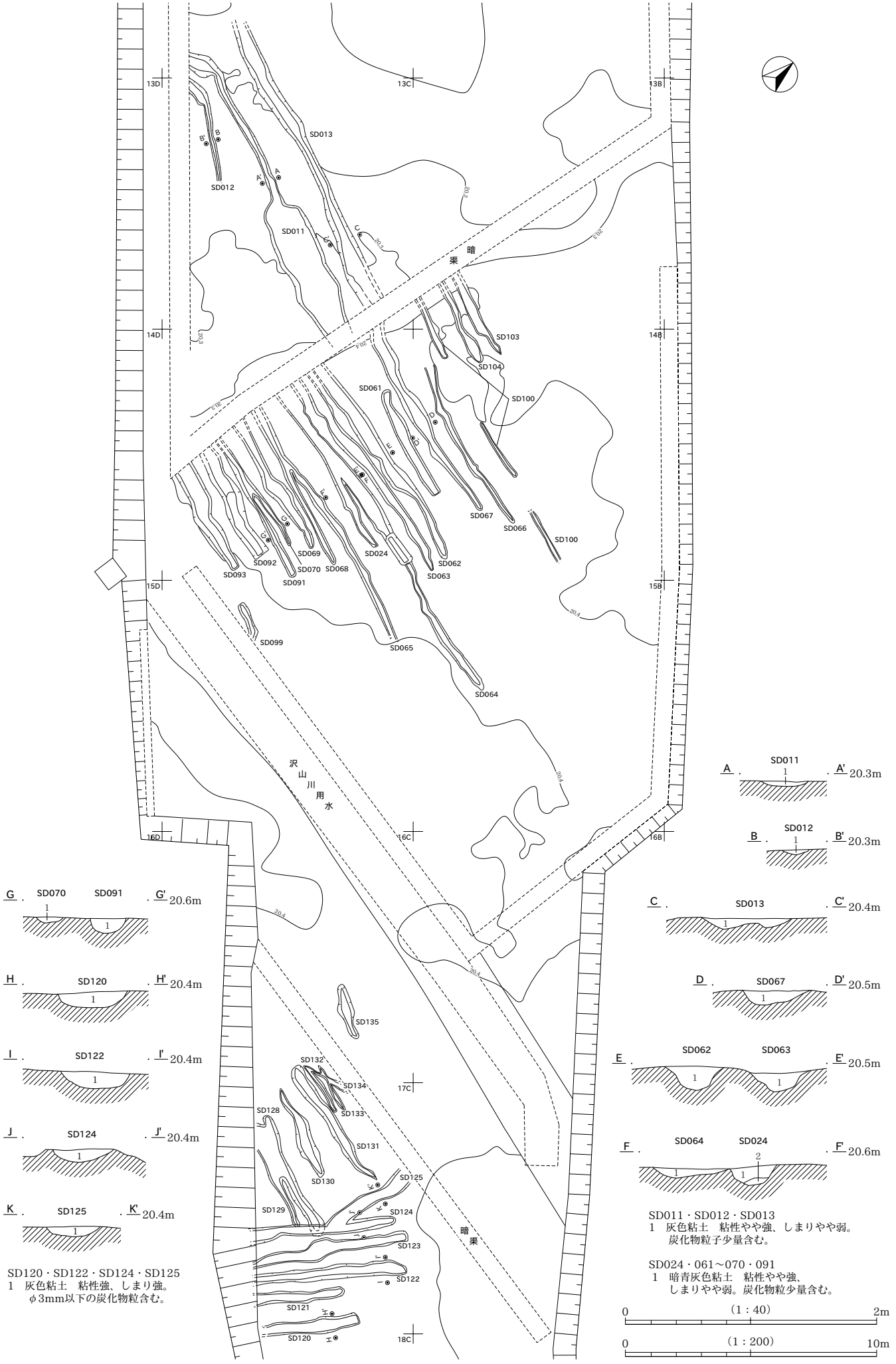
沢山川用水

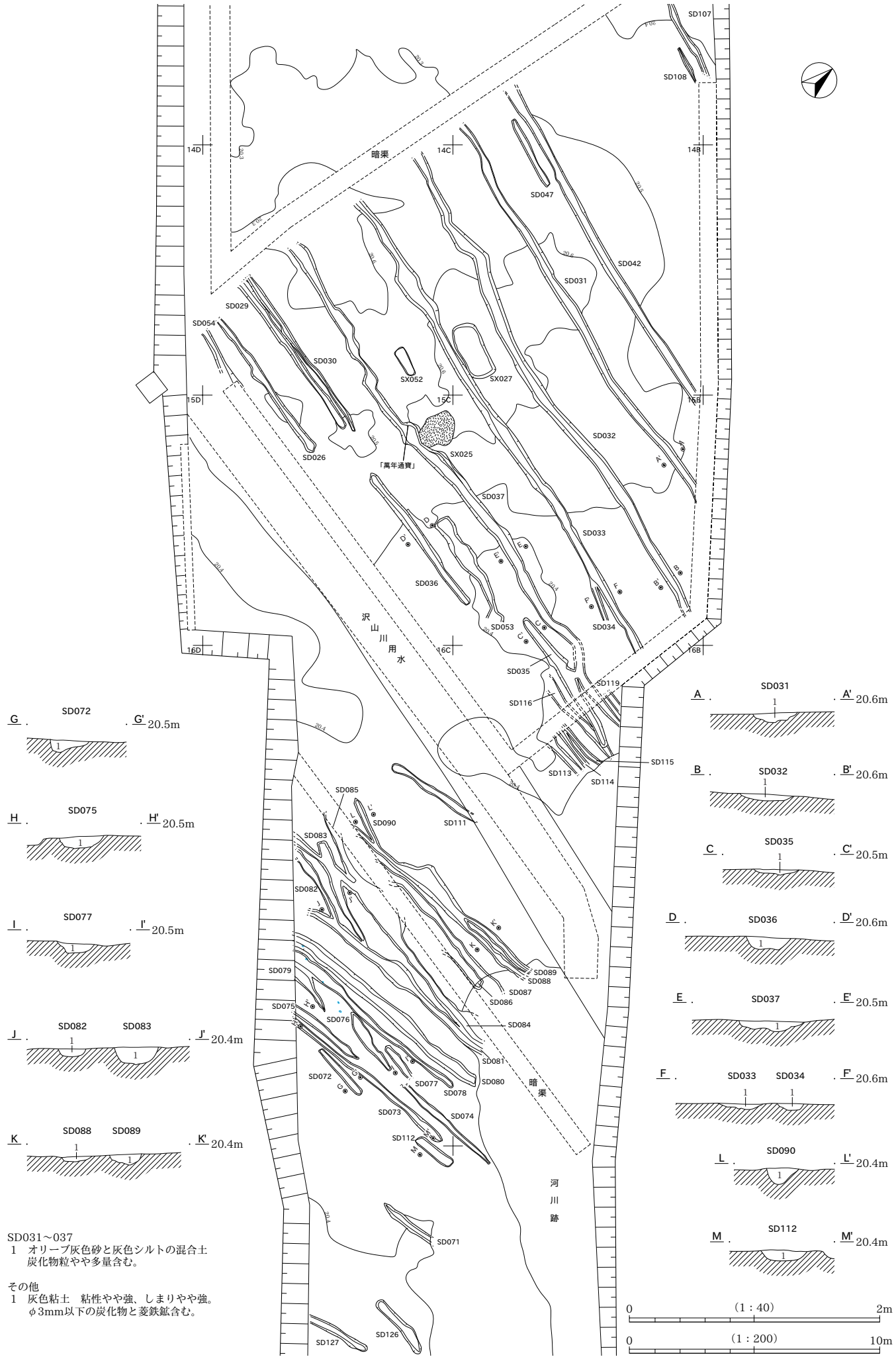


沢山川用水
1　灰色粘土　粘性やや強、しまり弱。黒褐色粘土をブロック状に含む。炭化物粒・酸化鉄粒を多量含む。

0　(1：40)　2m

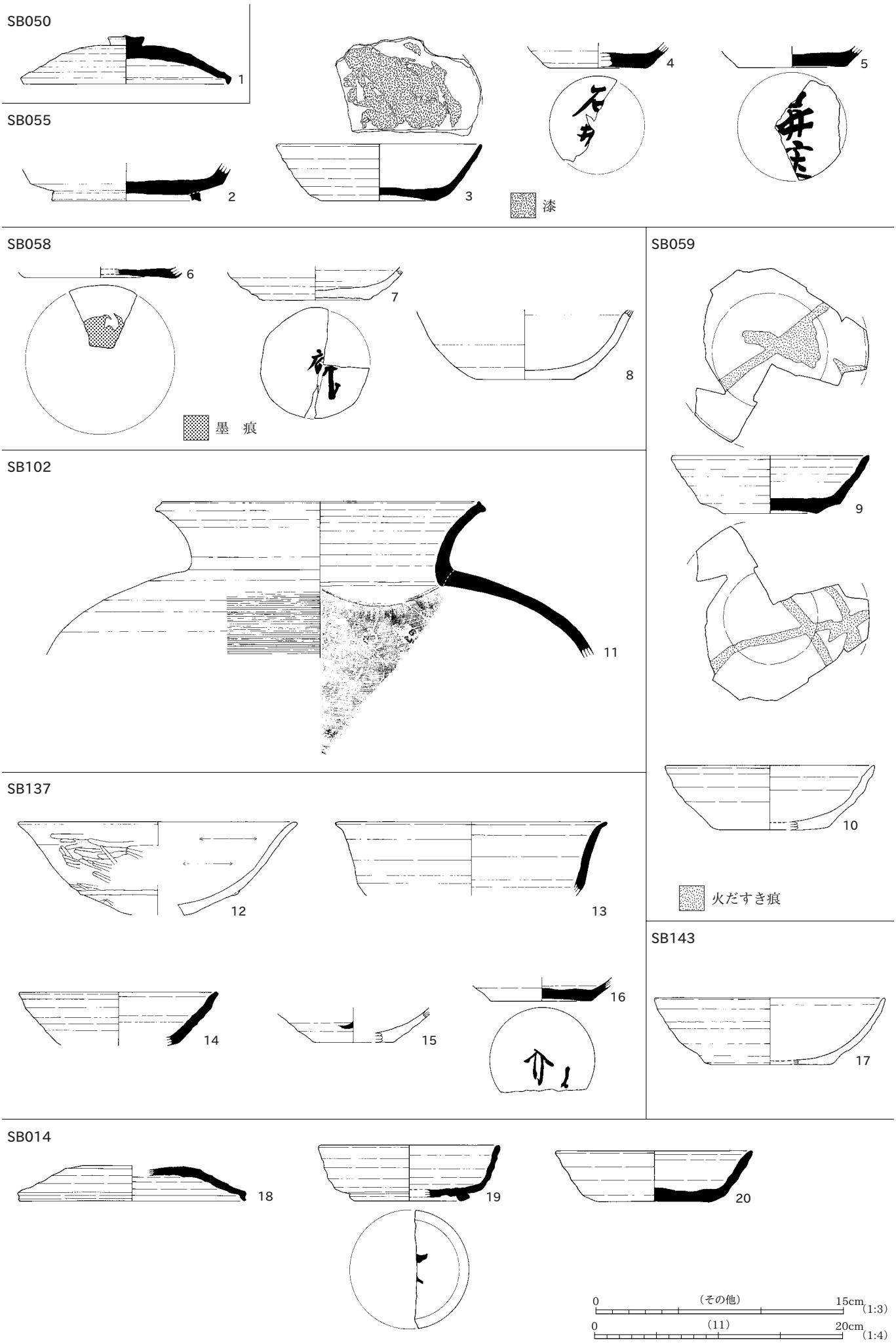
遺構分割図4　遺構個別図15　SD011～013・024・062～064・067・070・091・120・122・124・125



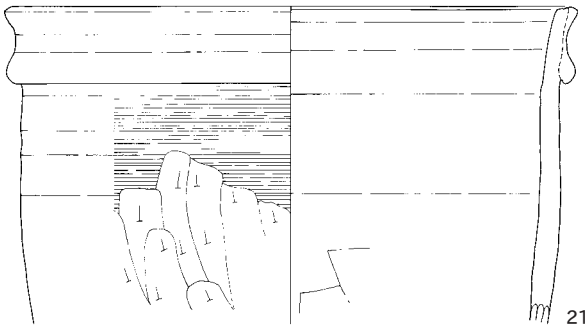


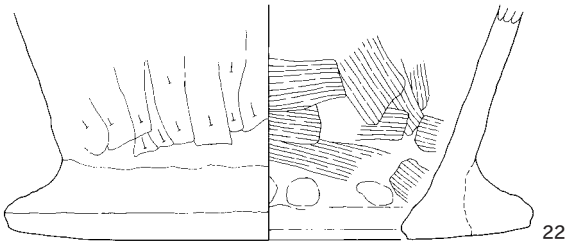
SD031～037
1　オリーブ灰色砂と灰色シルトの混合土
　炭化物粒やや多量含む。

その他
1　灰色粘土　粘性やや強、しまりやや強。
　φ3mm以下の炭化物と菱鉄鉱含む。


SB050
1
SB055
2
3
4
5
漆
SB058
6
7
8
墨 痕
SB059
9
10
火だすき痕
SB102
11
SB137
12
13
14
15
16
SB143
17
SB014
18
19
20
0 (その他) 15cm (1:3)
0 (11) 20cm (1:4)

SK007

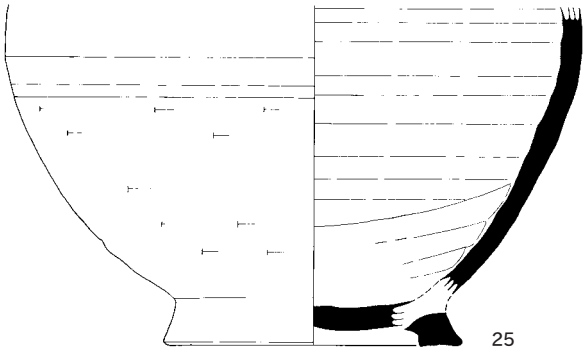




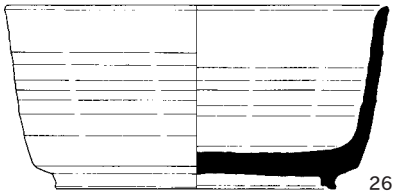
SK017

SK040

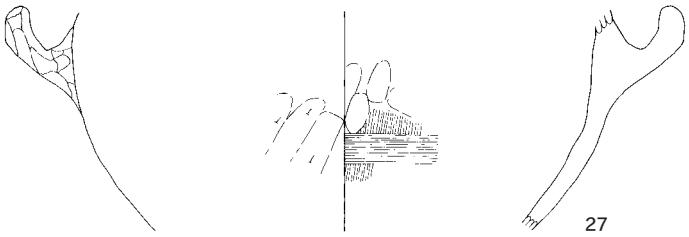
SK044



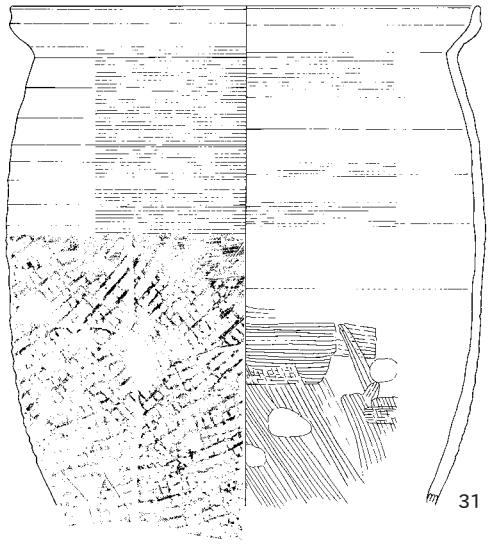
SK101



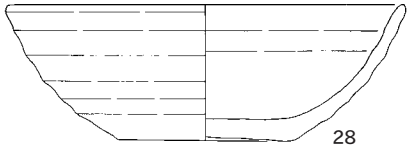
SX004

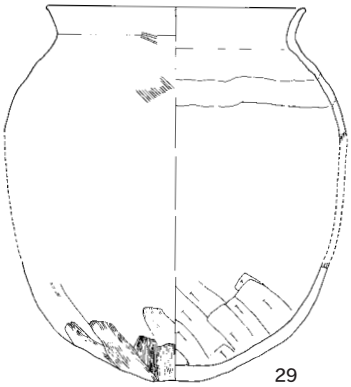


SX025

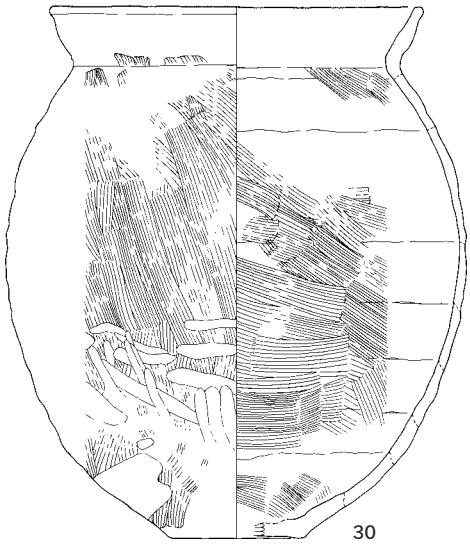


SX019



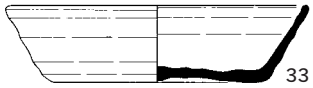


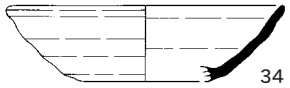
SX021

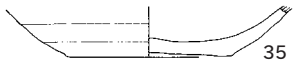


SX025・027

SX027

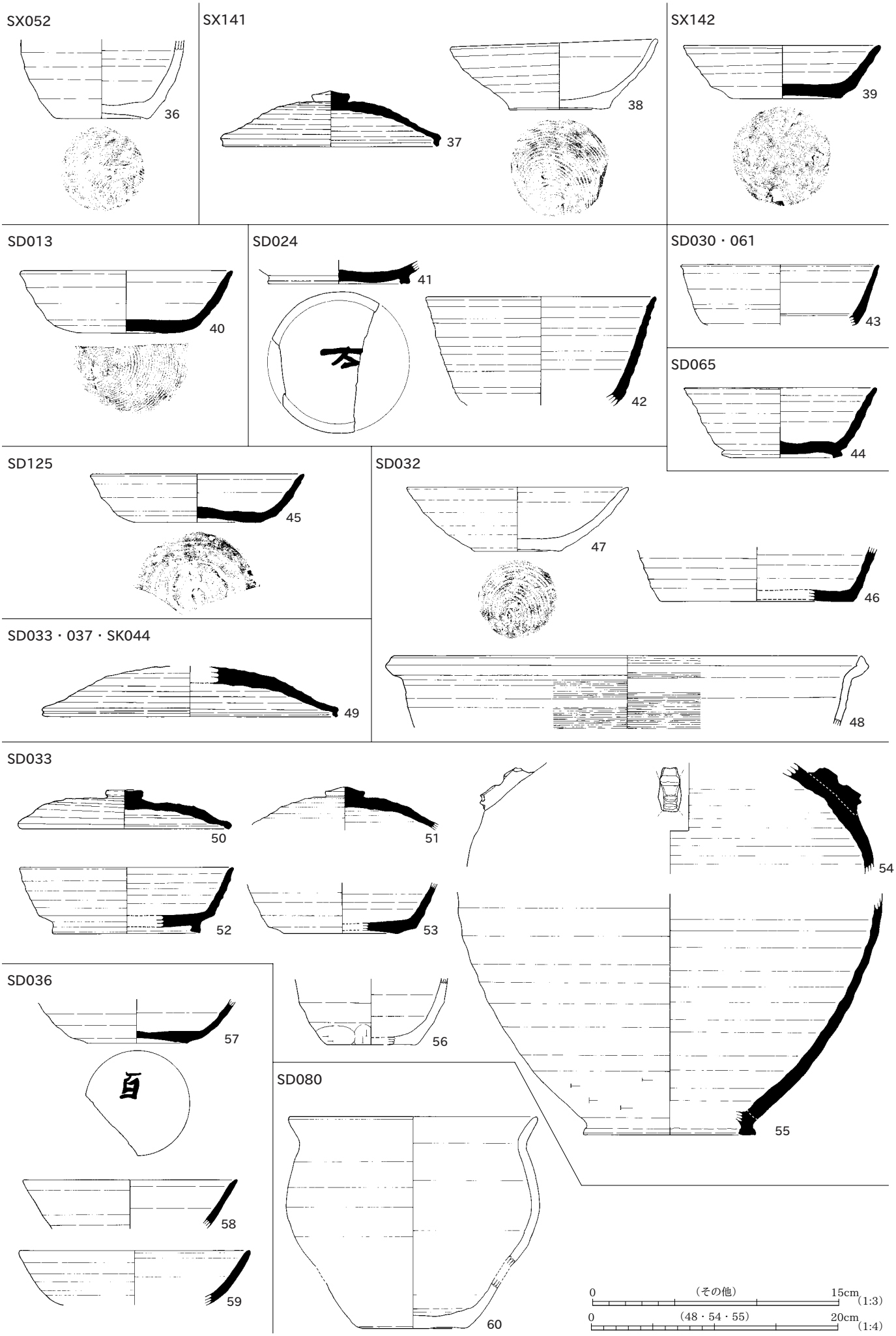




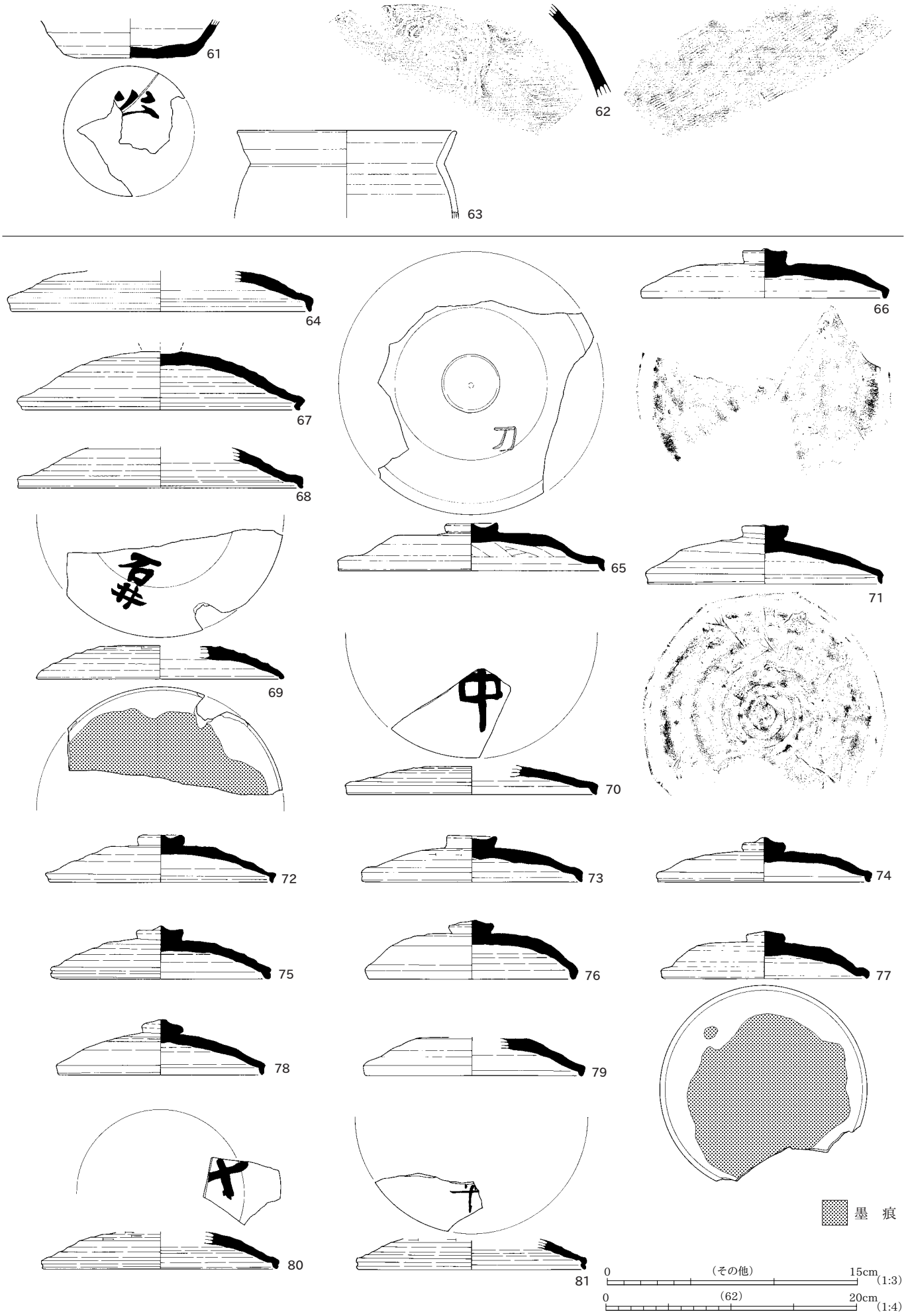


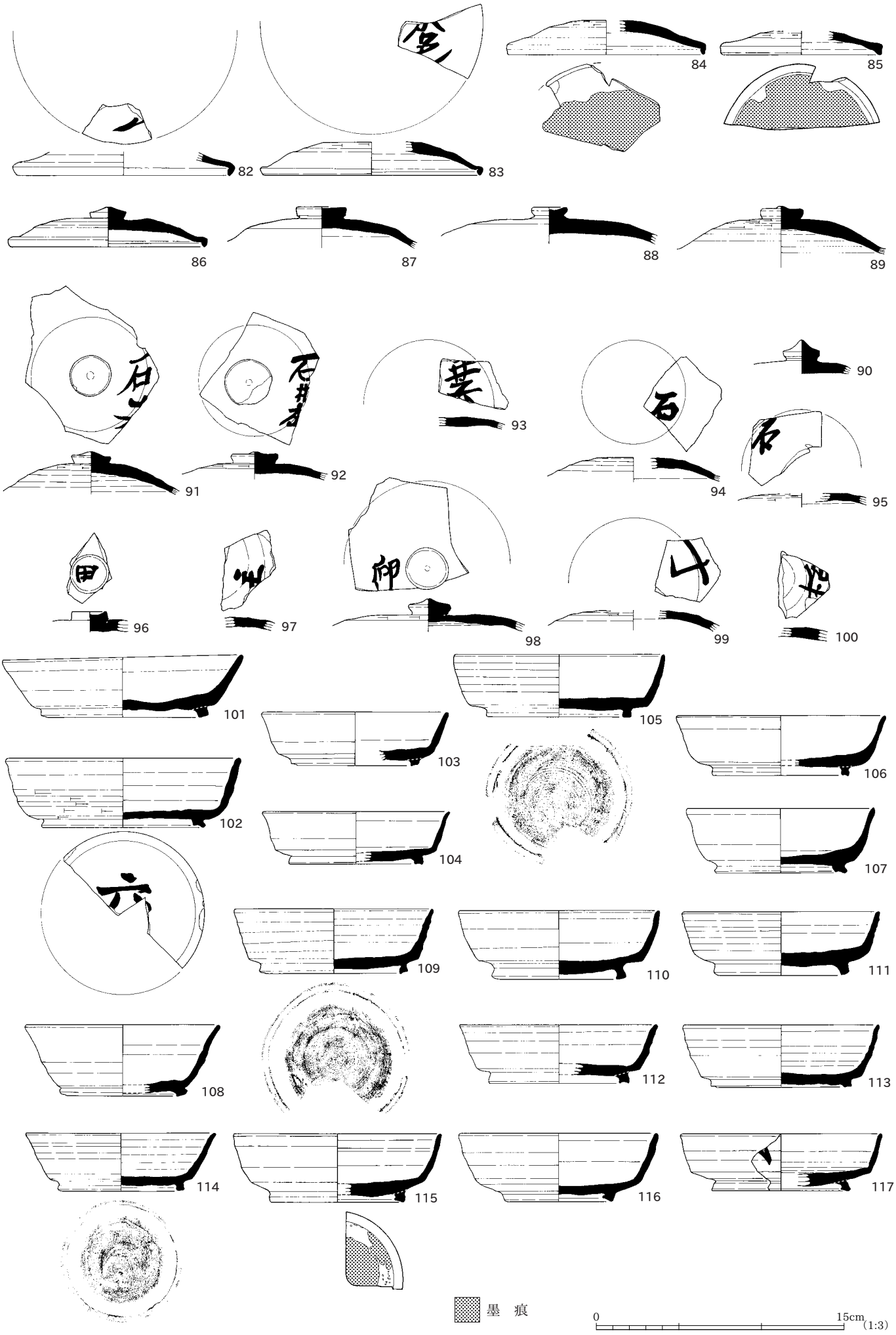
0　（その他）　15cm　(1:3)

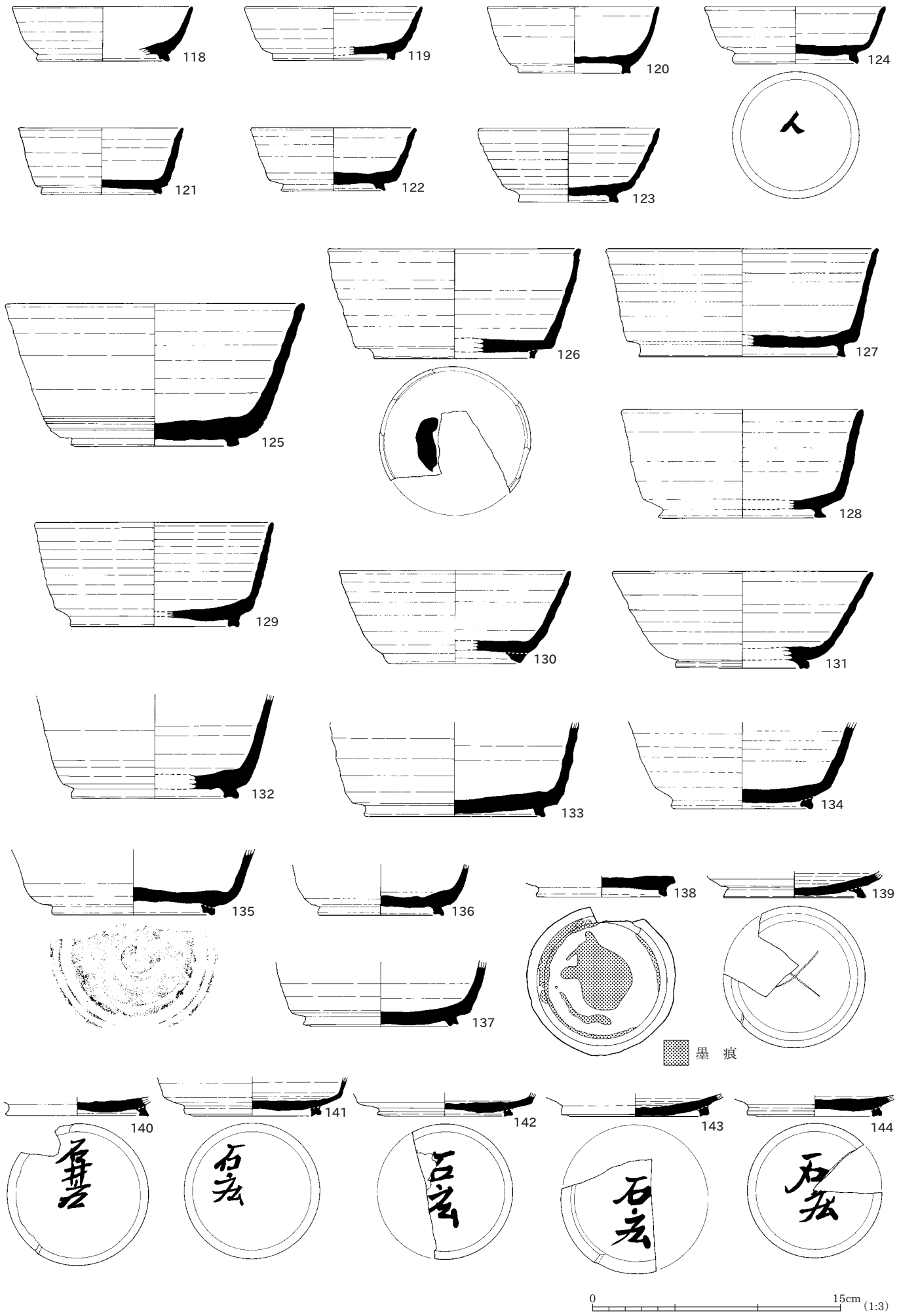
0　（27・29・30・31）　20cm　(1:4)

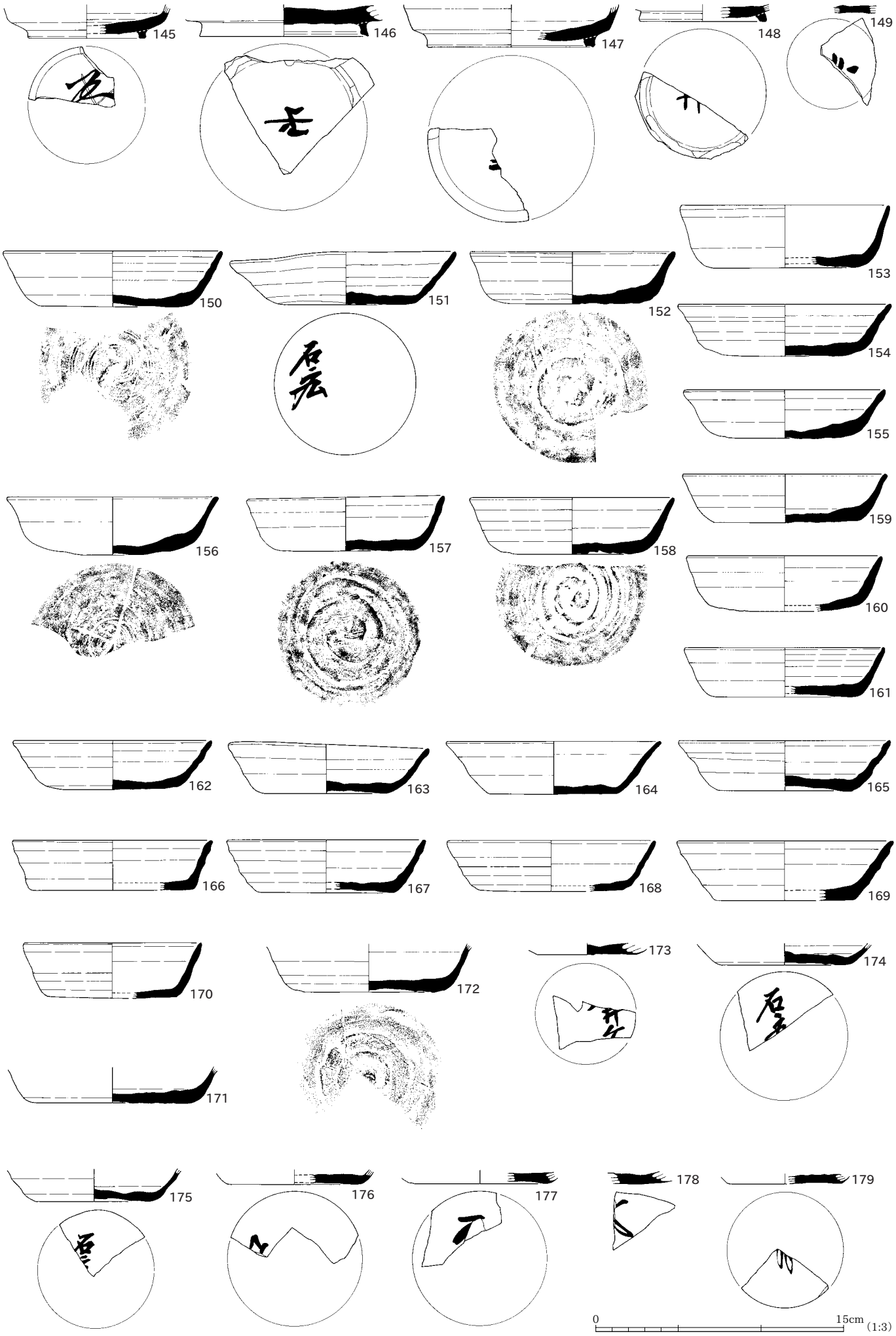

SX052
36
SX141
37
38
SX142
39
SD013
40
SD024
41
42
SD030・061
43
SD065
44
SD125
45
SD032
47
46
48
SD033・037・SK044
49
SD033
50
51
52
53
54
55
SD036
57
56
58
59
SD080
60
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
（48・54・55）
20cm
(1:4)

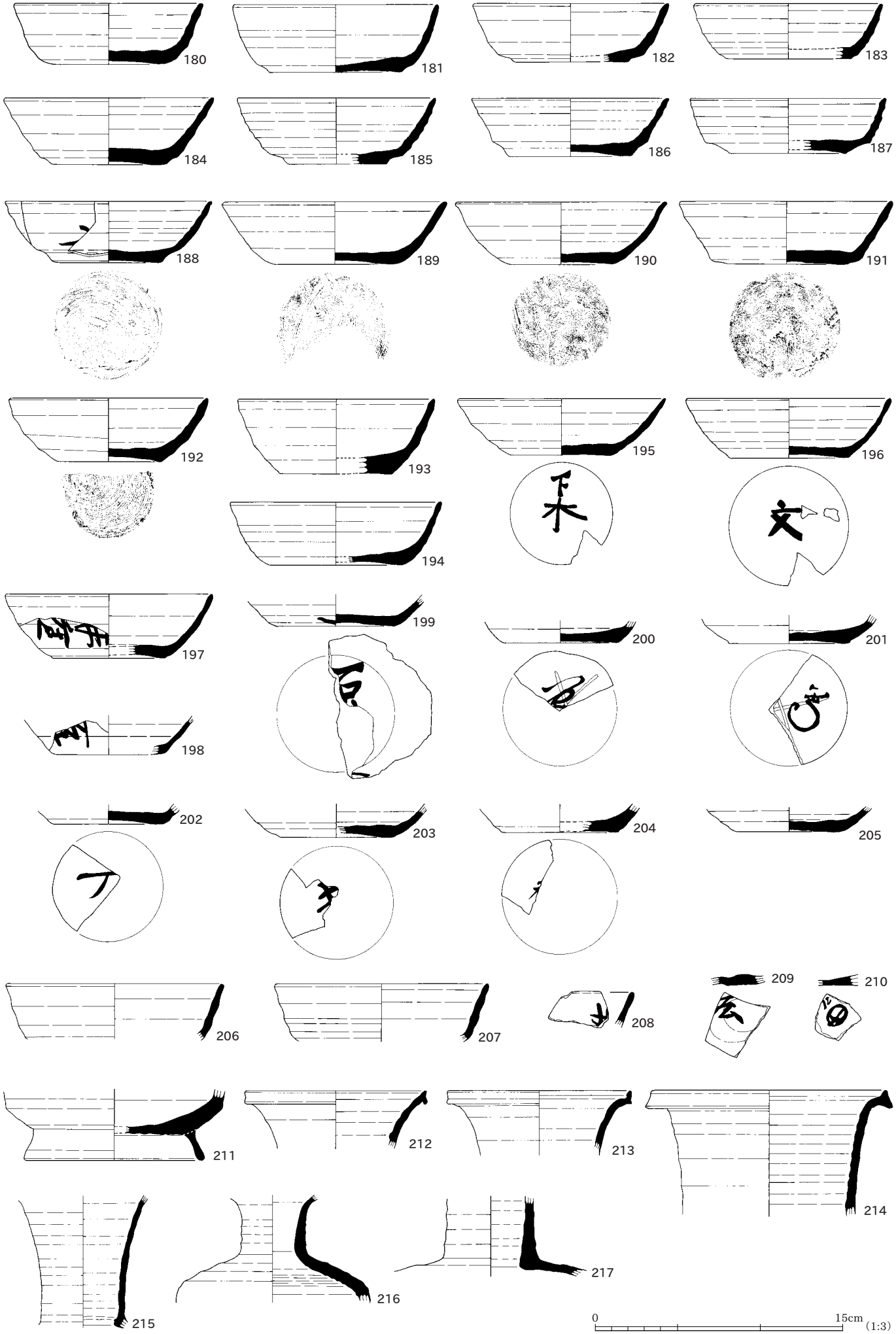
SD037

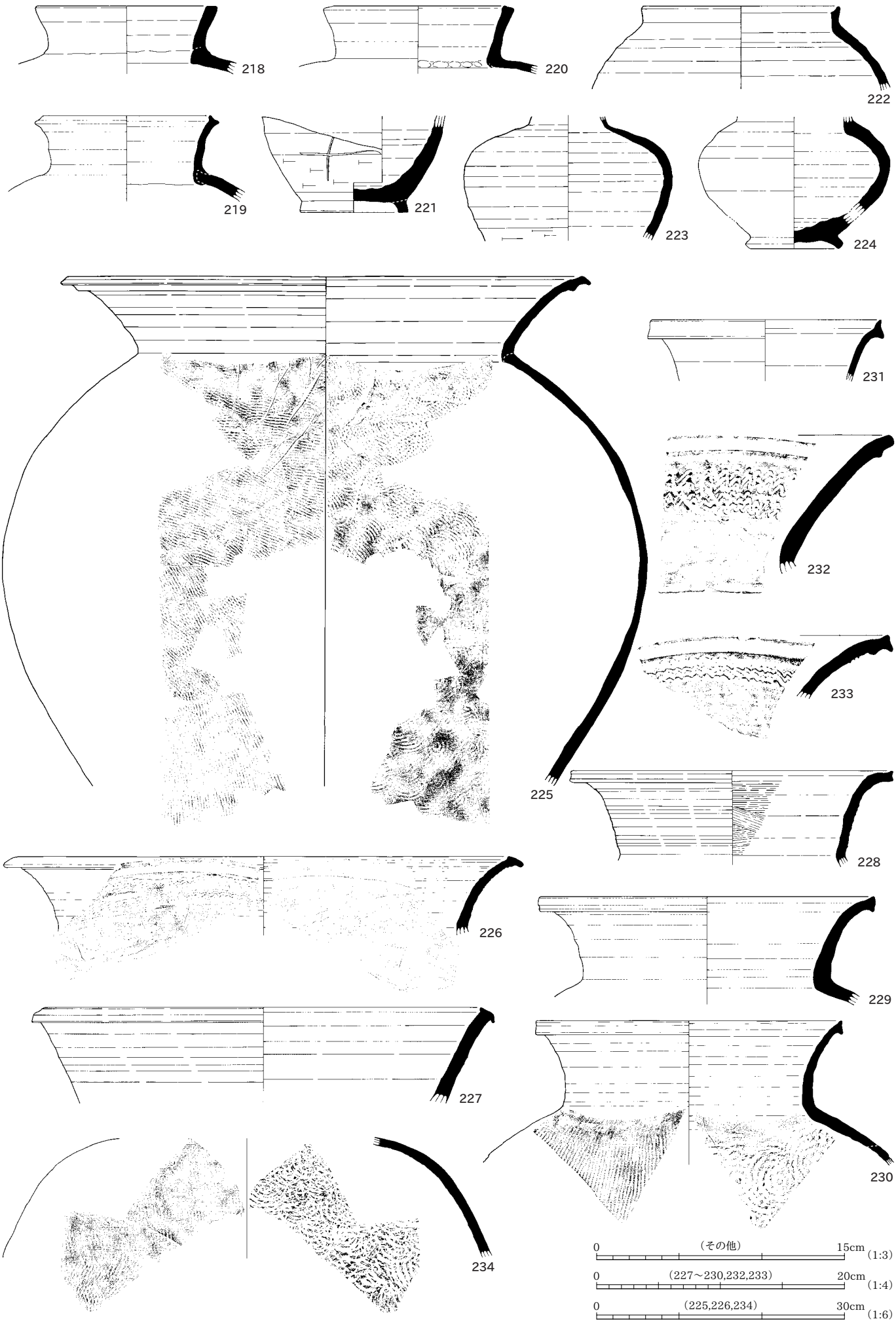

61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
墨　痕
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
(62)
20cm
(1:4)

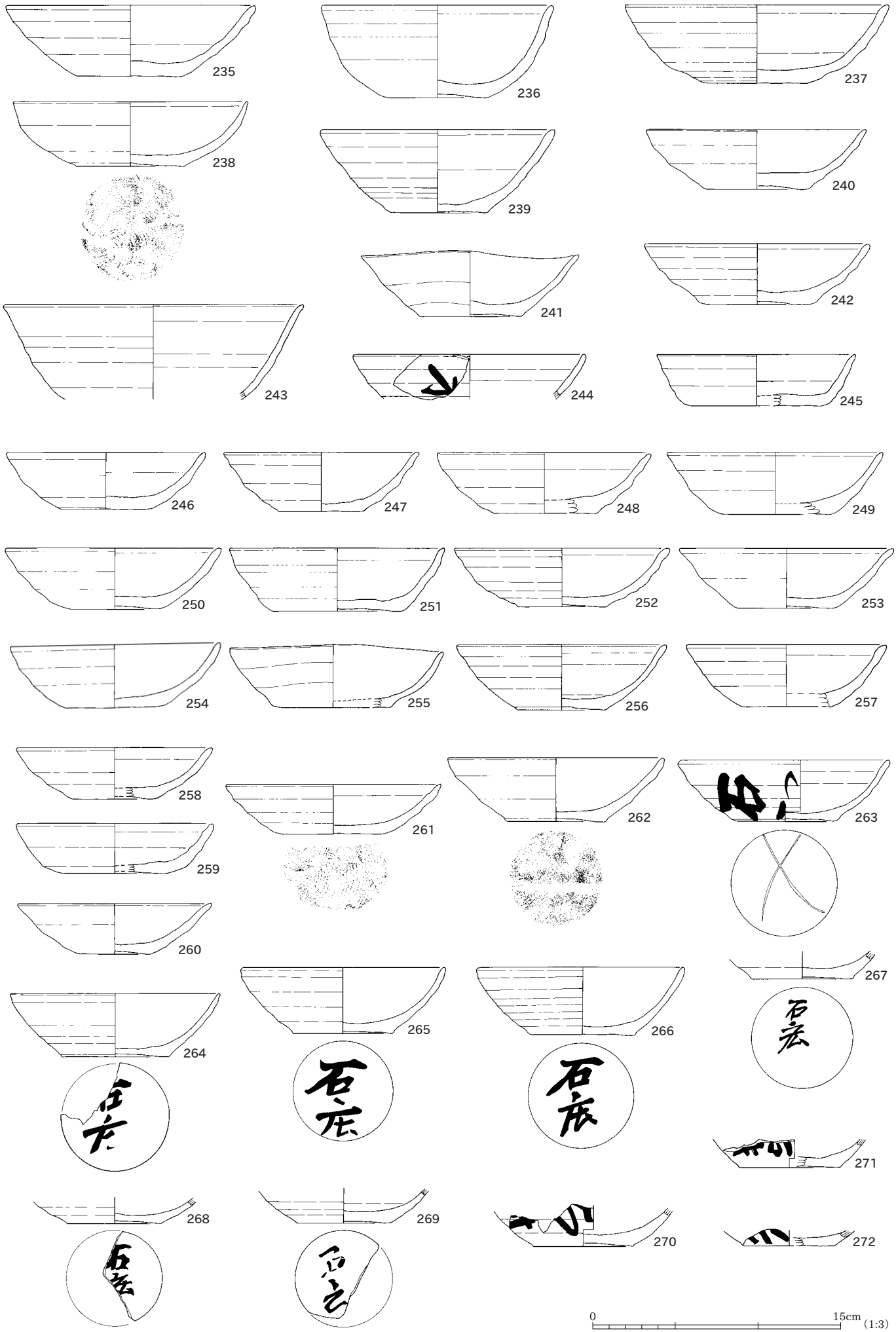

82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
墨 痕
0
15cm
(1:3)

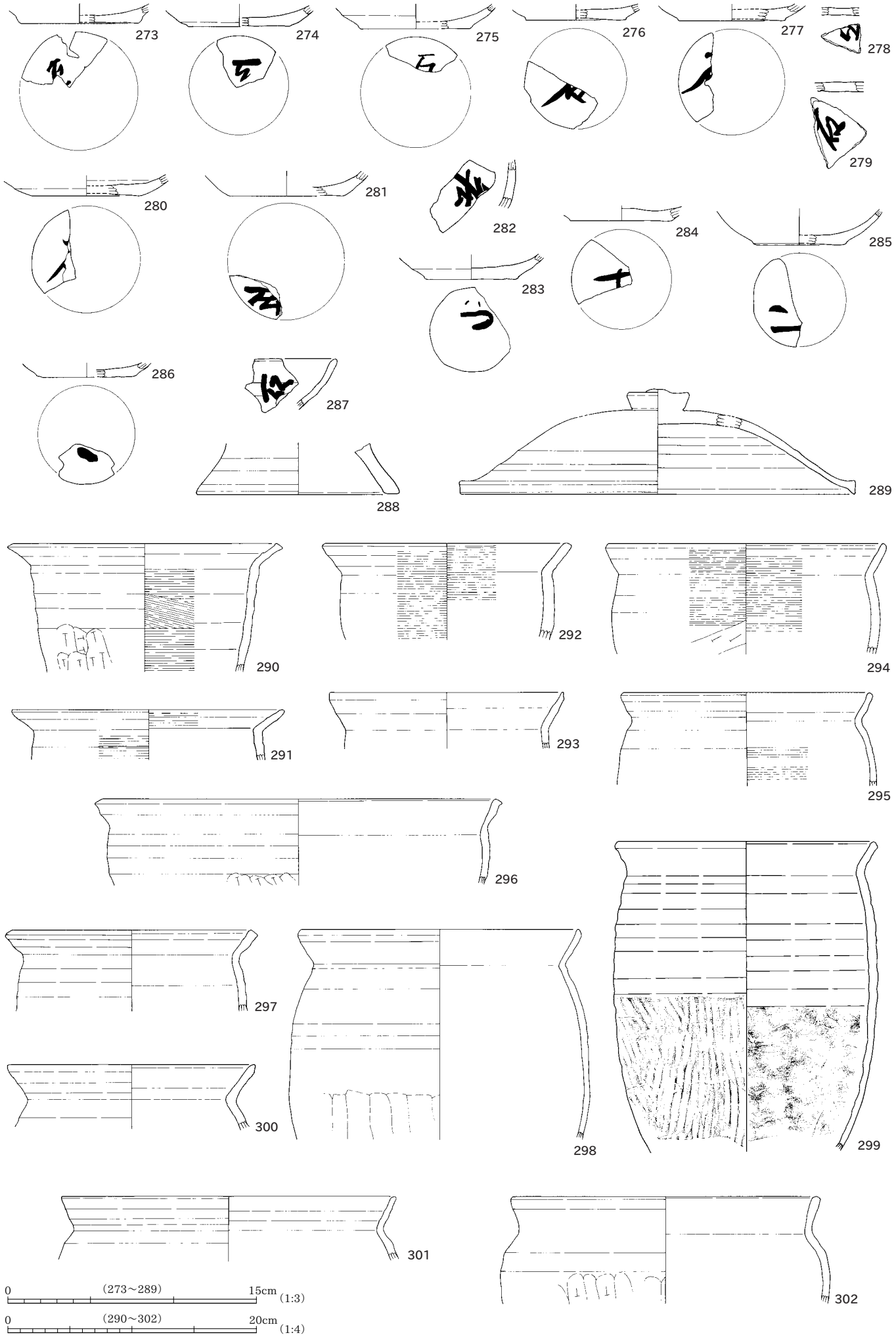

118
119
120
124
121
122
123
126
127
125
128
129
130
131
132
133
134
135
136
138
139
137
墨 痕
140
141
142
143
144
0
15cm
(1:3)

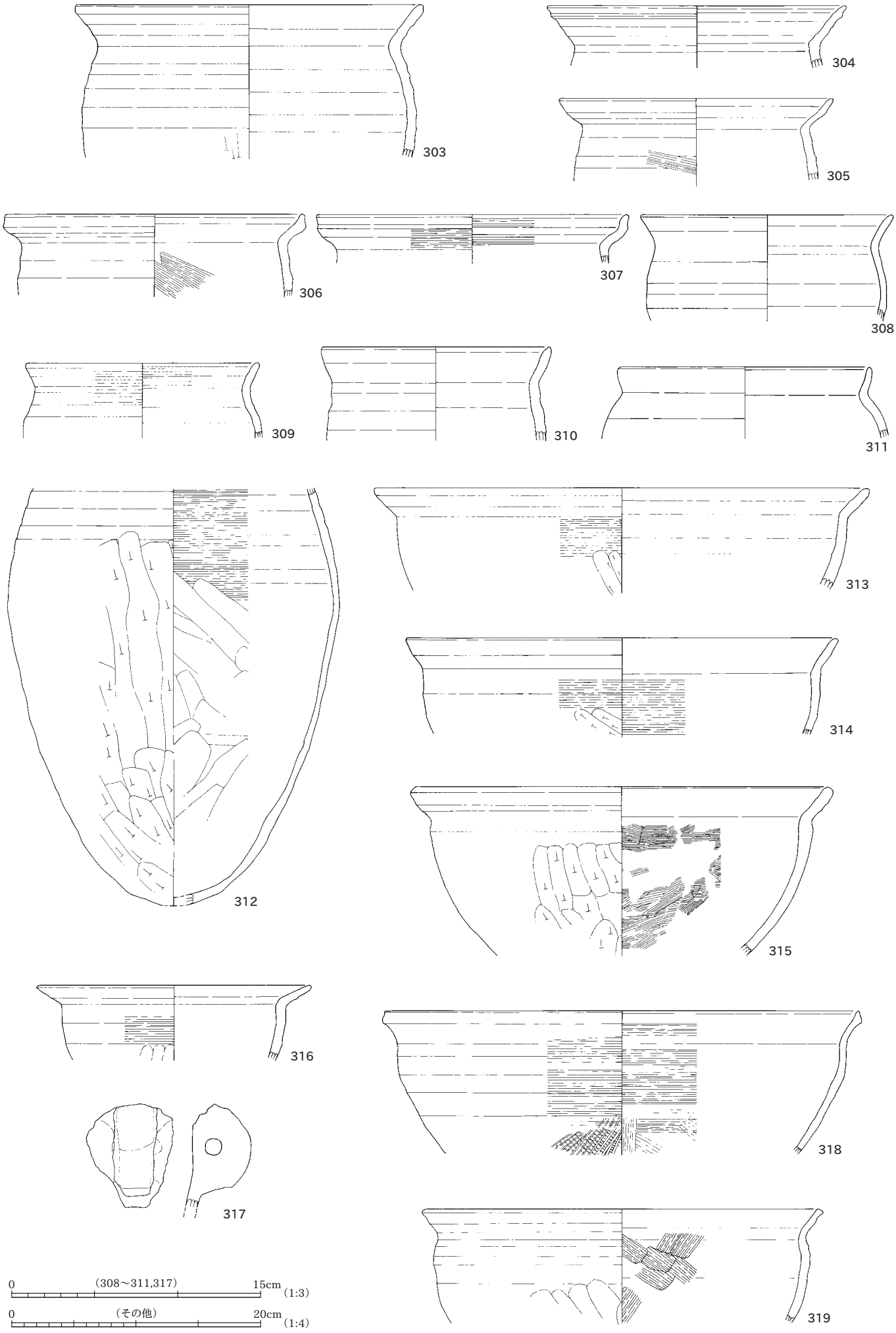

145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
0
15cm
(1:3)

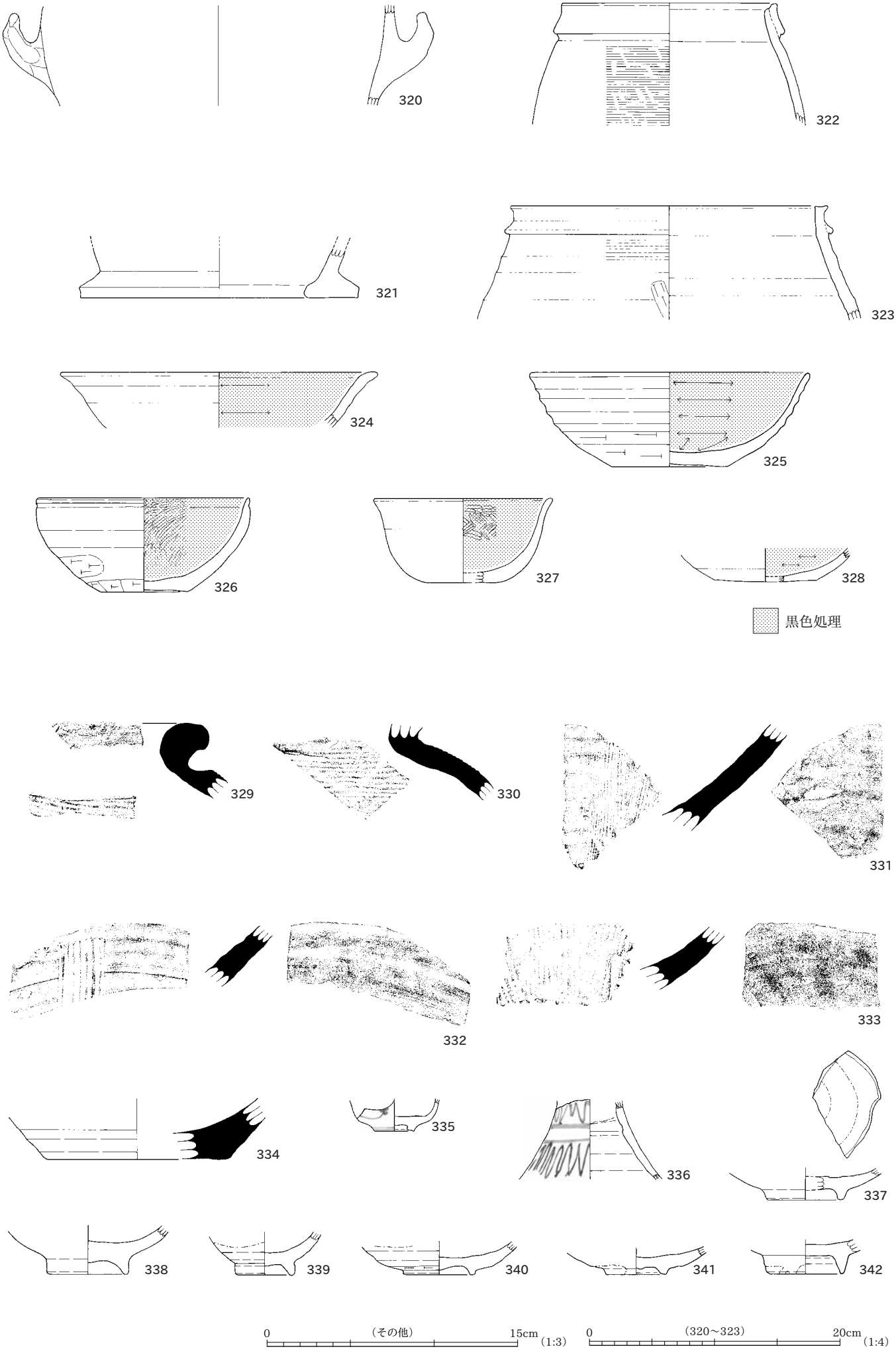

180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
0
15cm
(1:3)

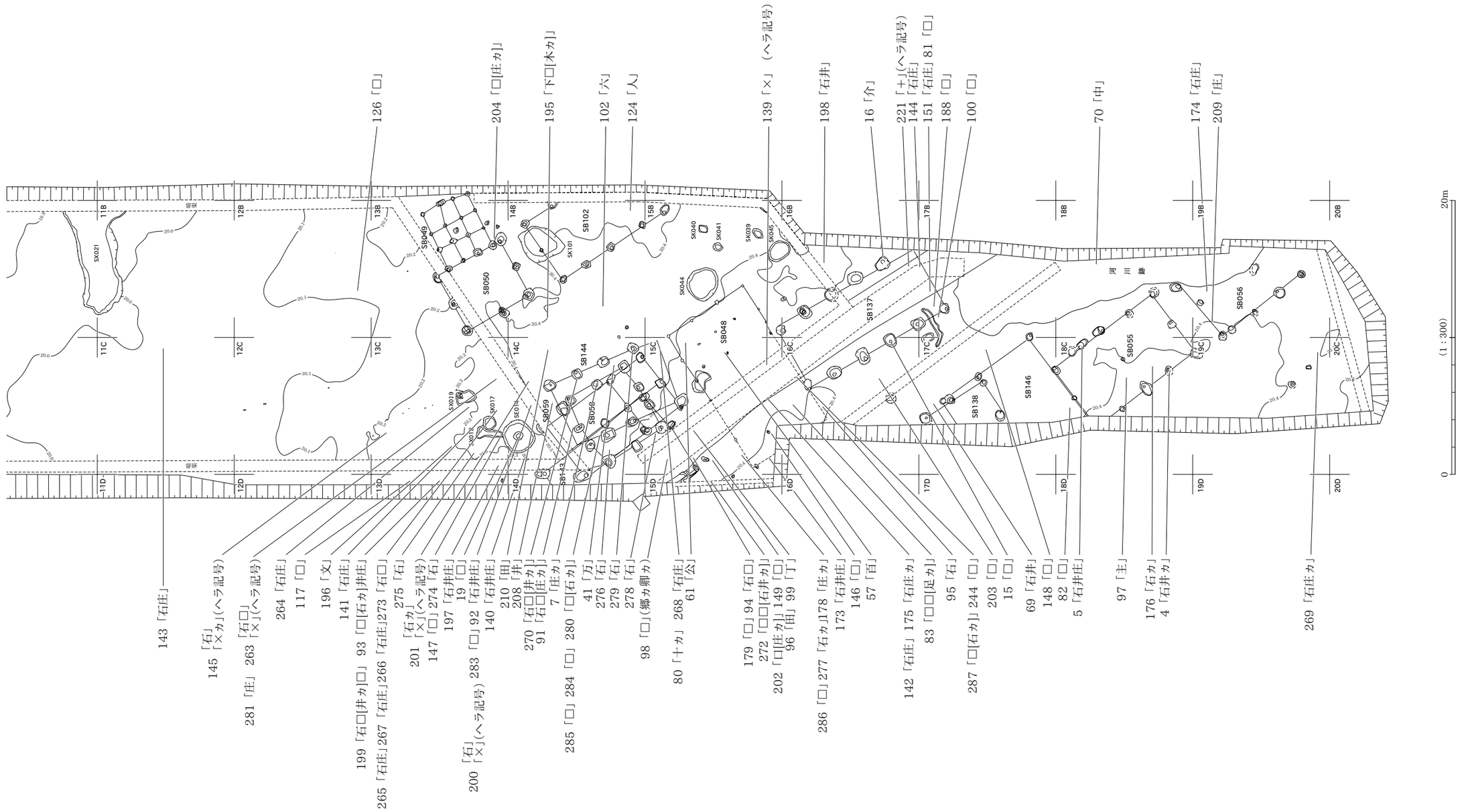

218
220
222
219
221
223
224
231
232
233
225
228
226
229
227
230
234
0 (その他) 15cm (1:3)
0 (227～230,232,233) 20cm (1:4)
0 (225,226,234) 30cm (1:6)

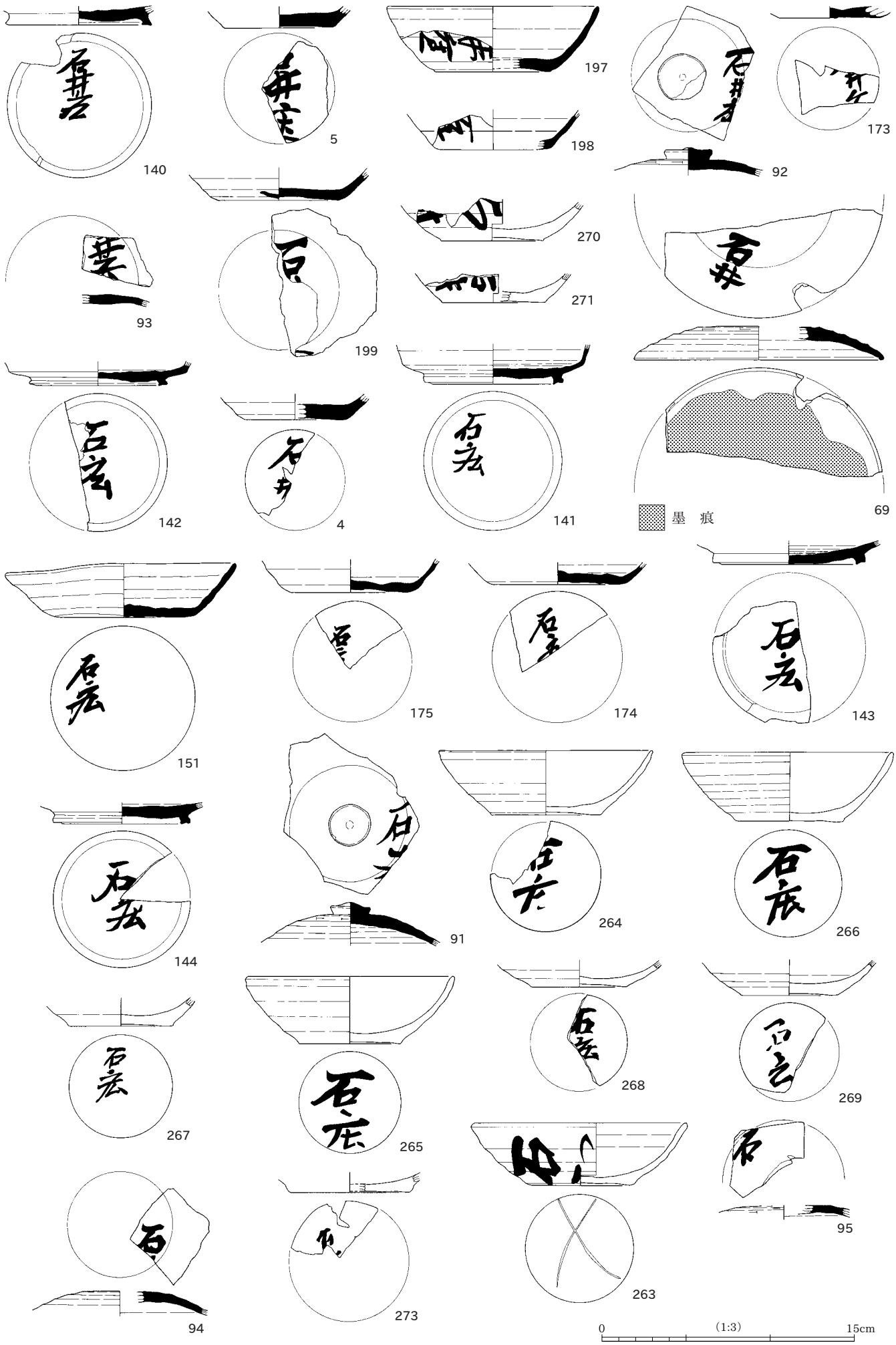

235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
0
15cm
(1:3)

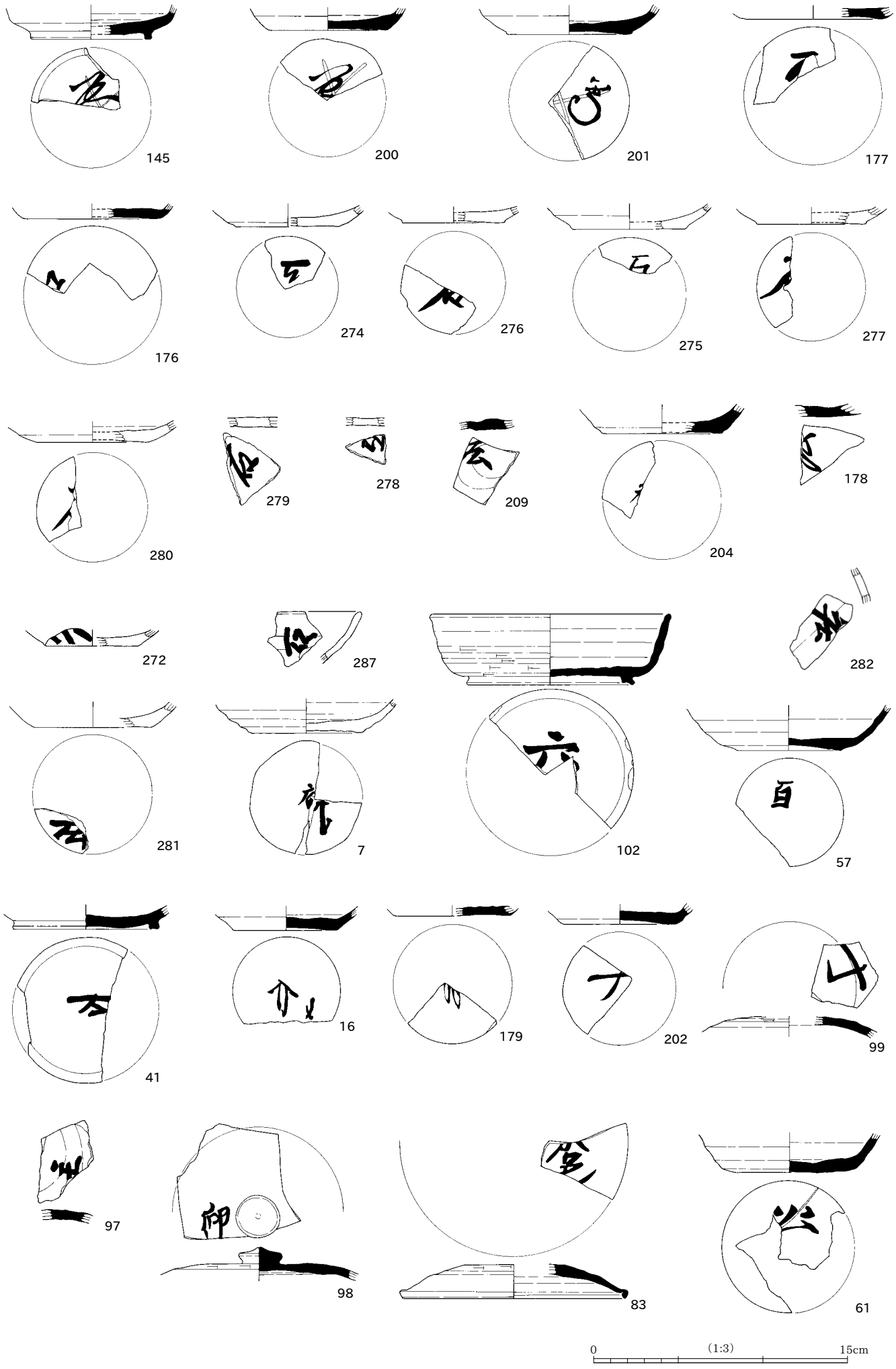

273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
0 (273～289) 15cm (1:3)
0 (290～302) 20cm (1:4)

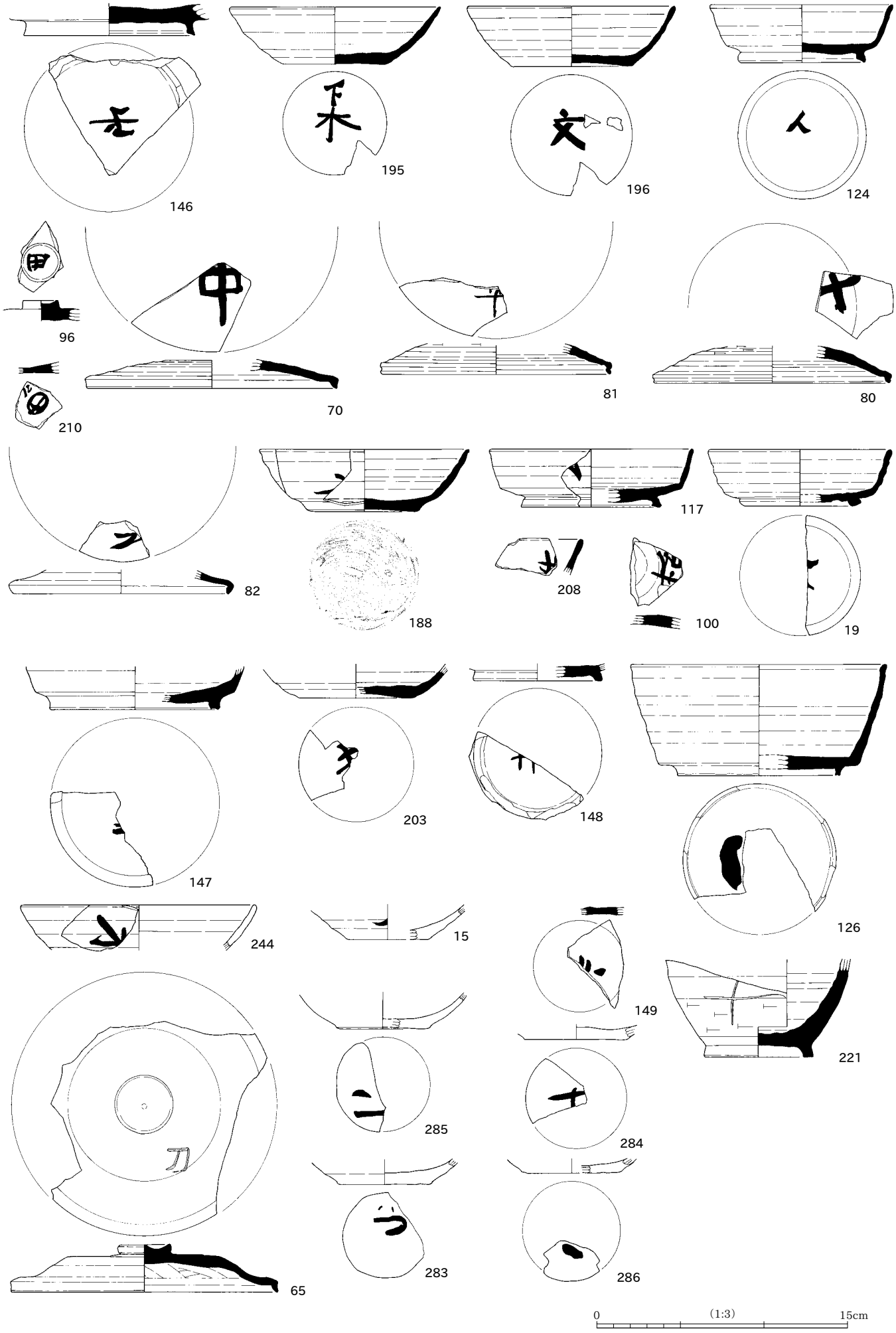

303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
0
(308～311,317)
15cm
(1:3)
0
(その他)
20cm
(1:4)


320
322
321
323
324
325
326
327
328
黒色処理
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
0
（その他）
15cm
(1:3)
0
(320～323)
20cm
(1:4)


126「口」
204「口[庄カ]」
195「下口[木カ]」
102「六」
124「人」
139「×」（ヘラ記号）
198「石井」
16「介」
221「+」(ヘラ記号)
144「石庄」
151「石庄」81「口」
188「口」
100「口」
70「中」
174「石庄」
209「庄」
143「石庄」
145「石」「×カ」(ヘラ記号)
281「庄」263「石口」「×」(ヘラ記号)
264「石庄」
117「口」
196「文」
141「石庄」
199「石口[井カ]口」93「口[石カ]井庄」
265「石庄」267「石庄」266「石庄」273「石口」
275「石」
201「石カ」「×」(ヘラ記号)
147「口」274「石」
197「石井庄」
19「口」
200「石」「×」(ヘラ記号) 283「口」92「石井庄」
140「石井庄」
210「田」
208「井」
270「石口[井カ]」
91「石口[庄カ]」
7「庄カ」
285「口」284「口」280「口[石カ]」
41「万」
276「石」
279「石」
278「石」
98「口」(郷カ卿カ)
80「十カ」268「石庄」
61「公」
179「口」94「石口」
272「口口[石井カ]」
202「口[庄カ]」149「口」
96「田」99「丁」
286「口」277「石カ」178「庄カ」
173「石井庄」
146「口」
57「百」
142「石庄」175「石庄カ」
83「口口[足カ]」
95「石」
287「口[石カ]」244「口」
203「口」
15「口」
69「石井」
148「口」
82「口」
5「石井庄」
97「主」
176「石カ」
4「石井カ」
269「石庄カ」
SX021
SB049
SB050
SK101
SB102
SK040
SK041
SK039
SK045
SK044
SB048
SB137
SB138
SB146
SB055
SB056
SX019
SX017
SX018
SE014
SB059
SB058
SB144
SB143
河 川 跡
11B
12B
13B
14B
15B
16B
17B
18B
19B
20B
11C
12C
13C
14C
15C
16C
17C
18C
19C
20C
11D
12D
13D
14D
15D
16D
17D
18D
19D
20D
20m
0
(1：300)

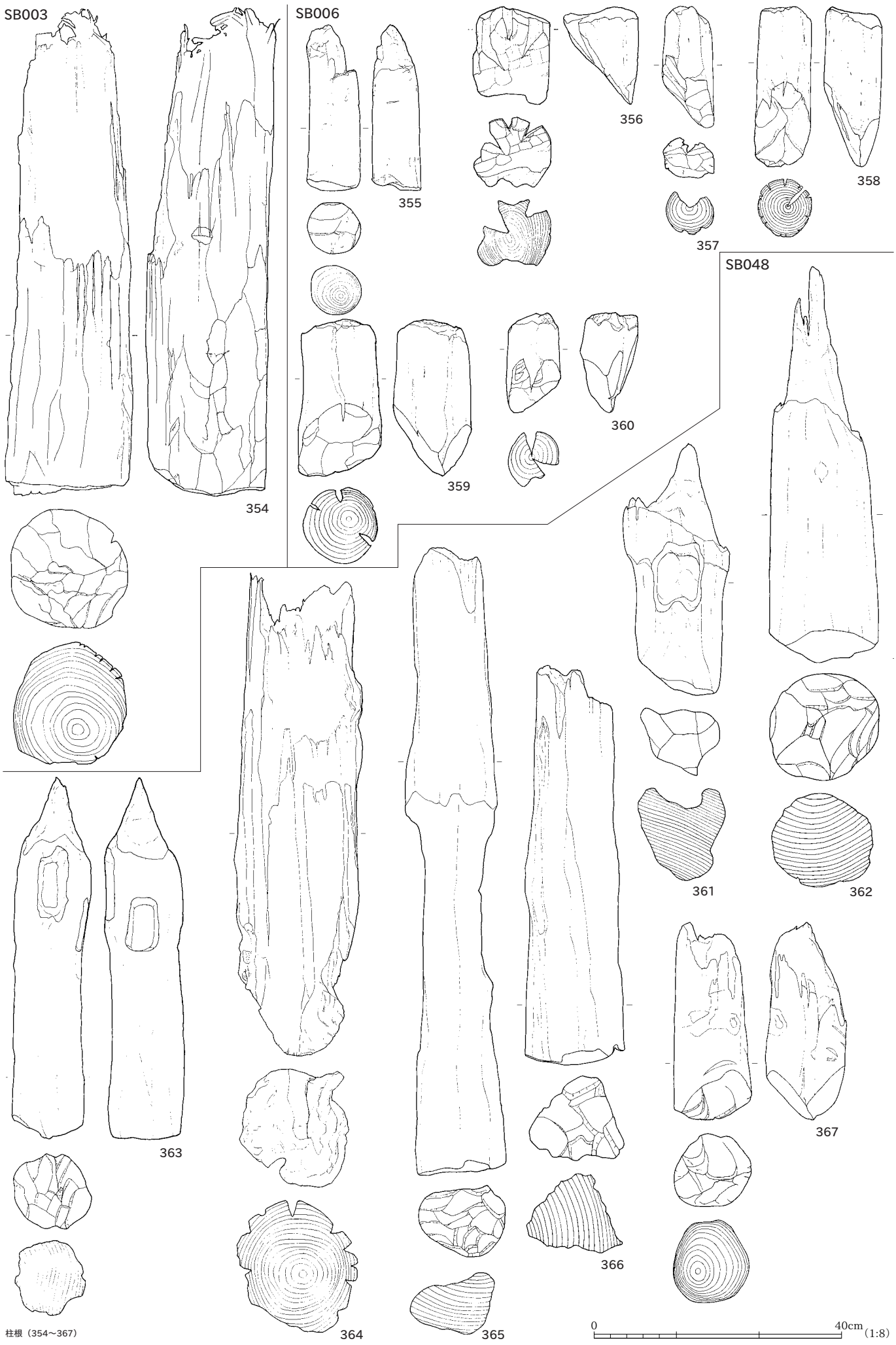

140
5
197
198
173
92
93
199
270
271
142
4
141
墨 痕
69
151
175
174
143
144
91
264
266
267
265
268
269
263
95
94
273
0
(1:3)
15cm


145
200
201
177
176
274
276
275
277
280
279
278
209
204
178
272
287
282
281
7
102
57
41
16
179
202
99
97
98
83
61
0
(1:3)
15cm

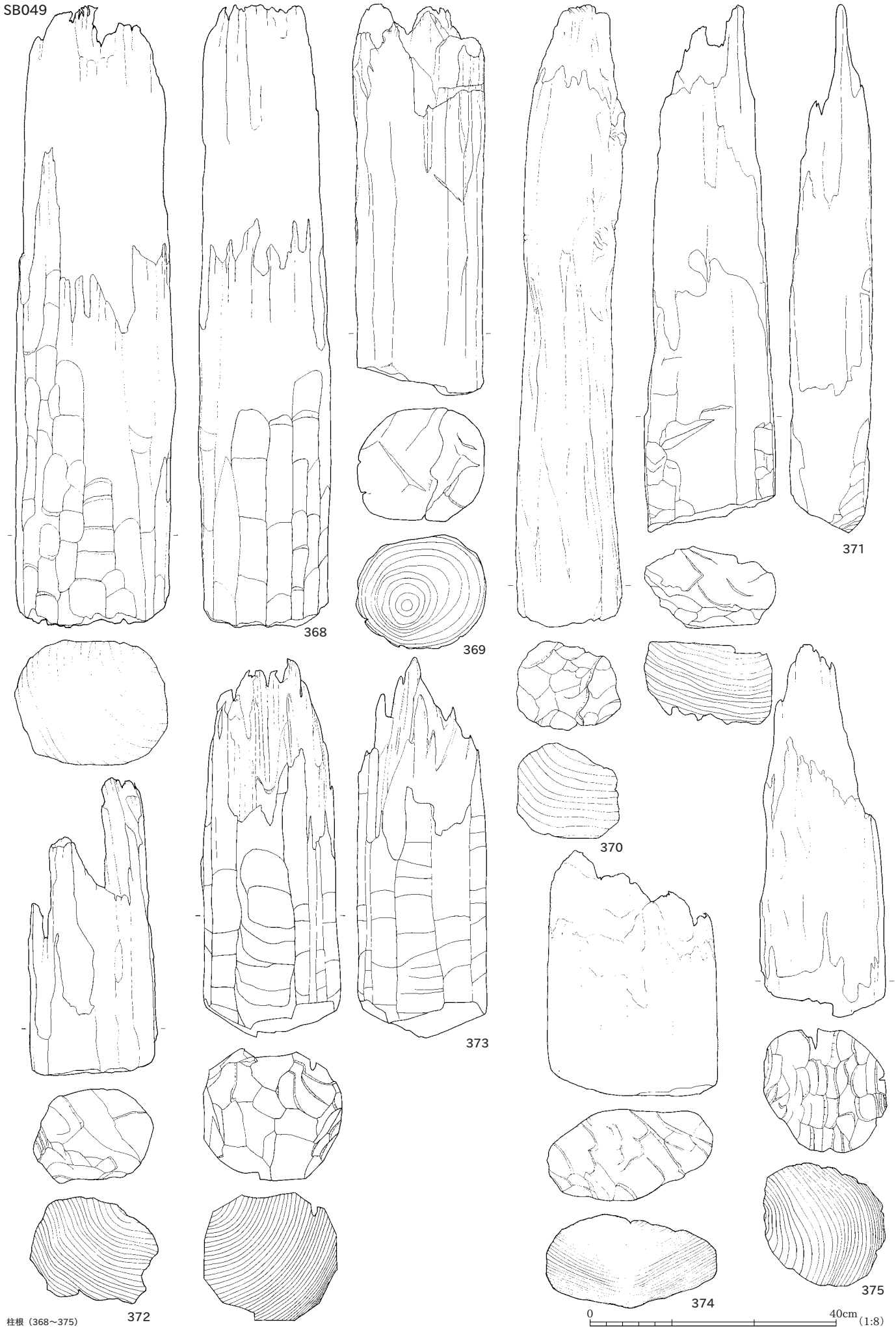

146
195
196
124
96
70
81
80
210
82
188
208
117
100
19
147
203
148
126
244
15
149
221
285
284
283
286
65
0
(1:3)
15cm

SB002
343
344
345
346
347
SB003
348
349
350
351
352
353
0
40cm
(1:8)

柱根（343～353）


SB003
SB006
SB048
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
0
40cm
(1:8)

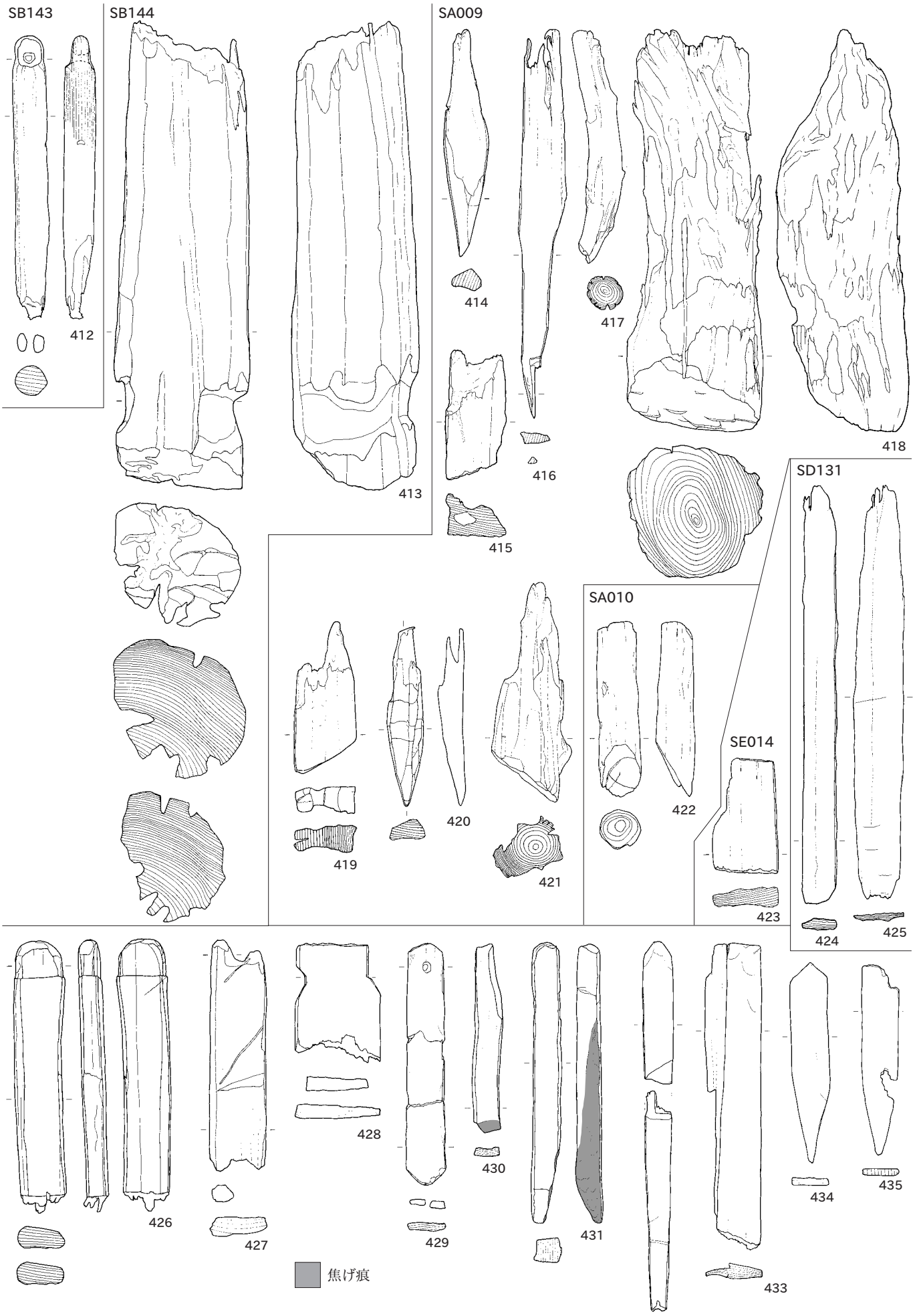
柱根（354～367）



柱根（368～375）

礎板（378～382・384～389）　斎串？（383）　木片（390）
柱痕（376・377・391）

柱根（392・397～400・409・410）　礎板（395・396・403～407）　木簡状木製品（393）　木簡（394）
板材（401）　角材（402）　斎串（408）　刀形木製品？（411）



柱根（413）　杭（414～422）
用途不明木製品及び部材（412・426～429）
焦げ痕のある木片（430・431）　斎串（432）
板材及び木片（423～425・433）　木簡状木製品（434・435）

0　（427・429～435）　15cm（1:3）
0　（412・426・428・429）　20cm（1:4）
0　（413～425）　40cm（1:8）

金属製品（436～441）　鉄滓（442・443）　萬年通寶（444）
羽口（445）　砥石（446～448）　敲打痕のある礫（449）
パステル形石製品（450）　搬入礫（451）

遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院　昭和50年10月17日撮影　空中写真）

遺跡遠景（調査前、北西から）

遺跡遠景（北から）

完掘全景

北西部の遺構群　完掘全景（東から）

南東部の遺構群　完掘全景

SB048・049・050・058・059・102・143・144ほか完掘状況

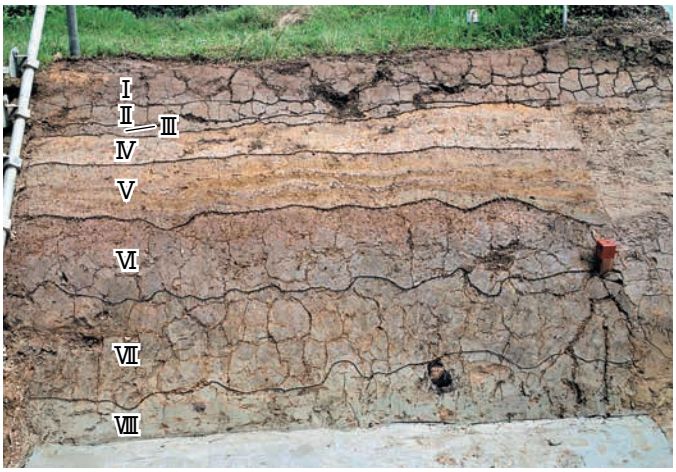
SB055・056・137・138・146ほか完掘状況

出土土器（土師器・須恵器）

墨書土器「石庄」

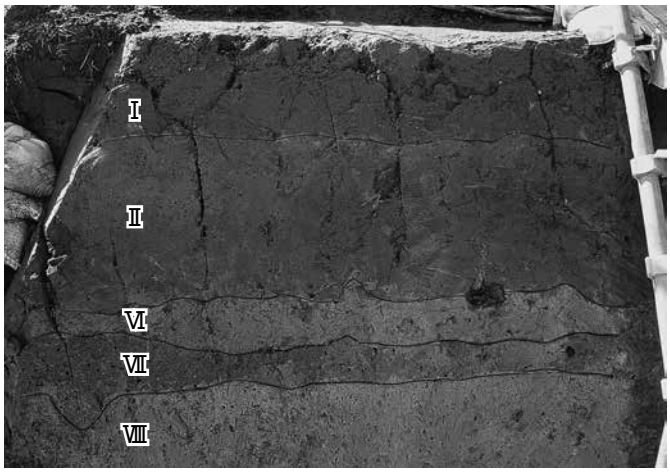
墨書土器「石井庄」

銭貨「萬年通寶」S＝1／1



3B15　基本層序

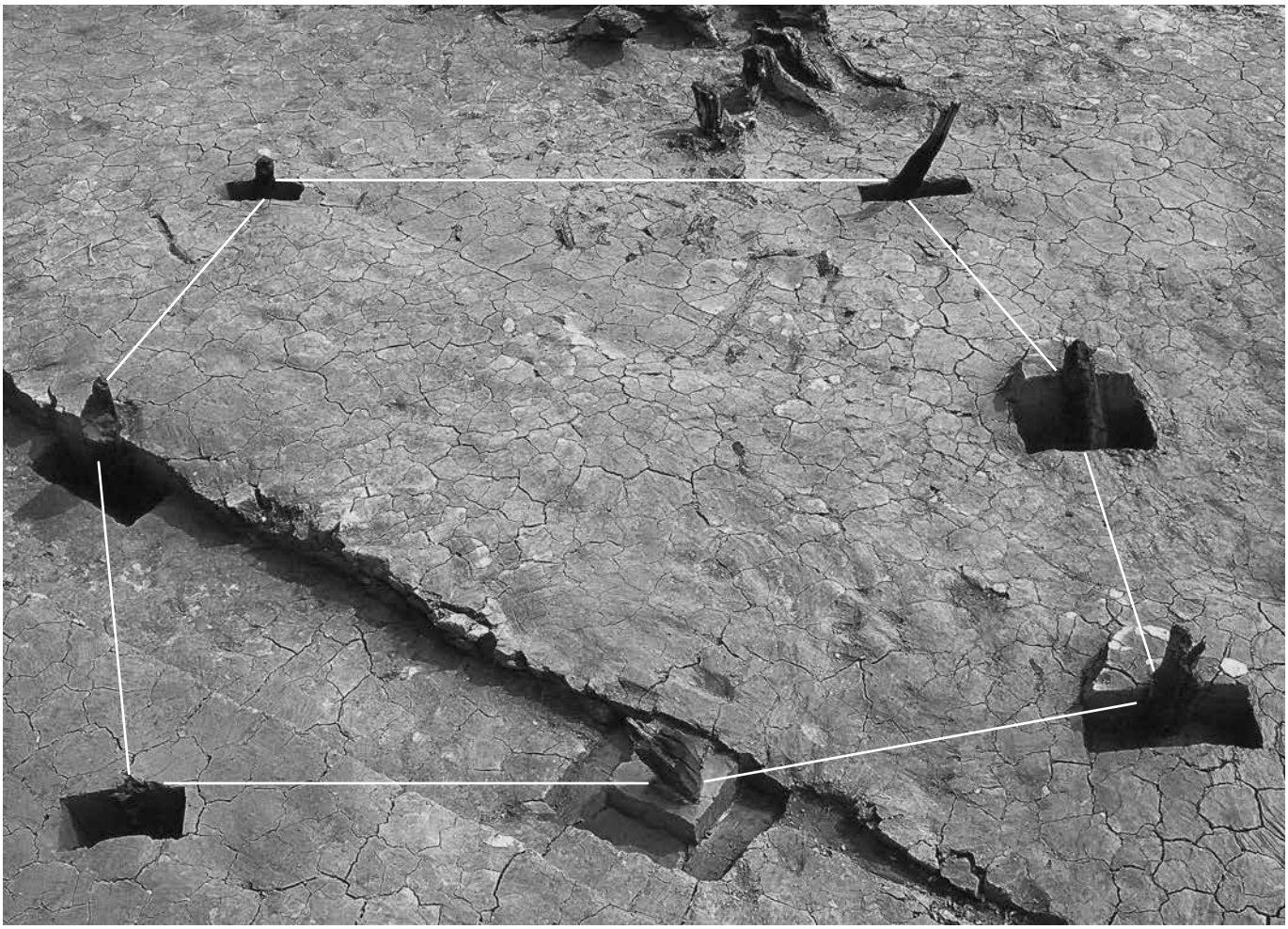
12A23　基本層序（南西から）



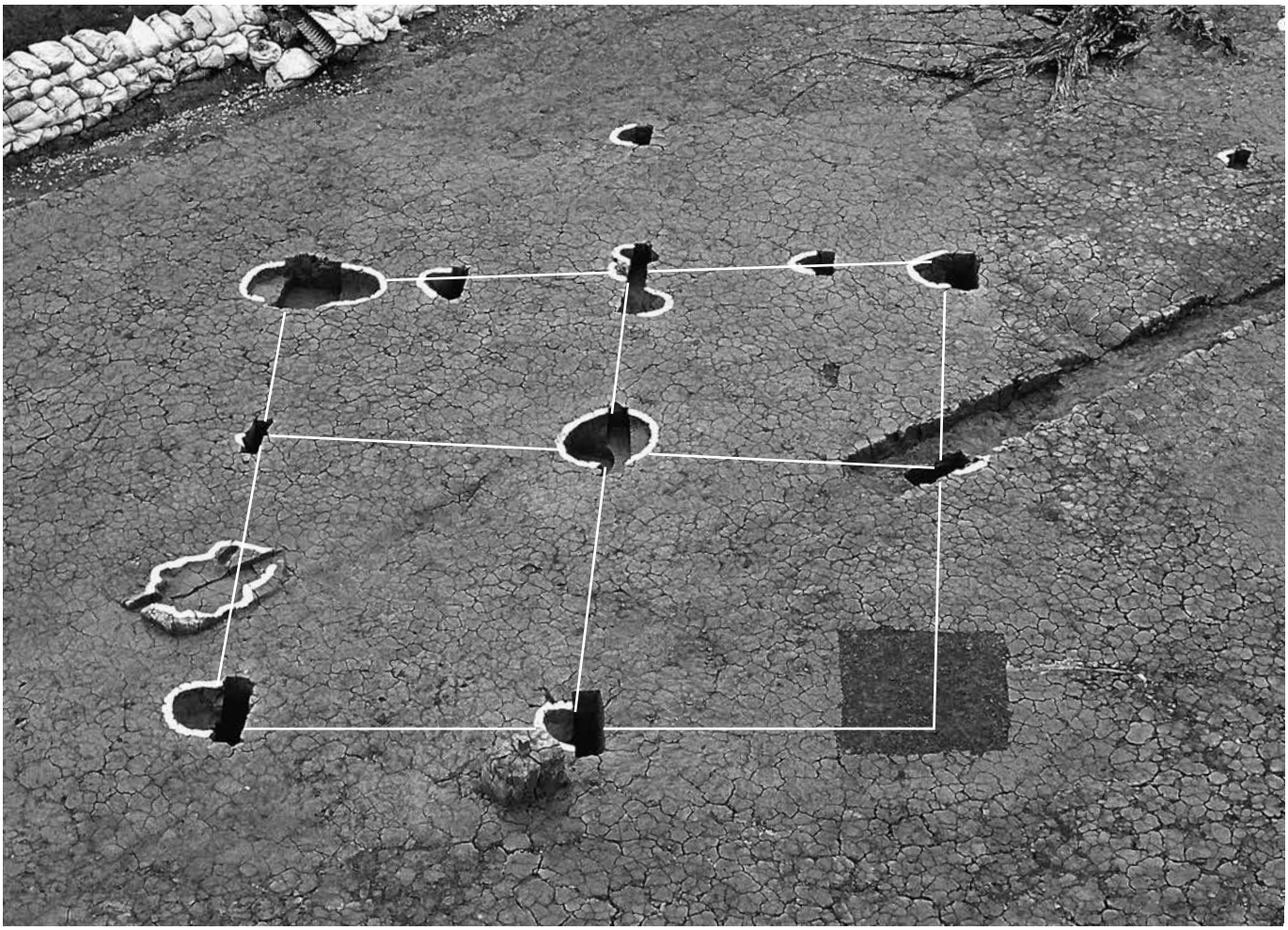
16C17　基本層序（北東から）

SB002-P02　土層断面（北から）

SB002-P03　土層断面（北から）



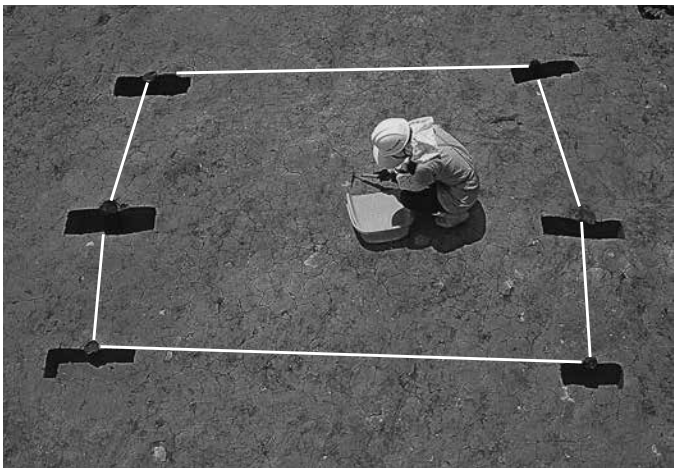
SB002　完掘（北から）



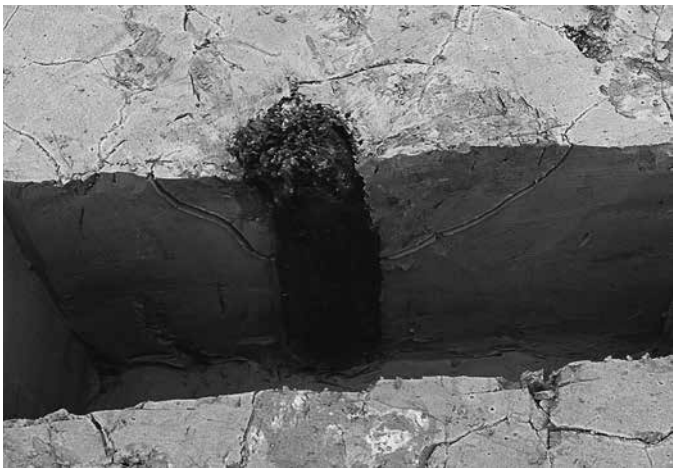
SB003　完掘（東から）

SB003-P03 土層断面（北から）

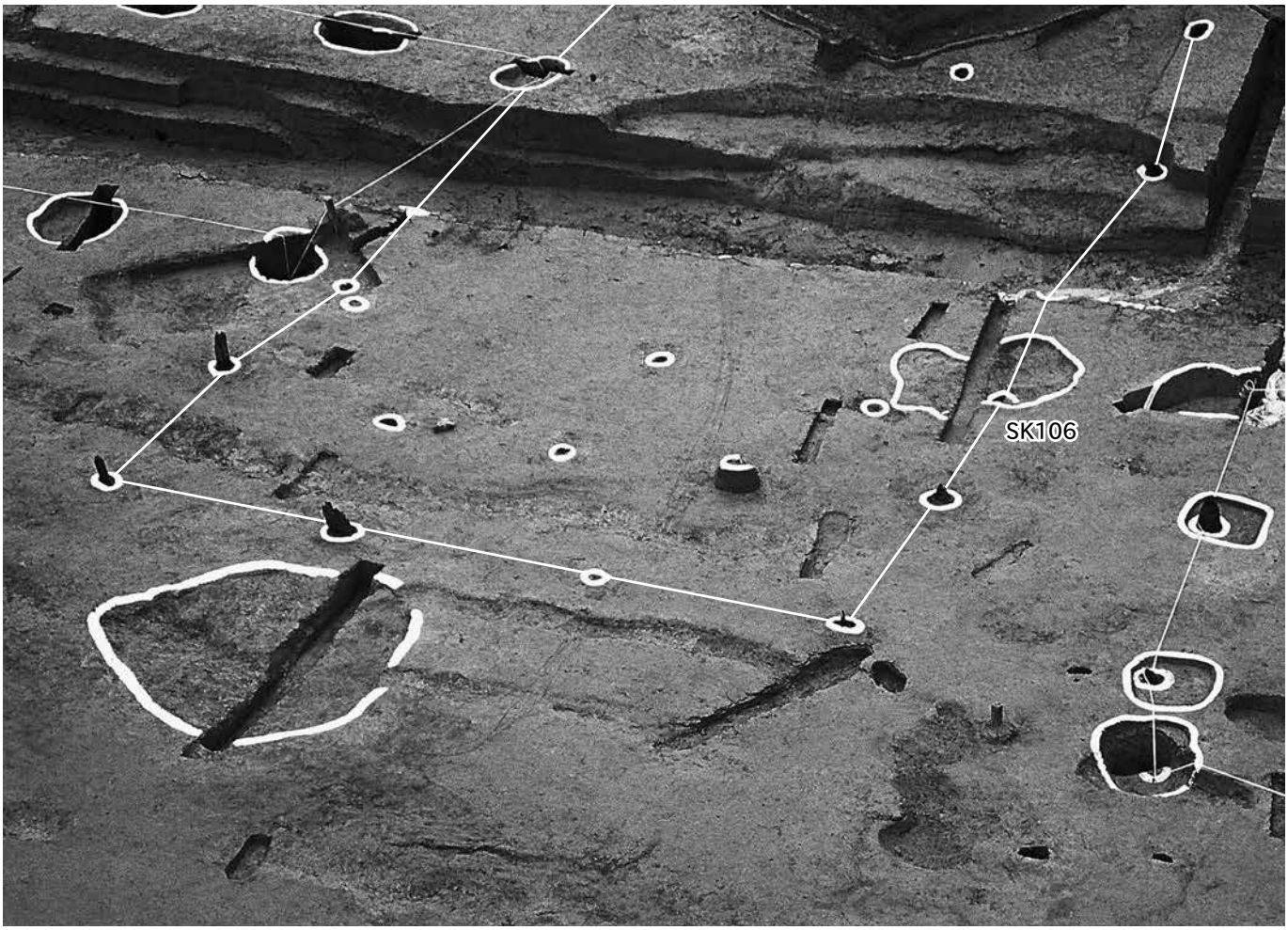
SB003-P08　土層断面（北から）



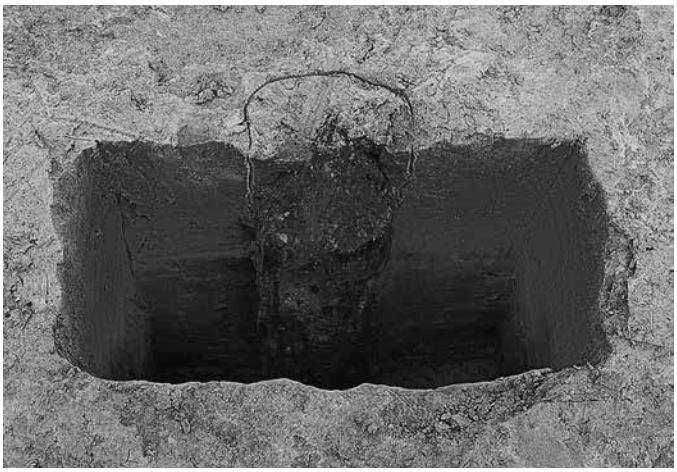
SB006　完掘（北から）



SB006-P01　土層断面（北から）

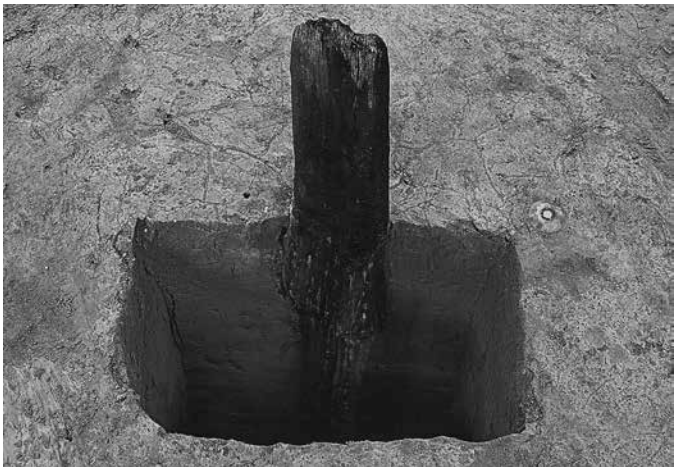


SB048・SK106　完掘（北から）



SB048-P02　土層断面（南から）

SB048-P03　土層断面（南から）

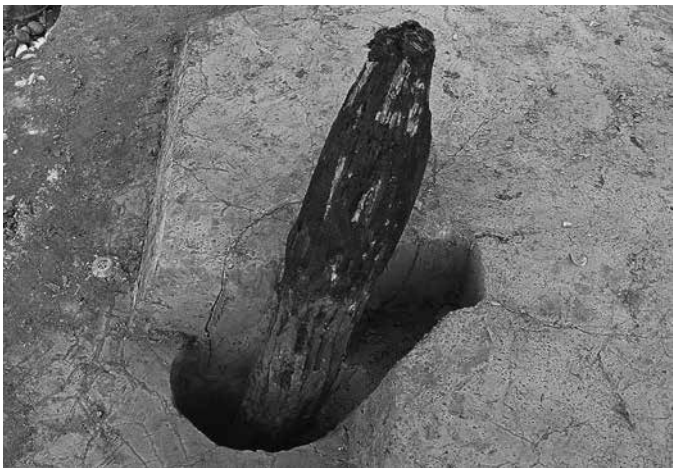


SB048-P04　土層断面（南から）

SB048-P08　土層断面（南から）

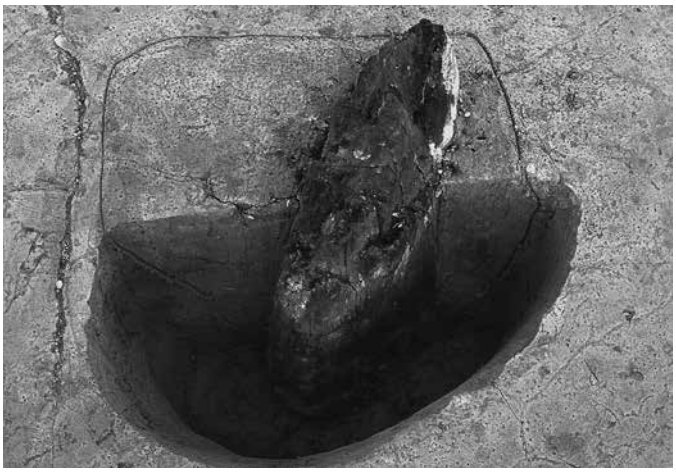
SB049　完掘（西から）

SB049-P01　土層断面（南から）



SB049-P05　土層断面（南から）

SB049-P07　土層断面（南から）



SB049-P17　土層断面（南から）

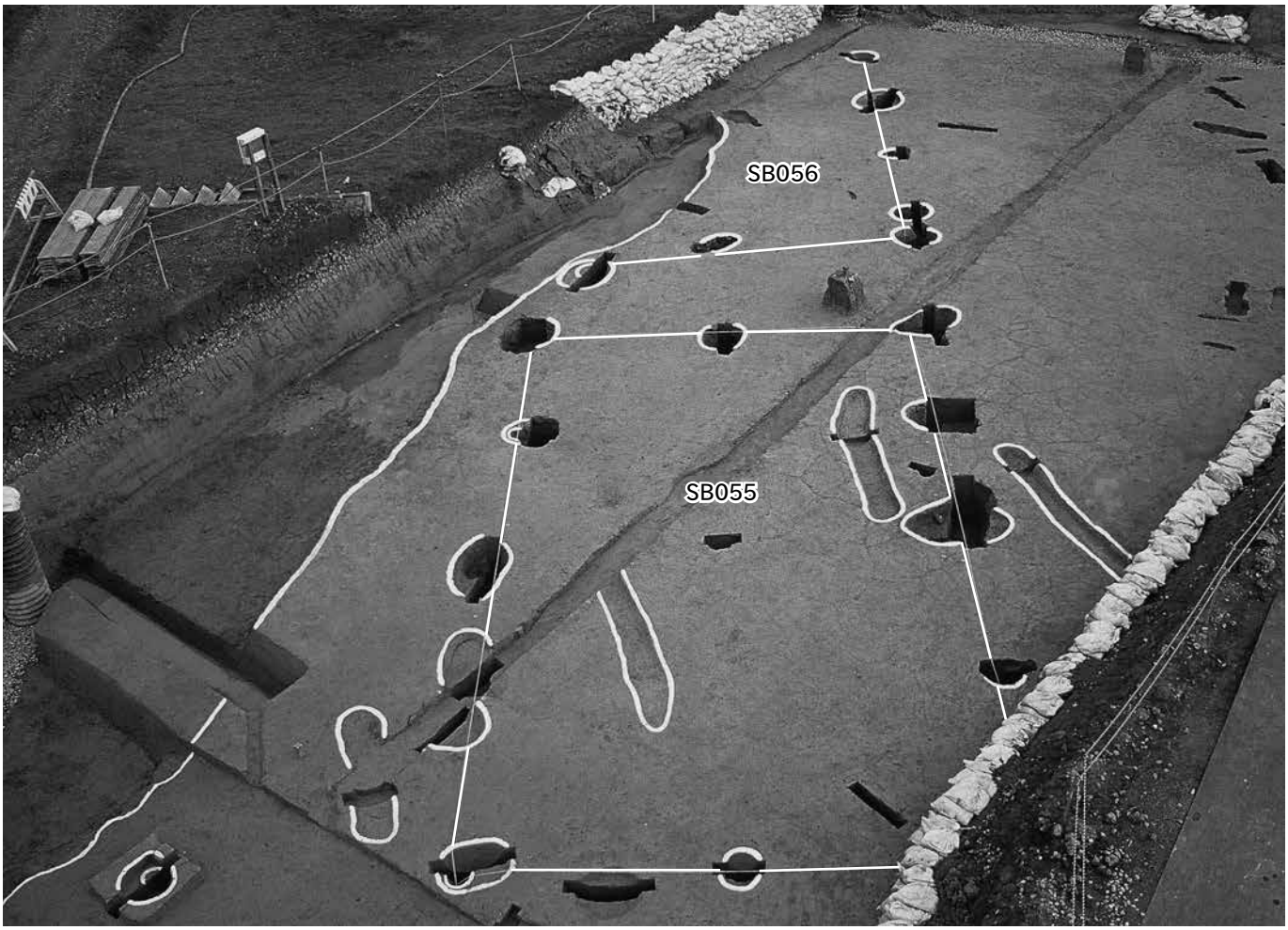
SB050　完掘（西から）

SB050-P02　植物質敷設物検出状況（南から）

SB050-P04　礎盤（板）検出状況（東から）

SB050-P05　土層断面（南から）

SB050-P08　土層断面（南から）



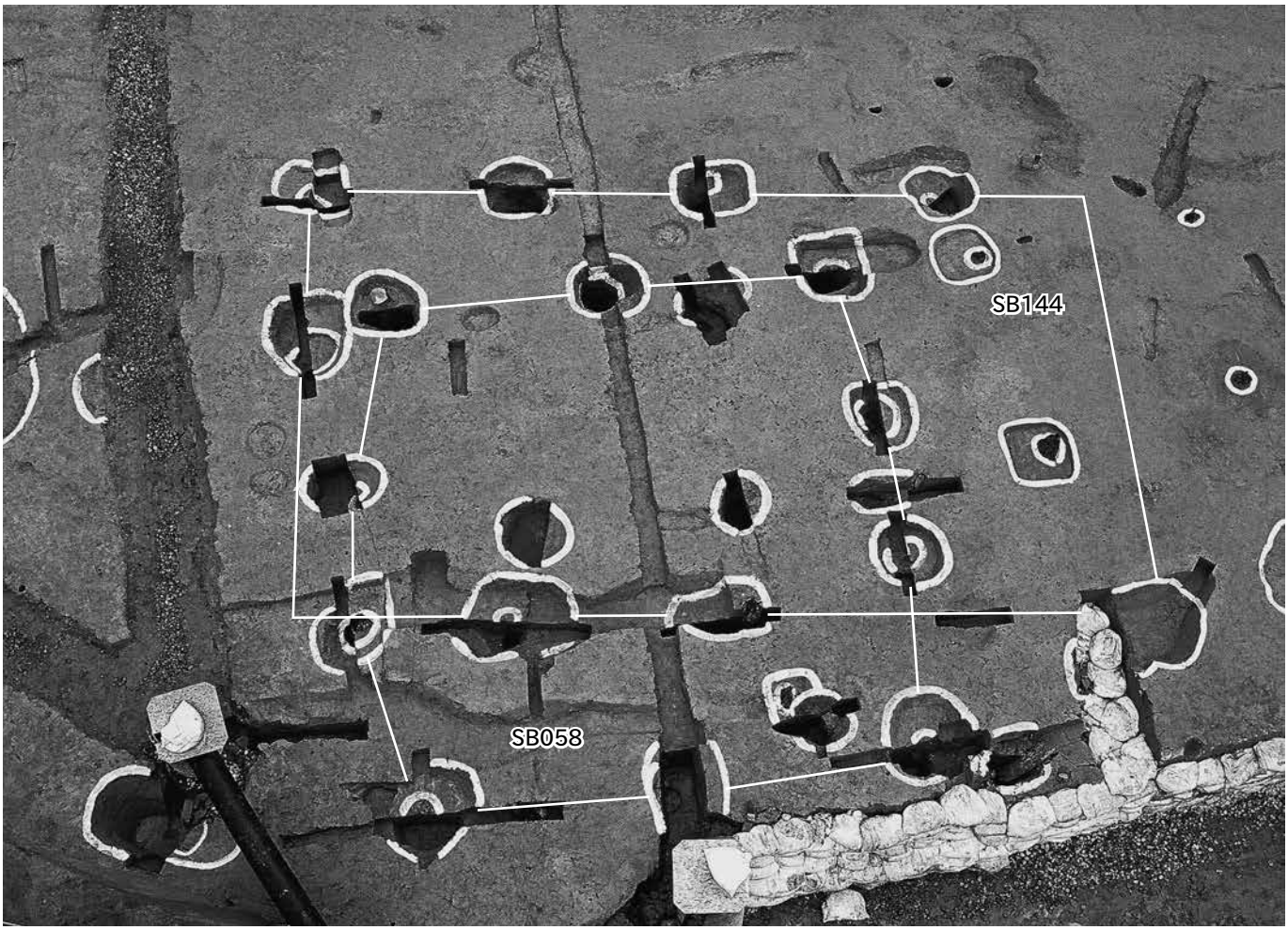
SB055・056　完掘（西から）

SB055-P07　土層断面（南から）

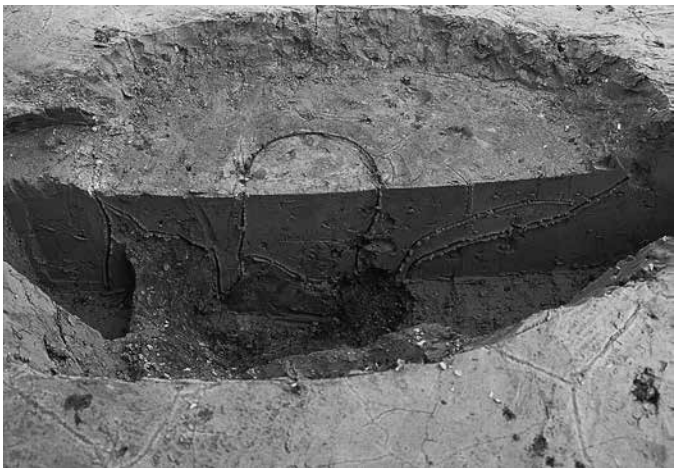
SB055-P11　土層断面（南から）

SB056-P01　土層断面（北西から）

SB056-P02　土層断面（南西から）



SB058・144　完掘（南から）

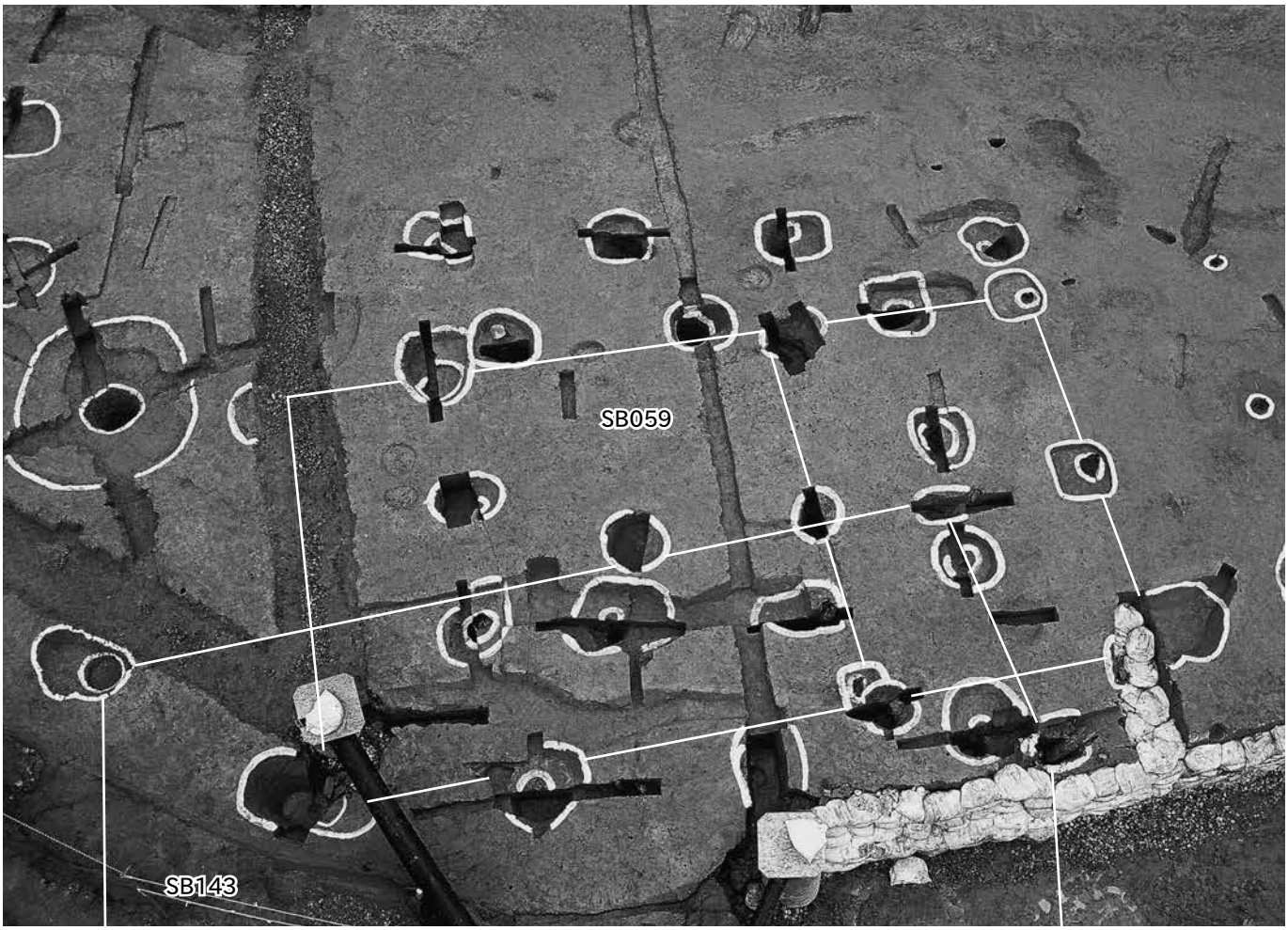


SB058-P03　土層断面（西から）

SB058-P08　土層断面（西から）

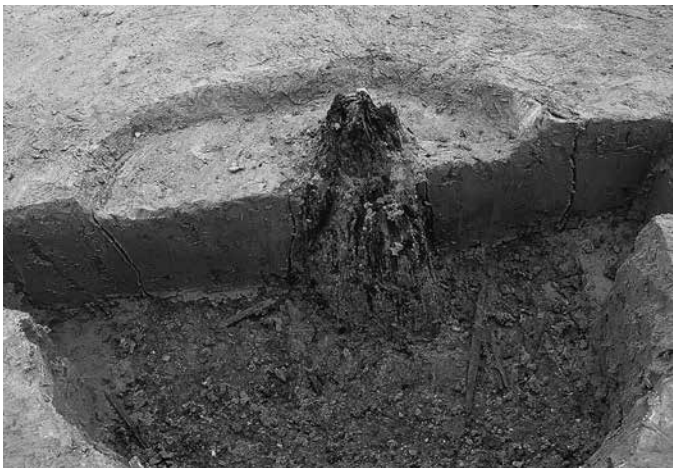
SB144-P01　土層断面（南から）

SB144-P02　土層断面（南から）



SB059・143　完掘（南から）

SB059-P02　土層断面（西から）

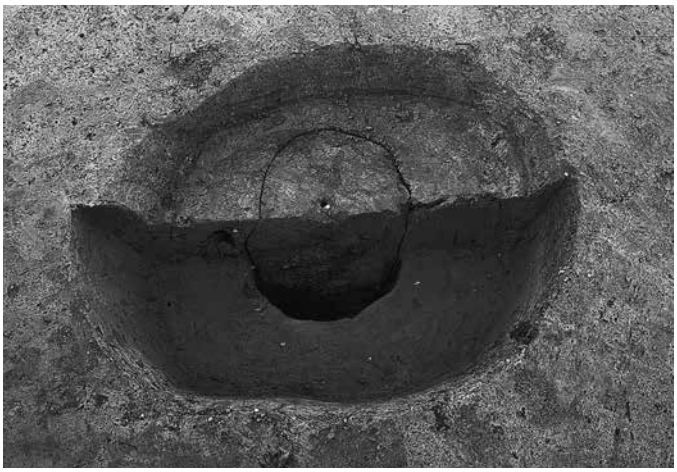


SB059-P03　土層断面（西から）

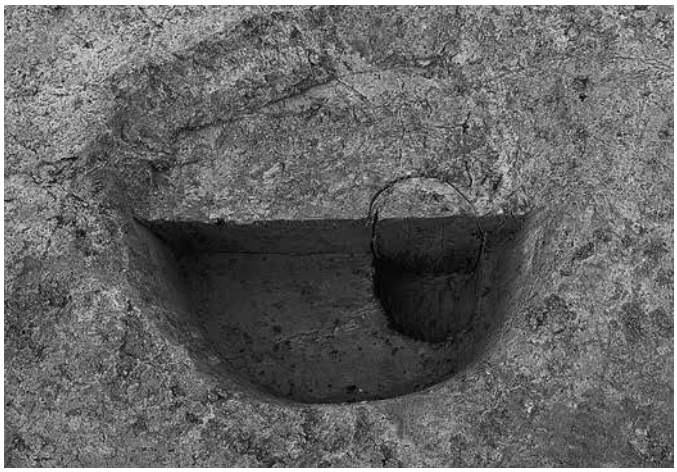
SB143-P01　土層断面（南から）

SB143-P02　完掘（西から）

SB102　完掘（西から）



SB102-P03　土層断面（南から）

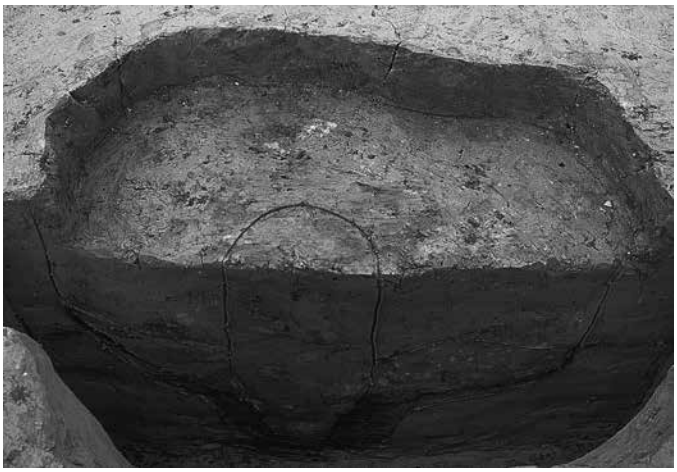


SB102-P05　土層断面（南から）

SB102-P06　土層断面（南から）

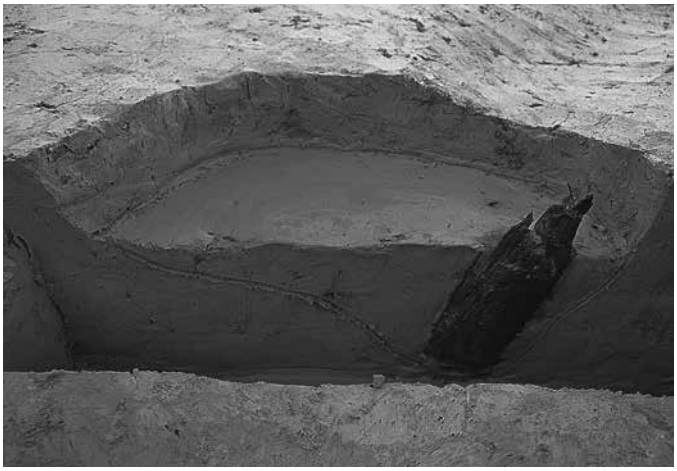
SB102-P07　土層断面（南から）

SB137・138・SD136　完掘（東から）



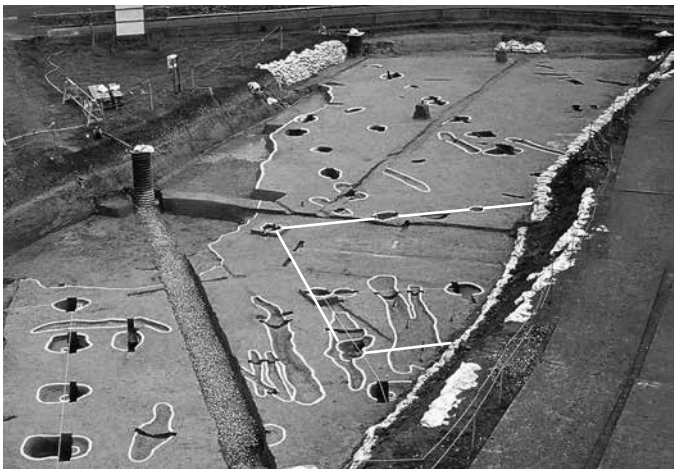
SB137-P03　土層断面（南から）

SB137-P11　礎盤（板）検出状況（東から）



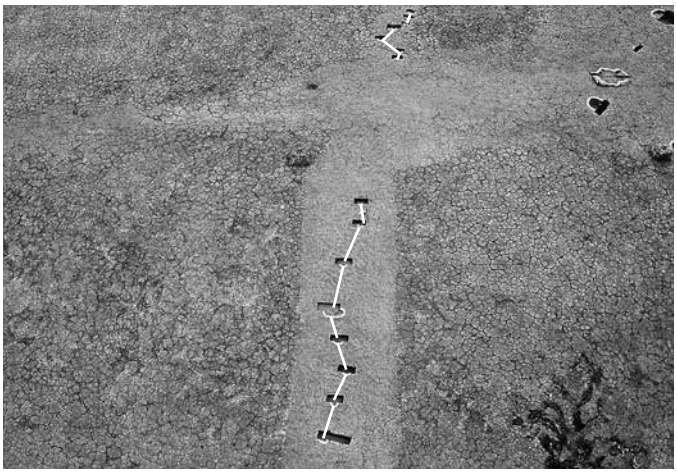
SB138-P01　土層断面（南から）

SB138-P06　土層断面（北から）



SB146　完掘（西から）

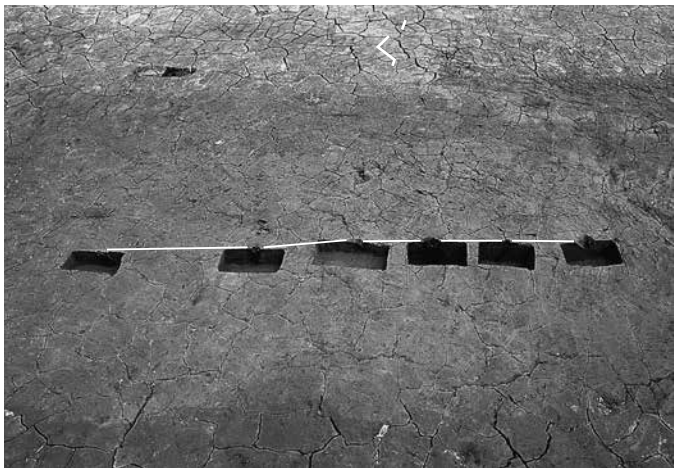
SB146-P01　土層断面（南から）



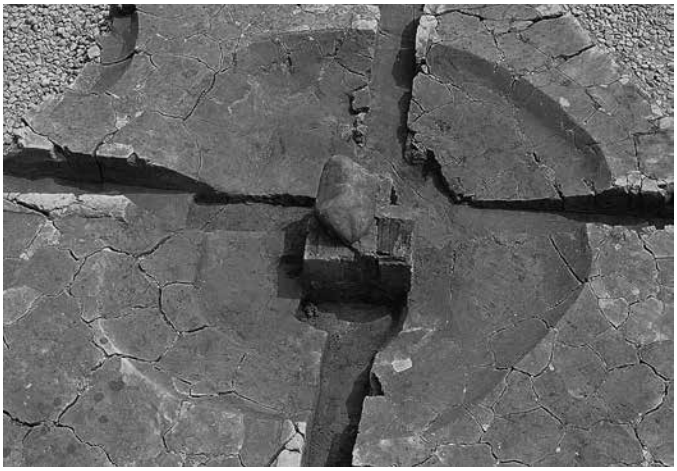
SA009　完掘（北東から）

SA009-P05～09　検出状況（南から）

SA009-P14　土層断面（南西から）



SA010　完掘（西から）



SE014　遺物検出状況（北から）

SE014 完掘（北から）

14B～C・15B～Cグリッド　畑作溝群（Ⅰ期）　完掘（南から）

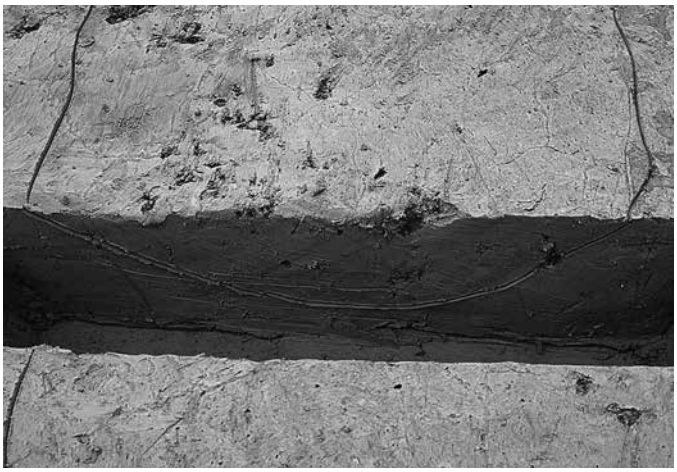
SD062　土層断面（西から）

SD064・024　土層断面（西から）

SD067　土層断面（西から）

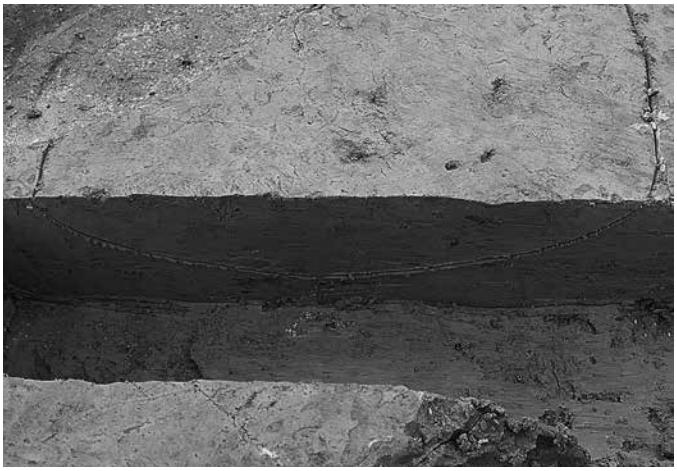
SD070・091　土層断面（西から）

17C グリッド　畑作溝群（I 期）　完掘（北東から）



SD120　土層断面（北東から）

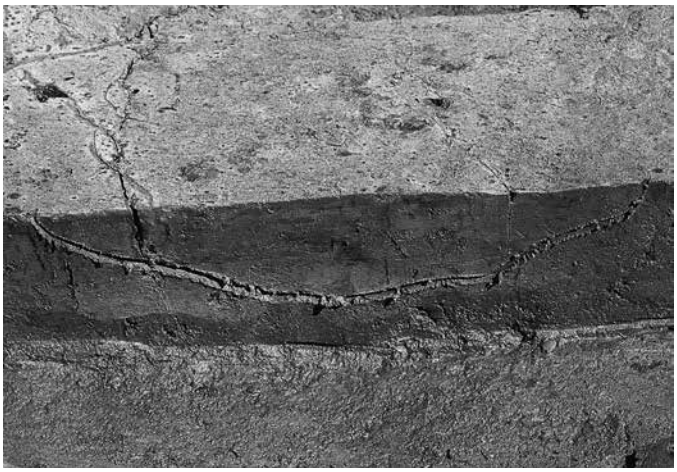
SD122　土層断面（北東から）



SD124　土層断面（北東から）

SD125　土層断面（北東から）

14B～C・15B～Cグリッド　畑作溝群（Ⅱ期）　完掘（南から）

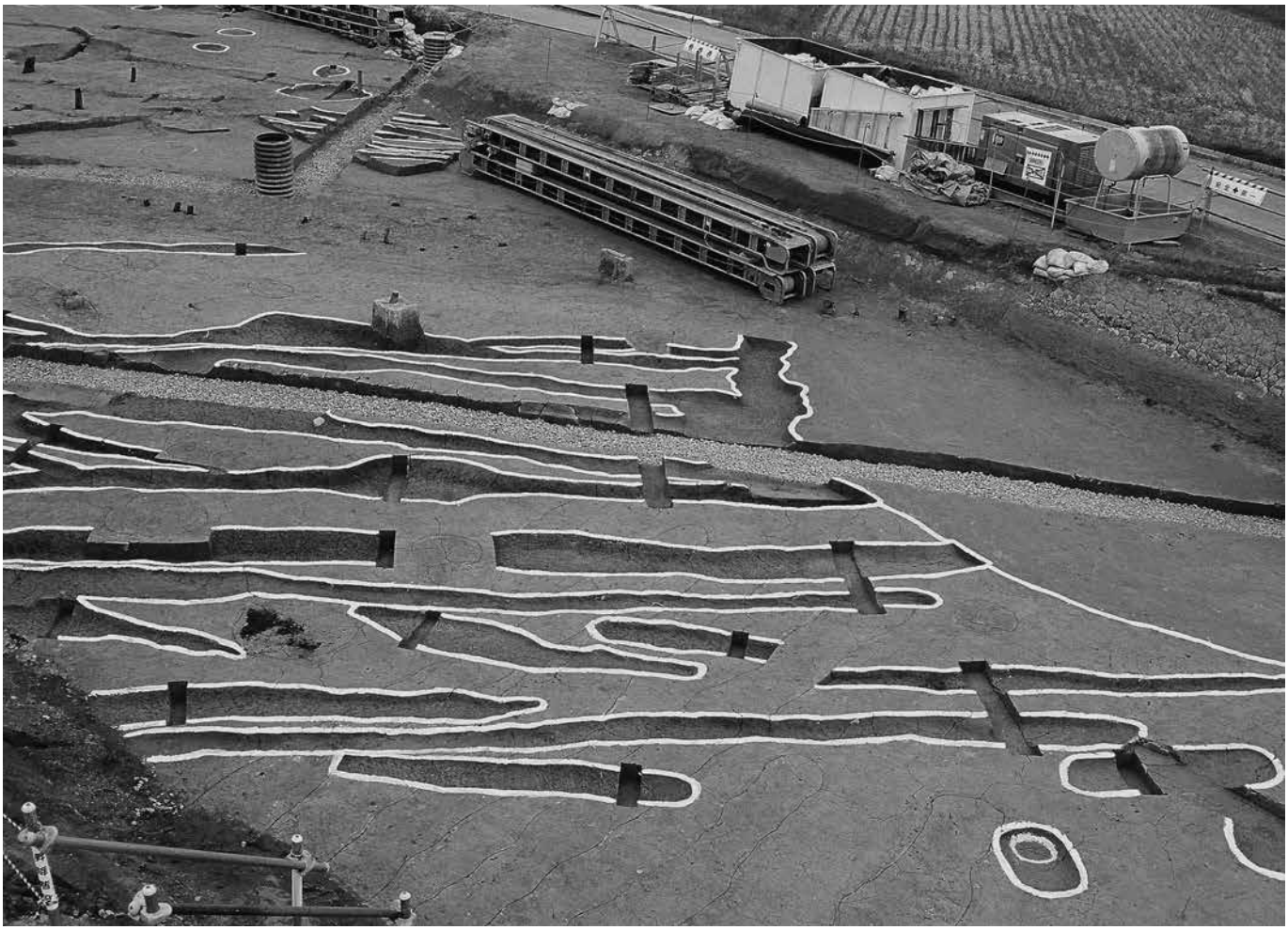


SD031　土層断面（西から）

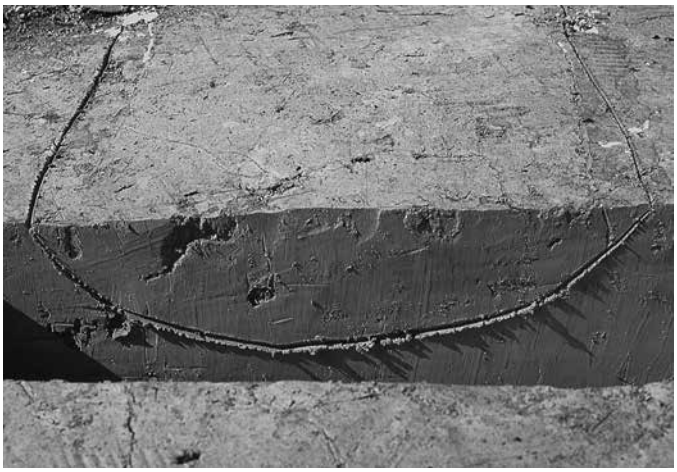
SD032　土層断面（西から）

SD036　土層断面（西から）

SD037　土層断面（西から）



16C・17B～Cグリッド　畑作溝群（Ⅱ期）　完掘（南から）



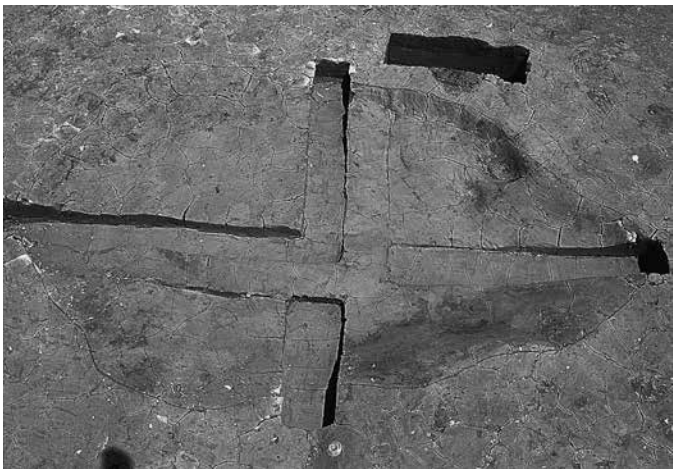
SD075　土層断面（東から）

SD077　土層断面（東から）

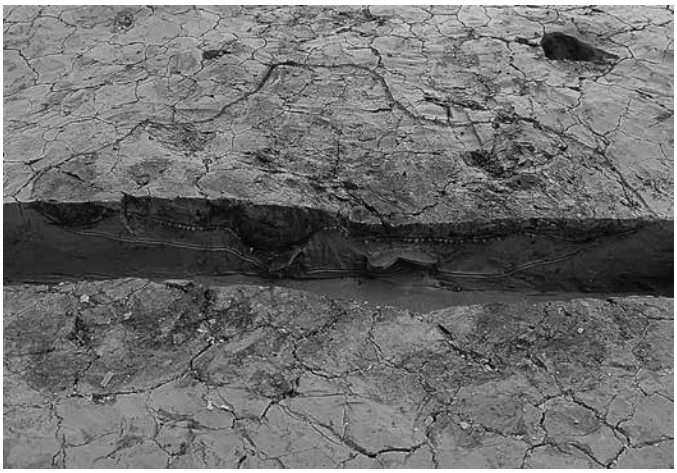
SD082・083　土層断面（東から）

SD112　土層断面（東から）

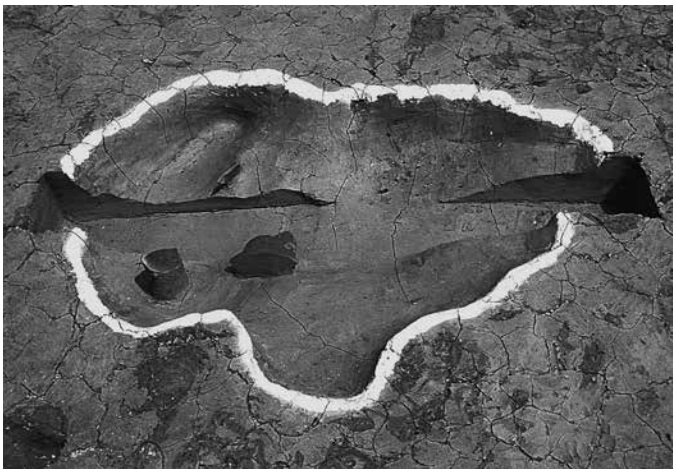
SK001　土層断面（北から）



SK001　完掘（南から）



SK007　土層断面（北から）



SK007　完掘（南から）

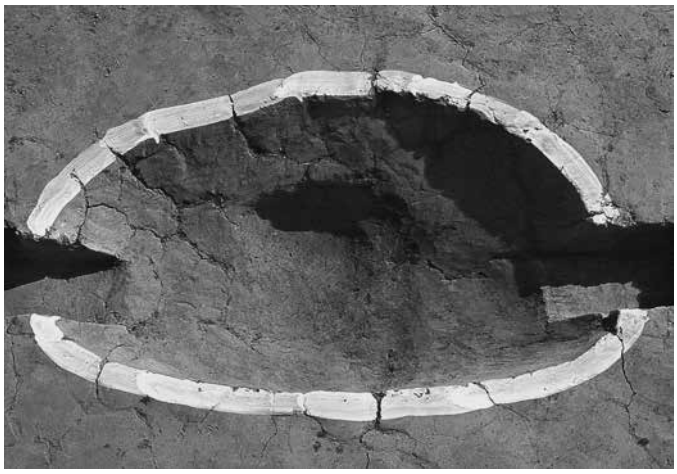
SK008　土層断面（南西から）

SK008 完掘（南西から）

SK017　土層断面（西から）

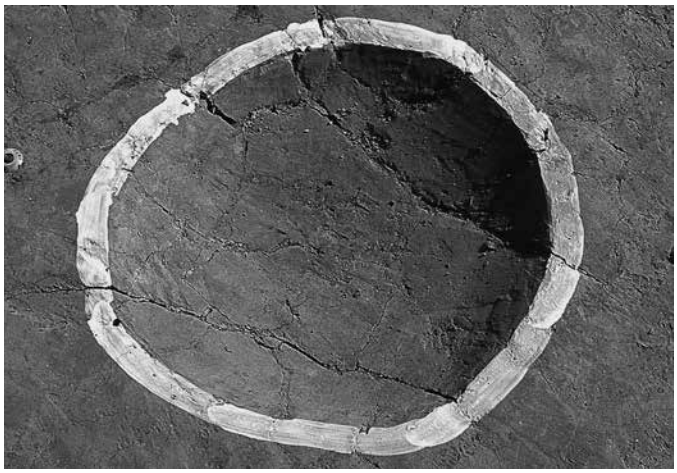
SK017　完掘（北西から）

SK039　土層断面（西から）



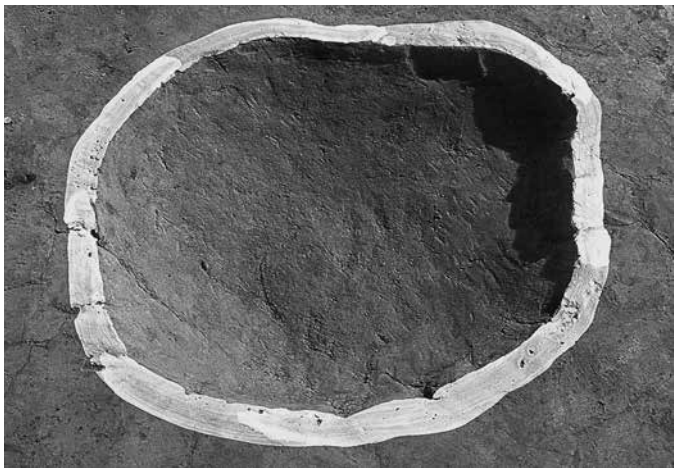
SK039　完掘（西から）

SK040 土層断面（西から）

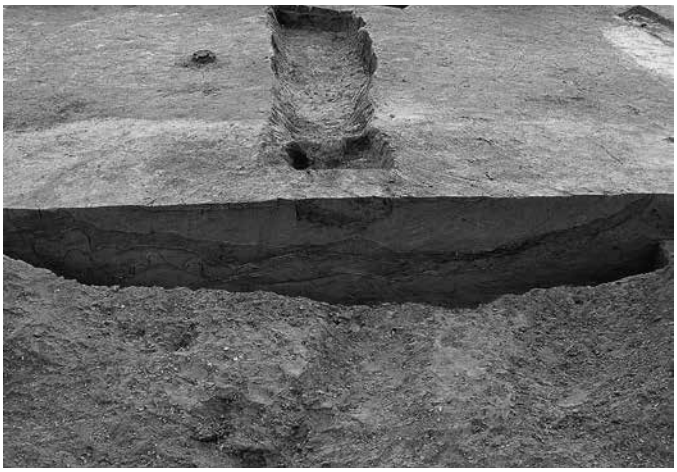


SK040　完掘（西から）

SK041　土層断面（西から）



SK041　完掘（西から）



SK044　土層断面（東から）

SK044　完掘（西から）

SK045　土層断面（西から）

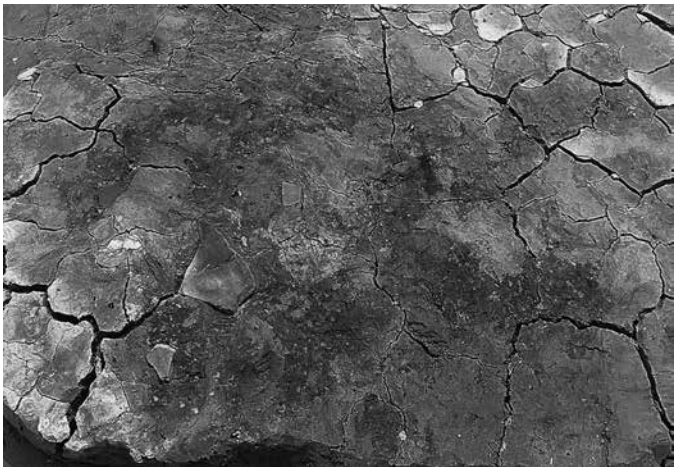
SK045　完掘（西から）

SK101　土層断面（西から）

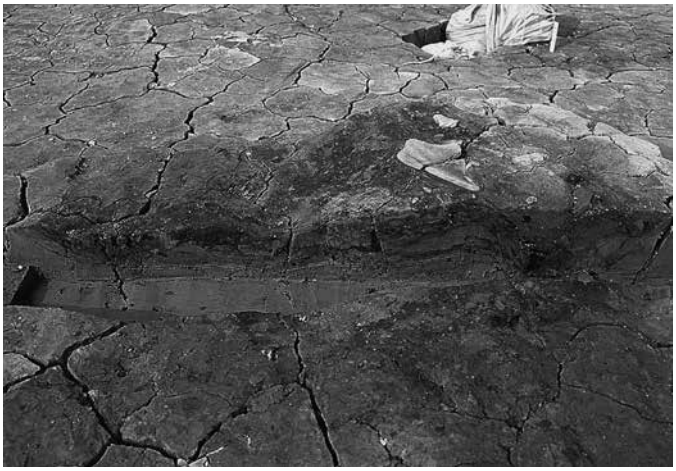
SK101　完掘（南から）

SK106　土層断面（東から）

SD136　土層断面（南から）

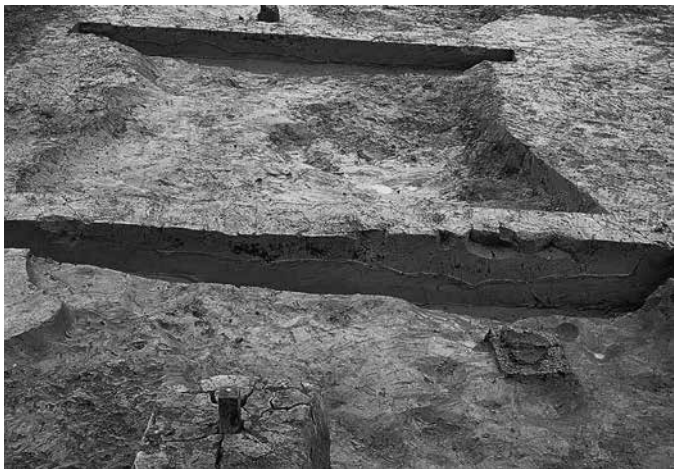


SX004　検出状況（北東から）

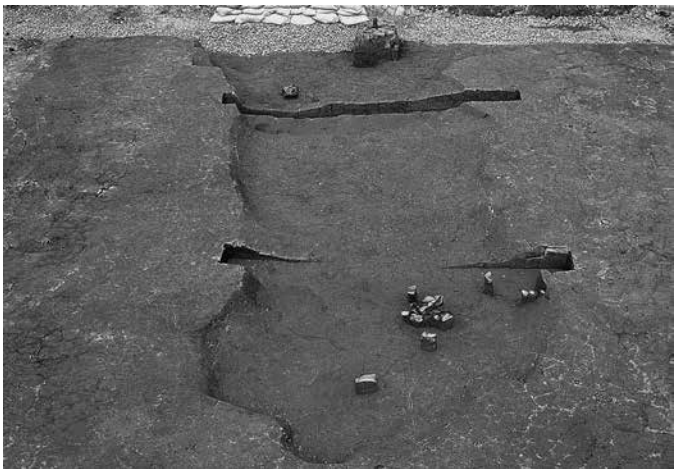


SX004　土層断面（南西から）

SX019　完掘（東から）



SX021　土層断面（北から）



SX021　遺物出土状況（南西から）

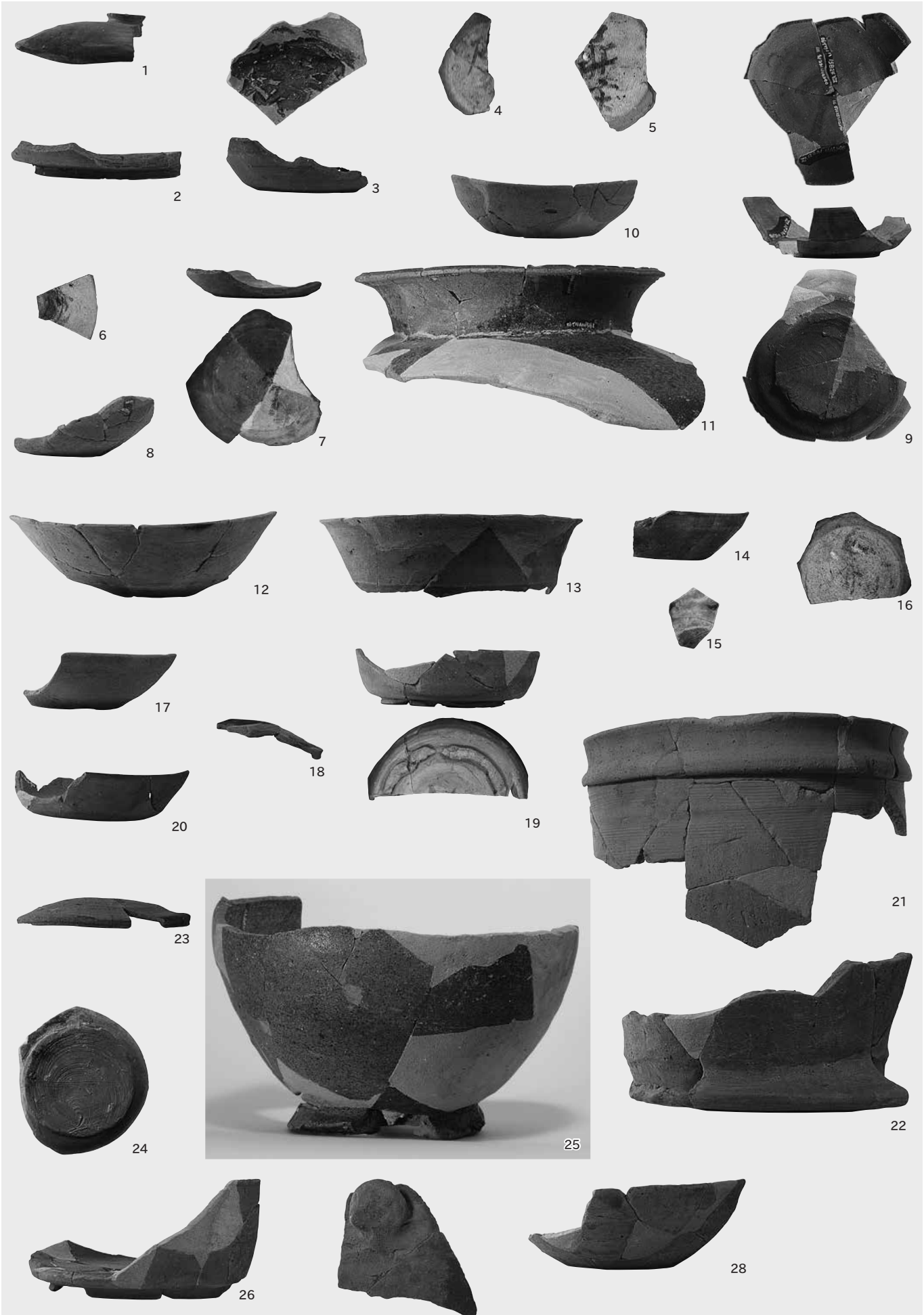
SX025　遺物出土状況（南西から）

SX142　土層断面（南西から）

13C15　墨書土器出土状況（南東から）

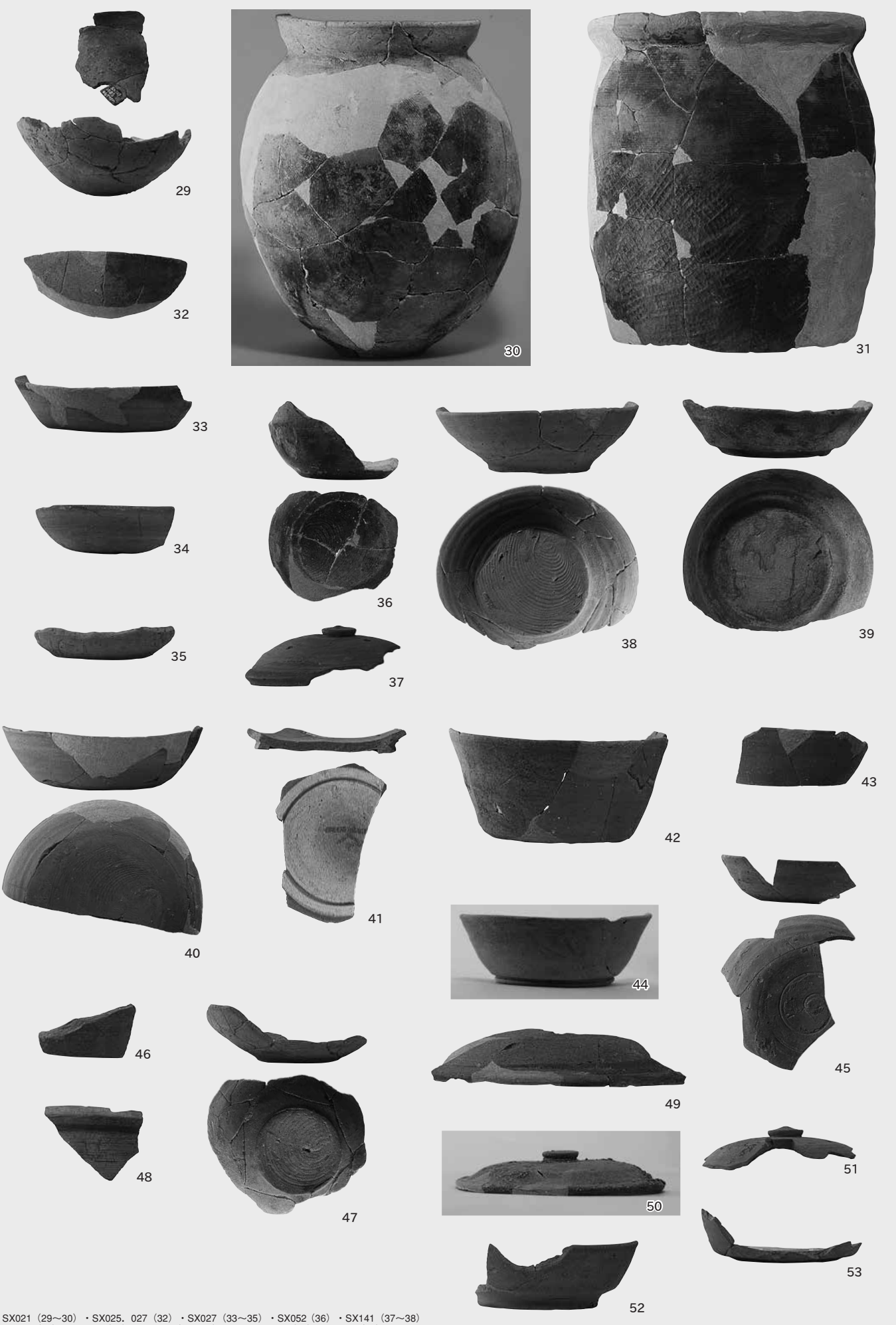
15C1　「萬年通寶」出土状況（南東から）

15C17　鉄斧出土状況（南から）



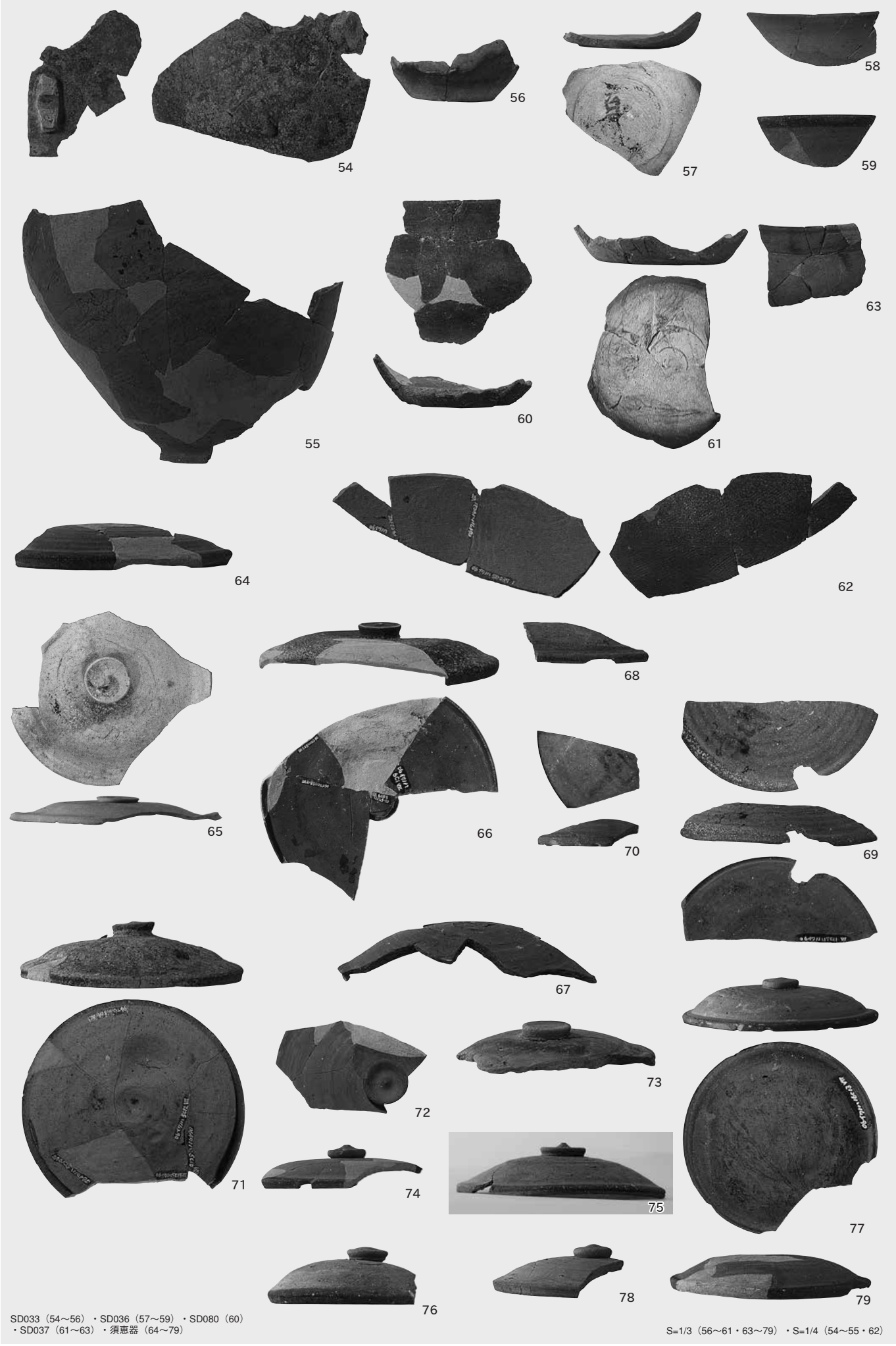
SB050（1）・SB055（2～5）・SB058（6～8）
SB059（9～10）・SB102（11）・SB 137（12～16）
SB143（17）・SE014（18～20）・SK007（21～22）
SK017（23）・SK040（24）・SK044（25）
SK101（26）・SX004（27）・SX019（28）

S=1/3（1～10・12～26・28）
S=1/4（11・27）



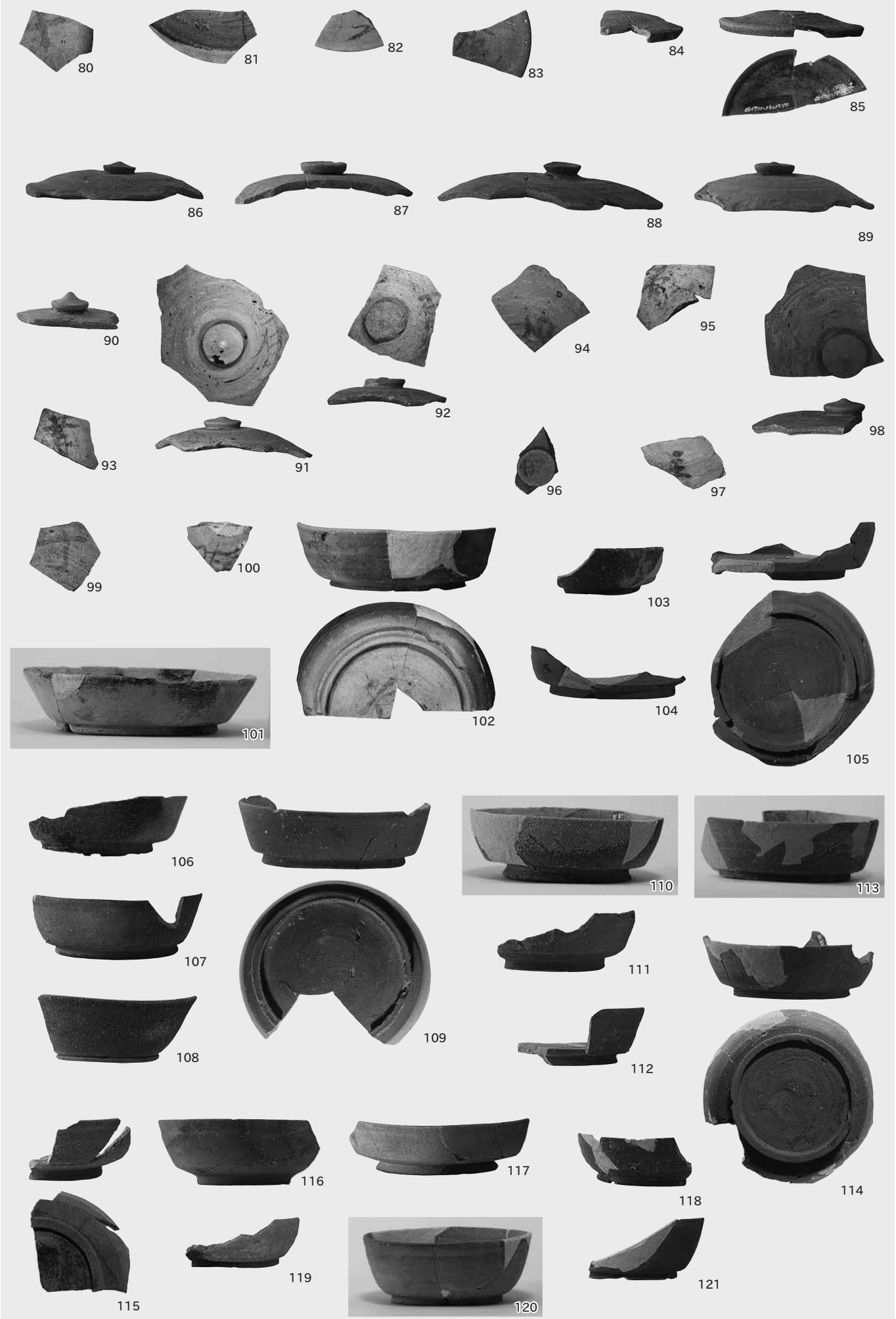
SX021（29～30）・SX025．027（32）・SX027（33～35）・SX052（36）・SX141（37～38）
SX142（39）・SD013（40）・SD024（41～42）・SD030．061（43）・SD065（44）
SD125（45）・SD032（46～48）・SD033．037．SK044（49）・SD033（50～53）

S=1/3（32～47・49～53）
S=1/4（29～31・48）

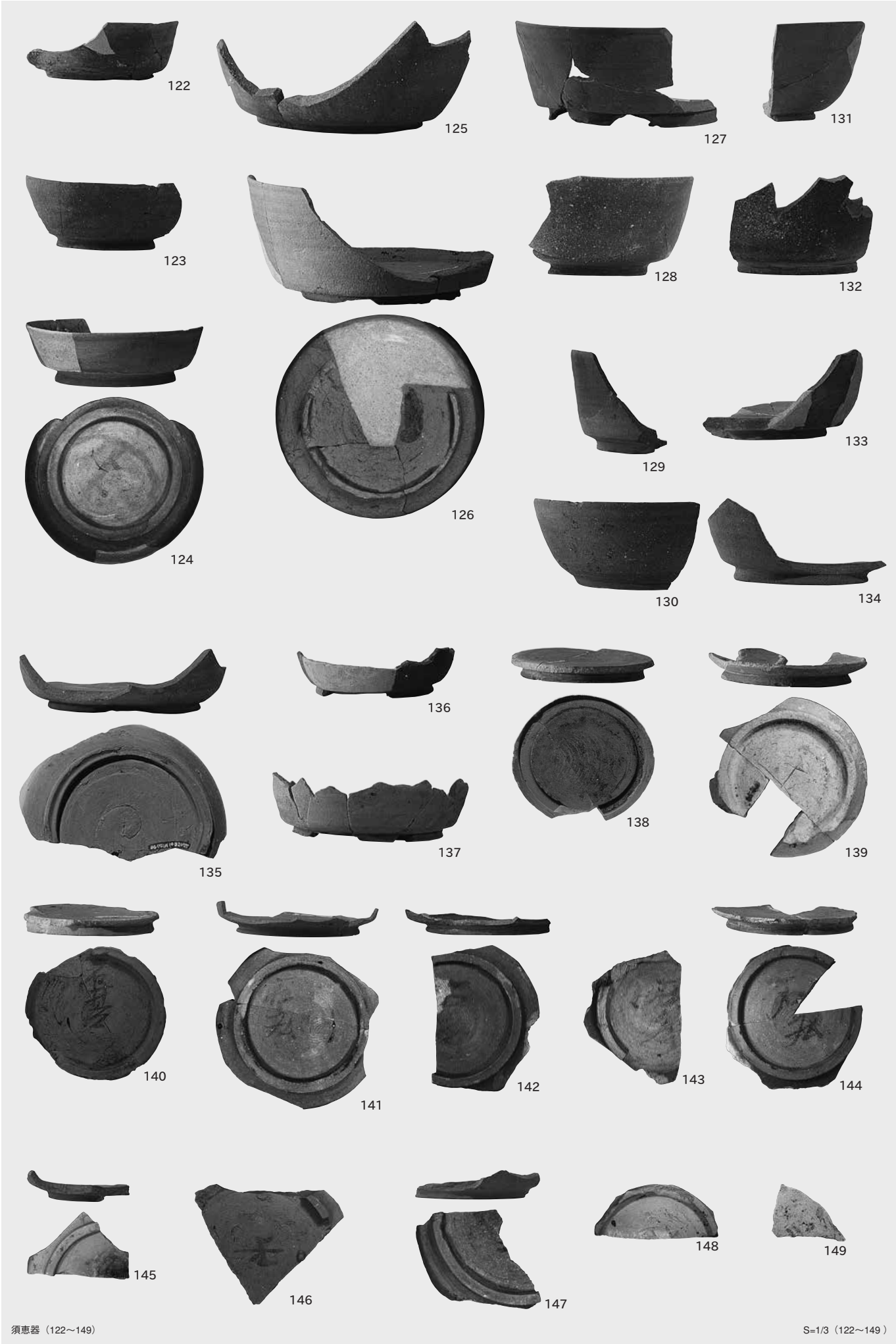


SD033（54～56）・SD036（57～59）・SD080（60）
・SD037（61～63）・須恵器（64～79）

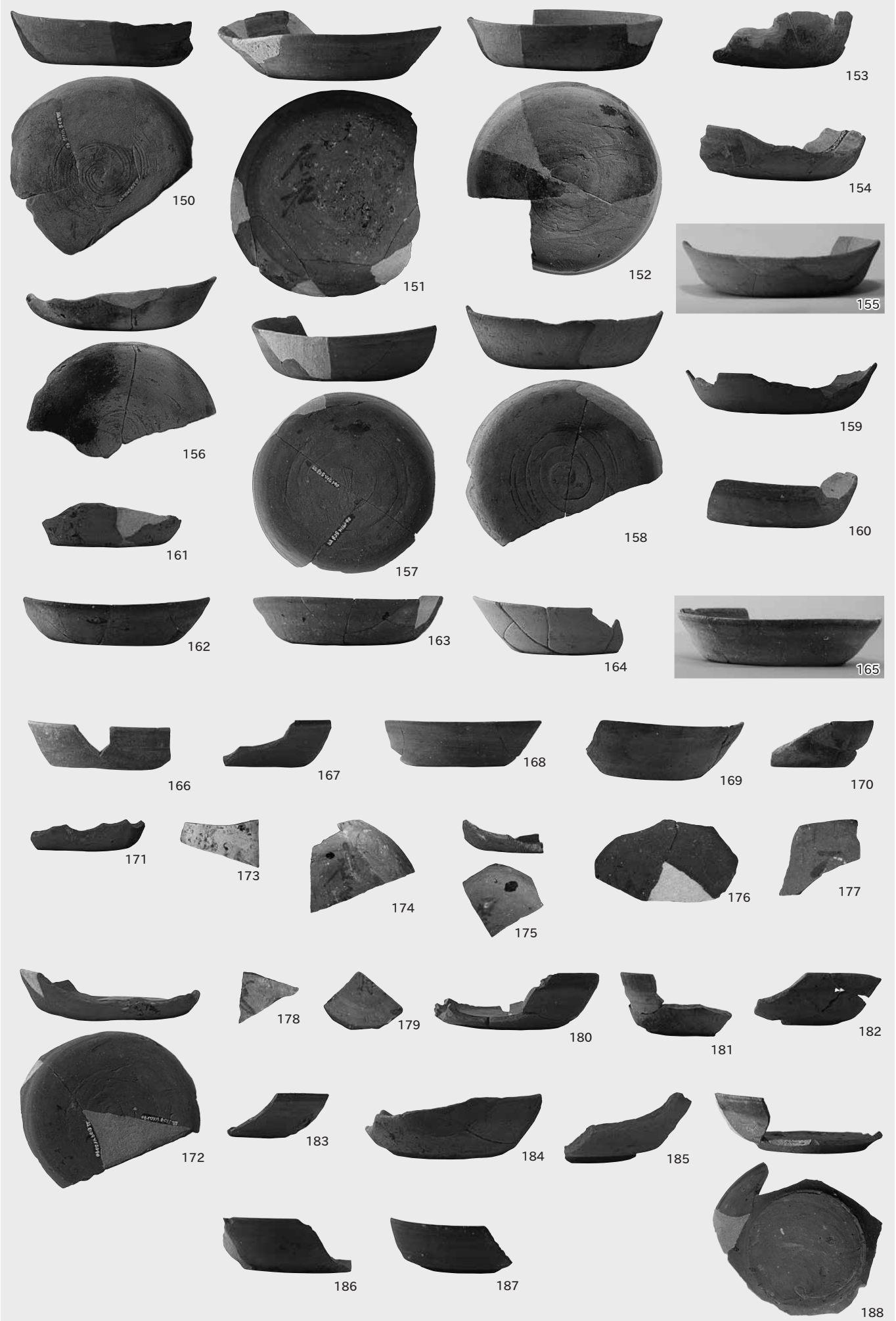
S=1/3（56～61・63～79）・S=1/4（54～55・62）



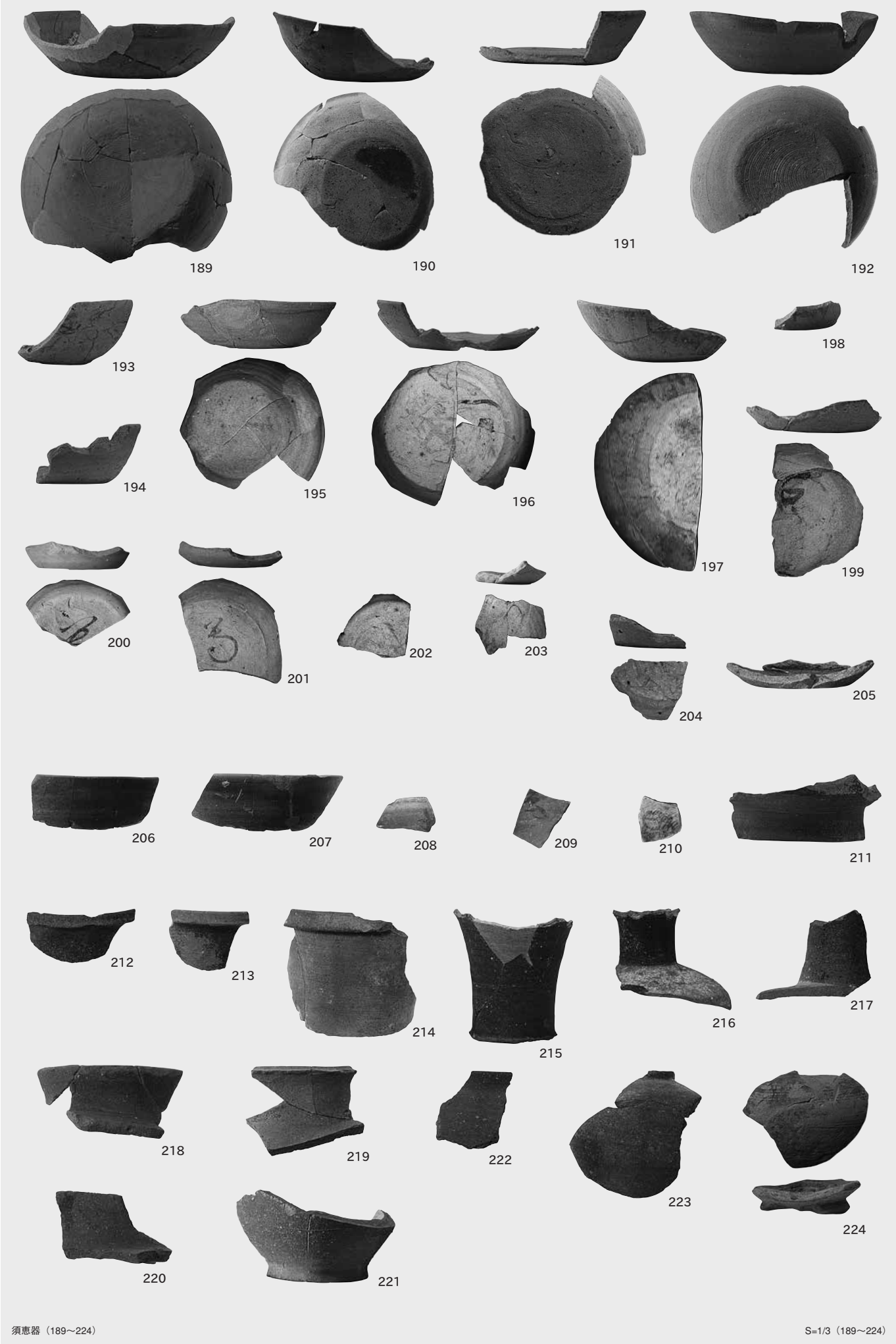
須恵器（80～121）　　S=1/3（80～121）



須恵器（122～149）　　S=1/3（122～149）



須恵器（150～188）　　S=1/3（150～188）



須恵器（189～224）　　S=1/3（189～224）

須恵器（225～234）・土師器（235～254）

S=1/3（231．235～254）
S=1/4（227～230・232～233）
S=1/6（225～226・234）

256

257

258

259

260

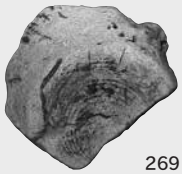
262

263

264

261

268

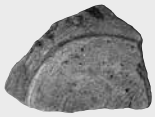

269

265

266

267

270


271

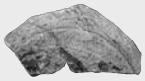
272

273

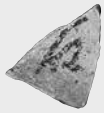
274

275

276

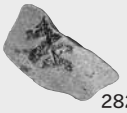

277

278


279

280

281


282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

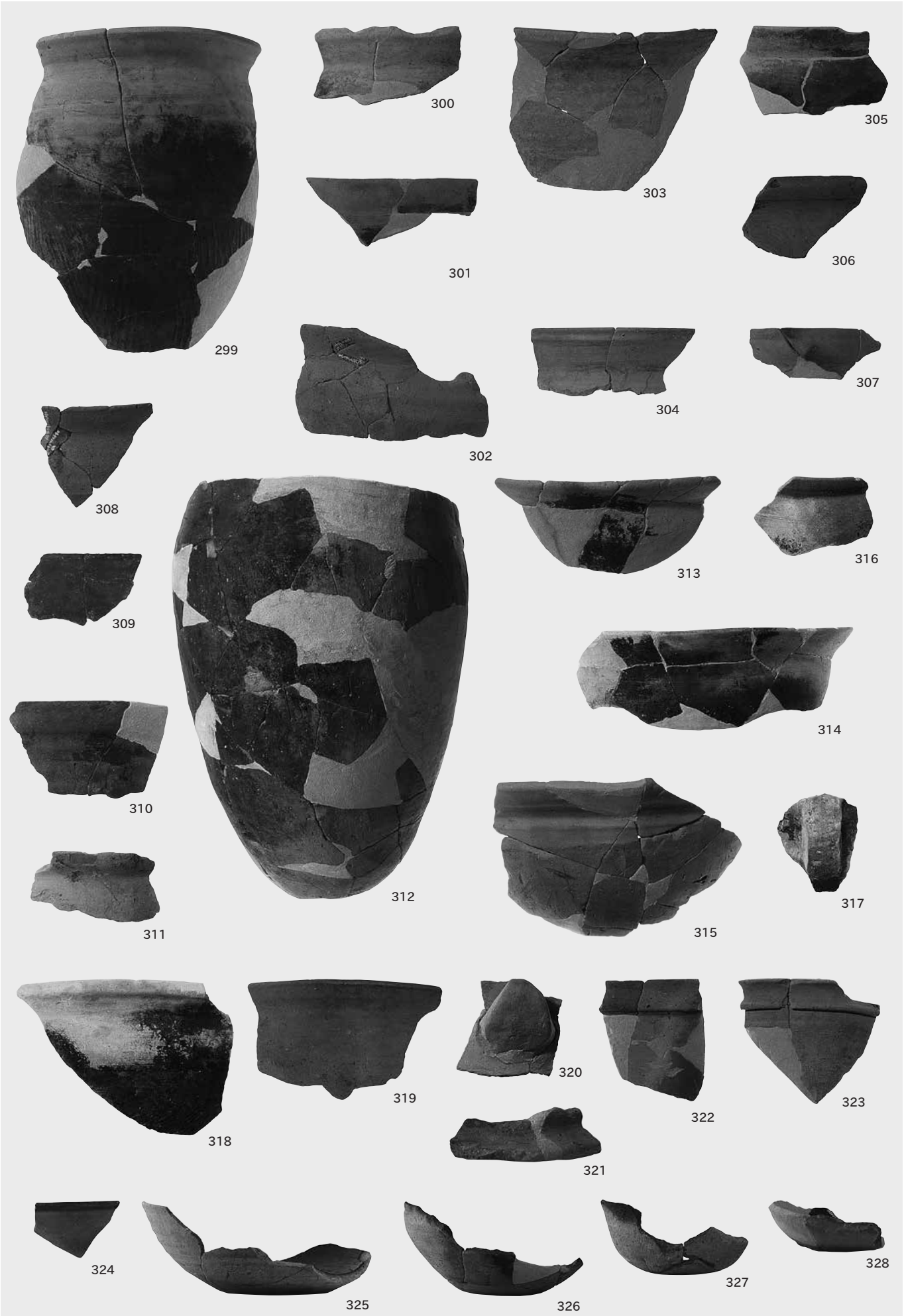
296

297

298

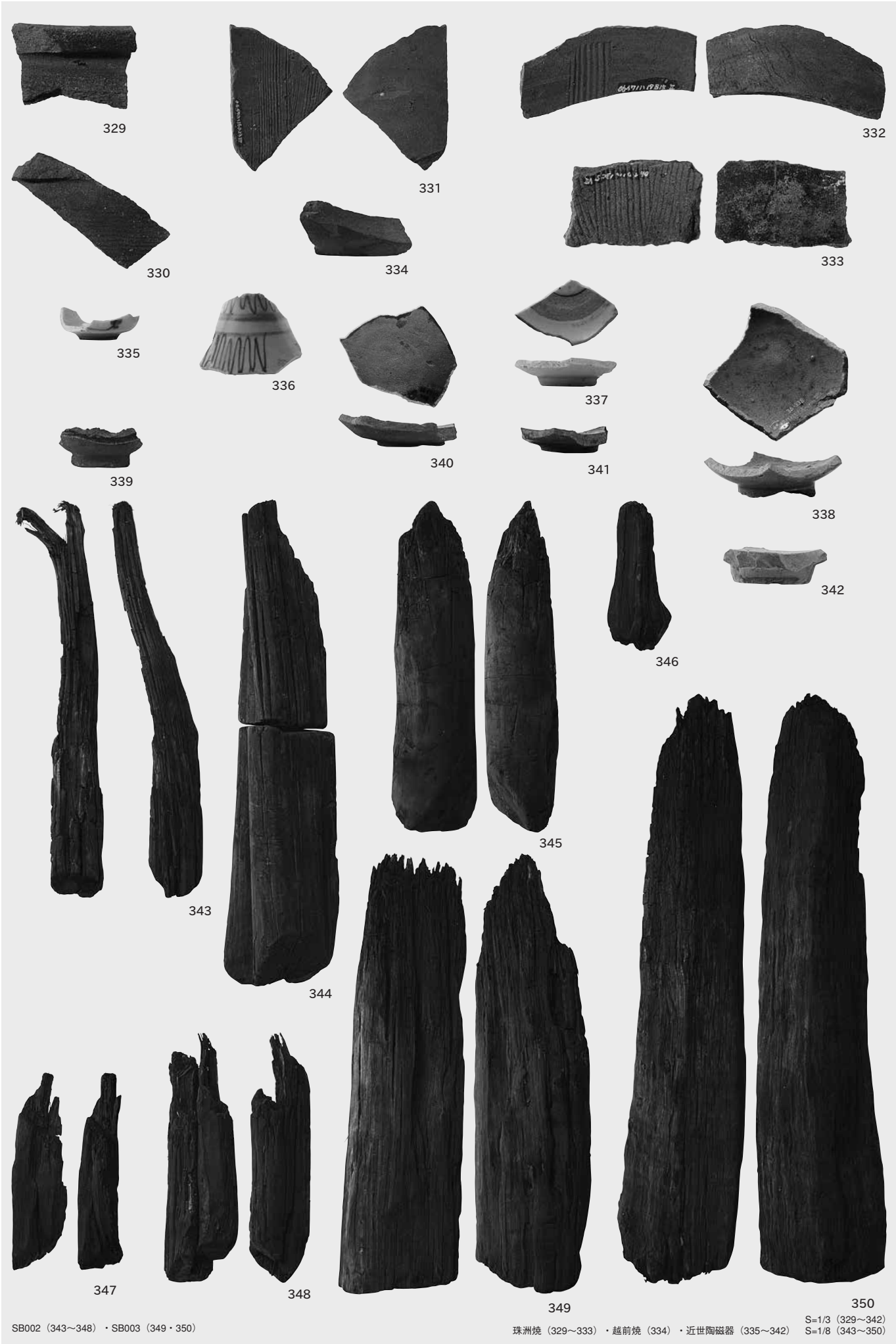
土師器（255～298）

S=1/3（255～289）・S=1/4（290～298）



土師器（299～323）・黒色土器（324～328）

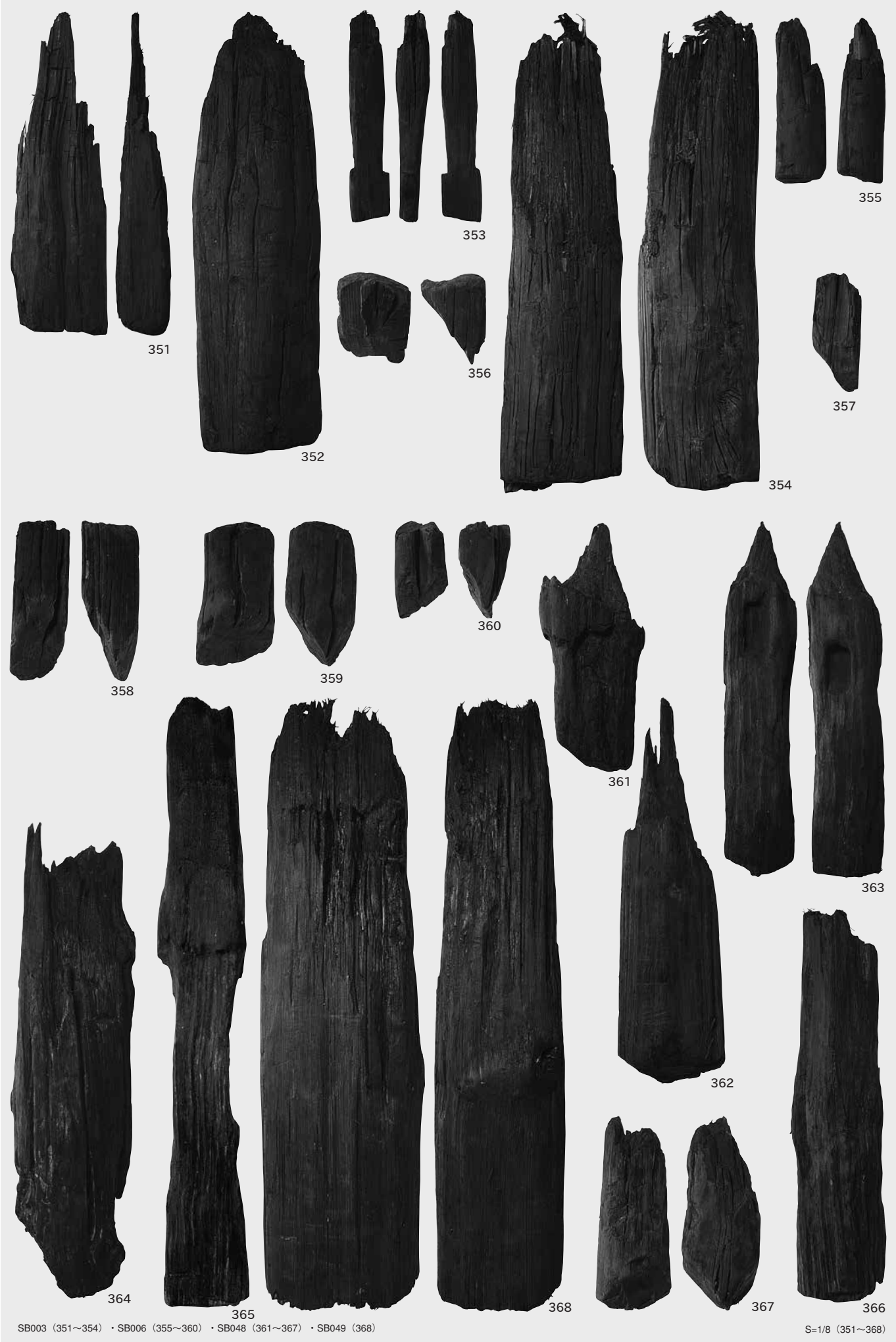
S=1/3（308～311・317・324～328）・S=1/4（299～307・312～316・318～323）



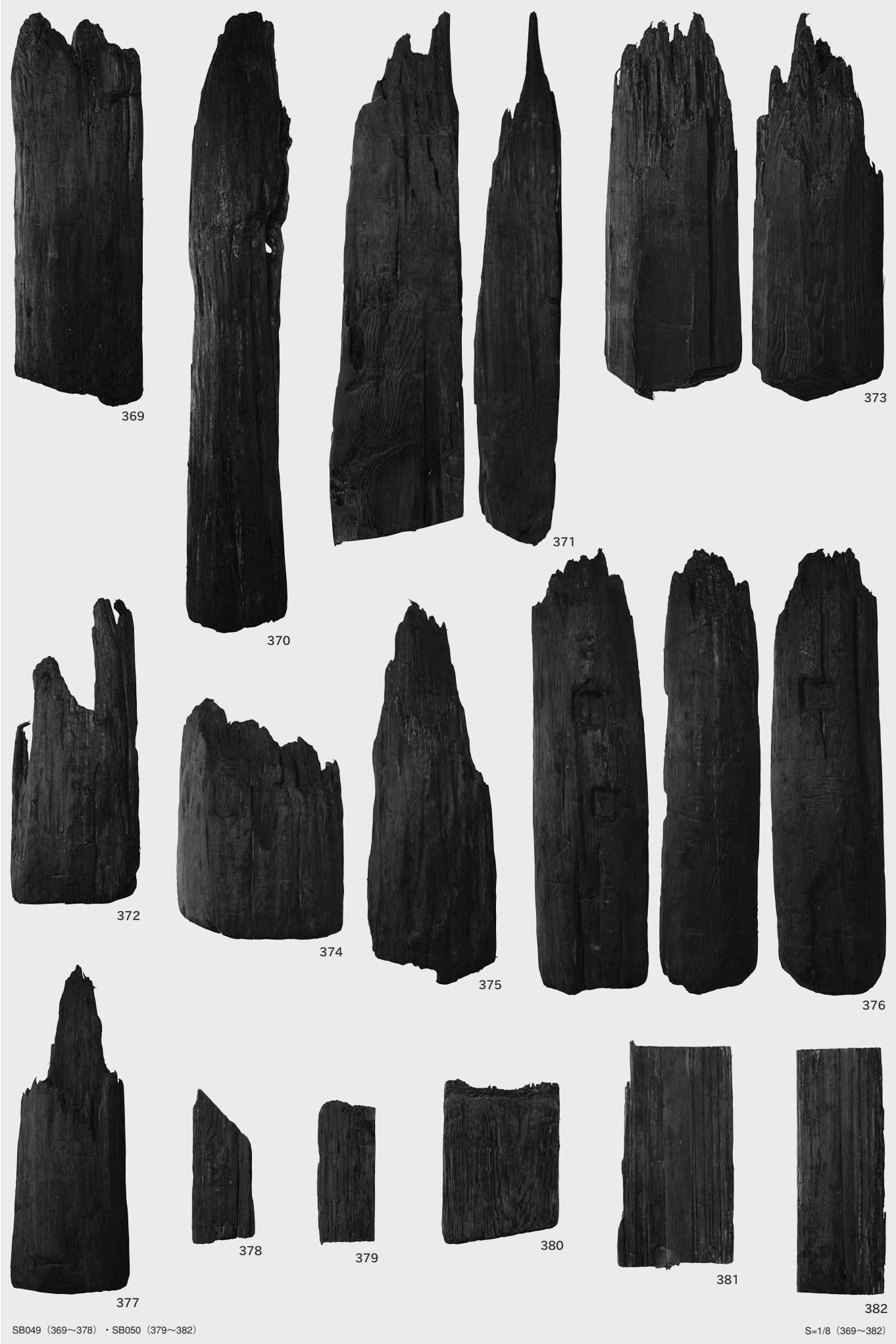
SB002（343～348）・SB003（349・350）

珠洲焼（329～333）・越前焼（334）・近世陶磁器（335～342）

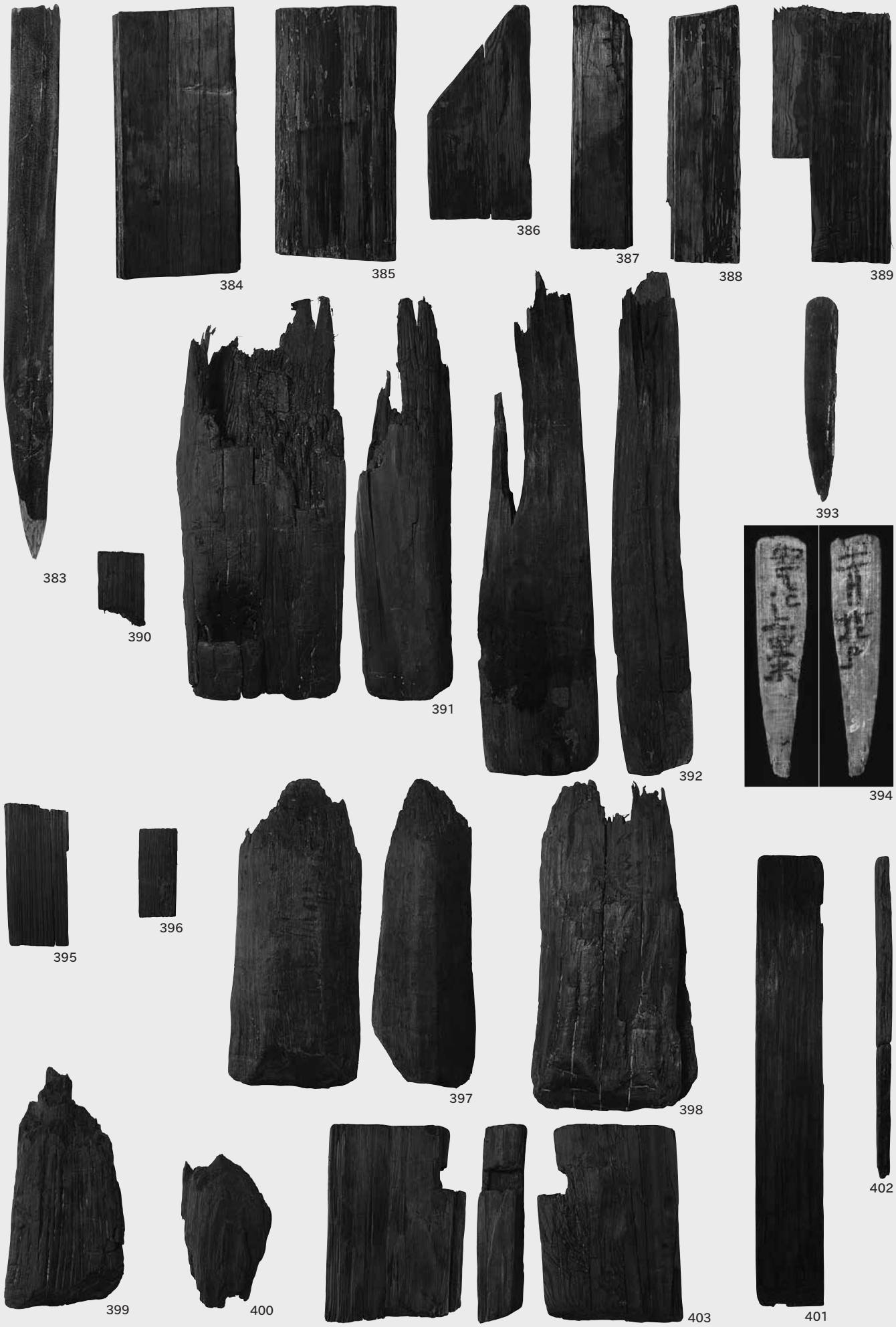
S=1/3（329～342）
S=1/8（343～350）



SB003（351～354）・SB006（355～360）・SB048（361～367）・SB049（368）　　S=1/8（351～368）

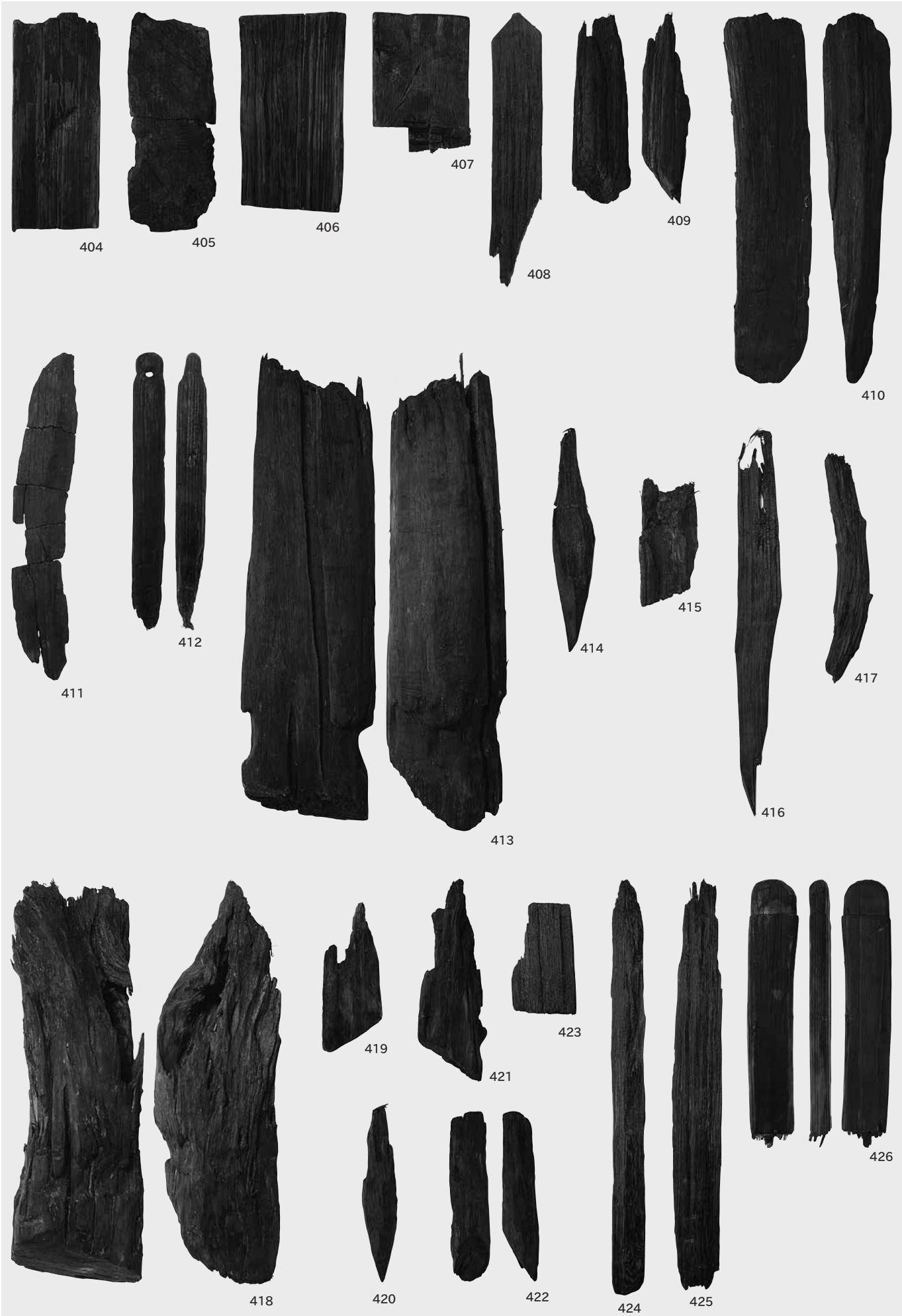


SB049（369～378）・SB050（379～382）　　S=1/8（369～382）



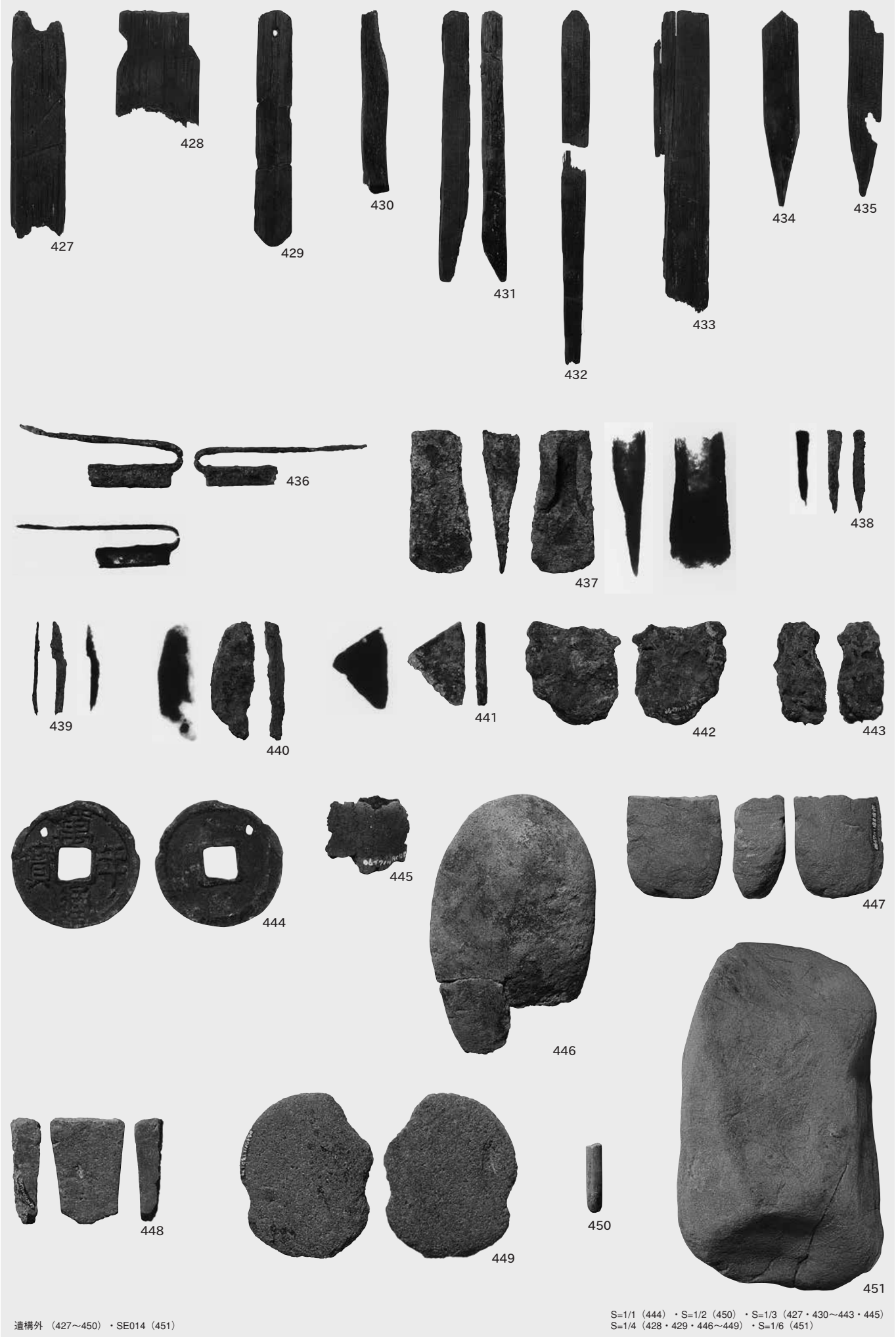
SB050（383～390）・SB055（391）・SB056（392）・SB058（393～397）
SB059（398～400）・SB137（401～403）

S=1/2（394）・S=1/3（393～350）・S=1/4（383）・S=1/8（384～392・395～403）



SB137（404～408）・SB138（409）・SB143（410～412）・SB144（413）
SA009（414～421）・SA010（422）・SE014（423）・遺構外（424～426）

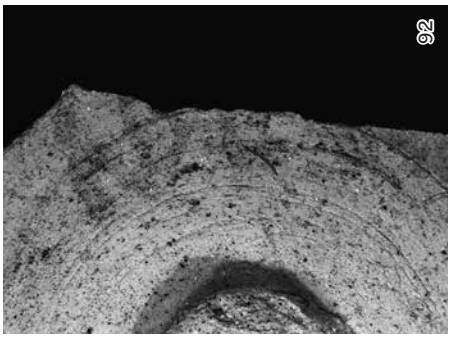
S=1/4（408・411・412・426）・S=1/8（404～407・409・410・413～425）

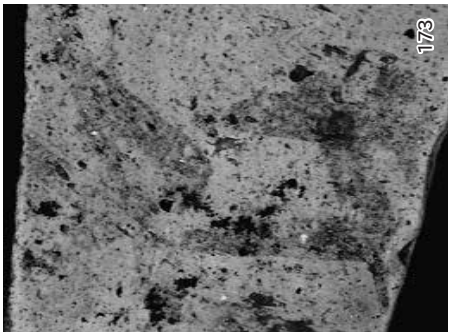


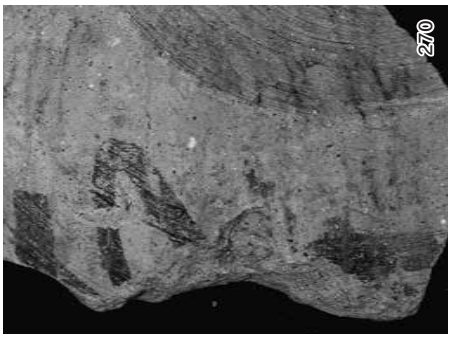
遺構外（427～450）・SE014（451）

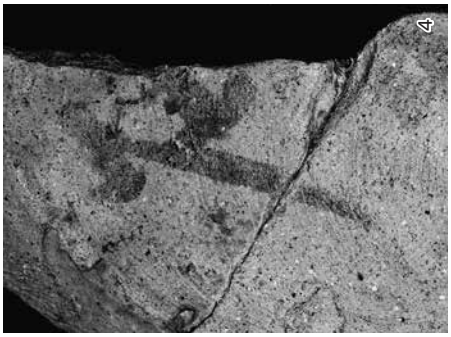
S=1/1（444）・S=1/2（450）・S=1/3（427・430～443・445）
S=1/4（428・429・446～449）・S=1/6（451）

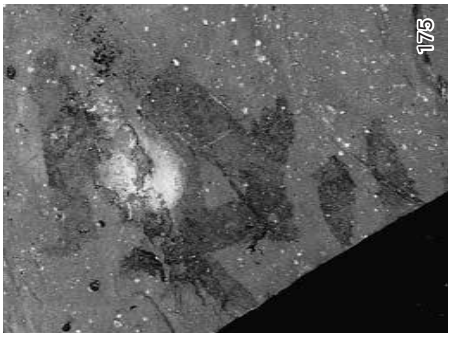
140

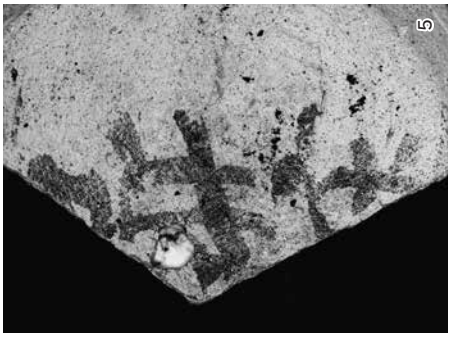

92

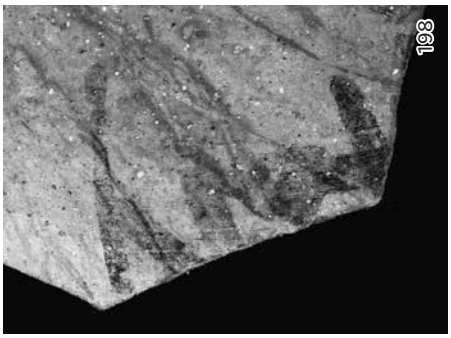

173

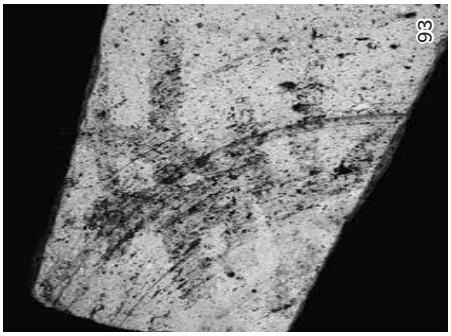

270

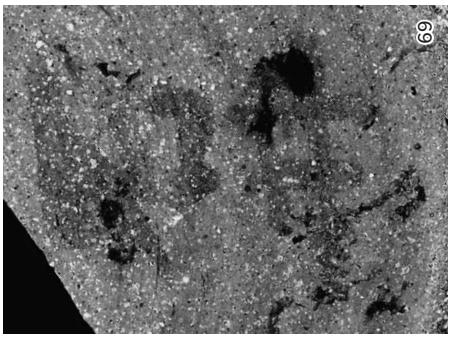

4


175

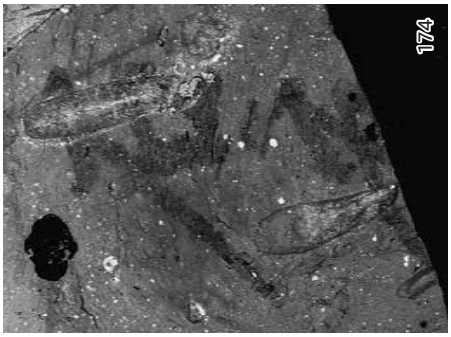

5

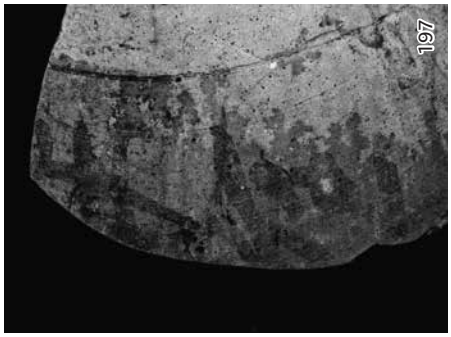

198

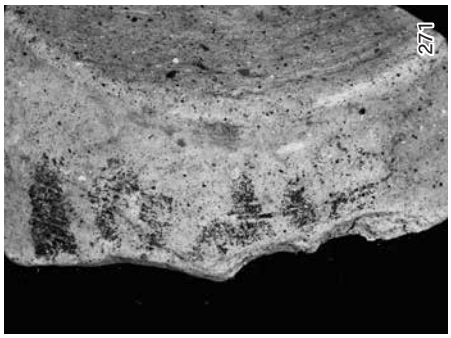

93


69

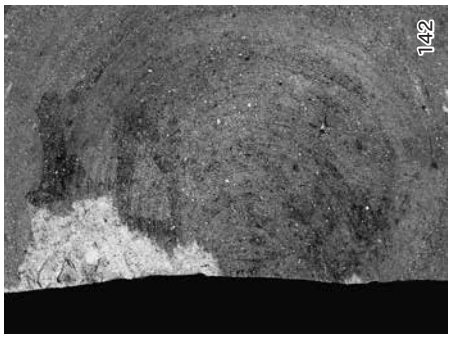
141

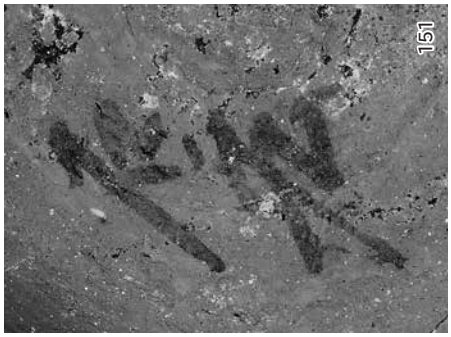

174

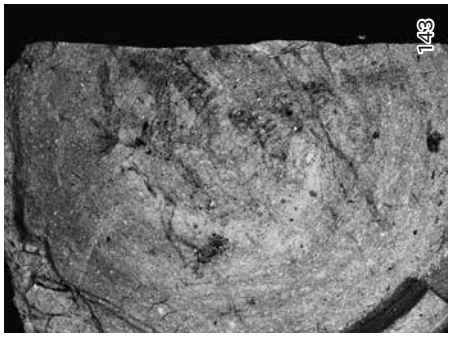

197

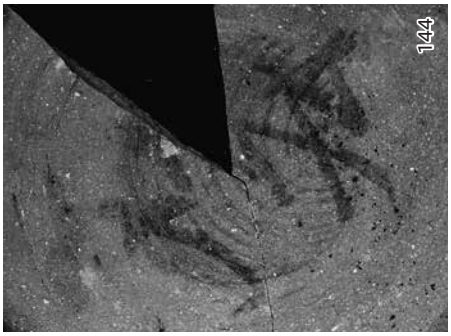

271

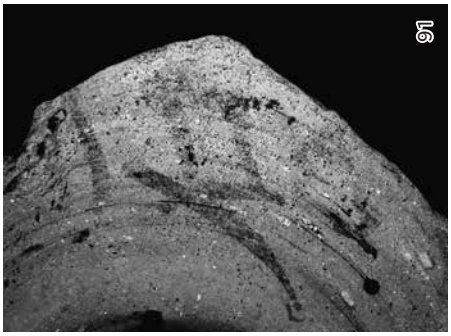
199

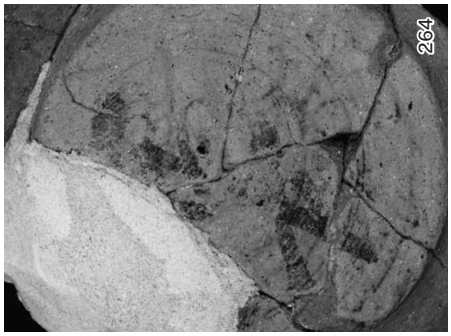

142


151


143

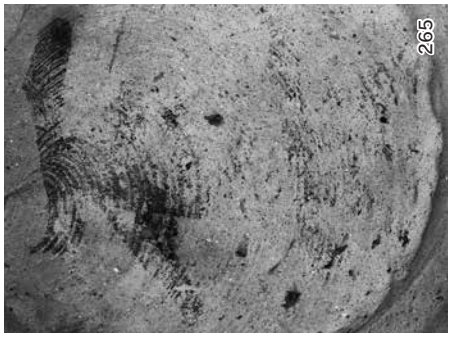

144


91

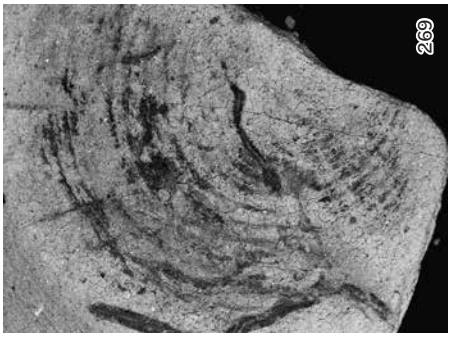

264

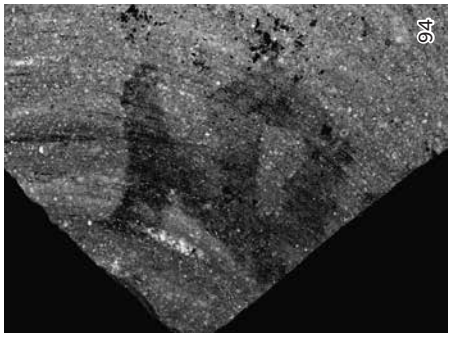
266

267

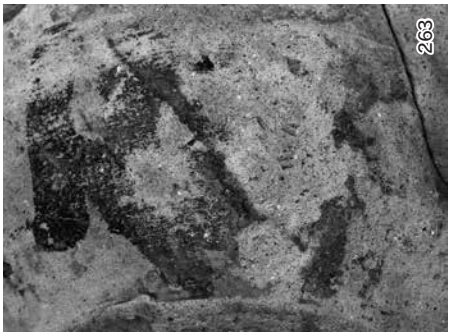

265

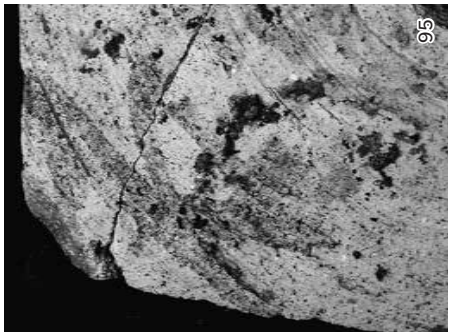
268

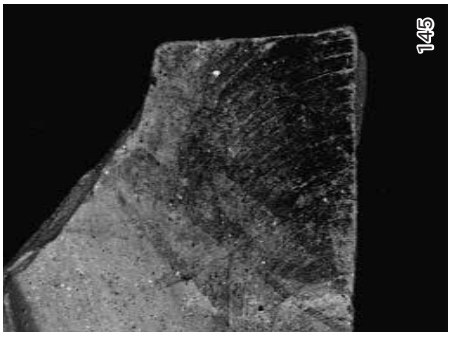

269

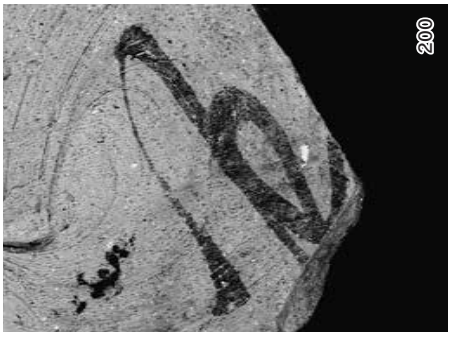

94

273

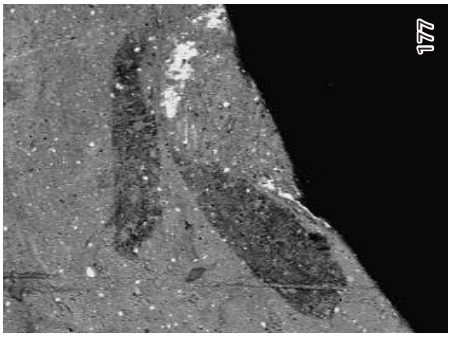

263

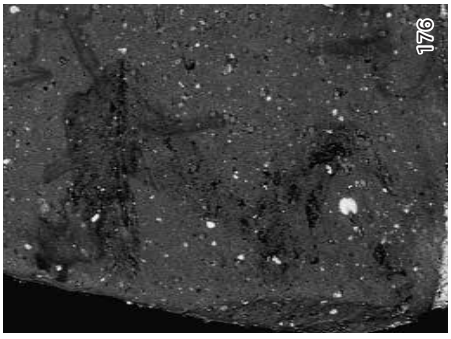

95


145

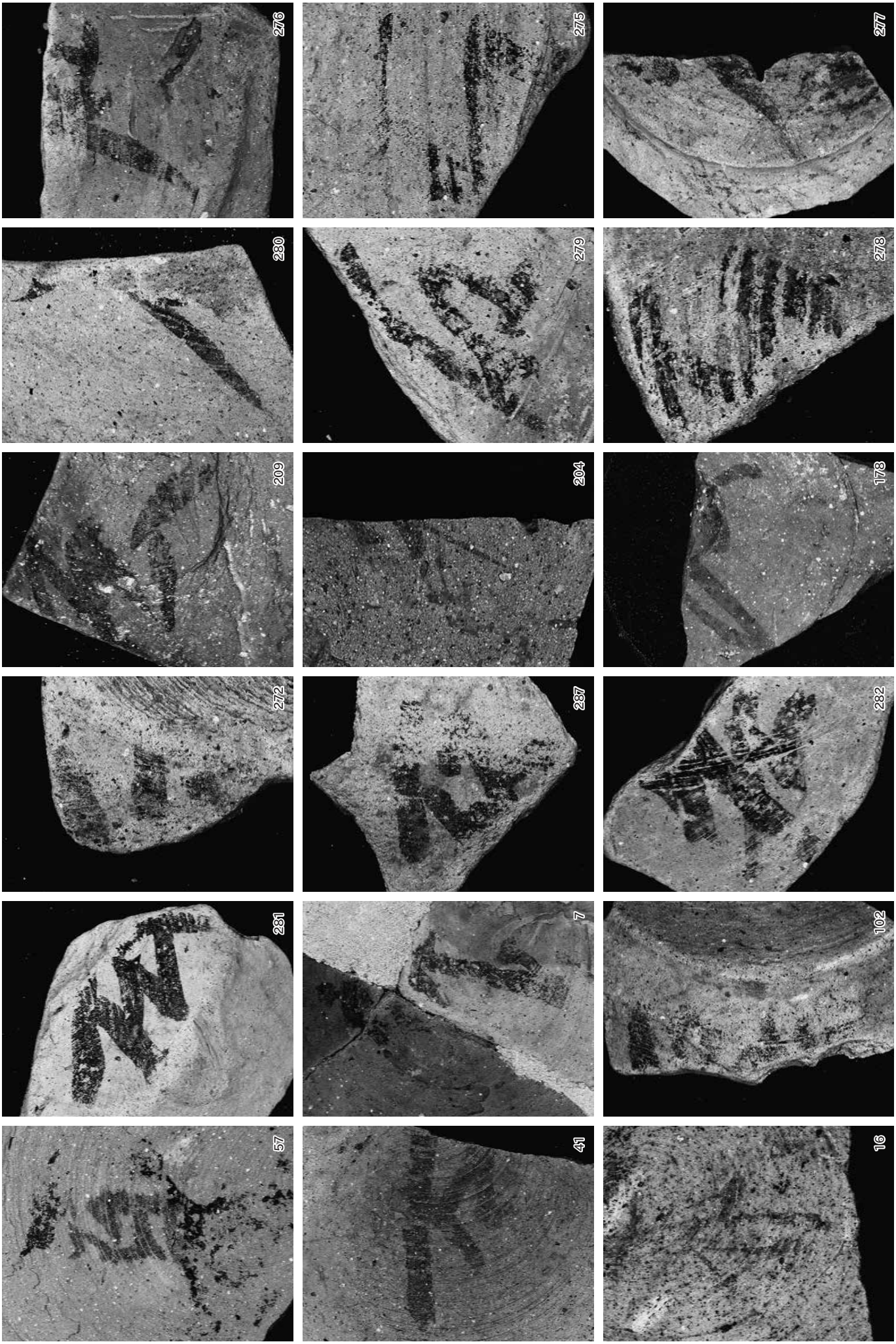

200

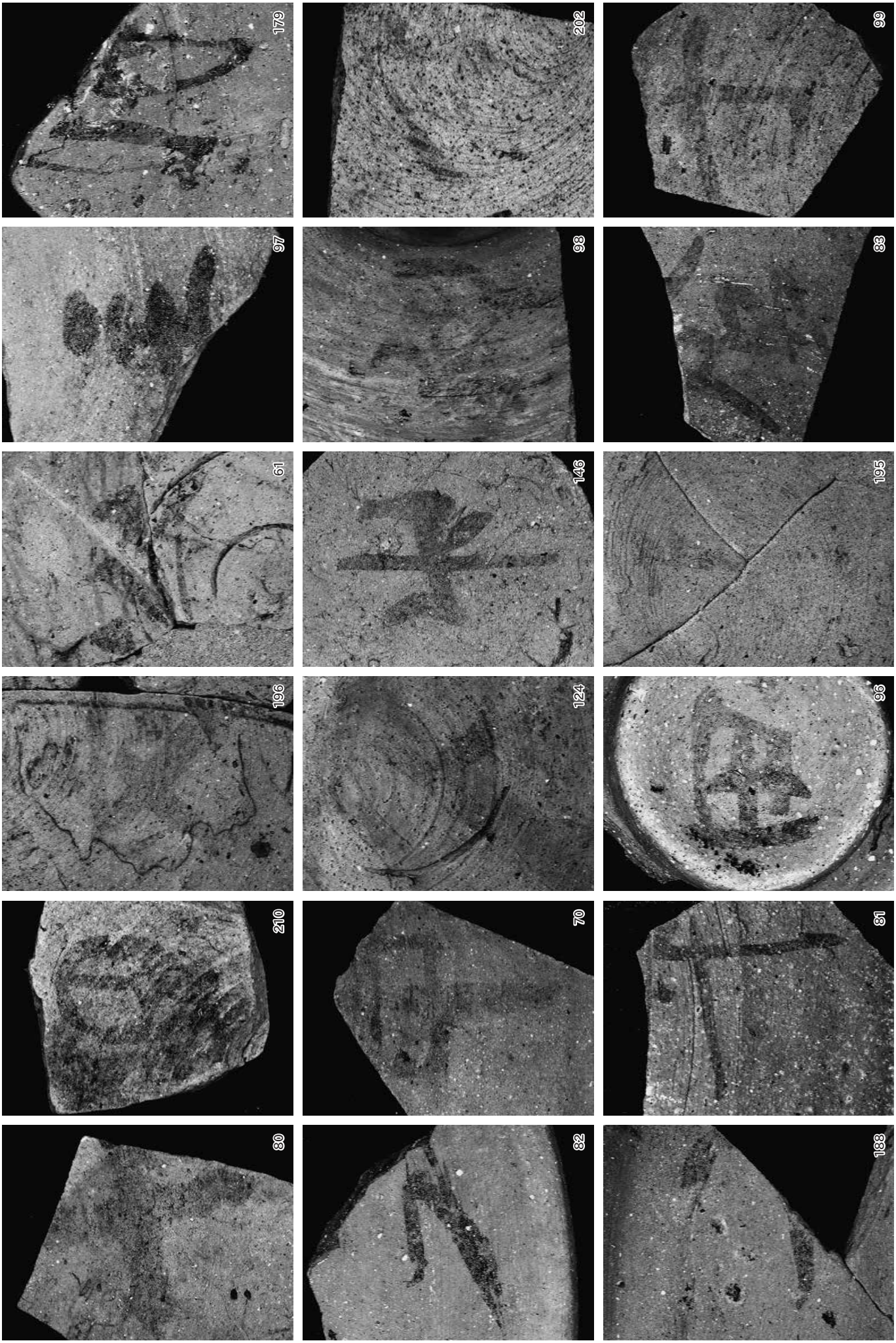
201

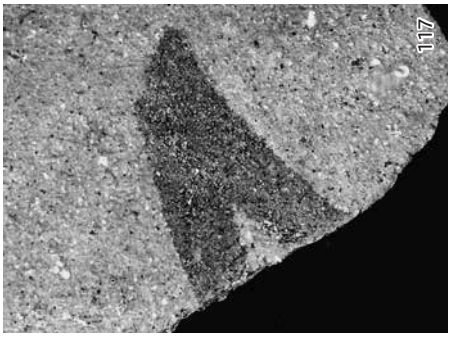

177

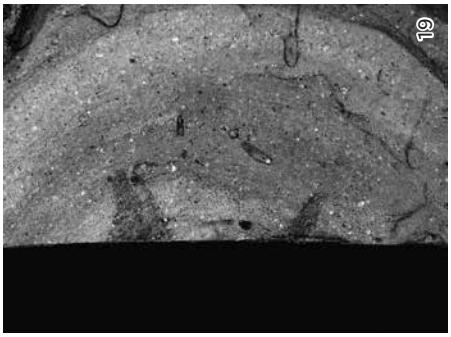

176

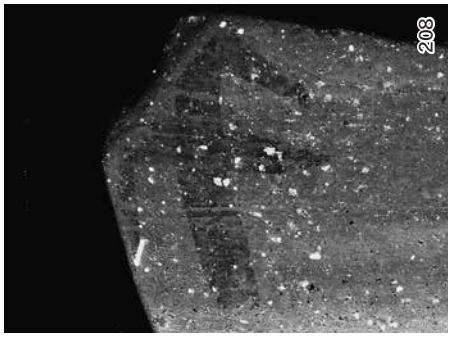
274

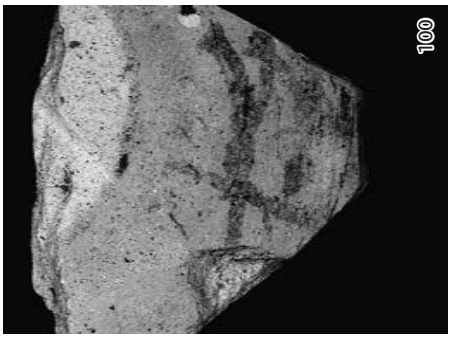

276
280
209
272
231
57
275
279
204
287
7
41
277
278
178
282
102
16

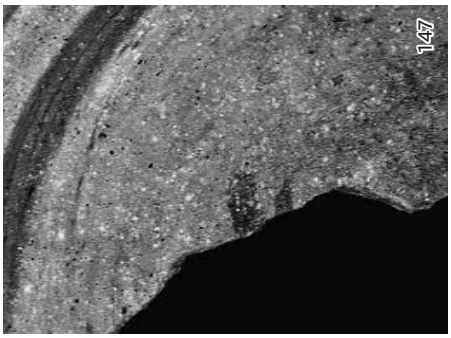

179
202
99
97
98
83
61
146
195
196
124
96
210
70
81
80
82
188

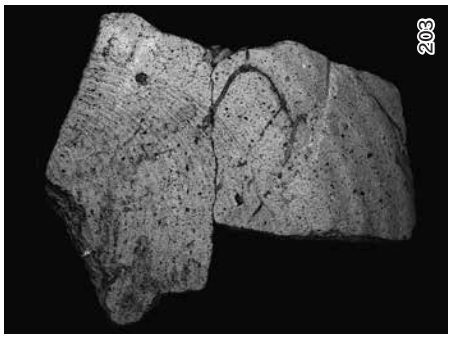

117

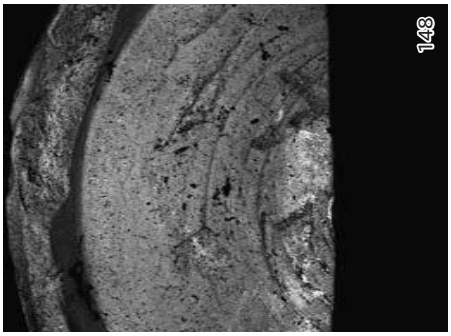

19

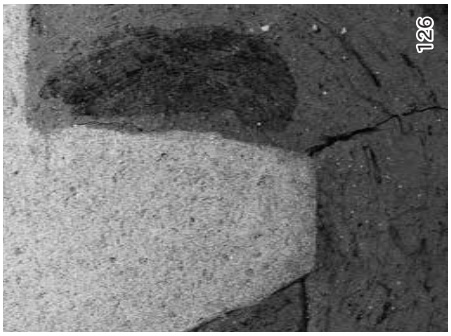

208

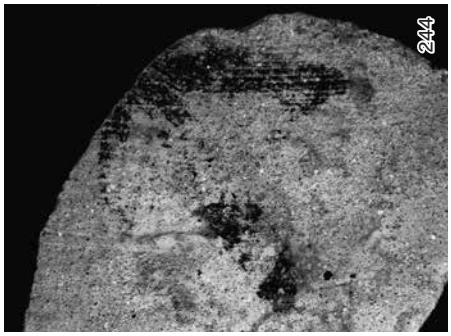

100

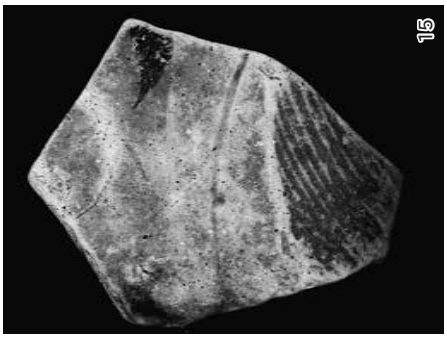

147

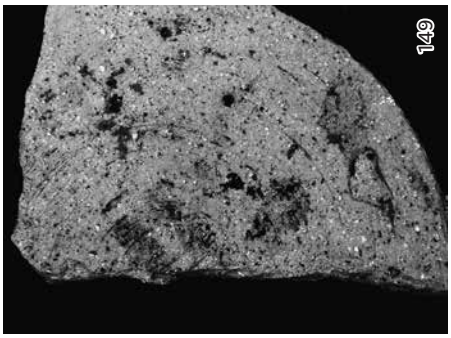

203

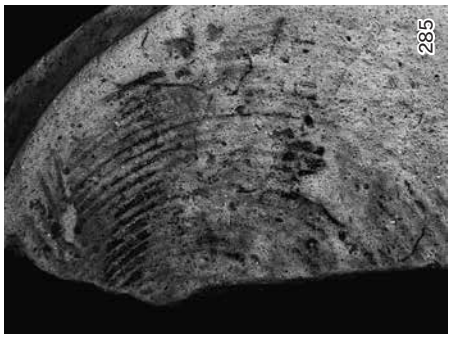

143

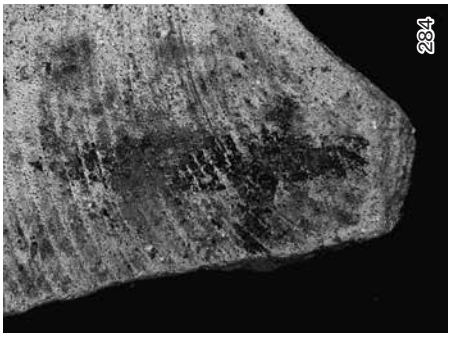

126


244

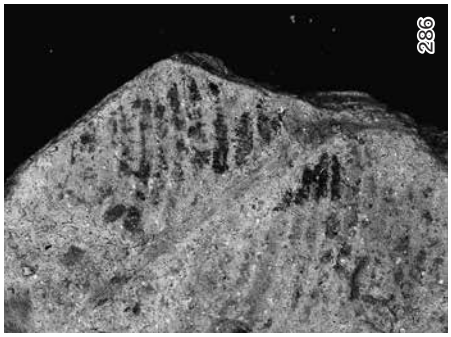

15


149

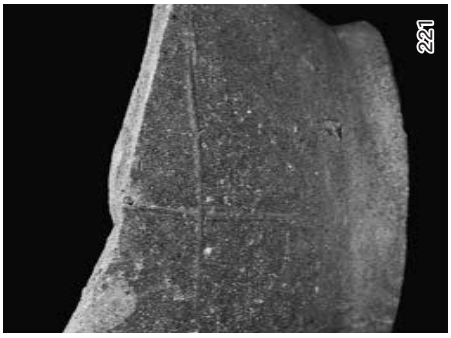

285


234

283


286

65


221

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いわのはらいせき
書　　名	岩ノ原遺跡
副　書　名	北陸新幹線関係発掘調査報告書
巻　　次	Ⅵ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第182集
編 著 者 名	髙橋保雄・高橋知之・田中一穂（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、金内　元・小村正之（株式会社野上建設興業）、斉藤崇人・馬場健司・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）、早津賢二（妙高火山研究所）
編 集 機 関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2008（平成20）年3月16日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
岩ノ原遺跡（いわ はら い せき）	新潟県上越市大字向橋字内沖（にいがたけんじょうえつしおおあざむかばしあざうちおき） 303番地1ほか	15-222	1483	37度 05分 47秒	138度 13分 50秒	20060501～ 20061122	7,500 m²	北陸新幹線建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特記事項
岩ノ原遺跡	荘園関連	平安時代 （8世紀末葉～9世紀中葉）	掘立柱建物跡（16棟） 井戸跡（1基） 土坑（11基） 溝状遺構（81条） 性格不明遺構（9基）	土師器（椀・甕・鍋） 須恵器（杯・蓋・甕・壺） 木製品（柱根・礎盤(板)・杭・木簡状木製品・木簡ほか） 鉄製品（錠前・斧・釘ほか） 鍛冶関連（鉄滓・羽口） 銭貨（萬年通寶） 石製品（砥石ほか）	出土した墨書土器から、8世紀中葉に上越地方で成立した「東大寺領石井荘」の荘園遺跡である。物資の搬出入関連と推定される建物は、8世紀末葉～9世紀第2四半期、荘所の建物は、9世紀第2四半期～第3四半期に相当する。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第182集

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅵ

岩　ノ　原　遺　跡

平成20年3月15日印刷
平成20年3月16日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　北越印刷株式会社
〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号
電話　0258（33）0306